

# P-29

1961~1970

大阪大学山岳会

Osaka University

Mountaineering Club

1975年11月

# P-29

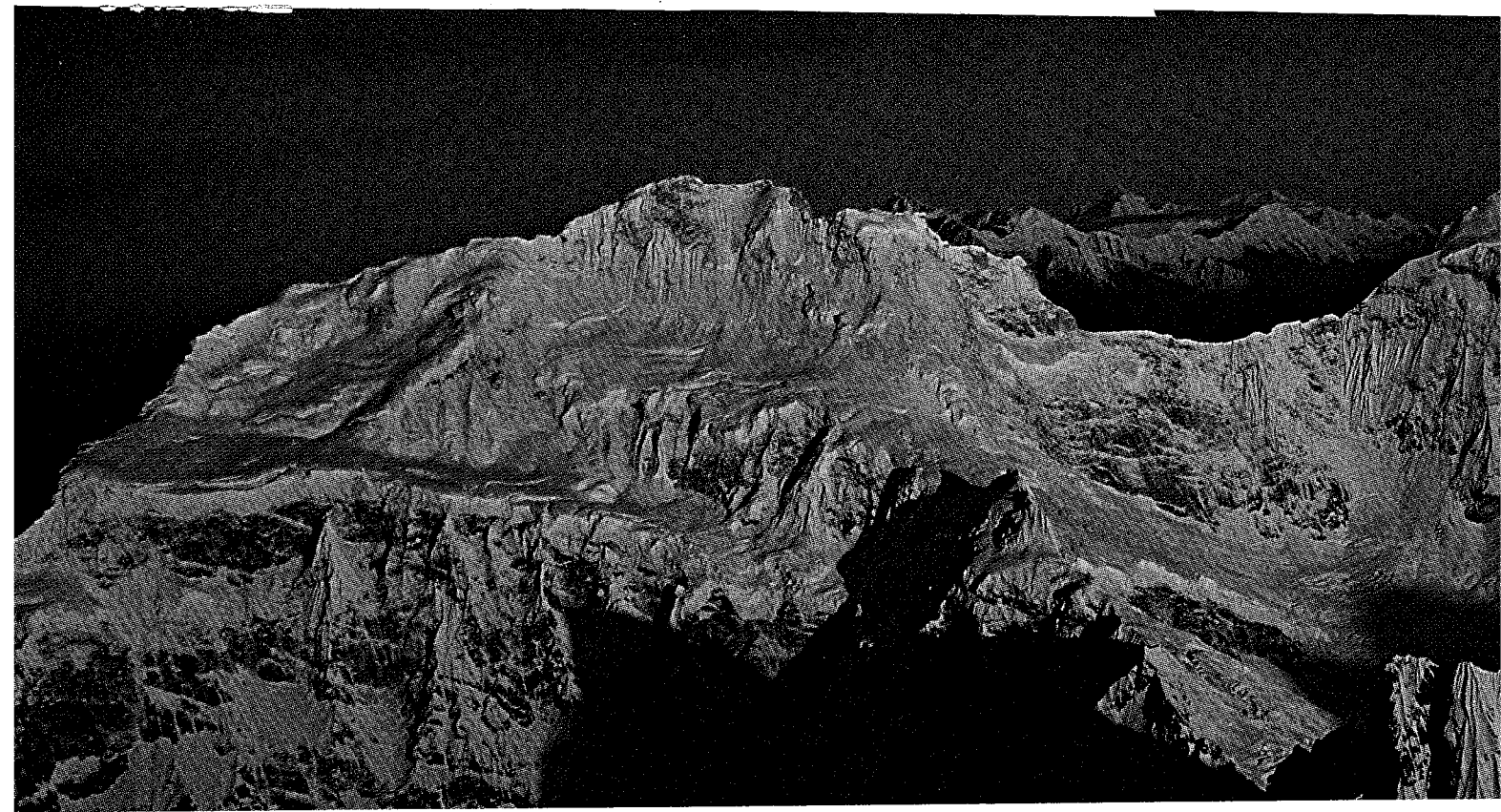
1961~1970

大阪大学山岳会

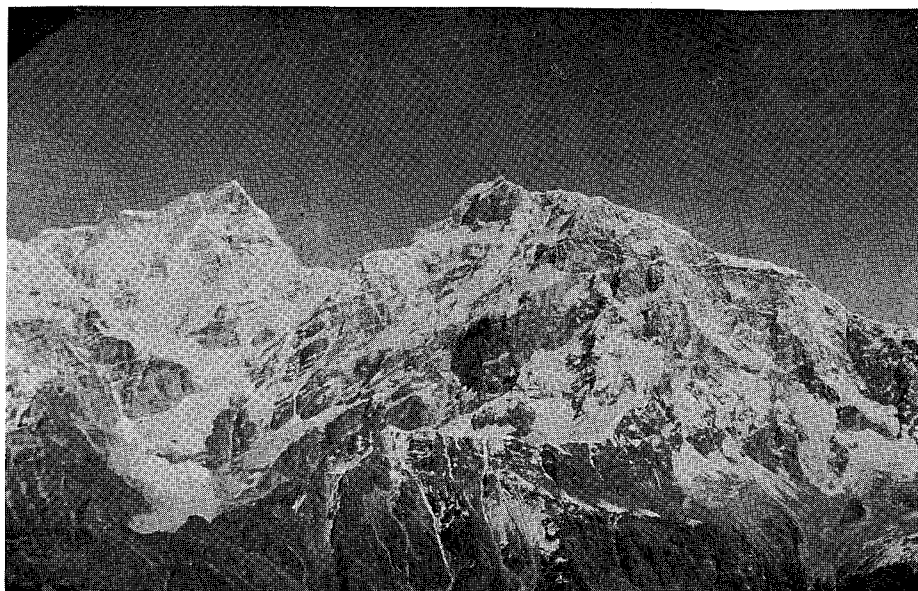
Osaka University

Mountaineering Club

1975年11月



① P-29 東面 (航空写真) 白川義員氏撮影。  
提供 白川義員氏, 日本銅センター



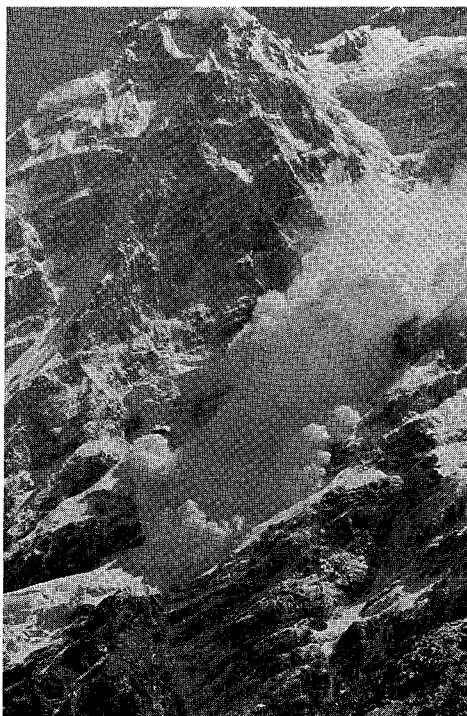
② 南西側からの航空写真, マナスル (左) と P-29 (右) (1970)



③ ベースキャンプ (4000 m) から P-29 (7835 m・西面) を見る (1961)



⑥ 6700 m 峯偵察 (1961)



④ P-29 胸壁からの雪崩 (1961)



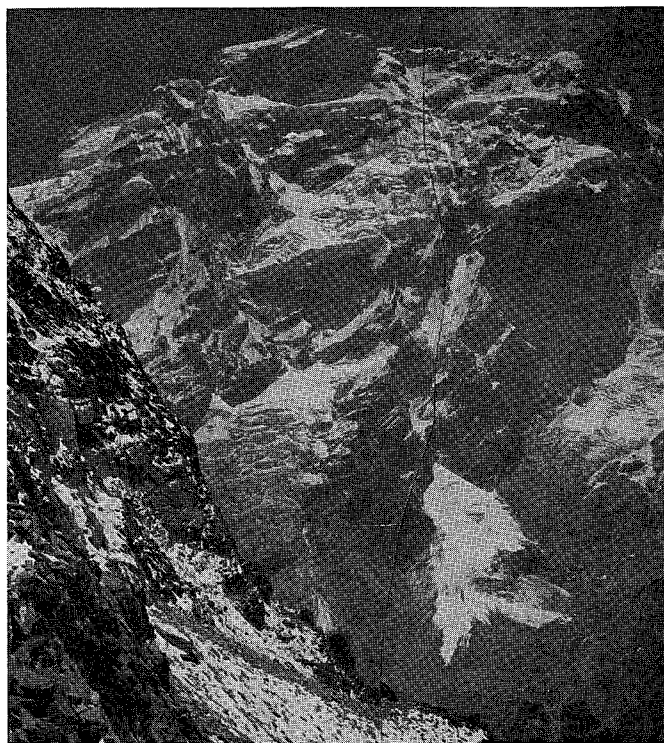
⑦ 氷壁に足場を切りつつ登る (1961)



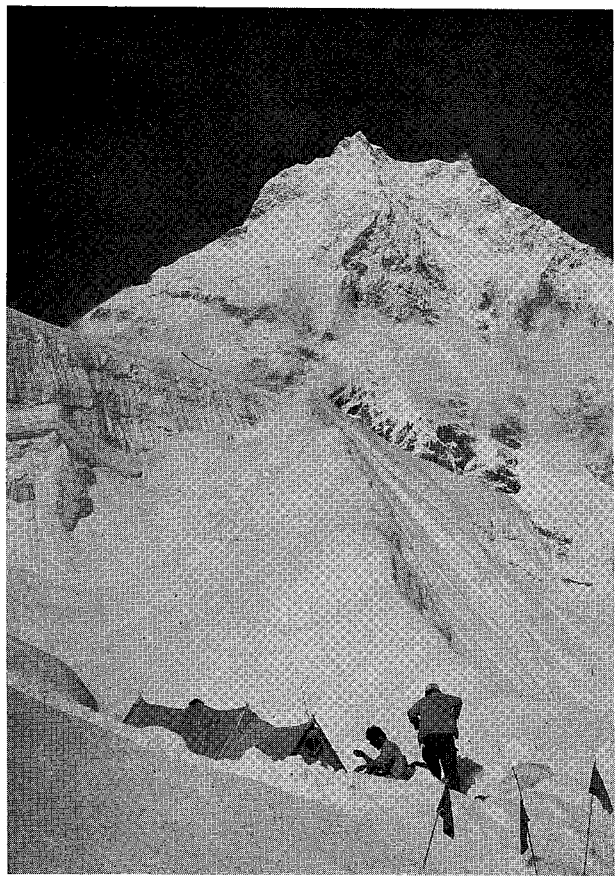
⑤ クレバス地帯を進む隊員 (1961) →



⑧ ナムンバンジャンからのマ  
ナスル3山, 左からマナス  
ル, P-29, ヒマルチュリ  
(今西寿雄氏)



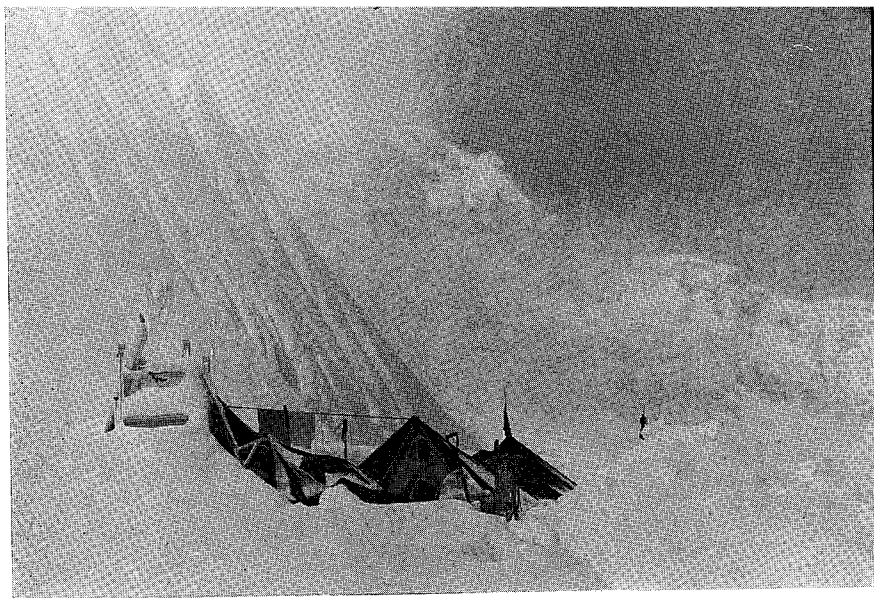
⑨ P-29 西面, 6700m 峰支尾  
根 (約 5000 m) より  
(1961)



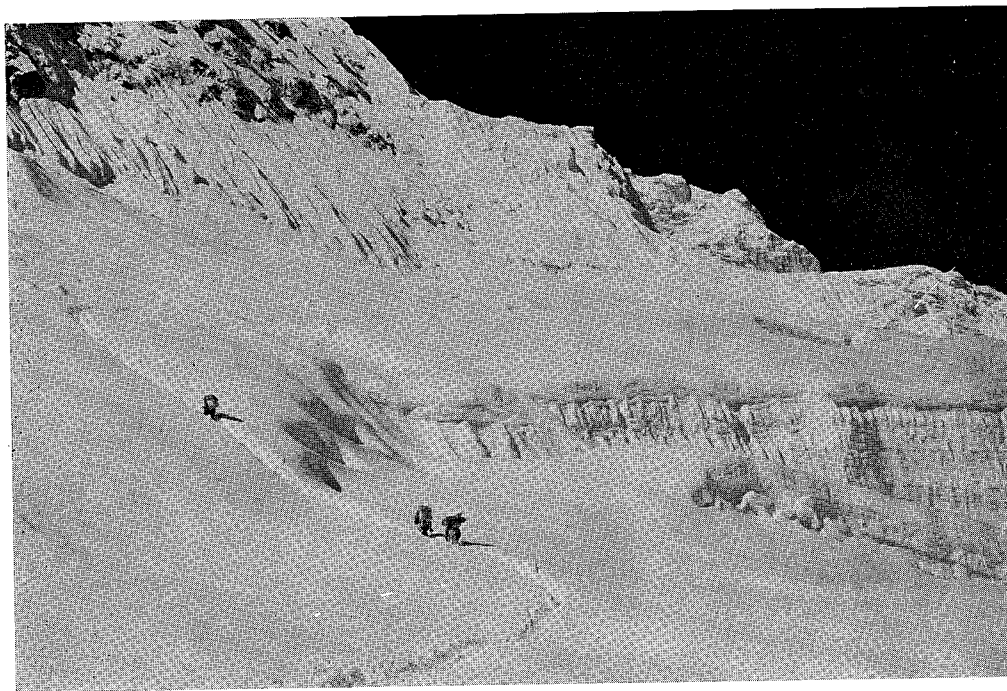
⑮ P-29 東尾根の第一キャンプ，後方はマナスル（1970）



⑯ 東尾根のラッセル（1670）

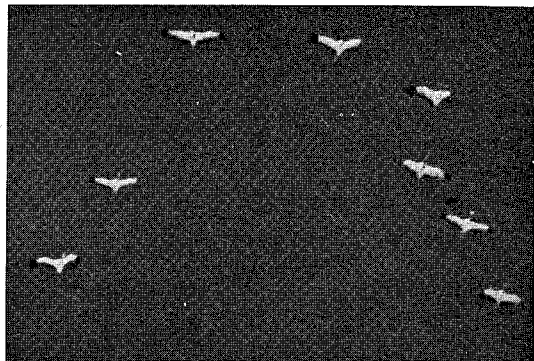


⑪ 東尾根第二キャンプ (1970)



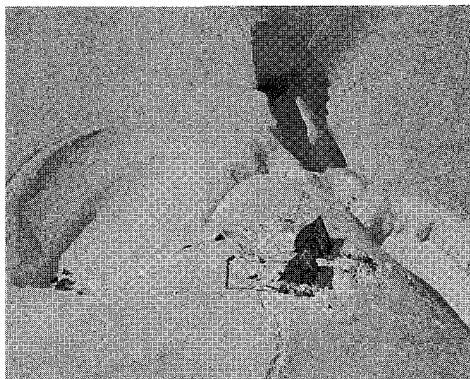
⑫ 第二キャンプへの荷上げ (1970)



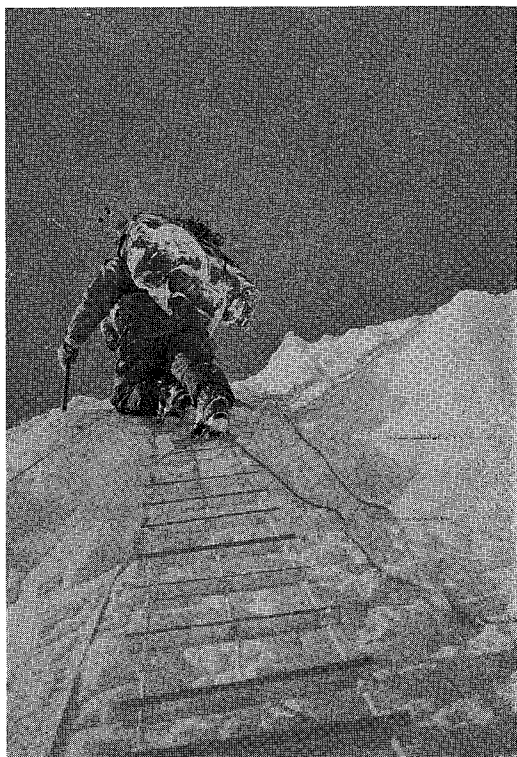


⑱ モンスーン明けを告げる渡り鳥  
(6,000 m~7,000 m を南行, C2 5,800 m にて  
1970年10月11日写す)

⑳ 東尾根 P-1 のトラバース (1970)



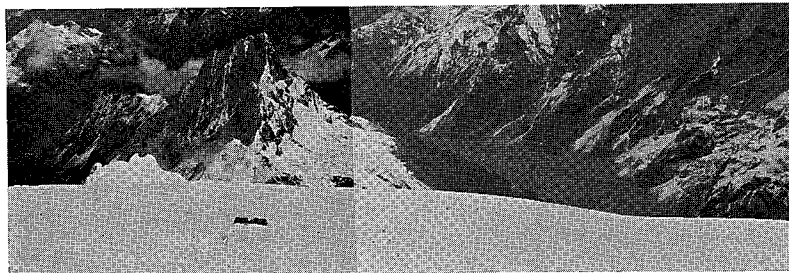
㉑ 東尾根基部の第三キャンプ (1970)



㉒ 第二キャンプ直上の縄梯子 (1970)



㉔ 第四キャンプより氷壁ルートを見上げる

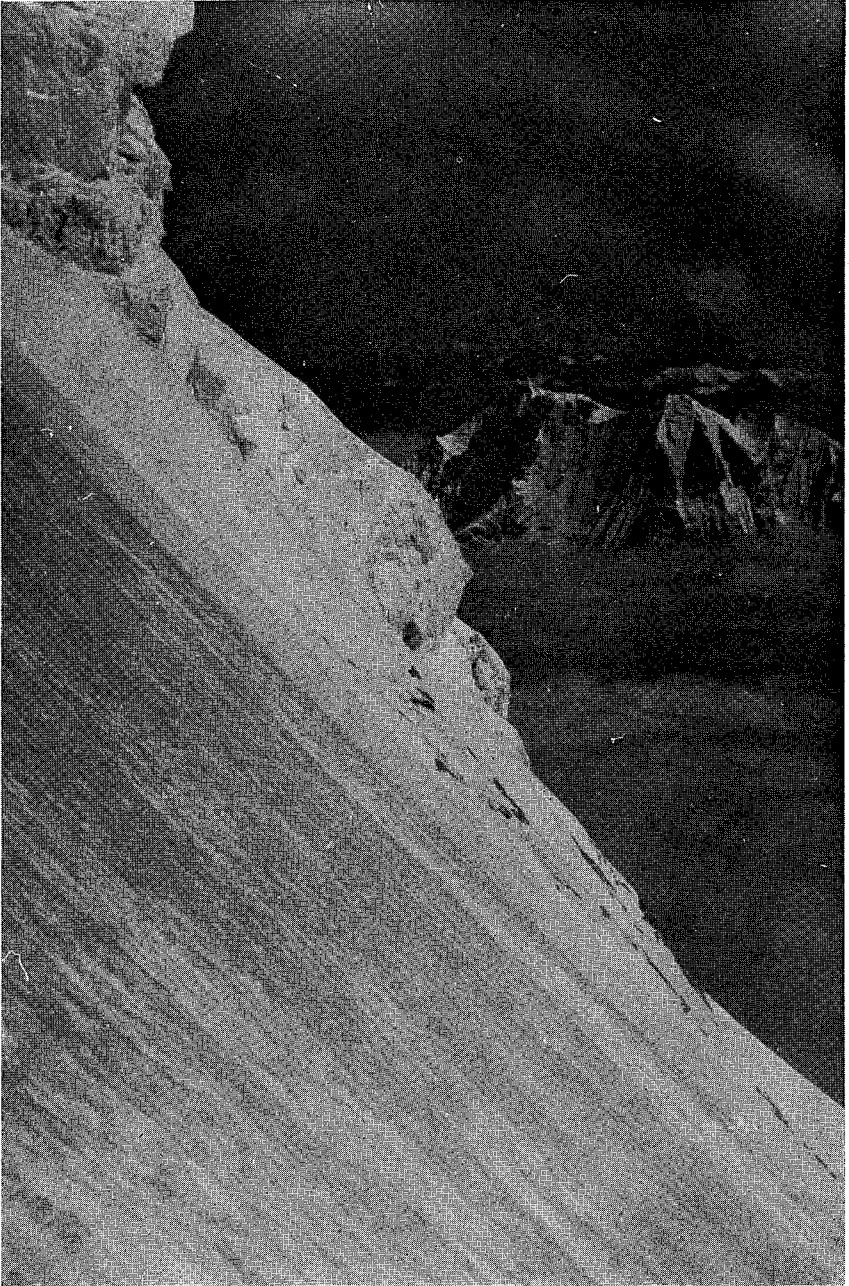


㉕ 氷壁途中から見た第四キャンプ、P-29 東尾根(左)とリダングダ氷河(右) (1970)

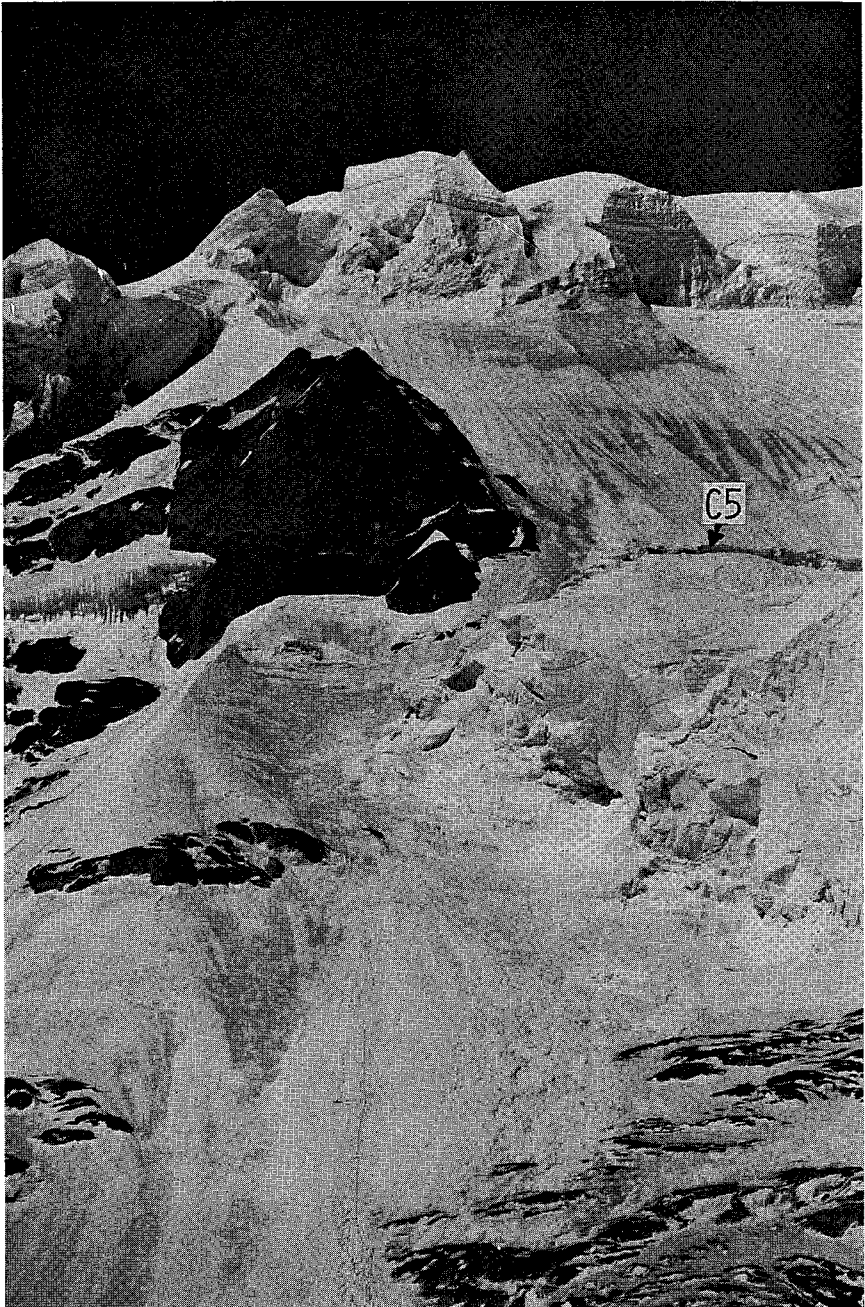
㉖ P-29 最後の難所, 頂上への氷壁ルート (C3 より写す) ルート工作中的の隊員も見える (矢印) →

区 間	高度差	固定ロープ の 有 無	固定ロープ の 長 さ	ルート工作日
A B	200 m	無	—	10月12日
B C	200 "	有	350 m	10月12日
C D	100 "	"	150 "	10月13日
D E	50 "	"	80 "	10月16日
E F	50 "	無	—	10月18日

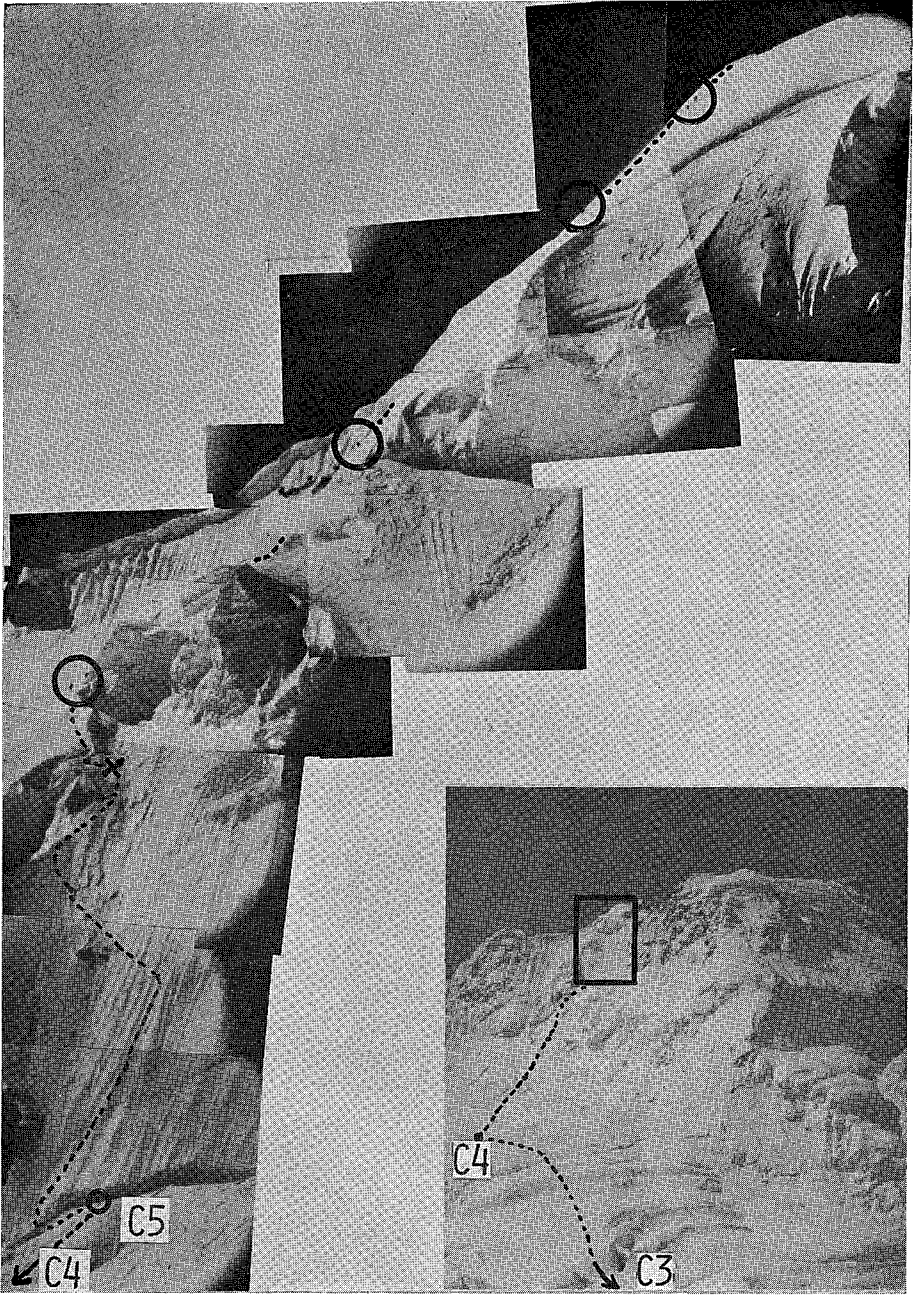
注) A地点 : Camp 4, 高度 6,900 m  
 C' : 3次隊最高到達地点 (7,350m, 11月2日)  
 F : Camp 5, 高度 7,500 m



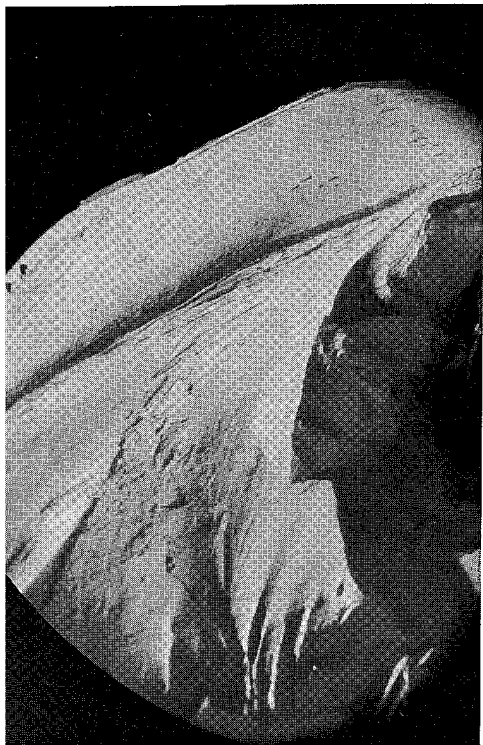
② P-29 氷壁，右方はバンプーチ（1970）



㊦ P 29 氷壁 蛙岩 附近，縦に固定ロープが見える（1970）

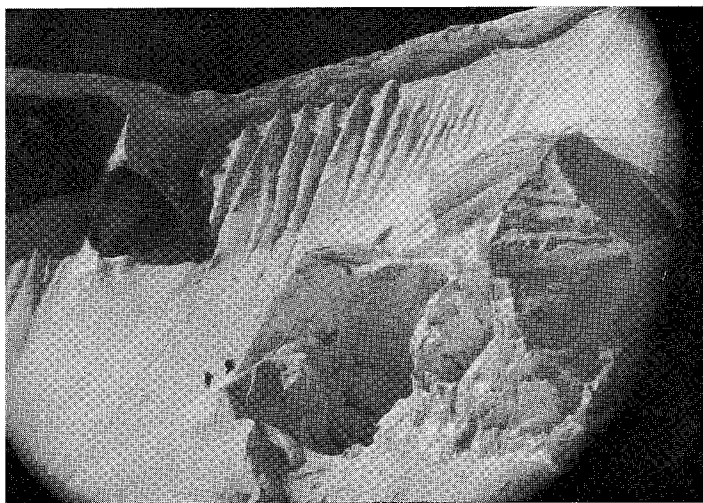


㊟ P-29 登頂, C3 (6,250 m) から望遠鏡を通して見る (1970年10月19日)



⑩ 午後1時，頂上へ向かう渡部隊員と  
ハクパツェリン

⑪ 午後3時，頂上から下る両隊員

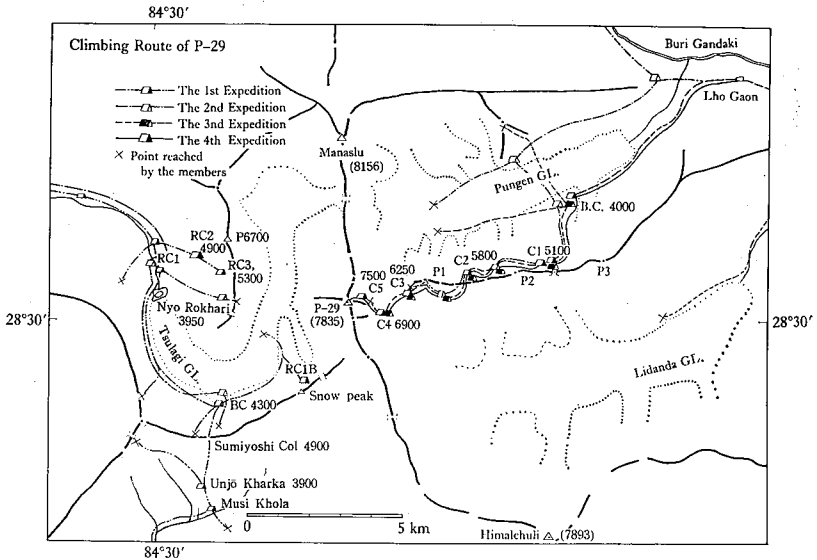


⑫ 午前11時，蛙岩上部の氷稜をヒマルチュリ側にぬける

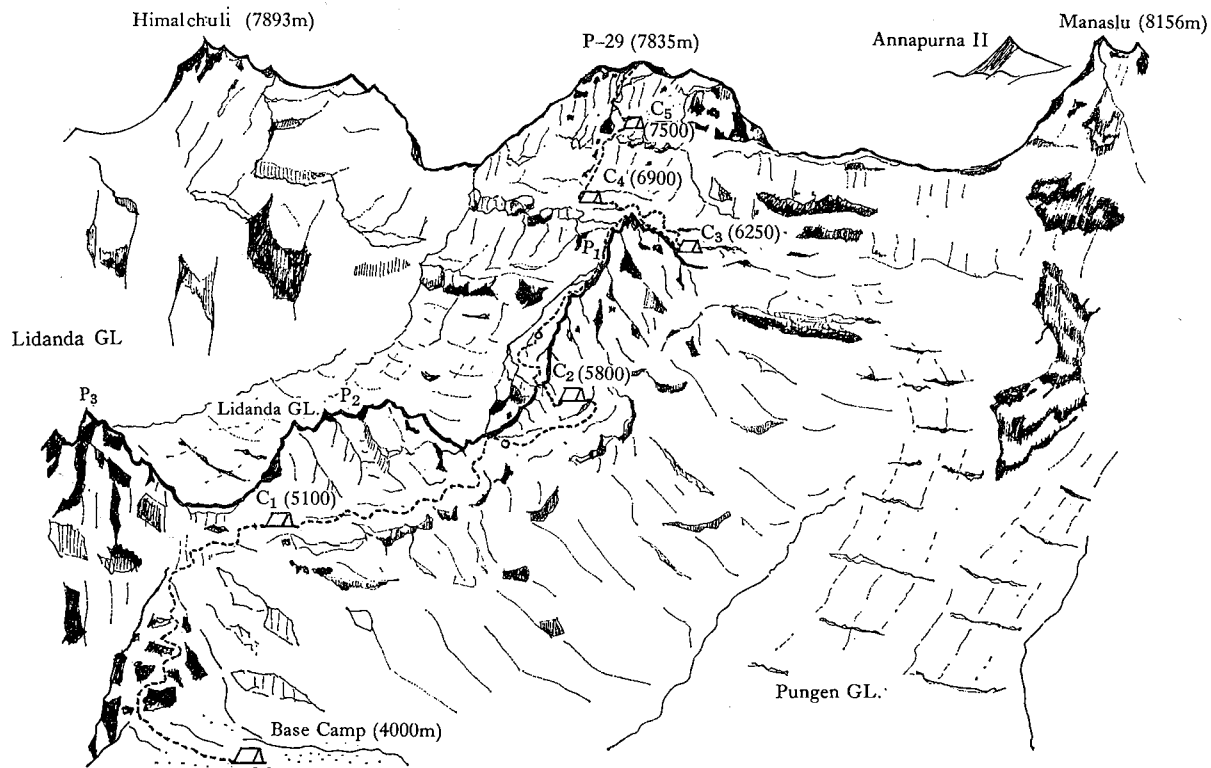




③② ベースキャンプ撤収，ローカルカを下るポーター達，右方は東尾根末端  
左方はパンプーチの稜線（1970年10月28日）（三枝礼子）



③③ 名隊の足跡



㊸ P-29 東面の登攀ルート (1970)



# 序

楨 有 恒

一九五〇年、エルツォグ氏によるアンナプルナ登頂に始まる戦後ヒマラヤ高峰への登山は、恰も十九世紀中葉アルプス初登頂黄金時代を思わせる盛況であつて、この華々しい舞台上活躍しているのがわが国登山隊である。この二十年間にヒマラヤの性格は次第に知られつゝありとはいへ、いまだに登山者にとっては、単に甘美な夢をのみ追ふことを許さぬ厳然たる存在である。

抑も大阪大学山岳会がP 29登山を計画するに至つた動機は、徳永篤司（マナスル隊）住吉仙也（ヒマルチュリ隊）両君の現地においての観察と篠田軍治教授との意図に発するものと聞く。老生の如きがマナスルに競う間に、言わば虎視眈眈として四周の峰々に注目されたのは、まことに慧眼の至りと感に堪えない。それより数年に及ぶ周到な用意の後、第一次隊を一九六一年に、第二次隊を一九六三年に、第三次隊を一九六九年に、而して一九七〇年第四次隊に至つて始めて登頂に成功したのである。この十ヶ年に亘る同登山隊の足跡を辿るとき、いかにもP 29は手強い相手であつた。それ故にこそ、同山岳会各位の堅固な結束と不退転の決意の下で、當々たる努力と忍耐とによつて築き上げられた輝かしい価値と思う。P 29はマナスル山群にあってヒマルチュリと共に三山並び称せらるゝ巨峰である。この三山ともにわが国登山隊によつて初登頂されたことは浅からぬ因縁である。

ここに同山岳会が多岐に亘る困難を克服し初志貫徹の御成功を心から祝いたい。また本書はこの記念すべき業績を世に贈る貴重な記録と思う。

# 目次

## 序

榎 有恒

P二九の十年……………篠田 軍治 四

第一次隊 西面の試登（一九六一年）……………篠田 軍治 七

第二次隊 東面の偵察（一九六三年）……………木村 裕一 七

第三次隊 東面の試登（一九六九年）……………玉井 康雄 四

第四次隊 P二九登頂（一九七〇年）……………住吉 仙也 五

検討と反省……………住吉 仙也 九

遭難事故

頂上と登頂

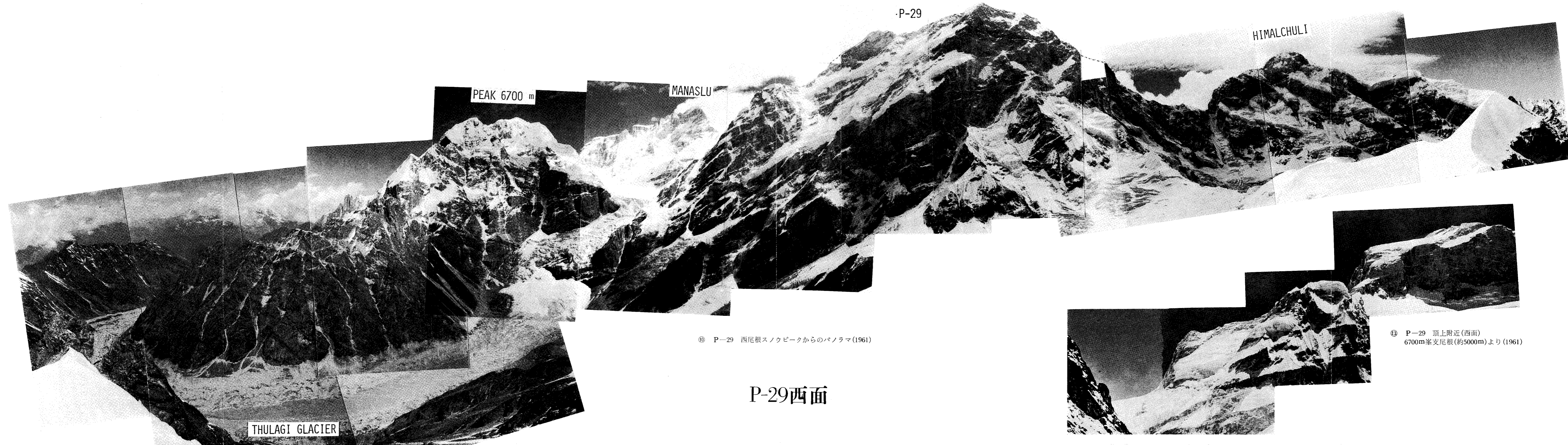
高所順化及び障害

ポストモンスーン期の遠征

山名について

## 追悼

追悼文に代えて……………住吉 仙也 九



P-29

HIMALCHULI

PEAK 6700 m

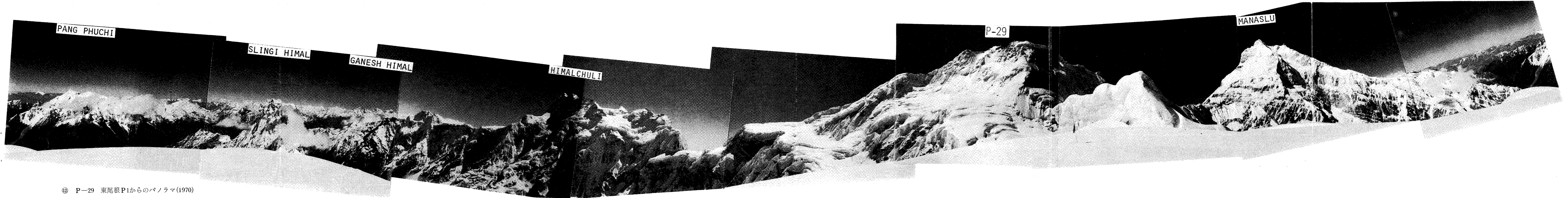
MANASLU

THULAGI GLACIER

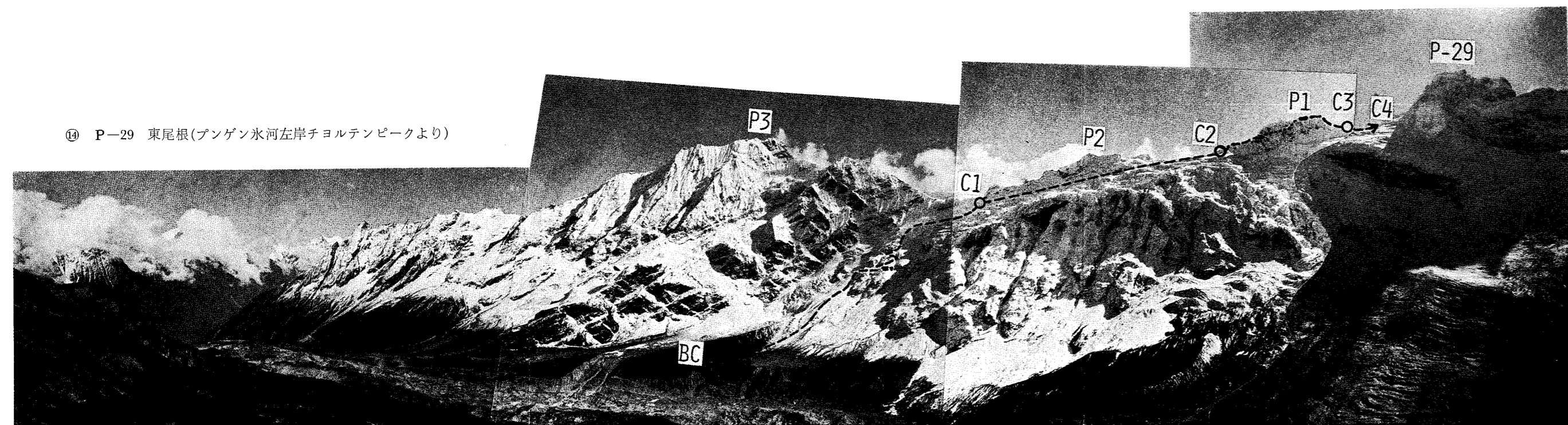
⑩ P-29 西尾根スノウピークからのパノラマ(1961)

⑪ P-29 頂上附近(西面)  
6700m峰支尾根(約5000m)より(1961)

### P-29西面



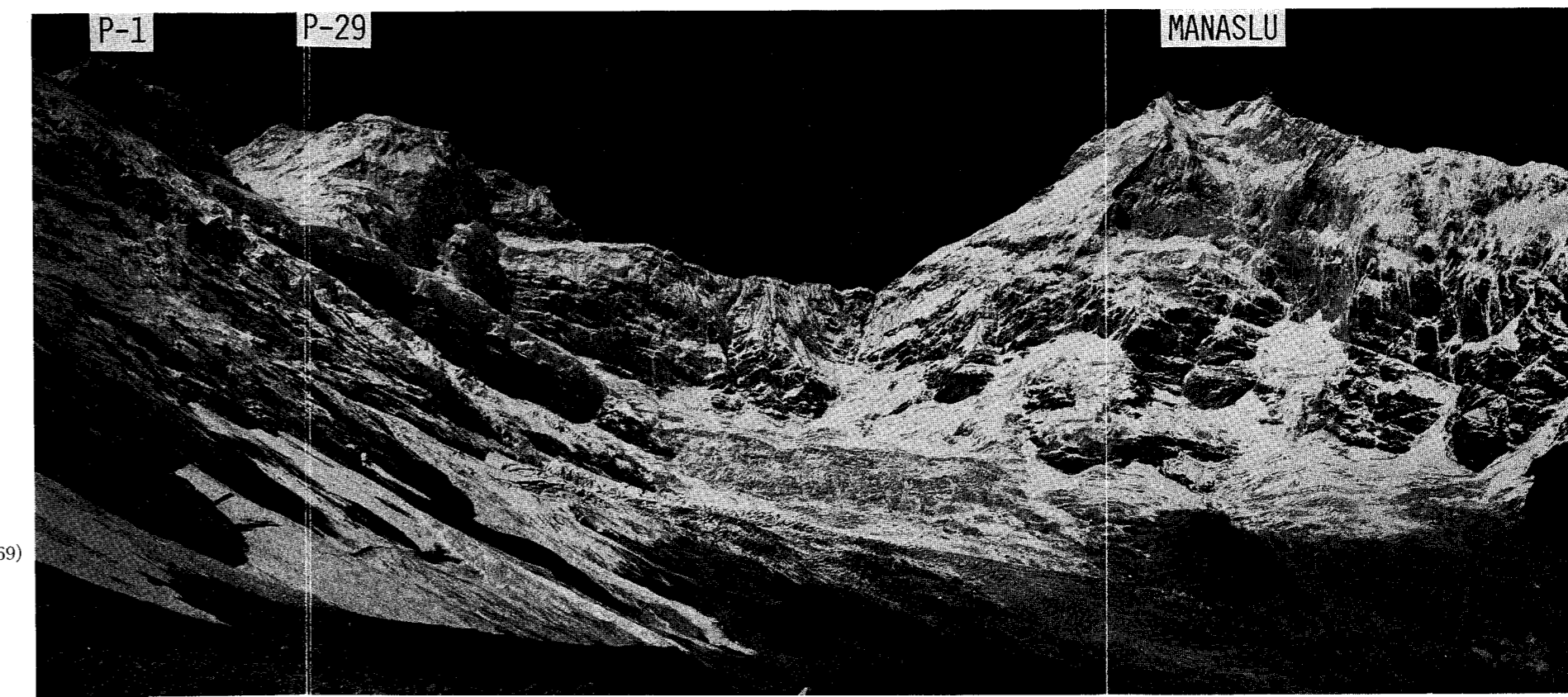
⑫ P-29 東尾根P1からのパノラマ(1970)



⑬ P-29 東尾根(ブンゲン氷河左岸チョルテンピークより)

## P-29東面

⑭ P-29 (左)とマナスル(右)  
(ブンゲン氷河右岸のベースキャンプより)(1969)



記録と雑感

渡部洋君を想う……………	黒田 治朗	三三
P二九通信……………	渡部 洋	三五
荷物の梱包、輸送、通関(第三次)(一九六九)……………	住吉仙也・石浜高明	一〇三
シエルパの死亡事故……………	住吉 仙也	一〇六
ツラギ氷河の流動……………	篠田 軍治	一〇九
渡部のピッケルの損傷とその原因……………	篠田 軍治	一一二
カトマンズの日々……………	水野祥太郎	一一七
ネパールの医学教育革命……………	水野祥太郎	一二三
薬草と生薬を求めて……………	難波 恒雄	一二六
ネパールの民家……………	大野 義照	一三〇
遠征隊事務局での回顧……………	大工原 恭	一三九
参考資料リスト……………	田井 英男	一五九
決算報告……………	山本光二・大野義照	一七九
協力者御芳名一欄表……………		一八四
あとがき……………	恩地 裕	一八七
編集後記にかえて……………	徳永 篤司	一九〇

地図 玉井康雄、カット 三枝礼子、作図 大野義照

# P 二九の十年

篠田軍治

阪大山岳会がP二九を選んだのは、いかにもむづかしそうな山だからである。その上に相当な高度をもつ独立峰であること、マナスル三山のうちの唯一の未踏峰であることである。むづかしい山である以上、一回で登頂することはむづかしい。だから何回も何回もやってみて、登頂までの過程を楽しむことができようと思った。

だから一九六一年春の第一回遠征のときには簡単に登れてしまっただけで済まない、予想が裏切られたことになると思いがちだが、できれば登頂したい。少なくとも登れる山に登らずに帰って来るようでは仕方がない。やはり何とかして登頂したいと思って、それなりに努力をした。

P二九の写真を見ると遠くからとったのには頂上が出ているが、近くからとったのは頂上附近が出ているのはあっても、どれが頂上かはわからない。こんな山は近くの六甲山を始めとして、高さの程度は違っても、日本の山にも沢山ある。日本の山では地図にルートが出ているので、どの方角から登ったらよいか考える必要はない。しかし、若し未登頂だったらどうするか。こうした考え方からルートをみつけようとしたが、その前にきめなければならぬのは東面か西面かである。

当時（一九六〇年）東面はマナスル側からの写真だけだったが、相当な困難が予想され、その上にブリガンダキの谷にはマナスル以来のサマ部落の問題がある。そこで一応西面にしぼって遠征計画をたてたが、P二九の基部に達するにはどこから入ったらよいかわからない。ムシコーラからか、それともマルシャンディを更に北に溯ってトンジェの附近の方がよいか、全く見当がつかなかった。そんなわけでカトマンズでも相当聞き込み努力し、どうやらムシ

コーラの谷から基部に行けそうだと結論に達したので、そこで最終的に西面という線が出た。結果から見て基部にはムシコーラからでも、トンジエ附近からでも行けることがわかったが、隊員の数から考えてトンジエ・ルートまで偵察隊を出すことは無理であった。

偵察隊、本隊の行動は報告に詳しく述べてある通りである。要するに、あの時期に危険なアイス・フォールで長期間活動するのは不可能であった。それなら他にルートはなかったか。左岸の岩場も候補に上った。これとても当時の登攀技術では時間的に問題にならなかった。又、若し実行していたとしたら、モンズーンが近づくと共に漸く活潑になった本峰の水の棚からずり落ちる大型の雪崩で遭難は避けることができなかつたであろう。

第一次隊が西尾根から登ろうとして、登頂は不可能に近いという結論を出した以上、六三年秋の第二次隊は東面、東尾根からということになる。結果は報告にあるように東尾根から本峰基部六三〇〇mに達し、東面からの登頂は困難ではあるが不可能ではないという結論に達した。第二次隊は帰途ラルキヤラを越えマルシャンデイに出て第一次隊の帰りのルートを逆にベース・キャンプに出て、西面と東面を比較して、西面の方が遙かに困難という結論を得た。僅か二年余りしか経っていないにも拘らず、ツラギ氷河の様相には多少の変化が認められ、アイス・フォールの流動がすさまじいことが立証された。今後西面をルートに選んで第二登を試みるとすれば時期を選ぶことと、一シーズンにやってしまうという考えは捨てるべきであろう。なお第二次隊は生葉関係の貴重な成果を挙げている。

私はネパール政府の登山禁止令がまだ解除にならない六七年三月、阪大を定年退職した。山岳部は恩地裕教授を部長として、新しい活動を開始し、積雪期黒部上廊下の完全溯行などの成果を挙げた。このときのメンバーが第三次隊に貢献してくれるものと期待をもっていたところ、六八年秋・モンズーンで非公式ながらネパール政府ヒマラヤ解禁の情報を入手した。帰国後、間もなく住吉から第三次隊の相談が持ちかけられて来た。もうプレモンズーンは間に合わない。どうしても六九年ポストモンズーンである。

ここでP二九ほどの高峰の初登頂を狙うのにポストでよいかどうか問題になった。しかし私は第二次隊の岩峰の霧氷の写真から、リダンダ、ブンゲンコーラの二つの谷からの上昇気流の凄さを想像し、春には東尾根のルートは危険にさらされる怖れがあると考え、むしろ秋を選ぶべきだと思っていた。この想像は六九年の第三次隊の東尾根のルートが六三年の第二次隊と違っていたことから、半ば当たったとも見られるが、本当のことは春に行ってみなければわからない。第二次まではRすなわち研究段階であるが、第三次はDすなわち開発というか登頂段階である。従って、その立場から第三次の人選、装備も検討された。ルートは第二次隊の見付けたもの、そのものと言ってよいが、頂上直下の氷壁は生やさしいものでなく、あと五〇〇mを残して時間切れで撤退を余儀なくされた。

第四次は水野祥太郎名誉教授を隊長、第三次の住吉隊長が副隊長として実際の指揮に当った。七〇年の秋である。第三次の荷物輸送は非常にスムーズに行き、<sup>\*</sup>その後の遠征隊のひな型になり、高所馴化も非常にうまく行ったので、それらの経験を生かすと同時に、第三次で不完全であったアイスハーケン、アイゼン、氷壁用テント等を増強して第三次よりもずっと早く行動に移って、氷壁での行動日数に余裕をもたせるようにした。六九年秋はヨーロッパは非常に天気がよかったが、ヒマラヤは期待したほどでなかった。同じ山を四回もやったら、よい天候に恵まれることもあろうと、大きな期待を寄せていた。（\*一〇二頁参照）

結果は登頂に成功し十年にわたるP二九遠征に終止符をうつことができたが、渡部、ハクパツエリンという二人の貴い犠牲を払ってしまった。そして、P二九には幾多の未知の世界が残されてしまつて、山頂附近の写真すらない。二人の遭難の直接原因は氷塊の衝撃と確信しているが、これも遺品からの推論で議論の余地はある。

六一年秋、第一次隊が帰ってから梅池の山の家計画に追われていた頃、阪大山岳部として最初の遭難者を出した。遅く入部して来てまだなじみの少ない新人であった。今度は若い層の中で、最も慎重な渡部の遭難である。彼の遭難によって多くのものが未知のままに残された。かえすがえすも残念でならない。

（一九七三年記）



## 第一次隊西面の試登（一九六一年春）

篠田軍治

はじめに

P二九のような山が、そう簡単に登れるものではないことは初めから予想されていたことであった。最悪の場合は一ス・キャンプの設営もできないかも知れない。しかし、マナスルとヒマルチュリの間にある山だけに、今までに多くの日本人に観察され、ある程度のことにはわかっている。案外一回で登頂できるかも知れない。今度の速征は偵察が主であっても、登頂の機会があったら登頂もしたい。そうなると隊の構成をどうするかということが問題になって来る。最初は隊長以下六名という予定だったが、偵察、登頂という二つの目的を達成するためには、もう少し隊を強化する必要があるということになって、結局つぎの八名になった。

### 第一次隊西面の試登

隊長	篠田軍治	阪大工学部
副隊長	住吉仙也	川崎病院
隊員	尾藤昭二	阪大武田外科 医療、食糧
〃	山本光二	大和銀行 会計、食糧
〃	西川元夫	近畿日本鉄道 装備、通信
〃	兼清喜雄	日立製作所 装備

山 本 信 樹 日産自動車 装備、気象

小秋元 隆 邦 東京放送 報道

仕事の分担に兼務が多かったのは、偵察の段階が長いと予想されたためである。住吉は唯一人のヒマラヤ経験者という意味で、医療の方の責任者から除いたのである。留守責任者にはヒマラヤの経験者を、というのが私の持論であったが、これは一方では隊を弱体化する怖れがある。その点、随分問題になるところであるが、結局、徳永篤司に事務局長になってもらって、私の持論通りになった。

阪大山岳会としては、この計画以外に田島汎の立案したサイバルがあり、P二九に絞られて来たのは一九五九年の初めの頃であった。しかし、本格的に動き出したのは一九六〇年の夏からであったから、登山手続、準備などはあわただしい中に経過し、一九六一年二月一七日のサーダナ号で尾藤、山本<sup>光</sup>、西川、兼清の先発四人が大阪市大、岳連両隊と共に神戸を出帆し、篠田、住吉、山本<sup>信</sup>、小秋元の本隊が三月一〇日エア・インディアで羽田を出発し、カルカタに向った。

#### キャラバン・ルートの選定

今までに手に入った資料から、P二九を西北面からやろうということとは比較的早く決定した。西北面に入るにはキャラバンの出発点がポカラになり、マルシャンディの谷に入るのは当然であるが、麓に近づくのにはムシ・コーラの谷をつめるのと、トンジェ附近から入ると、それらの中間から入ると三つのルートが考えられる。

\* 慶応ヒマルチュリ隊の各位及び今西寿雄氏の御好意によるものが多かった。

インド測量局の地図では六七〇メートル峰からの尾根は南西に延びて、ムシ・コーラとマルシャンディとの合流点附近に及んでおり、ムシ・コーラの源頭はマナスルとなっているが、一昨年の慶応隊の結果では、ムシ・コーラの

源頭はヒマルチュリであつて、マナスルとムシ・コーラとの間には尾根があることがほぼ確實になつている。

そうなると、この分水嶺の北に相当な川がなければならぬ。マナスル隊やヒマルチュリ隊に参加した数人の方の意見を綜合すると、トンジュエ附近にはそれらしい谷はなかつた。トンジュエとジャガートの間あたりで、マルシャンデイの河原が開けたところに滝が落ち込んでいて、その水量が相当あるので、これがその谷に相当するとも考えられる。しかし、これでは少し南に寄り過ぎてゐる。今西寿雄氏のナムン・バンジャンからの写真から考えると、どうしてもマナスルから三本歯を通つてトンジュエ附近まで達している尾根の南側に、相当な谷がなければならぬ。しかし、この谷は深いゴルジュになつてゐるものと想像される。こんな事情を勘案すると、トンジュエから入るのには意外な困難が予想される。

\* これはタールという茶店が二軒あるところであることが確認されたが、本谷ではないようである。

一方、ムシ・コーラの方はどうであろうか。もちろん分水嶺は越えなければならぬ。そうなつてくると分水嶺の北側が降れるかどうかが問題である。住吉は三月二七日カトマンズからポカラに飛び、機上からの観察結果では、北からの氷河がこの分水嶺に突き當つてゐる形だから、相当な断崖が想像されると悲觀的な意見になつた。私も小秋元、ピナヤと共に同じコースを三月二九日に飛んだ。その時は住吉のときほど天気はよくなかつたが三千メートル以上はよく見えて、観察の結果では分水嶺の尾根と六七〇〇メートル峰の末端との間には相当な距離があるから、どこかにカール地形のようなものがあつて降りられるところがありそうに思えた。こうした事情と三千メートル附近の雪が例年よりも確かに深いように思われたので、最初の偵察隊は南斜面からということにしてムシ・コーラの谷に入れることにした。

最初の偵察隊は四月四日午後、住吉、西川、ヒラ・テンジン、クンガ・ノルブ、パサン・ノルブと常備ポーター二人、ポーター七人計十四人で出発した。本隊は四月六日ポカラを出発し、九日クディに到着した。この日、ナルマ、

ダハレ、パグルンパニと一六〇〇メートル附近の尾根を通っている間に、六七〇〇メートル峰や分水嶺附近の地形を遠望して、六七〇〇メートル峰の続きは分水嶺（西尾根）とつながっていないことは確認されたが、トンジュエ方面の岩峰は相当に峻しいことも明らかになった。そこでムシ・コーラの偵察隊を強化することにして、山本光、山本信を一日に出発させた。

\* 偏光フィルターや日立の干涉フィルターを双眼鏡につけて観察した結果である。フィルターを使わないと明瞭には見えなかった。

ポカラでポーターの集りが悪るかったため、尾藤、兼清は一日遅れて出発し、一〇日にクデイに着き、一日にはマルシャンデイ左岸の山をできるだけ高い所まで登るつもりで出掛けた。ところが彼らは住吉の手紙を持ったポーターと途中で出合い、ジャガートの対岸のチ普拉あたりから登るルートが有望なことが判明したので、装備その他を多少変更するために、夕刻クデイに引返して来た。そして翌一二日再びチ普拉に向けて出発した。西尾根の続きか、ダハレの裏山あたりに湖があって、これが登路と関係がありそうだということはカトマンズでの聞き込みで知っていたが、それが住吉の手紙でチ普拉から行けるらしいということになったからである。

尾藤隊はチ普拉の附近のサンジャプルに湖を知っている人があることを確かめ、湖がドゥド・ポカリと言って牛乳のように濁っていて、神聖な所であることを知り、西尾根の支尾根へ向い四二〇〇メートルのコルに達して、湖へは岩峯を巻いて行けば、それほど困難ではないが、キャラバン・ルートとしては見込薄であることを確かめて、一六日ベース・キャンプへ帰着した。

翌一七日ベース・キャンプをムシ・コーラの合流点の附近まで移動し、一八日には篠田、尾藤、シエルパニ、ポーター二でムシ・コーラ左岸の尾根へ西尾根の偵察に向った。ムシ・コーラをつめて、ツルベシの直下の竹橋まで来ると、ツルベシの茶店にシエルパが二人降りて来ているとの情報が入ったので、直ちに連絡すると住吉からの手紙を持

っていた。

それによると、住吉は四九〇〇メートルの西尾根の<sup>\*</sup>コルに達し、目の前にマナスル、P二九を源頭とする大きな氷河（ツラギ氷河と呼ぶのが適當であろう）があり、その上流は大きなアイスフォール、下流は壮大な土かぶりの氷河となつて、六七〇〇メートル峰で大きくUターンして北に流れ、末端に大きな湖があり、それから下流では左折してトンジェ方面に向つており、このアイスフォールは困難ではあるが、ルートとして選べないことはないとのことであつた。

\* いつの間には「住吉コル」と呼ぶようになってしまつた。このルートをみつけるには相当苦心した。山本（光）は対岸の慶応隊のBC附近に登つてみて、このコル以外に西尾根を越えるルートのないことを確認した。

問題はこの氷河のモレーン上をベース・キャンプに選ぶとすれば、どのルートをとつてキャラバンを進めるかということである。距離的に考えてトンジェから入ることも考えられる。しかし、この大きな氷河が今まで未知であつたことは、トンジェ方面には入つた人がなかつたこと、換言すればトンジェ方面から入ることは非常に困難であることを意味する。ムシ・コーラからでも四九〇〇メートルのコルを越えてキャラバンを進めることは困難には違ひないが、不可能ではない。以上のようなわけで、キャラバンはムシ・コーラの谷へ進めることにした。一八日に住吉、山本光が帰つて来たので、一日準備して、二〇日に新しく雇つたポーター八一名と共にキャラバンに移つた。二〇日ツルベシ、二一日ダハレ泊り、二二日ダハレの老夫の一寸したストが起つたが、チトラカルカ泊り、翌二三日もポーターのストがあつたが、かまわず登つて三九〇〇メートルの、後に「雲上カルカ」と命名した所に達した。

チベット人によるコルの途中までの荷上げは二五日に終了、これと併行して隊員とシェルパも荷上げを続け、住吉、西川は一足先きにベース・キャンプの位置の選定に出掛け、本隊は肛門腫瘍のイラ・テンジンを残して、三〇日には大部分が氷河のほとりのベース・キャンプに入つた。

## ベース・キャンプ

西尾根の雲上カルカに到着した日は、初めて全員が顔を合せた日であった。ポカラ滞在中にもバイロワから兼清が飛来したときも一応全員が揃ったわけであるが、兼清はすぐに同じ飛行機でカトマンズへ査証その他の用事で出発してしまったので、落ちついて話をする暇もなかった。ムシ・コーラの谷を登ってキャラバンを進めて来たときも、西川だけはアイスフォールの雪崩の観察をするために残留したので、やはり全員は揃わなかった。

サーダナ号で出発した四人は、二月一七日神戸出帆、本隊は三月一〇日羽田発、そしてサーダナ号がカルカッタへ入港したときには篠田、住吉、小秋元の三人はカトマンズへ出発した後であった。残りの隊員が荷物と共にバイロワ経由でポカラへ到着して、初めて大部分の隊員が揃ったが、兼清がカトマンズから戻って来たときには住吉、西川は偵察に出発してしまっただけであった。

こんな具合で全員が揃うと急に賑やかになる。雲上カルカは南斜面で快適な所で、薪も多いのでキャンプ・ファイアは楽しいものであった。

これにくらべるとベース・キャンプの位置は条件が悪い。四月一七日に住吉がコルから初めて、マナスル、P二九、六七〇〇メートル峰の間から出て、大きなアイスフォールから土かぶりの氷河となり大きくUターンして北に向かい、末端に氷河湖をもつ幅約一キロのこの氷河を発見したときは、あまりにも蕭条として、絶えず上昇気流のために雪と霰を降らしているこの谷筋は、全く地獄のような感じがしたそうだ。その上にベース・キャンプは北斜面の燃料の全く無い地点である。ベース・キャンプとしてU字型の峡谷の陰というのは、標高は四三〇〇メートルであり高いとは言えないが確かによくない。しかし、雲上カルカをベース・キャンプ(BC)として、ここをアドヴァンス・キャンプ(AC)と仮定すると、ACからBCに戻るのに高いコルを越すことはいかにもまずい。こんなわけで、環

境は悪くてもBCはここに選ぶより外に方法は無かった。結果は予想した如く晴れた日でも午後には上昇気流による雪と霰、それが落ち尽すとまた強い日射、また雪と霰というサイクルを繰り返し、五月末の撤収の頃まで緑というものを見ることはできなかった。

西尾根の基部は断崖となつて南峰の近くに続いているので、登路としては問題外である。唯一の考えられる登路は、BCから氷河を登りアイスフォールを越えて雪原状の所へ出て、マナスルとの間の鞍部へ出ることである。アイスフォールの落差は一五〇〇メートルほどで平均して三〇度を越える傾斜である。右岸は断崖になっており、とても登路にはならない。そうなると思えられるのは左岸だけである。左岸にしても非常な困難が予想される。住吉も暇さえあればアイスカッティングのトレイニングをやっている。

右岸にはのしかかるように六七〇〇メートル峰の末端が蔽いかぶさっており、そこからなだれが落ちる。またアイスフォールと土かぶりの氷河との境界が岩壁になつて切れていて、小さななだれが落ちる。前者をBなだれ、後者をAなだれとすることにして、四月十八日以後偵察隊の西川を残留させて、雲上カルカから毎日コルへ登つてなだれの状況を観察させた。このアイスフォールを初めて望見したときには、まだなだれはそれほど顕著でなく、土かぶりの氷河も上端附近までデブリはなかった。四月の末になると次第に活潑になつて来たが、それでも半日間にAなだれ三回、Bなだれは二日に一回程度であった。しかし五月に入ると共に漸く劇しくなり、多いときにはAなだれは一時間に八回を越えるほどになった。

寒さがゆるむと共になだれの発生場所も次第に高い所に移つて行き、時にはP二九頂上直下の岩壁の基部の末端の水が崩れて、岩壁一面に幅二〜四キロ程度のものが落ちて来て、土かぶりの氷河まで達し、しかも幅一キロの氷河を横ぎつて対岸に達するようなものも何回か観察された。

Aなだれは、数が多いが小さいのが多いので、右岸を通れば避けられないことはない。しかし、右岸はBなだれを

まともに受けることになる。その上にBなだれよりも一段上のところからなだれがおこる。また、北へ曲がっている氷河の上流には、両岸のマナスルと六七〇〇メートル峰から絶えず落ちていたことが、音から推測される。右岸のアイスフォールの上部には、比較的緩い白い斜面が見えるが、そこは言うまでもなくなだれの通路である。

こうしてアイスフォールでの長期間の行動が、問題にならないほど危険であることが明らかになったので、あらためて左岸の岩壁の観察が進められ、二〇〇〇ミリ望遠レンズを使って要所所が細かく観察された。その結果は全く否定的で、その上に左岸は頂上直下からの大なだれを避ける方法がない。何れにしてもアイスフォールでの長期の行動は許されることが明らかになった以上、登頂行動を断念して、つぎの行動に移らなければならない。

そこで五月六日朝、隊員、シェルパ全員を集めて、隊の今後の方針、登頂活動を断念して今後に備えて氷河の奥とP二九頂上附近の状況を明らかにするために、六七〇〇メートル峰の試登を含む偵察と、トンジエ・ルートの開拓に全力を注ぐことにすると宣言した。

アイスフォールを登頂ルートに選ぶことは、当初から覚悟していたことであった。しかし、現実にP二九のアイスフォールにおつかつてみると、あまりにも想像とかけ離れていたものであった。あらためてハントの『エヴェレスト登頂』を取り出して、クーンブのアイスフォールの写真を眺めた。エヴェレストのアイスフォールならば何とかして試みる気になるが、このアイスフォールは両岸が切り立っており、あまりにも悪い所が多い。スイス隊に参加してエヴェレストへ行ったサーダーのアジーバが、後で語ったところによると、エヴェレストのは悪い所が短かいので何とかなるが、このアイスフォールは悪い所が桁違いに長いので、とても不可能であると言っていた。

#### 六七〇〇メートル峰の試登と偵察活動

五月七日は休日にして、八日からまた行動を開始した。漸くBCに集結した荷物の一部を、また六七〇〇メートル



峰試登のために移動させなければならない。八日には全員で氷河の左岸を降り、はじめて氷河湖の左岸をまいて、マルシャンデイへ注ぐ支流の源流へ出た。このあたりへ来ると標高も三九〇〇メートル程度になって岳樺が現われ、新芽が出ている。荷物をデポして引き返す途中、湖畔の岩小屋の中にカルカの材料と思われる細い木材を見つけた。

これでこの谷にも、過去において人が入ったことのあることは明らかになったが、木材はいかにも古い。またこれより下流に人に入った形跡が見出だせない。今でも人の通れる道があるのかどうか、またこの木材をここに置いた人はどこから来たのか、何とも推定し難いのが却って無気味でもある。

後になって、このドナ・コーラの谷には猟師道があつて、マルシャンデイ河畔のナジェに通じていることが尾藤隊によって確かめられ、五月十三日には住吉が数人の猟師と会っている。(ジャコウ鹿が目的らしい)

六七〇〇メートル峰の試登隊は、最初西川、山本信、アン・ナムギヤル、アン・ダワの四人で五月九日出発した。

一二日に住吉、兼清、カルマオンチュウ、クンガ・ノルプの四人が応援に出掛け西川と兼清が交代した。以下は西川の手記である。

五月九日 晴後雨、夜晴

十時出発、氷河湖の下端から少し下った所が森林限界、その頃から雨が降り出す。日本の早春を思わす針のような雨に濡れて、石楠花や樺の木は新らしい芽をふくらませている。一五時、昨日荷下げして荷物をデポした所、広河原にキャンプする。(この日BCでは午後は霰と雪であった。氷河湖のあたりから下が雨になっていた。)

五月一〇日曇、雪、夕方晴

天気は曇っているが、下流のマルシャンデイの上空に少し青空がある。八時、トンジュ・ルート偵察に向う尾藤隊が出発、われわれも少し遅れて出発する。

六七〇〇メートル峰西面の氷河は、ここのキャンプのすぐ上で懸垂氷河ハンギンググレイシャーとなつて消えている。その氷河に達する

には氷河の北側の草付きの岩稜が唯一のルートに見える。高度差一〇〇〇メートル。はじめ鹿道などを辿って登って行くうちに、ほとんど高度をかせぎ、一二時三〇分氷河の下のガラ場、高度四六五〇メートルに達する。一〇時頃から降り出した雪がますますはげしくなる。ガスも濃くなり地形の判断もつき難いので引き返す。広河原キャンプ一五時帰着、尾藤隊はすでに戻っていた。

五月一日 晴

今日は氷河上にキャンプを進めるためのボッカである。七時半出発。昨日ルートがつくってあるので、足ははかどり、岩のガラ場を通り過ぎて一三時半、フンギからの氷河のセラック帯の下端の、あまり広くない雪原に達す。高度四九〇〇メートル、ここをキャンプ地にきめる。半時間ほどいて引き返す。広河原のキャンプへ一六時半に帰る。

五月二日 晴

広河原に来て今朝が一番良い天気である。アン・ナムギャルだけが今日このキャンプに戻ることにして、他の三人は昨日見付けた四九〇〇メートルの雪原にキャンプRC2を進めることにする。朝、良かった天気も、四一〇〇メートルの高さにある大岩庇のところに登り着いた一一時頃には、真上に少し青空を残してガスに囲まれてしまった。

一四時半にキャンプ・サイトに着いた。アン・ナムギャルはすぐ広河原に下る。一六時過ぎガスが晴れて来たので、キャンプの裏のこぶへ登る。六七〇〇メートル峰から出ている上下二段の氷河の合流点が、大雪原となって足下に広がり、西へアイスフォールとなって落ちていく。上段の氷河は最後まで急峻なアイスフォールの連続で、奥はヒマラヤひだとなって稜線につき上げている。下段の氷河は所々に緑色の断層を見せているが、大部分が雪原のように見え、上段に比べれば坦々としている。しかし稜線へ出するには、これもまた容易でない。氷河のつき当りの壁にはヒマラヤひだが見られ、さらに上部には懸垂氷河がかぶさっている。唯一の登路は、あの三角形の北の一辺しかない。

五月三日 晴後雪

下段の氷河にキャンプを進めることにする。七時半出発、一旦氷河合流点の雪原まで下ってそれを横切り、アイスフォール帯に入る。午後になると定期便のガスがやって来て、あたりを包んでしまう。ただでさえ視界のきかないアイスフォールの中で、二〇分もガスの薄れるのを待ったりして一四時、荷物をデポする。高度五二五〇メートル、折から降り出した雪の中を二時間かかってRC2に引き返す。キャンプに兼清が来ていた。

五月一四日 晴、午後ガス

休養のための停滞。

五月一五日 晴、午後ガス

山本はせきがひどく体の調子が良くない。兼清と二人でRC3を建設したらこれに入ることにして、八時半出発。トレースがあるので足はよく伸び、一昨日苦労した氷の出ている急斜面も楽に通過できた。デポ地からさらに一段登った所に雪をならし、氷を削ってキャンプ・サイトにする。高度五三〇〇メートル、一三時、サポートの山本とアン・ダワはテントを張り終えてから下る。

五月一六日 晴、午後ガス

四時半に目を覚まして、ガタガタして出発できたのは六時半。キャンプ自体がアイスフォールの中にあるのだから、すぐ迷路的な上り下りに入ってしまふ。今にも崩れそうなアイスピルの下を通ったり、悲壮な決心をしてからクレバスを跳び越えたりして一〇時、高度五四〇〇メートルのところの高さ二〇メートル余りの氷河の幅一杯にわたる氷壁にぶつかる。かなり手前にハングしているし、上の方に砕石を含んだ層があり、ここで二時間いろいろ手を尽したが、どうしてもこれを使い越える方法がみつからない。とにかくこれから先はラダーか縄ばしごなど、BCにある装備が必要なのは目に見えているので、一旦BCに引き上げて陣容を立て直すことにする。兼清は非常に疲れている。朝はすたすたと通れた所が、雪が腐って足場がさまらず難渋する。チョット油断して歩いていると、すぽっと腹

までクレバスに落ちこんでハツとする。キャンプ帰着一三時半。

五月一七日 晴、午後ガス

一時RC2から山本とアンダワが登って来た。一二時出発。一四時半にRC2に戻り、荷物をまとめて一五時  
広河原のキャンプへ四人揃って下る。

五月一八日 晴、午後ガス

山本と兼清を広河原に残して、BCへ六七〇〇メートル峰の増援方を頼みに出発する。BCへ着いたのが一時、  
尾藤から隊長の発病を知らされ、午後大阪市大隊の遭難を知った。

このようにして六七〇〇メートル峰の試登は、稜線に達することもできなかった。何とかして稜線へ出て、P二九  
とマナスルとの中間の内院を観察しようという望みは絶たれたので、下の氷河の一段下の氷河の跡を登って稜線に出  
ることにした。山本、兼清の二人は、二日一時半頃遂にBC対岸のコルに到達することに成功した。この谷も上  
の方は氷河で、氷は意外に硬く、市販のアイス・ピトンは一回のハンマリングで二ミリ程度しか入らず、尖端が破壊  
したが、東京機器工業で特別に鍛造したものは威力を発揮した。

住吉はRC1まで行き、方針を指示して帰って来た。一つには若い層に自主的に行動させるため、また自分自身も  
ツラギ氷河のアイスフォールに挑むつもりであったのだ。

## 六二〇〇メートル峰の登頂

西尾根の住吉コルから東に寄った方に懸垂氷河があり、それから少しP二九の方に寄った所にピラミッド形の白い  
峰と岩の峰とがある。西尾根のジャンクション附近に登れば、それから尾根伝いに簡単に行けそうだ。登頂を断念し  
た今となっては、隊員の中には雪線以上の活動をほとんどしないで帰る者が出る怖れがある。何とかして全員雪線

以上で行動させたい、それにはこれらの山が適当であろうと考えて、五月一三日、アジーバを連れて偵察に行つてみた。

四八〇〇メートルほどのジャンクションから少し下った所まで登ってみると、岩峰とこれより少し高く六二〇〇メートル程度と推定されるスノー・ピークまでは広い尾根と雪原とで、至って簡単なように見える。

\* 最初は六〇〇〇メートル以下と思っていたが、実際に登って確かめたところでは、六二〇〇メートル程度のものであるとこのことであつた。

東の方の谷を見ると、おだやかな広い氷河が北へ向かつて流れている。上の方はジャンクションの雪原に続き、下はツラギ氷河の附近で終っているが、その間はつながっていない。ツラギ氷河と全く対照的な、セラック一つ見えない美しい氷河である。この頃からガスが次第に濃くなつて来た。この地点にもう一五分遅く着いていたら、スノー・ピークもこの美しい氷河も見られなかつたであらう。

五月一七日、住吉はパサン・ノルブ、アン・ダワを連れて出発、五〇〇〇メートル附近にキャンプした。一八日、山本光、パサン・ノルブも上のキャンプに入り、彼らは岩峰と雪峰の登頂を果たした。一九日、住吉、山本が帰り、二〇日、尾藤、小秋元、ダ・ノルブ、イラ・テンジンが出発、二一日、BCに戻つて来た。

これらの登頂活動が今回の遠征の最高到達点であり、初登頂の唯一の記録になつた。

### その他の偵察活動

ツラギ氷河の奥は、氷河がUターンしているだけにわかり難い。これをはつきりさせるために多くの偵察行動をした。六七〇〇メートル峰の試登、スノー・ピークの登頂もそのためであつたが、まだ資料が不足なので西尾根の続き、ウェスト・コルから分れて北に向かう尾根へも上つてもらった。五月二五日一〇時半、兼清、山本信はコルに達

し一二時までいて、ガスの晴れ間を見て写真撮影をした。二六日には尾藤、ペンバ・ノルブは左岸の山に登って六七〇〇メートル峰の観察をした。

ツラギ氷河の溯行には五月一日、篠田、住吉、兼清、アジーバで出掛けたが、相当に悪く、アイスフォールの下まで行くこともできなかった。これらの偵察行の到達点は図③に×印で示しておいた。

### トンジェ・ルートの開拓

ツラギ氷河の末端は氷河湖を経て北流し、西に向きを変えてトンジェ附近でマルシャンディに注いでいることは地形から考えて明らかである。私も四月二六日雲上カルカ滞在中ウエスト・コルに行つて見た。西尾根はここで南北に分れるが、附近に幾つかの池がある。ダハレからも行けるが、チプラからチベット人がみそぎのために登るといふ神聖な湖、ドウド・ポカリはこの中のどれかであろう。ここからツラギ氷河へは越えられそうもない、また西尾根も基部からここまでの間に越えられるところは、住吉コルだけということが明らかになった。ここへ来て、住吉はいかにも好いルートを見つけたものであるということがはっきりわかった。

北へ分れた尾根は西に向きを変え、その向う側に川があることがはっきりわかる。トンジェまではそれほど遠くないはず。

ツラギ氷河へムシ・コーラ側から入るルートは見つかったが、果たしてトンジェ方面から入れるかどうかは全く不明である。

氷河湖の標高とトンジェの標高、マルシャンディまでの距離を考えると、谷は相当な傾斜であつて、深いゴルジュを予想しなければならぬ。

遠征隊がポカラを出発する頃までは、この谷が滝になって、ジャガート対岸附近に落ち込んでいるのではないかと

いう説が有力であった。しかし、今はジャガート対岸の滝というのは、ウエスト・コルを水源とする短かい川の末端であることが明らかになった。そうなるとツラギ氷河からの川は、相当な水量でマルシャンデイへ注いでいるはずである。滝になっていけば、今までに対岸を通った遠征隊の中の誰かに発見されていなければならぬ。それが今まで誰にも見つけられていないということは、落ち口が非常に深いゴルジュになっていることを物語るものであろう。

とにかくトンジェ・ルートの開拓は下を向いての山登り、下降ルートの発見である。住吉より若い隊員は阪大山岳部の黒部下廊下、上廊下横断時に活躍した連中である。その中でも尾藤は新越乗越から下廊下への下降ルートを初めて試み、下向きの山登りの困難さを身にしみて体験している。なおまたヒラヤ遠征には珍らしい雪も氷もない夏山での行動である。こうした事情を勘案して山本光を加えて、シエルパとしてダ・ノルブとパサン・テンバの二名を同行させることにした。以下は尾藤の手記である。

五月九日 曇

六七〇〇メートル峰に向う西川、山本信らと共に湖の下端の台地にあるRCI(三七〇〇メートル)に下った。

五月一〇日 晴後雨

六七〇〇メートル峰に向う隊、谷を下る隊、それぞれの予備偵察に出掛けた。谷を下るわれわれは左岸を行くべきか右岸を下るべきかは、むずかしい問題であった。一応、右岸をシエルパを先行させると、湖からの沢と六七〇〇メートル峰の氷河末端からの沢との合流点を少し下った所で、彼らは早くも砂の上に裸かの足跡らしいものを発見した。さらに森林帯に入って間もなく、明らかな踏み跡を見つけた。それは漸次明瞭な山道となった。さらに人の泊った跡のある岩小屋と小屋掛けを見つけた以上、マルシャンデイに通ずる道のあることを確信するに至った。

人跡未踏の谷との予想を裏切り、容易に山道がみつげられたことは、ネパールが徹底した山国であることを物語っていた。かかる平地のない所では、およそ人間が歩けそうな所はどこでも人の足に踏まれているのである。

五月一日 晴後雪

朝九時RCI出發、一気に下降してマルシャンディ・コーラに出た。道は途中から竹橋を渡って左岸に移るようになっていた。六時ナジェ部落着。ナジェ（グルン・一八五〇メートル）の住民から聞いたところでは、(1)湖の名はニョー・ポクリ（乳の湖）、(2)六七〇〇メートル峰の名はドナ・フンギ（フンギは肩）、(3)下って来た谷をドナ・コーラと言う。またナジェの住民だけがこの谷に狩猟に入るとのことである。谷の道も猟師道で家畜の通る道でないから、悪い所が何箇所もあつたはずだ。ナジェの住民だけに知られた谷であり、ナジェは登山隊の来たことのない部落であるから、この谷が知られていなかったのも無理はない。

\* この附近ではポカリと言わずにポクリと言う。

五月二日 晴

日本の五月のような快適さに休養。

五月三日 晴後雨

ナジェの部落民を一人ポーターに雇って、途中の道の補修工作を行なった。セルパの道工作の腕前は立派なものだった。大木の切り出し、運搬、それを使って実に要領よく道を作った。左岸から右岸に移る竹橋の所で一泊した。

五月四日 晴後雨

八時出發、帰途本隊のキャラバンを通過させる際の諸問題を考えながらRCI帰着。

### 隊長の発病、大阪市大隊遭難と帰りのキャラバン

五月一四日の日記を見ると「今日は朝から胃の調子が悪く、何だか貧血の気味で九時の気象観測の後で、少しふらふらした。無理せずに一日休養」夜十時頃就寝、しばらくすると気持ちが悪くなった。住吉の毎日新聞社古市氏宛の



手紙によると「真夜中、就寝中の私のテントに隊長が顔面蒼白で来られ、吐血」のこと。急ぎ私のテントに寝ていただき、真夜中のこととて小秋元（BC唯一の隊員）、シュエルパを騒がせるのも困るし無意味なので、私一人で隊長テントの吐血処理、湯タンポ準備、止血剤等注射をしました。夜二時半頃やっと私もシュラフにもぐりましたが、隊長の年令を考えると夜明けが待遠しく、かつ今後のことを考えてなかなか寝つかれませんでした。

明けて一五日、隊長吐血は再度となく、気分も落着かれた様子で、やや愁眉を開いた次第です。それにしても十四日、予定（六七〇〇メートル峰偵察を続行中、私もそれに加わり、指揮する）を急変して、BCに私一人で帰って来たのが全く不幸中の幸いだった。」

一五日には尾藤、山本光も帰り、ドクターは二人になり、一六日にはどうやら日記を書けるようになった。病気は胃潰瘍で吐血の量は住吉も驚いたくらい多かった。

トンジェ・ルートの開発に成功しているので、このニュースはトンジェのチェック・ポストから無電で連絡することも可能だったが、二人のドクターの意見は心配するほどのこともない的一致したらしく、一七日のポスト・ランナーに托して、毎日新聞の古市氏と留守隊長の徳永に知らせただけであった。しかし、リエゾン・オフィサーのロカが外務省に報告して、これがUPIの通信員に伝わって内地に報道された。このことは後にポカラへ着いてから知った次第である。この機会に御心配をかけた内地の皆様にお詫びする次第である。

市大隊の遭難のニュースは一八日午後と一九日朝のカトマンズ放送で聞いた。一週間ほど前から、なだれの中心が次第に上の方に移って行った感があった時だけに、案じていたものが遂に最悪の結果になって現われたという感じだった。

隊長、大島、ギャルツェンの死という和最悪の結果である。大阪の留守隊にもヒマラヤの経験者がいないだけに、難渋を極めているに違いない。何とかして応援をカトマンズに送りたい。しかし明日出発して強行軍をしたとして

も、カトマンズ着は二八日になる。これで果たして間に合うであろうか。しかし間に合っても、間に合わなくても日本隊の遭難であるから、隊員を派遣することを決意した。外科医であり、経験者である住吉は欠かすことができない、も一人は一番英語の達者な西川を出すことにした。

住吉が帰って来て相談してみると、彼には医者として、また隊長は病気で自分は副隊長であるということから、すぐには承諾しない。しかし彼も私の頑固さに免じて遂に承諾し、翌二〇日午後新らしく開拓されたトンジュ・ルートを下って行った。住吉もアイスフォールに挑むこと、またトンジュで越冬することに執着をもっており、西川は初めてのヒマラヤというのに先発、先発で帰りのキャラバンだけは楽しみたいと思っていたのに、遂にキャラバンを経験することなく山を降って行くのは、心残りの多かつたことであろう。彼ら二人はカトマンズで期待通りの活躍をしてくれた。また二九日、毎日新聞に打った電報で隊長重態というのに、医者である副隊長がカトマンズに現われたというので、前日「篠田隊長重態」で賑わった新聞紙上に快方に向かったという記事が現われ、回復させるための必要からか流動物を摂り出したというおまけまでついたが、事実はその通りであった。この直後に一七日ポスト・ランナーに托した手紙も着いて、大阪の留守隊での徳永留守隊長の状勢判断の適確さに驚いたのであった。

住吉が去って尾藤は急に責任重大になった。医者であると同時に隊長の仕事もしなければならぬ。しかし山本光がよく補佐した。

RCIから少し下ると急に谷が開け、岳樺の多い徳沢を思わせるような所に出る。標高も三五〇〇メートルで石楠花も咲き、誰言うことなく樺河内となってしまう。私の病気も次第によくだったので、今日一三日は退院の日である。椅子に乗ってパサン・テンバとダ・ノルブに交互にかつがれ、尾藤が付添って樺河内に下った。体には全くこたえない。回復したと言っても二〇メートル歩くのが苦痛であったが、樺河内に来た翌日には、もう二〇〇メートル歩いてもあまり苦しくないようになった。六七〇〇メートル峰を眺めながら、病氣保養をする気持ちは今までに味わっ

たことのない長閑なものであった。

二五日、山本光、アジーバらは谷を下り道の補修を行なうと共に、アジーバはトンジュエ方面へ行って人夫を集めて来ることにした。こうしている間に残りの隊員と荷物が集結し、人夫も二九日には登って来た。

三〇日、帰りのキャラバンに入り、その日は右岸から左岸に移る竹橋のほとりで泊り、三一日午後、麦秋のナジェ到着。途中の道は相当に手入れはしてあっても、行きのキャラバンのような大部隊では通過困難と考えられるほど悪い。やはり往路にムシ・コーラを選んでよかった。

ナジェでは農繁期と橋の補修に人手をとられて、人夫がなかなか集まらない。漸く六月三日に出発できた。サタレの対岸まで来ると、日本隊になじみの深い竹の吊橋が落ちていて、思わぬ所で川留め。修理が出来上るのを待ち、ここにワイヤ・ロープを使った吊橋を建設中のスイス人アシュマン夫妻などに見送られ、雨上りのマルシャンデイを下った。そして七日クデイに着き、漸く往きのルートに合し、一日ポカラ着、キャラバンを終えた。

ポカラに着いてみると、内地の大勢の方々から病氣の見舞状が来ていたが、はじめはどうして内地まで伝わったかわからなかった。

お わ り に

P二九の西面に関する限り、考えられるルートはツラギ氷河だけである。しかし、このルートがプレ・モンスーンの時期には非常に危険であることは前述の通りである。

今後西面からの登頂を目指す前にはもう一度、東面を徹底的に偵察する必要がある。とにかくP二九は予想を遙かに上廻った困難な山であった。われわれは、日本人にこうした、新しい登山術の開発を必要とするようなむずかしい山が残されていることは、喜ばしいことであると思っている。

この度の遠征によってツラギ氷河が発見され、その周辺の地形が明らかにされ、氷河湖からマルシャンディへ注ぐドナ・コーラの谷も明らかにされた。またP二九西尾根の全ぼう、これと本峰との間の氷河、また西尾根から南へ出る台地はヒマルチュリからの台地とつながり、その間をムシ・コーラが流れていることなどを見出だすことができた。

登頂活動としては六七〇〇メートル峰の試登、西尾根の六二〇〇メートル峰の登頂程度で、著るしい成果は挙げる事ができなかった。

私にとって最も思い出になったのは、ダハレから四九〇〇メートルのコルを越えて、偵察をしながら未知の谷をキヤラバンを進めたことであつた。

## 附 記

(1) シェルパはアジバ以下八名、リエゾン・オフィサーはパサブ・ロカであつた。

(2) 現地民から聞いたところでは、P二九はツラギまたはそれに近い発音である。そこで氷河はツラギ氷河と呼ぶことにしたが、ナジュの極く一部の者は Kasu と呼んでいるらしい。P二九にしてもツラギ(ムシ・コーラその他)、ツランギ(チプラ附近)、ツラニ(トンジェ附近)などがあるので、Thulangi としてみた。六七〇メートル峰も Dona Phungi としてよいだろうが、トンジェ方面では、この肩に相当する言葉は Phungi でなしに Pulney となる。またドナ・フンギは前山のこと、本山の六七〇〇メートル峰は Cheaw Pulney と言うのだという説もある(トンジェ附近)。なお樺河内の現地名は Bangoy Khalka である。(一九六二年記)

## 第二次隊、東面の偵察（一九六三年秋）

木 村 裕 一

第一次隊の帰国後、当然のこととして、次の計画が話題になつてきたが、二年後、突然具体的な形となつた。しかし決まってみると至極当然であり、タイミングとしても妥当な時期でもあつた。

第一次隊が西面の試登で、登頂が至難であるという結論に達した以上、非常に困難であるとされている東面を改めて見直し、徹底的に登路の調査をすることが我々第二次隊の主目的となつた。更に偵察を完全なものにするため、帰路は途中、ドナ・コーラを上り、一次隊のベースキャンプに立ち寄り、西面登路の最大の難関であるアイスフォールの活動を観察し、プレ・モンsoonとポスト・モンsoonでは如何に異なるか、積雪状況はどうか等、ポストモンsoonに於ける西面の登攀の可能性を検討し、併せて東西両面を同一の尺度で判断して最終的な登路を決定することとした。加えて學術調査として、第一次隊よりの引き続きの研究として、氷河の粘弾性の研究資料の作成と、植物の採集、チベット医薬の研究を行うことをも目的とした。

隊の構成は左記の五名と決つた。

隊長 篠田 軍治 (59才) 大阪大学工学部教授

副隊長 木村 裕一 (32才) 経済学部卒 日本アルミニウム工業勤務

隊員 難波 恒雄 (31才) 薬学部卒 大阪大学薬学部助手(學術)

田村 俊秀 (27才) 医学部卒 大阪大学医学部附属病院  
" 広瀬 貞雄 (26才) 工学部卒 大阪大学大学院工学研究科

隊員決定から出発まで、準備期間は決して充分なものではなかったが、一次隊の準備に参画していたこと、一連の資料が大変役立ったことと、すでに遠征隊を送っているという自信が、不必要な不安を取り除いてくれた。

一九六三年八月三十一日、篠田隊長と田村隊員が空路カルカタを経由カトマンズへ飛び、木村、難波、広瀬は九月七日空路羽田よりカルカタに向った。なお、篠田隊長はカトマンズに三日間滞在し、主としてネパール政府関係者との公式渉外折衝、および各方面への挨拶の後、学会のためのロンドンに向け出立し、爾後、隊の編成は四名となった。

### 秋のカトマンズ

九月十二日、インドからネパールに送る荷物の確認のため田村を残し、他の三人はパटना經由でカトマンズに着く。日本の盛夏より酷しいカルカタからやって来た我々にとって、カトマンズの街は郷愁さえ覚える程日本の秋に近い。インペリアルホテルの庭には百日草や椿の花が咲き、静かな街のたたずまいに加えて、周囲に小高い山が見渡され、どことなく京都に似た面影さえ感じたのも、異国臭のぶんぶんしたインドから飛んで来たせいも多分にあつた。

カトマンズでの仕事の量は隊の大小に拘らず定量なので小人数である我々は大変忙しい。その上、ブリガンダキ、特にサマ周辺の情報を集めねばならない。自称親日派、知日派と称する人達が我々のことを聞き伝えて話し込みに来るが我々が知りたい山間部のことは、さっぱり判らない。外務省、警察、ヒマラヤ協会と各方面でサマ周辺の事情を問い合わせるも一片の情報も入手出来ない。全くそのような辺境には関心がないという態度であり、しかも役目柄、

全ゆることを保証するという類の大言壮語が必ずつけ加えられるのでうんざりする。仕方がないので我々のリエゾン、オフィサーにサマ周辺での彼の任務の重大さを殊更に強調しておく。これが後で非常に好結果を招くことになるのである。

シュルパは出発前にサーダーのアンテンバ（三十六才）と一次隊に参加したアンドワ・三号（二十九才）をヒマラヤ協会を通し予約していたが、ミンマ・テンジン（二十五才）とアン・フリ（二十五才）は篠田隊長がカトマンズに到着してから選り、ペンバ・ノルブ（二十七才）はローカル・ポーターとして我々が備った。オーディナリーポーターの手配についてはヒマラヤ協会を通じるか否かについては迷ったが協会が最近急速に組織化され、権威をもって来て、その傘下にある程度固定したポーターをリストアップし、悪質な者の加入を認めず、協会の力は相当ポーター達に滲透しているとのことであった。交渉の結果、協会は「若しポーターがサポータージュヤストライキを起し、隊に損害を与えた場合、ヒマラヤ協会が補償する。」という念書まで書くというのでポーターは協会に一任することとした。事実キャラバン中は彼等の消極的な妨害にすら会うことなく無事サマまでの日程を消化することが出来た。

カトマンズを出発する二日前、日本隊のリエゾンとしてブリガンダキを二度訪れたゴールが来訪し、サマ周辺は数年前と何等変化していないという悲観的な情報を提供し、警官を四人位雇うのが賢明であるという。今回の計画の中でサマ周辺の民情が一つの問題であったが、やはり大きな難関になりそうな気配である。

連日のように遠く雷鳴が聞えがどうやらモンスーンも本格的に終りが近づいている。とにかく出来るだけ速やかに先を急がねばならない。

### 秋のブリ・ガンダキ

九月二十一日、リエゾン・オフィサー（キショール・S・J・B・ラナ）を責任者とし、シュルパ五名、ポーター六

十一名のキャラバンを出発させた。カトマンズからトリスリ・バザールまで、発電所建設工事のために完成された立派な自動車道路が通じており、先輩達があえぎながら登ったというカカニの丘までジープで約二時間、トリスリ・バザールまで更に二時間余りで行けるといっているので隊員四名は残された雑用を片付けるために出発を遅らせた。ランタン・リルンを目指すイタリヤ隊八名とは屢々狭いカトマンズで出会っていたが、彼等は通関手続の手違いでなかなか出発出来ないでいた。我々の出発の朝、彼等から若しリルン登頂に成功するならば、日本の国旗をも立てたい、という厚意の溢れる申し出に依り、我々手持ちの日の丸に故森本、大島両氏とガルツェン・ノルブの氏名を書き、ロイヤルホテルで彼等と楽しい一刻を過した。いづれも背の高い屈強な山男達で、非常に強力なメンバーである。その中の二名が登攀中、帰らぬ人となるなどは夢にも思わなかった。

日本隊になじみの深いトリスリのマンゴー園の中には、水力発電所を建設中のインド人の宿舎が出来ており、九月二十二日はその中の立派なゲスト・ハウスに泊る。

翌日から本格的なキャラバンが始る。モンソンはすでに終わったものと思っていたがブリ・ガンダキに近づくに従って夕立の時間が長くなり、カトンジュ近くの高台からみたブリ・ガンダキは常に暗雲に覆われ、その溪谷の深さをいやがうえにも強調していた。

九月二十六日、午前中にアルガート・バサールに到着。米、小麦粉など食糧を最終的に調達する。ここから有名なブリ・ガンダキのモンsoonルートの高巻きが始る。雨天による一日の休日を挟んで五日間の行程である。ドロート、ケロンジャ、フルチュークと連日小雨の中を黙々と歩く。滑り易くなっている山道を泥んこになりながら登っては下る、その上蛭が容赦なくストックキングをぬって侵入する。吸われた傷口はなかなか血がとまらず、少し油断していると足は流血でまっ赤になる。

九月三十日、ケロンジャの近くで、一見でシェルパと判別出来る男に出会う。サマにいる妻に会いに行つての帰り



のアン・ツェリン五号\*であった。そして雇ってほしいという。カトマンズでのサマについての情報が悲観的であったので、部落民の宣撫および帰路のポーターや、食糧の調達、それに植物採集に忙しい難波隊員のアシスタントとして隊に加えることとする。彼がいたことで気分的にも楽になったし、漢薬の収集にも役に立ったし、コックとしての経験を生かして時々こった料理をして我々を喜ばしてくれた。(注)三次マナスル隊のシェルパ。

十月三日、チェックポストのあるセティバスに着いた夕方、忽然として夕焼けが映え、やっとブリ・ガンダキにも秋が来た。雨あがりに見るダリヤやコスモスのあざやかさが目にしみる夕方であった。

ニヤックに着いた十月四日、従卒三人を連れたインスペクターポリスに会う。これは二年前の行政改革で出来た制度でさしづめ巡察専門の警察署長といったところであろう。われわれのリエゾン・オフィサー、ラナ君は外務省高官の姻戚に当り、カトマンズでサマ周辺の事情について話しておいたら特別の通行証を持参していたのが想像以上にのをいい、インスペクター・ポリスはサマ部落まで隊の後先きになって援助してくれた。特別の通行証には「我々は国王の客であり、いかなる通行妨害も許されないし、食糧や人夫の要請には絶対に応じなければならない。」と書いてあるという。また我々はあらかじめ外務省と折衝し、もしサマ周辺で妨害に会い、P二九に入山不能になった場合は、バウダー・ピークもしくはチョ・オ・ダナに転進してもよろしいという注釈付きの通行証を受けていた。これらはカトマンズでの情報が悲観的であったことに対する方策であった。

十月六日、ナムルーに入る。心なしか今までと異った雰囲気を感じる。ナムルーの手前で植物採集をしていた難波隊員に村民が文句をつけていたことをシェルパから聞く。アンツェリンの意見を尊重し、キャンプは村から少し離れた所に設ける。体格も良く、大造りの容貌を持ち、特徴のあるチベット靴をきりりとはいた姿はそれだけで隊員達を緊張させた。しかし翌日、何事もなくサマの手前、チョルテンのある草原にキャラバンを解いた。

## その後のサマ周辺

十月八日、全ポーターに支払いを済ませた後、ヘッド・ラマの家を訪れ、ベースキャンプまでのポーターの提供を求めた。彼は農繁期を理由に、即座に一週間後でないと要求に応じられない旨返事をする。ラナ君が気色ばむのをなだめ、インスペクター・ポリスとも相談することとしてその場は引き揚げる。ローで宣撫工作のため遅れて来た彼に相談すると明日自分が善処することを約束してくれる。大変頼もしい限りである。

翌九日、サマのことはポリスに任せ、我々は早速ベースキャンプ設営の偵察に出発する。田村、広瀬両隊員はシエルパ二名を連れマナスルの東尾根に登り、プンゲン・コーラ全域を俯瞰し、私はシエルパ一名を連れてプンゲンコーラを進み、前記四人とハンディ・トーキーで連絡をとりながら、ベースキャンプ地を探す。歩き出してから一時間半でプンゲンコーラ左岸の非常に広いカルカに達した。カルカを進むこと半時間で新しいゴンパがあった。これは日本隊（一九五六年マナスル隊）の金で再建したものである。更に進むとモレーンで出来たと推定される小高い丘に出る。標高四二〇〇米。氷河を観察するのに絶好の地である。P二九に懸っているアイスフォールは判然と二段に分れ、上部は五二〇〇米位まで届いている。右手のマナスル本峯から急傾斜で落ちているアイスフォールと比較すると動きが非常に緩慢なのが両者のセラックスの大きさから比較しても明らかである。しかもその中央部にモレーンのガラ場が望見出来、その周辺のセラックスは安定しており、クレバスも少ないように思われる。アイスフォールのトラベースは少々やかいかも知れないがとにかく早く此処にベースキャンプを設営し、じっくり観察することが先決である。第二のルートとして決めている東尾根へのルートもこのプンゲン・コーラ側から登れそうである。

翌十日、昨日の偵察の結果、一日も早くベースキャンプを進めたいところであるが、サマ村民との交渉がまっていた。朝十時頃インスペクター・ポリスの従卒が我々を呼びに来る。彼等はサマ部落の中にあるゴンパに宿を構え、そ

の中庭に空箱を横にした机の脇に腰を下して我々を迎える。この村の有力者達が今、協力するか否かを会議しているのでここで暫く待てという。私は心中おだやかでないが、ポリスは早やばやと彼等からとる誓約書を書いている。二時間待っても姿が見えず、たまりかねて使を出すとやっと村の長老十四人がやって来た。開口一番、第一回マナスル隊が来た直後ゴンパが雪崩でつぶれ、数人の死者まで出した。全村民が三カ月かかってやっと建て直したのである。その後は各遠征隊を拒否して来たという。今回は事情が異なるので協力はするが、カルカの奥にあるゴンパには近づかないでほしいという。しかしこれは単なる言訳らしく、ポリスの書いた誓約書には文句なく母印を捺した。誓約書をあとでラナ君に翻訳してもらうと、「遠征隊に理由なく金銭の強要や、登山妨害をすれば、村全体の責任としてネパール政府は全村民に対し然るべき処置をとる。遠征隊が要求する食糧や使役の調達には全面的に協力する。」という大したものである。事実、一昨日難色を示したポーターについても明日必要な人数を確保するという。残りの荷物については、二、三日の猶予が欲しいと哀願する変りようである。とにかくこれで安心して登山が出来るというものである。テントへの帰路、半ば収穫の終わった畑で働く農夫達の声に、初めて旅愁を感じる余裕が出来た。

サマ周辺の状況を報告するためには、ダライ・ラマの兵士達とチベットからの難民の生活をつけ加えなければならぬ。彼等はダライ・ラマのインド亡命と前後してネパールに入国、チベット国境周辺の非武装地帯でテント生活をしている。カトマンズでは余り評判は良くない。西北ネパールでは強盗などの不祥事件も起きているとのことであるが、我々の接した範囲では非常に陽気で、親切で、善良に見えた。ラマ兵士達がチベットから逃れて来た時、サマ部落は彼等の入村を拒否したとかで、お互いに悪感情を抱いているようである。兵士達は「サマの人間は悪いばかり奴ばかりだから用心せよ。もし彼等が隊に妨害を加える時は、われわれが守ってやる。」とまで進言して来た程である。後日、サマからラルキヤへ出発する時、セカンド・ラマが約束をたがえ予定のポーターが揃わず、途方に暮れている時、兵士達は難民と相談し、二人のヤク・マンと五頭のヤクを調達し、わざわざラルキヤ・マーケットまで送ってく

れた。

難民達は村の周辺に六角形の羊毛のホームスパンのテントを張って暮している。その中に四十才前後の比較的若いアムジー（ラマ僧医）が居た。彼は薬物の本や生薬（漢方薬）を沢山持っていた。難波隊員にとっては宝の山に來たも同然で、毎日そのナムジーを相手に、アンツェリンを通訳として、チベット薬物の薬効、用法、産地、用量等を聞くことが出来、植物性を中心に、鉱物、動物薬も含め百二三十種の薬物を一挙に収集することが出来たのである。

## 試 登

さて、十月十一日、ベースキャンプを予定地のプンゲン・コーラの奥に設け、翌十二日広瀬隊員とシエルパ二名が正面氷河を試登する。氷河の規模は後日見ることとなったマナスル氷河や、P二九西面のツラギ氷河に比し遜色ないものであるが氷河自体の活動が極めて緩慢なため、フィスフォールの崩壊についての危険性はなく、軽装備でもあったので五一〇〇米辺りまで一挙に直登することが出来た。しかしこのルートの心配は、P二九本峰の頭にひっかかっている懸垂氷河である。一日に数回アイスフォールのテラスに落下していた。その落差が千数百米に及ぶため、落下するブロックの殆どはテラスに達するまでに消滅するが、テラスに届くものでもすでにそのエネルギーを消耗し、テラスを滑っている間に消えるものであった。しかし詳細に観察するうちに相当巨大なブロックが落下し、アイスフォールを相当下まで達するもののあることが、アイスフォール表面の白さの区分から識別することが出来た。我々がこの直登ルートを探るならばテラスのどこかに中継キャンプを設けねばならないし、昼間より雪崩の頻度の多い夜間の状態が把めないのではルートとする決心がつかない。結局試登した夕方の大崩壊を契機にP二九東尾根に転進することにする。我々は本隊が出来るだけ安全に通過出来るルートを探さねばならない。東尾根がどんな状態で本峰の肩に続いているかを解明しながら、正面ルートをじっくり観察することとしたのである。

翌十三日、前日までの観察で何のためらいもなく行動を開始した。日本での写真でみた限りではとても登れそうにも思えなかつた東尾根の第二峰と第三峰の間が唯一の登路として使えることが判った。つまりクレバスも、ハンギングブロックもないただの急斜面はヒマラヤにおいては最も安全なルートの種類である。表層雪崩さえ注意すればよいのであるから。その日は四五〇〇米まで登り、田村、広瀬隊員とシェルパー一名がテントを張る。東尾根に転進したのでベースキャンプが奥に入りてすぎ、不便なものとなつてしまつた。しかし改めて移動する時間的余裕がないのでそのままとした。従つて第一キャンプはブンゲン氷河を二時間かけて横切り、更に下つてルンゼに取りつくことになるので第一キャンプは標高をかせぐことが出来なかつた。しかしこの氷河の往復には主としてローカル・ポーターを使つて荷物を運ばせたのでそれ程ロスにはならなかつた。先発した田村、広瀬隊員は休養のために二度、後発した私は徹収までベースキャンプに帰らなかつたから。

十月十四・十五日の二日間で田村、広瀬両隊員を先頭に先発隊によつて東尾根二・三峰の科尔までトレースがつけられ少量の荷物も揚げられた。しかし連日の晴天もぼつぼつあやしくなつたので一旦全員ベースキャンプに帰幕し、今後の方針を再検討することにした。

翌十六日から三日間、降雪に見舞われ、隊員は休養としたが、その間にもシェルパ達によつて第一キャンプまでの荷揚げは続けた。我々はポスト・モンsoonといえは来る日も来る日も底抜けの快晴が続くものと考えていたので、この悪天候は意外であり、少なからず戸惑つた。十月十九日も雲後小雨のいやな天候であつたが、私と広瀬が第一キャンプに入る。前日第一キャンプに入り、今日第二キャンプ予定地に荷揚げしていた三名のシェルパは頻発する表層雪崩に先がはかどらず、結局途中で荷物をデポし、薄暗くなつてから第一キャンプに帰つて来た。

十月二十日久しぶりの快晴に勇躍第二キャンプ建設に出発。ラッセルのあとは完全に消え、道がはかどらず六時間半かけて東尾根稜線直下五一〇〇米の見晴の良い処に第二キャンプを設ける。

第二キャンプから第三キャンプへは傾斜約五十度のヒマラヤ巒をトラバースすることから始る。三百米の距離で大雪山に出る。この大雪山は写真では棚があるかなしかに見える部分であるが実に広々としていて巾が二、三百米もあり、坦々と東尾根第一峰に続いている。こんな処に大平原があるとは予想もしなかったが我々にとっては嬉しい誤算であった。勿論積雪の下は氷河なので所々クレパスがあるが大したことはない。しかし緩斜面であるので高度がかせげず、ラッセルも結構ある。元氣な広瀬隊員を先頭に、第二キャンプを建設してから四日目の十月二十四日、東尾根第一、二のコル、高度五七〇〇米に第三キャンプを設ける。適度な凹地で強風の心配もなく気持の休まるキャンプサイトである。只無線交信が不便でベースキャンプとの交信にはテントから少し出かけていかねばならなかった。この日ラジオでイタリヤ隊が遭難したとを知り呆然とする。

十月二十五日からの三日間、いづれも朝は晴れているのだが、午後になると必ずガスが発生し、夜はなにがしかの雪が降った。P二九本峰の岩壁のハンギングブロックは頻繁に昼となく夜となく大音響とともにプンゲンコーラ正面のアイスフォールに落下していた。第三キャンプからはすぐに東尾根第一峰の急斜面を登る。高度の影響に加えて、ナイフリッチヤ、小さなデブリなどいよいよ本格的な悪場が次々と現われ思うようにピッチが延びない。残された食糧は乏しくなり、天候も徐々に悪化しているように思われる。十月二十八日第一峰直下のヒマルチュリ側の僅かな緩斜面に最前線キャンプを設け、ここから本峰の肩までの偵察を行うこととする。

十月二十九日、予定通り八時半、広瀬隊員とアン・テンバが第四キャンプより出発。第三キャンプから私とミンマ・テンジンが八時半に彼等のあとを追いつながら偵察を行う。P二九本峰と東尾根の間はプラトリーになって居り、プンゲン・コーラを直登しアイスフォールをトラバースするとこの肩に達するのであるが、このプラトリーは二段に分れた大氷河原になっておりP二九とヒマルチュリとの肩まで続いている。この大氷河原のどの辺りから最後の氷壁にとりつくかがP二九登頂の鍵である。少しでも近づいて調査しなければならない。時間の経過と共に城壁さながらの本

峰の英姿はガスに包まれていく。十二時過ぎ広瀬隊員らに追いつく。目的地である本峰肩まで五〇〇米もあろうか。徐々に周囲もガスに包まれ五米先が判然としない。心ははやれども六十度に近い急斜面のトラバースに加え、クレバスがあつたりしてピッチがあがらない。おまけに足元の雪が非常に不安定である。足下に眺められるリダンダ・コーラの谷底めがけて大水河原の端部が大崩壊を起す。約千五百米の殆ど垂直に近い氷壁を中型のビルディング程のブロックが大音響を谷中にこだまさせながら落下するのである。何ともすぎましい。我々の乗っている足場も連鎖反応で今にもずり落ちるような錯覚さえ覚える。午後一時半、天候は悪化するばかりなので引き返す。

翌十月三十日、広瀬隊員とサーダーのアンテンバは遂に本峰肩に達する。高度六三〇〇米。ここから上段のプラトーまで急斜面の登りで所々にクレバスがあいているが、どうにかルートはとれそうであるという。本隊にはクレバスの梯子が要るようである。

我々はこの日を境に撤収段階に入った。天候は本格的に悪くなつて来た。うかうかすると食糧がなくなる。今度降り出したら、また三日位動けないし、第二と第一キャンプの急斜面が危険である。

案じた通り翌日から天候が悪くなり、全員ベースキャンプに勢揃いしたのは十一月四日であつた。

十一月五日、ポーター達二十九名がベースキャンプに登つて来た。これで東面の偵察が終り、東尾根やペンゲン・コーラともお別れである。すでに新雪に覆われたカルカを歩く足どりは軽かつた。残された千五百米の氷壁は容易ではないが登頂の可能性は確かに存在するという確信を持つことが出来た。

#### サマからマルシヤンディ溪谷へ

サマに下りて二日間、来るべき本隊のため専ら村民達の宣撫工作をする。「マナスルはキングスマウテン(信仰の山)なので登らないで貰いたい。他の山なら構わない。」という。又さかんにネパール政府の権威を認める発言も聞かれ

た。サマは十年で人口は約二倍に増え、宗教と政治に分離のきざしが感じられた。中国の国境封鎖によりネパール政府の威力が増大し、しかも難民やラマ兵士、それに避難して来たラマ僧を加え複雑な社会構成に変わっている。有史以来眠り続けて来た地の果ての寒村にも、国際情勢の変化の影響と文明開化の足音がひしひしと感じられた。

十一月九日、快晴。絶好の峠越えの天気となった。ポーター二十三名、ヤク五頭を引く難民二名を加え総勢三十六名でラルキャ峠を越える。パウダーピークの白い尖塔が強烈な西風にふるえているかのように紺青の空に突きささっている。この情景こそ私のポスト・モンスーンのヒマラヤのイメージであり、しばし感動する。峠はすでに新雪におおわれひざまで沈む、ヤクは殊更難渋する。今一度降雪があれば峠越えは出来ないとかでビムタコーチに着いた翌朝、早々に五頭のヤクは引き返していった。

典型的な侵蝕溪谷で、人を寄せつけず、一步一步に神経を使う暗くてきびしいブリ・ガンダキ溪谷とは異なり、マルシャンディ溪谷に入ると牧歌的な風景に一変する。快適な林間の道が続き、谷は広く、足元に気を使うことなくマナスル群山のパノラマを満喫することが出来る。

## 西面の偵察

十一月十二日、インド軍のチェックポストのあるトンジエから、五日間のP二九西面偵察の旅が始まった。隊員四名、シエルパ六名、ポーター七名、総勢十七名の身軽な旅である。ドナ・コーラのマルシャンディへの合流は街道からは見えにくい。少し奥まった処で落下している滝がそれである。ドナ・コーラは大きな支流をもたないので水量はそれ程多くない。登り口は巨大な一枚岩にステップを切った急峻なもので、この道はすぐ上にあるナジェ部落民（これがドナ・コーラ唯一の部落である）だけが利用するもので、この奥にマナスル氷河や我々が東面で観察したプンゲン氷河に匹敵するツラギ氷河が隠されているとは想像もつかない。ドナ・コーラの下流域は海拔千五百米から始めるの



で亜熱帯性の植物が繁茂し、しばしば踏み跡が消えている。中流域は岩登りに近い難所が連続する。第一次隊が作ったのであろう木製の梯子が残っていたり、丸太の橋が渡してあったりして結構役に立った。途中猟銃をもった九人の猟師に出会う。下のナジュの住民らしい。獲物はなく我々の蛋白質源の補充は残念ながら出来なかった。この道中は難波隊員の大活躍の場であった。珍しい植物の採集にアンツェリンを叱咤激励して繁忙をきわめていた。

マナスル主峰から南西に伸びる支稜にある六千八百峰を目前にする頃、森林限界に近づき、間もなく樺河内（第一次隊命名による）に至る。北面の日陰の場所に数日前に降ったらしい残雪がみられ、随所に枯草が残っていた。コックで前回の隊にも同行したアンドワがなつかしそうに歩き廻り、どこからか空箱を探し出して来る。しかし一昨年、目印をおいて岩陰にデポしておいたというスペアーザイルや、なにがしかの山の道具は遂に発見することは出来なかったようである。恐らくナジュの村民か猟師が探し出して持ち帰ったのであろう。

ポクリを過ぎる頃から本格的な降雪となり、みるみる辺りは白一色に変る頃、やっとの思いで三日がかりで旧ベースキャンプに辿りつく。新雪の中から前回の梱包用の残材を掘り出し、暖をとり、お茶をすすりながら、第一次隊の報告書ですでになじみの情景に囲まれながら前隊の奮闘の跡を思いめぐらす。午後八時現在、雪はなお降り続いており、明日一日だけの偵察を気にしながら眠る。

十一月十五日、晴後雪、午前四時半起床、田村、広瀬兩名が住吉コルに出発。軽いラッセルをしながら午前十時、四千八百米の展望のきく地点に到達する。

ツラギ氷河の奥に懸るアイスフォールは東面のブンゲン氷河のそれとはまことに对象的である。P二九西稜とマナスル西南稜の絶壁が両方から迫り、薄暗くさえ感じられる狭くて長く、相当の高度差の間を氷河が折り重なって押し出されている。西岸の絶壁の上にはいづれにもべっとりとハンギング・グレッシャーが乗っており、雪崩は特定の場所に起るのではなく、アイスフォール全域にわたって危険であり、セラックスが非常に不安定なため、連鎖反応によ

る影響も相当広範囲にわたるものと考えなければならない。雪崩の頻度も東面と比べてかなり多い。只マナスル西南稜寄りの雪崩は小規模なものが多い。しかしこの活動の激しいアイスフォールの中にルートを見極めるには非常に精度の高い観察に永い時間的経過を費やさなければならぬ。すでに東面の試登を行って来た我々にとって、それは無意味に思われた。どうしてもアイスフォールを通過してP二九に登らなければならないとするならば、躊躇なく東面のそれを選ぶであろう。即ち、東面東尾根ルートがそのアプローチの故に難点があるとすれば、第二のルートはペンゲン氷河の直登ルートであることは隊員全員の一致した意見であった。

### 偵察を終って

東西両面からP二九峰を観察してきたのであるが、山頂部分が梳状のため頂上の所在が定かでない。帰路ポカラからカトマンズまで飛んだ飛行機からの観察も加え、頂上はマナスル寄りで主稜線よりも西面に偏してあるものと推定される。しかし現時点では頂上の正確な位置は大した問題ではなく、問題は東尾根ルートにおける最後の約千五百米の氷壁攻略の一点に絞られる。詳細なルートの検討の省略するが、周到な準備と、天候にさえ恵まれるならば必ず登頂出来る確信をもった。

思えば今次の偵察には予期せざる偶然が幸いして所期の目的は達成されたように思う。

なお最後にツラギ氷河の活動について第一次隊と第二次隊のデータに依り、その詳細を科学的に明らかに出来たことをつけ加えておく。

(一九七三年記)

## 第三次隊東面の試登 (一九六九年秋)

玉 井 康 雄

まえがき

第二次隊による偵察は、ポスト・モンズーンでも西面は難しいという駄目押し付きで、東面に登路発見という成果をもたらし、私達を興奮させた。かくて一九六四年第三次登攀隊の準備が開始され、翌春には隊員予定者もぼつぼつと決定しつつあった。

ところが間もなく例の「ネパール政府はヒマラヤにおける登山活動を禁止する。」という全く予期せぬニュースが入り、ヒマラヤへと指向していた他の多くの日本隊同様準備活動は休止状態に入ってしまった。

それから約四年間、しばしば登山が解禁になるというニュースが流れたが、いずれも希望的観測というものであった。六八年夏をすぎると、また同じようなニュースが岳界に流れ、いくつかの隊が準備を開始したということも伝わりはじめた。今度ばかりはどうも本当のようである。そして事実、解禁になった。

いつものことながらメンバーの決定はむつかしい。安泰なる日本を離れ、半年も山に行くということは一般の人には理解してもらえないのは当り前のことである。まして、会社を休んだり、妻子を残して行くとなればもう気違い沙汰に近くなる。これに打ち勝つには烈しい登高意欲と、やはり強い説得力が必要だ。こんなわけで、まづ、隊長は住吉さんに決まった。(住吉さんは、この第三次P二九隊、エベレスト隊、第四次P二九隊と三シーズン続いて遠征に

加わった。いかにタフで、いかに社会的通念からかけ離れた人であるか。私は、会社の仕事もなかばであり、また妻のおなかがり出しはじめた時でもあったので、条件としては最悪に近かったが、この九年目のチャンスをおがすわけにはいかなかった。第二次隊隊員であった人には是非加わってほしかったが、皆参加出来ない状況にあった。

最終的な隊の構成は左記の十一名よりなった。

隊長	住吉 仙也	(42才)	医学部勤務
副隊長	玉井 康雄	(30才)	富士写真フィルム(株)勤務
隊員	大工原 恭	(31才)	歯学部勤務
	三枝 礼子	(37才)	東京芸術大学学生 薬学部OG
	三沢日出夫	(29才)	古河電工(株)勤務
	牧野 大輔	(28才)	理学部大学院生
	石浜 高明	(27才)	日立造船(株)勤務
	渡部 洋	(25才)	理学部研究生
	黒田 治朗	(24才)	阪大附属病院勤務
	甲田 克彦	(22才)	基礎工学部学生
	田中 喜樹	(22才)	工学部学生

遠征歴のあるのは隊長だけである。大工原、三枝の参加は種々の制約のため、カトマンズでの現地合流という形式をとった。

六月、準備室は中之島にある廃墟となっていた旧理学部内の一室に決まり、いよいよ具体的な仕事が始まった。準備の手順は、いつもほぼ同じなので省略するが、今までとは異なる状況が二つあった。

一つは大学紛争の最中であつたということである。となりの講堂では暑い徹夜の大衆団交が続いていた。そのうち校舎の封鎖がはじまり、この旧理学部は活況を呈してきた。封鎖を恐れた大学の庶務関係の事務室が次々と転居してきたからである。もしこれらの事務室がねらわれ、我々の部屋も一緒に封鎖されたらどうしよう。私達だって今そう自信のあることをしているわけではなかつた。毎日必要品のリストをもつて、多くの会社へ寄付をお願いして歩いていたのである。たしか、ある会社の総務課長はこう言った。「そのP二九とやらと、うちの会社とはどんな関係にあるのか、ようわからへん。そやけど棒を振るのよりは、よろしおまんな。」だれが見ても私達の思想がどちら側にあるのか、はつきりしていた。結局恐れていた建物の封鎖がなかつたのは幸いであつた。

その二は五年の登山禁止のため、インドを通つての荷物輸送がはつきりしない点であつた。この点については、住吉、石浜が数十回にも及ぶ英文手紙のやりとりで別項に記載する如き結果となり、可及的速やかに輸送し得たと思われる。しかもこの手続きや通関業者については今後の日本各隊の踏襲するサンプルになつた。

隊員は、三沢が若手四人と共に、八月一日にラオス号で神戸を出発、隊長、私、石浜はインド航空で八月九日日本をあとにした。

### カトマンズへ

海外は私にとって始めてである。カルカッタの夏は雨期である。貧しく悲惨な街に、人も牛もそして犬も、すべて悲しくやせている。それにひどい蒸し暑さ。私はインドに限らず世界中のことはテレビを見たり、本で読んだりして一応知っているつもりでいた。しかし、夜ホテルの前の路上で寝る骨と皮だけの人々を見るだけで、本当は何も知らなかつたことに気付き、激しいショックを受けた。

八月十一日、通関のため遅れた船荷を待つ隊長を猛暑のカルカッタに残し、私と石浜はカトマンズへ飛んだ。運良

く雲表のあなたにヒマヤラを見たとき、とうとうやって来たという感慨がこみあげる。

カトマンズ、標高一五〇〇メートルにあるネパールの首府。ヒマラヤ二度の経験者、隊長によると、登山禁止の五年間に近代化が進み、空港も拡張され、街には日本製のタクシーが走っているという変りようである。金に余裕のない我々はゴビンドマン・セルチャン氏が改装中の大きな家を宿舍にきめた。(後のラリー・グラス・ホテル)

石浜の手腕と英語で、役所まわりもスムーズに運び、十三日、商工省より輸入許可書入手し石浜はカルカッタに持参する。十五日にはバンコクまで船で来た三沢、渡部、田中が、二四日には大工原、三枝、牧野がカトマンズ入りをした。黒田、甲田は荷物と共にトラックでカルカッタよりネパール入り。その間カトマンズでは、通関の準備、食糧、燃料の購入、シエルパの手配等が行なわれた。美味い米でも、プリムス・ストーブだって安く手に入るのが不思議に思われる。

シエルパ達も登山禁止の五年間に、死亡や離散しており、優劣も判然とせず、この雇用は、頭痛のたねであった。遠征に加わったことのない新人も多い。

結局ヒマラヤン・ソサエティの紹介で次の七名を雇った。チョタレイ(サーダー)、アン・ダワ(コック)、ダワ・ノルブ、ラクパ・ツェリン、カルサン、ドルジェ、サンゲ。

我々は荷物の到着を待った。船はダッカ港で遅れている。ポスト・モンズン期の登山活動は、モンズンと冬のジェット・ストリームのはさみ打ちに会っている。この短期間を有効に利用するには、一日も早くカトマンズを出発し、モンズンの明ける前にベースキャンプを作り、冬の来る前に登頂しなければならない。

遅れていた荷物が、やっと九月三日カルカッタから二台のトラックで、カトマンズに届いた。ビルガンジーまで通関準備のため出迎えにいった三沢、牧野、カルカッタから荷物のトラックでやって来た黒田、甲田はぐったりしている。しかし私等はゆっくり休むわけにはいかない。

九月三日、朝から雲が低くたちこめ、雨が降りつづく中で再梱包する。カトマンズ入りしてから一番の悪天候だ。午後私達はトラックとバスに分乗し、トリスリを目指して、カトマンズをあとにする。

### 雨中のキャラバン

九月四日リエゾン・オフイサーたる若い警官D・B・バスネット君も加え、トリスリ・バザールからキャラバンが始まる。一四〇名のポーターは、全てカトマンズ・ポーターである。

先を急ぐモンsoon中のキャラバンは、毎日必ず一度は雨に見舞われた。ところが、不思議にも、毎朝出発時には一度も雨が降らず、この幸運はロー部落到つくまで続いた。トリスリを発って四日目、アルガート・バザールに着。ブリ・ガンダキに架っていた橋は流失しており、釣越しかかりになっている。アルガートには中国製のコンデンスマイルクなども売っており物資は豊かである。ここで食料品を補給した後、いよいよブリガンダキ左岸を通るいわゆるモンsoon・ルートに入った。道は、ブリ・ガンダキの濁流をはるか下に見下ろす高捲きの連続で、三〇キロの荷を持つポーターのために、しばしばフィックスド・ロープが必要であった。マナスル・ヒマルチュリ以来全く変わっていないのだろう。カトマンズ・ポーターの一部は、この道の悪絶さにおびえ、八日にはラウララのテント地より三〇名が消えてしまった。ポーター全員にビニール製の雨具をわたしていた私達にとっては痛い損害である。カンガオン下方のブリ・ガンダキには、左岸の大崩壊によりダムが出来、大きな自然湖が濁った水をたたえていた。帰路聞いたところによると、このダムは一九六八年の三度にわたる山崩れにより出来たものであって途中二度ダムが崩れ洪水が起り、そのために下流のアルガートの橋が流失したとのことであった。

有名な蛭は、マシガオン附近よりいっせいに現われ、フルツォフ下方でブリ・ガンダキに降りるまでキャラバンを悩ませた。確かに、雨の中の毎日の行進はつらい。靴の中はいつも水びたしであり、滑りやすい丸木橋や棧道があ

り、蛭は靴から、ピッケルから、触れる草々からはい上って来た。そして、疲れて着いたところがドロドロのテント地である。

マナスル隊以来おなじみの上高地（ヤルー）上流でブリ・ガンダキ右岸に移り、鬱陶しい天気の中でジャガートに着く。昔通りチエック・ポストがあり通行許可書が調べられる。私達はビスケットと紅茶の接待をうけながら、隊長が歩哨の銃をかまえて、カメラにおさまるのを眺める。

つづくセテイバスには無電設備をもつインド軍のチエック・ポストがある。隊長によれば、以前はジャガートにあった由。こんなところにも中印両大国との国境をもつこの国の複雑さを見ることが出来る。悪名高いニヤックへの登りを喘ぎ、登の上で道は再び左岸に変わる。

スリンギ・コーラにかかる橋を渡ってからはブリ・ガンダキも狭まり、橋も多くなる。チャンの近くで、突然アン・ツエリン・パンチにあう。カトマンズでもどうしても行方のつかめなかつた第二次隊のときのシェルパである。（マナスル三次のときのシェルパ）。彼は、いまやオメガを腕に、チベット・ネパール・インドとの交易に携さわる商人である。彼は、今後しばしばベース・キャンプを訪れ、私達の現地食調達をしてくれた。

ナムルーには出来てから一年目というチエック・ポストがあり、予想していなかつた私等を驚かす。この部落の住民からポーターになりたいという希望が出されたが、なんとかローまでそのままキャラバンを続ける。リエゾン・オフィサーもここまで来るとあまり元気がない。もうチベットの村なのだ。リダダを過ぎ次のローではとうとう住民の要求を入れてカトマンズ・ポーターを現地人に替える。ソロ・クーンブからサーダー・チョタレイについて来た連中はそのまま私達と同行し、以後全期間低所キャンプ間の荷上げに従事することになる。

ローからは女、子供までまじったにぎやかな行進となり、ブンゲン・コーラ沿いに登って、寒い雨の中、九月十九日ローの最奥のカルカに入る。出発以来十七日目だ。しかし、このカルカよりベース・キャンプ予定地までのルート



が悪天候のため視界なくつかむことができない。偵察を出して、やっと九月二十二日標高四〇〇〇メートルの岩の多い草地にB・Cを設ける。

### 登山活動

九月二十三日より登山が始まった。天候は依然として悪くガスが低くたちこめている。東尾根へは牧野、甲田が、そして、ブンゲン氷河へは黒田等が行く。隊長はここで、はじめてブンゲン氷河からダイレクトに東尾根鞍部への試登を提案したのである。(隊長は以前から考えていた由)。三日間の両ルートの偵察のち、やはり第二次隊の登路をそのままたどる東尾根ルートがより安全であるとの判断がついた。氷河ルートは、ここベース・キャンプから見る限りでは魅力的な登路であるが、その後、しばしば氷河上部及び氷河右岸を洗う大雪崩が観察された。

東尾根へ登るルートは氷雪崩の危険こそ少なかったものの、降雪時には表層雪崩が多発した。又上部の急斜面は雪が深く、この道つけは全期間にわたって苦労した。そこでルートはほぼ中央の岩小屋を中間デポとし、悪天候の荷上げはここを中継して行なった。結局、黒田、牧野と私が先行しロープを張り、後続の隊長、石浜、田中が第一キャンプを建設したのは九月二十七日であった。ここは第二次隊の第二キャンプの西より約二〇〇メートル、標高五一〇〇メートルの氷棚の上で、頭上には東尾根筋の大きな黄色い岩がそびえている。

ここから第二キャンプ予定地へは東尾根北面の氷河棚に沿って進むが、毎朝十時頃から天候が悪化し、工作ははかばかしく進まない。

九月三十日、東尾根第二峯の東北部に第二キャンプ建設。渡部、黒田、ダワ・ノルブが入る。十月五日、三人は甲田、牧野のサポートを得て第一峯の手前に第三キャンプを作る。この付近は第二次隊の時に比べ山容が大きく変化し、尾根沿いに進むことが出来ない、第二峯、第三峯の間の鞍部からはリダング氷河へそぎ落ちていく豪快なヒマル

チュリ北面が望まれる、ルートは鞍部より一段上ったところで、北面に廻り込む。この急な雪面にフィックスド・ロープ四〇メートルを張って上ったところが第三キャンプになった。第三キャンプは標高五八〇〇メートル、第一峯手前の台地にある。このキャンプのすぐ上は、三〇メートルの垂直氷壁であり、この輸送工作には手間がかかった。依然として天候は安定せず、毎日昼頃になるとリダングダ側から雲が上って来、東尾根にからみつき雪が降りはじめ。ポスト・モンスーンの安定した天候を期待した私には予想外の空模様が続く。このため第三キャンプより東尾根南面にまわりこみ進むルートがつかめず、十三日、三沢、田中、チョタレイが標高六二〇〇メートルの第四キャンプ予定地に到達したのを機会に、順化と休養のため全員がベース・キャンプに下る。

十月十四日第二段階のスタート。さきに休養を取っていた石浜ら六人がベースから出発する。天候が安定したこともあって全員の意欲は充分である。十六日には、残っていたシュルパ達は火をたきお祈りをし、決意をあらわにしたチョタレイにつれられ、ベース・キャンプを離れる。

十七日には渡部、黒田、チョタレイが第四キャンプをつくり、十八日には第二次隊の到達点を越えて、遂に本峰と東尾根第一峰の鞍部、標高六二五〇メートルの地点に第五キャンプを建設した。ここまでのルートは東尾根の稜線近くの南面を連続してトラバースするものである。第五キャンプから仰ぎ見る本峰壁は青光りのする急斜面であり、頂上へ突きあげている氷のふくらみの両わきが、わずかに頂上へのルートを示している。

第五キャンプから第六キャンプへの登路は、ヒマルチュリからの写真では距離的に長く、且つ高度差もあり、心配していたところである。しかし、実際には困難な個所もなく、二十四日には牧野、石浜、渡部、黒田が本峰直下六九〇メートルの地点に第六キャンプを建設した。この日から一週間、三沢、牧野、石浜、渡部、黒田、田中、甲田の若手により東壁のルート工作が繰り返し行なわれる。二十八日には、第六へは隊長が、第五へは三沢と私が入り、全ての態勢は整った。壁の工作は蒼い堅氷のため遅々として捗どらず、更に壁中央の急傾斜部に近づくとつれ、前日の

工作終了点に到着する時刻が遅れはじめ。堅い氷にスクリュー・ピトンをねじこむのは意外に時間がかかる。二十九日、C6まで往復したチョタレイが不調になり、貴重な酸素を吸わせつつ、C5より下におろす。これからのち、C5・C6間で働くシュルパは、アン・ダワとダ・ノルブだけとなる。

十一月一日、とうとう強風が頂稜を洗いはじめ気温の低下も著しい。(夜間13時)。P二九に冬が来たのである。頂稜の雪庇が大きくなり、ボロ／＼と崩れノギリの歯のようになる。ルートを洗う氷塊もふえて来た。石浜と田中のサポートをうけた黒田、甲田は、日の出前より行動を開始し、東壁のほぼ中央部七三五〇メートルまで進む。午後二時。すでに日陰である。これが今回の最高到達点となった。残り五〇〇メートルを登るためには壁にもう一つテントが欲しい。しかし、この急斜面に張るテントはない。このまま直接頂上に向うには更に数日の工作が必要であろう。しかも、この気温、殊に日陰、更に夜間の低気温では、高度から考えてビバークは不可能である。食糧も、隊員の体力もそれ程余裕はない。到達点は延ばせても、頂上は無理だ。かくてその夜、第六キャンプから撤収を決める隊長の声がトランシーバーにのって飛んだ。撤収は十一月七日終了した。途中エベレスト用のマスク実験を行う。残った酸素は体力をはいはたし視力の低下した黒田のために使われる。九日、うるこ雲の中にそびえるP二九に最後の別れを告げ、私達はトリスリを目指して再びキャラバンを開始する。乾期のブリ・ガンダキは往路とは全く異った快適な気分を味わわせてくれる。ポーターは全て現地のチベット系の陽気な連中だ。

十一月二十四日、カトマンズに到着。遭難のうわさが流れ、心配していた他隊の人達に迎えられる。二十六日には外務省を訪れ、一九七〇年秋の登山を申請し、帰国の途についた。

## あとがき

やはり今回の失敗の原因は最後の壁に対する認識が甘かったことが第一である。私達は壁に対する一週間の工作で

頂上に達せられると考えていたが、現実の氷壁は更に厳しかった。六〇〇メートル前後のキャンプ建設が遅れたのも残念であった。インド放送は毎日われわれに天気予報を送ってくれたがモンソン中はもちろん、モンソンが明けた後も、予報が晴という日は東尾根では午後から雪、曇の予報では一日中雪が降るといふ具合であった。局所的な地形による気象であろう。シエルパの高所に於ける働きも、登山禁止のため期待に反する結果であった。

成果としては、東壁からの登頂に見通しを持てたこと、隊員の高度順化が非常にうまく行なわれたことである。帰路出来ればサマ部落を訪れたいという希望を持っていたが、通行許可書の不備でリエゾン・オフィサーの許可がおりなかった。彼としても、早く帰りたいだったのであろう。

登山中、一度だけサマの住民がベースを訪れ、マナスル(カン・ブンゲン鳥の頭)には登らせないと申し出たが、P二九(カン・シヨクパ鳥の翼)を登るのだと伝えるとおとなしく帰っていった。なお、サマとローの中間には未だにチベットに戻れる日を待つて十余人のカンバ兵が住みついている。サマとチベットとの交易はかなり盛んな様子で、ラルキャ・マーケットには夏期のみ役人が一人いて国境通過を防いでいるとのことであった。

不成功であった第三次隊の一員として、その原因をいろいろ考える。しかし、所詮失敗した登山のあとがきは全て結果論である。もし船が早く着いていたら、もしベース・キャンプに入るのに手間取らなかつたら、もし氷河の偵察をせずに東尾根一本にしぼって早くとりついていたら、天候がもっと安定して高所キャンプが早く建設出来ていたら、そして、これらの幸運を全て手にしていたら、われわれ第三次隊は、あるいは頂上に達することが出来たかもしれない。

しかし、このようなことを全て望むのはかなわぬことであろう。私だってその他の幸運を沢山手に入れた。そしてそのおかげで、P二九にせまることが出来、そして、全員無事にこの白い巨人のもとを去ることが出来たからである。

(一九七三年記)

## 第四次隊P二九登頂（一九七〇年秋）

住 吉 仙 也

### 登頂の一日（写真⑳～㉑参照）

一九七〇年十月十九日。朝、無風快晴。ここ第三キャンプ（六二五〇メートル）の気温は氷点下十五度。モンsoon明けの雲一つない空は、青よりも紫に澄んでいる。正面のP二九、その右、左にマナスル、ヒマルチュリと並ぶ豪華な舞台は、朝焼けのバラ色に輝いている。

六時、「今から出発します。」無線機から張り切った渡部の声が凍った空気を振るわすと、第五最終キャンプ（七五〇メートル）を作ったシュルンドから二つの黒点が躍り出る。ここ第三キャンプでは肉眼と望遠鏡での観戦が始まった。

渡部とハクパ・ツェリンの二人はキャンプ下にデポした固定ロープを背負う。シュルンドは難なく通過、ホッとする。

次が氷壁中の難場、傾斜六十度、高度差約一〇〇メートル。われわれが「蛙岩」とよんでいる露岩の右上。白扇を立てたような浅いヒマラヤ壁の氷壁。スピードは遅いが、確実に、リズムカルな動きで一步一步登っていく。渡部がトップ。蹴爪だけでは駄目なのか、ステップを切るのが多い。初め直登、それから左寄りに一ピッチ、一ピッチと高度を上げていく。アイゼンの氷をかむ、かかれた音が聞えてくるようだ。しかし望遠鏡から離れて目を転ずると、白と

紺の無音の世界。そして二人は静止した二つの黒点。

朝から渡部がトップ、ハクパ・ツェリンがセカンド。パートナーの選択は渡部に百パーセントまかせたが、この二人はよほど気が合うのだろう。昨年の遠征以来の馴染みで、今回は特によくザイルを組んでルートをはひらいていた。ことに渡部は昨秋遠征の帰路から、唯一の中心となつて準備に当たり、その熱意と執着はものすごかった。またハクパ・ツェリンにとっては、実兄のイラ・ツェリンがサードとしての初遠征で張り切るのも当然である（一九七〇年プレの日本エベレスト隊では、チョタレと二人がサードだった）。ともに闘志満々、登頂の気構えがベースキャンプ以来ありありと見えていた。

それにしても固定ロープが見えないのはどうしたことだろう。無線機の調子が悪く連絡は難しい。この氷壁を越えるまでは確実にロープをフィックスする約束である。予定でもまだ三日の余裕がある。上部での難場を予想して、降りに固定するつもりだろうか。あるいは氷の条件がよいのか、しかしステップを切っている。それにしても午後の日蔭と寒さ、氷の硬さは充分わかつているはずだが。

十時。時計を見直すほど時間の経つのが早い。小さい氷稜にとりつく。これに続く上部の懸垂氷河断端こそ、数日前にも知らせた一番手こずりそうな所。ここを左に抜ければあとは傾斜も四十五度ぐらいにゆるくなる。今までのリズムが止まり、動きはのろい。この高さは渡部にとって初めてだ。渡部がジリ、ジリと動く。ハクパがダブルロープを這うようにして確保している。渡部が止まる。アイスバイルかピッケルを振るう。左右の足場を変える。少し戻る。酸素ボンベは背負っているが、マスクを着けて吸っているのかどうかはわからない。スクリューピトンをねじ込んだのか、止まっていた姿が少しずつ動き出す。また止まる。足場を刻む。一步、さらに一步。

見ている私もくちびるをかみ、息をこらえ、苦しくなつては激しく深呼吸し、彼の動きにつれて上体をひねっている。

ギラギラ光る水のフットライトを浴びながら渡部の動きは変らない。

ハクパとの間隔がかなり広がった。この一ピッチで通れそうだ。渡部の動きが止まる。坐り込んだ姿勢。確保に入った。ああ、やっと越えた。ハクパがゆっくり動き出す。

十一時。やっと頂上に続く氷稜の左に抜け出る。鏡のような氷を背にして二人は休んでいる。何を見、何を思っているのか。

十一時十分。再び動き出す。今度はコンティニューアスで。しかし残念ながら、ここからは氷稜のかげに隠れて見えない。

十一時三〇分。望遠鏡でチラリと見えたがまた隠れる。照りつける日ざしは暑い。朝ここを出発した田中、黒岩、サーダー、パサン・ノルブは、雪崩跡を第四キャンプへ登っている。代って第四キャンプからすでに降りてきた大笹、大野は、休養のシェルパと観戦に忙がしく、かわるがわる望遠鏡にしがみついている。雲一つなく晴れ渡った紫の秋空は、氷の輝きを一層まぶしくさせる。一次、三次の遠征が念頭をよぎる。

十二時四〇分。再び現われる。やはり渡部トップ、スカイラインを快調にとぼしている。セカンド、ハクパ・ツェリンとの間隔が広いようだ。渡部の調子はよほどよいのだろう。ここまで登れば、あとは問題ない。この辺については、昨年以來ヒマルチュリ隊やマナスル隊が撮ったもののほか、いろいろの写真を見ながら何度も話し合った所だ。一時十五分。頂上の小台地が作る雪庇の横で、二人の動きは一つになって止まる。握手し抱き合っている。しかし休みもせず、さらに雪庇の向うへ雄姿は消える。頂上は手中のもの。アンナプルナが見えるだろう。たんまり写真と石をとってこい。

姿の見えぬ時間がやけに長い。相変らずの無風快晴。

三時。待ちに待った二人が同じ雪庇の横に現われた。一時間四十五分の何と長かったことか。

すでに陽は傾き、二つの影が長い。背負子はずし、荷を作り直しているらしい。しかしすぐに降り始める。軽快な動きは変らず、登りには見えなかった一歩ごとに吹き上げる雪煙が、あかね色の逆光に輝いて美しい。

四時二十分。やっと下の方に現われた。例の難場の上だ。夕日は主稜線に沈み、逆光の陰でもう望遠鏡でも見にくい。第三キャンプも寒くてたまらぬ。それも寒いだろうが急ぐな。注意しろ。

四時五〇分。わたしは五時の定時交信のためテントに入り、ベースキャンプに「登頂」を伝える。

夕食はうまかった。わたしにとって、一年半も続いた遠征食（一九六九年のP二九、一九七〇年のエベレストと今回のP二九）は、食欲があっても喉を通りにくい。しかし今晚の食事は実に豊かに思われた。

七時過ぎ、第四キャンプから三つのライトが降りてくる。誰だろう。不調の無線機に業をにやしたやつに違いはない。意外なほど早いスピードで近づいてくる。月明りに黒く長く浮かび上がったトレースを音もなく近づいてくる。

シェルパ達のかなにか呼びかかう声が凍った静かな夜気をふるわせる。

近づいた。もうすぐ……。と突然シェルパの号泣。「どうしたんです」と大笹や大野が問う。「シェルパも登頂すりゃうれし泣きするよ」私は何気なく答えたがどうも異様な感がある。成功の感激にはおかしい。シェルパが「ハクパ・ツェリン」といっているのも変だ。アン・ナムギャルが私の側に来る。老練沈着そのもののシェルパ。「どうしたんだ」と尋ねると、同時に答えが返ってきた。「渡部サーブ、ハクパ・ツェリン、フォールダウン、ダイ。」

わたしの顔から血の気が引いていくのがわかる。「ダイ？」ともう一度聞きなおすのもうわの空、しゃがみこんでしまった。一体どうしたんだ。意外にも今日第四キャンプへ登ったばかりの田中、サーダーのイラ・ツェリン、パサン・ノルブがかけ込むように到着する。シェルパの号泣が激しい。うるさい。「黙れ」といいたい。

田中から詳細を聞く。「第四キャンプも登頂の喜びに湧いていた。五時前、突然サーダーの叫び声でテントを飛び出した。するとすぐ近くに二つの動かない体が転がっていた。サーダーは「スーッと黒い物が滑って止まるのを見



た」という。第四キャンプから一〇〇メートルほどの距離、酸素を持ち全員がかけよったが、そこには手の施しようもない二人が、しっかりとロープで結ばれ横たわっていた。』

サーダーがわたしに抱きついて狂ったように泣き出す。パサン・ノルブは静かに泣きじゃくりながら、わたしを抱く。いったいわたしはだれに抱きつき、だれに向かって泣けばいいんだ。

シェルパをテントに入れる。一人で見上げる氷壁は、昼の舞台、今起こった不幸とはかかわりなく、まったく静かである。夜目にもクッキリと浮かぶ稜線が、次第にゆがみ、悲しさがこみ上げて来た。（十九日の「日誌」より）

### 第一次隊よりの経過

七八三五メートルの未踏峯。望見したかぎりよい登路はなく、試登もされていない。山麓の地形も判然としない空白。これが一九六一年のP二九であった。この年、第一次遠征、西面の地形解明。第二次（一九六三）、東面の登路確認。第三次（一九六九）、七三五〇メートルまで登攀。そして今回第四次（一九七〇）、悲しい事故と共に待望の登頂をなしたのである。

今までの第一、第二および第三次隊について補足要約する。

第一次隊 一九六一年春（隊長篠田軍治、登攀隊長住吉仙也、他隊員六名）

P二九東面は徳永（マナスル三次隊）、住吉（ヒマルチュリ・村木隊）により観察されたが、頂上直下に困難な氷壁があることにより、地形不明の西面に登頂の鍵を求めた。

マルシャンディからムシ・コーラを経て入り、この谷の奥からP二九西尾根とも呼ぶべき低い西に延びる尾根を越え、P二九とマナスルから出る氷河（ツラギ氷河）のサイド・モレーン上にBCを設営した。P二九の西面をなす大岩壁は、すでにナムン・パンジャンからの写真（今西寿雄氏撮影）により、登路としては絶望的であったため、このツラギ氷河をつめてP二九とマナスル間

のコレに出るルートに望みを托した。しかしこの氷河の奥のアイス・フォールは廊下状をなして狭まり、両岩壁からの雪崩とアイス・フォールそのものの烈しい動きで極めて危険であり、登頂を断念した。

しかし六七〇〇メートル峰の試登など、これまで空白か不正確な間違つた地図しかなかったこの地域の盲点を解き、ツラギ氷河、氷河湖およびこれより流れるドナ・コーラを下ってマルシャンディに帰路をとつた。

**第二次隊** 一九六三年秋（隊長篠田軍治、偵察隊長木村裕一、他隊員三名）

第一次隊の結果から、一応西面登路をあきらめたわれわれは、第二次隊として東面のブリ・ガンダキから偵察隊を入れた。サマからブンゲン氷河に入ったが、その奥はアイス・フォールの状況が悪く、東尾根に転じて比較的安全なルートを見つけ、この東尾根の基部約六三〇〇メートルまで達し登頂の可能性を見付けた。さらに同隊は帰路ラルキヤ・ラを越えてP二九西面も偵察し、第一次隊同様この面からの登攀ルートは極めて危険かつ困難であり、登路としては東尾根が可能性ありと報告した。

**登山禁止** 二次隊の報告に基づき、登頂を目的とする一九六五年遠征隊の準備にかかったが、相前後してネパール政府のヒマラヤ登山禁止令が出され、計画は中断の已むなきに至つた。

**第三次隊** 一九六九年秋（隊長住吉仙也、他隊員一〇名）

一九六九年春、登山禁止令を解除する新登山規則が施行され、同時に許可を得たわれわれは登頂を狙える初めての隊として第三次隊を送つた。同隊は登路として東尾根かあるいはブンゲン氷河を登るべきか、改めて偵察検討した結果、やはり安全性の上から第二次隊踏査の東尾根ルートをたどり、キャンプを進めた。

十月二十四日、頂上直下、高距約八〇〇メートルの氷壁基部、六九〇〇メートルにC6を建設。

しばらくのヒマラヤ登山禁止のためか、高所ポーターたるべきシュルパの高所での活躍は期待に反し、加えて堅氷では何ら頼るべきものはなかった。幸い隊員の高所順化は完璧に近く、C6に隊員のみ八名が一週間以上滞在して氷壁のルートを拓いていった。しかし十一月に入ると気温の低下と共にジェット・ストリームの影響は次第に強く、雪庇や氷塊のルートへの落下ははげしくなり、十一月二日、七三五〇メートルまでのロープ・フィックスをもつて登頂を断念した。

#### 第四次隊・一九七〇年秋

登攀隊長 住吉仙也（43才） 阪大医学部所属、第一次、第三次参加  
 隊員 田井英男（32才） 阪大工学部助手

三枝礼子（37才） 阪大薬学部卒、東京芸大学生、第三次参加

豊坂昭弘（29才） 大阪警察病院勤務

大笹秀一（27才） 住友重工（株）勤務

渡部洋（26才） 理学部研究生、第三次参加

大野義照（26才） 工学部助手

田中喜樹（23才） 工学部学生、第三次参加

石原敏雄（24才） 理学部研究生

黒岩芳夫（22才） 経済学部学生

シェルパはサーダー・イラ・ツェリン（39）、ナムチエ）、ラクパ・ノルブ（33）、ターメ）、ハクパ・ツェリン（34）、ナムチエ）、アン・ツェリン（コック、46）、ナムチエ）、アン・ナムギャル（35）、ターメ）、カルサン（36）、ナムチエ）、テンジン（32）、ナムチエ）、パサン・ノルブ（29）、ナムチエ）、カミ・ノルブ（27）、ナムチエ）、ナチ（22）、ジュンベシ）、の十名。ローカル・ポーター・シェルパ六名。キッチンボーイ二名。

第三次遠征を反省検討し、今回は以下の点に特に留意した。（一）時期を早めること。（二）氷壁におけるスピード・アップ。（三）氷壁途中に建設可能なハンギング・テントの考案。（四）隊員のみならずシェルパに対しても高所順化のための行動に配慮する。（五）その他はほぼ第三次隊に準ずる。

（一）時期は第三次より十日は早く九月十日から十月一杯の五十日間を登攀期間とし、十月二十日前後を登頂予定日とするよう計画した。ジェット・ストリームの来襲は年により異なるであろうが、昨年の経験では十月末から十一月

に入ると同時にこの洗礼を受け、気温の低下と相まって、氷壁登路に流落する雪崩や氷塊が急増した（殊に主稜線からの雪庇の崩壊）。事実いままでのポスト・モンズン期における七五〇〇メートル以上のヒマラヤ登攀では、西辺の峰を除くとほとんど十月二十日前後に登頂を成功させている。一方、早ければ早いほどよいわけではない。モンズン明けが平均十月初旬であること、高所生理的に四〇〇〇メートルのベース・キャンプ以上は五〇日を妥当とし、それを超えた場合、著しい体力の衰退に加えて最後が氷壁登攀では大した成果も期待できないと考えた。たとえ気象や生理条件が幸運に恵まれても、更に長期の登山は食糧、燃料の増量を来たし、ポーターや資金にまで影響を及ぼすであろう。

(二) スピード・アップについては氷壁における気象、殊に風と気温およびこれらに左右される氷の硬度に関係する。局地的な風は致しかたないが、幸いにP二九東面はジェット・ストリームに対し主稜線の風蔭になる。気温は(一)のとおり時期を早めることにより、かなり(約一〇度)和らげられると考えた。氷の硬さに対しては、スクリュールピトンの刃を鋭くし、強度を大にしたものを特製し、また全員十二本出歯アイゼンを用意し積極的に蹴爪を使うこととした。同時に氷壁でもっとも肝心なことは、最終キャンプの建設とロープの固定を完了するまでは、連日ラッシュ・タクティックスの心がまえをもつことであると考えた。

(三) ハンギング・テントは高強度のスクリュールピトンによるプラットフォーム付きのものを考案して持参した(実際にはシュルンドをキャンプ地としたため使用しなかった)。

(四) 第三次では隊員の高所順化は極めて良好であったのに反し、シュルパは全く不甲斐なく、最高キャンプに泊ったものは一人もなかった。これは順化のための行動管理を隊員にだけ行ない、シュルパの行動はサーダーのチョタレに任せて、トランスポートの荷の管理のみ隊員がやったためと考えられる。そこで、今回は隊員同様シュルパの行動にも注意し高度順化を図った。結果は管理したのがよかったのか、あるいは登山禁止解除後一年間に高所の経験をも

ったためか、昨年比し格段に順化良好であった。

### キャラバン

ルートも荷物、ポーターの数量も第三次隊とほぼ同じ。注カトマンズ出発は第三次より九日早い八月二十五日。昨年以上の雨を覚悟したが、一九七〇年のヒマラヤは気象異変のせいかかえって少なく、昨年は刈り入れ前でテントが張れず困った所でも、今年に至る所に刈り取られたあとの畑が見られた。

しかし、アルガート・バザールまではともかく、ここから奥のブリガンダキ沿いでは、マナスル以来全く変わらず、文明の恩恵にも浴していないので道路の改修など望むべくもなく、行程は一日も短縮できない。九月六日ニヤック着。連日の夕食後ミーティングも熱を帯びてくる。さらにチベット地域に入ると現地人とのトラブルは定例行事となり、頭痛のタネであった。従順なカトマンズ・ポーターをナムルー、リダнда、ローの部落民に交替せざるをえない。ナムルーにはチェックポストができたが、全く無力。ローからの入山に当たっては、昨年は無かったのに今回は入山料として一五〇〇ルピーを要求される。今春オランダ隊が二五〇〇ルピーでも入山できなかった事実を知っていたので、馬鹿らしいと思いつつも支払う。一九七一年春の韓国マナスル隊は入山料を払わない代りにサマのチベット人をカトマンズに呼び、ポーターとして雇うとのことだが、金銭出納はいずれが得だろうか。

とにかく第三次隊より十日早い九月十二日、従来と同じ四〇〇〇メートル地点にベース・キャンプを建てた。赤や黄色の高山植物がモンスーンの残り雨に濡れて美しい。

註 キャラバンルートは往路は第三次隊と同じ。帰路はニヤック、パンシンを通らず、その対岸すなわち左岸を通る(→↓デン→チユゴ↓ジャガート……)(八十二ページおよび裏表紙見返し地図参照)

第3次隊と第4次隊の行動比較表

	第3次 (1969年秋)	第4次 (1970年秋)
頂上 (7,835m)		10月19日
7,500m		C 5 10月18日
6,900m	C 6 10月24日	C 4 10月11日
6,250m	C 5 10月18日	C 3 10月9日
	C 4 (※1)	(※2)
5,800m	C 3 10月5日	C 2 9月23日
	C 2	
5,100m	C 1 9月27日	C 1 9月20日
4,000m	BC 9月22日	BC 9月12日
キャラバン開始 (カトマンズ発)	9月3日	8月25日

(※1) 10月13日 C4へのルート工作のみ終えて全員BC集結

(※2) 10月1日 C3への予定荷上を完了して全員BC集結

登路はほとんど昨年の第三次隊と同じである。部分的に地形の変化しているのは当然だが、もっとも大きな違いは今回は第三次隊のときにくらべて一日早いためか、雪線が高度差で約五〇〇メートル高く、降雪のたびに雪崩がルートを洗うことであった。流された隊員も何名かいたが、事故にならず幸いであった。

しかし各テントは順調に作られ、第三次隊のC2、C4は省略し得た。

九月二十日、五一〇〇メートル地点にC1建設(第三次のC1建設は九月二十七日)。ここへの荷上げは雪量少なく大いに捗る。

九月二十三日、C2建設、五八〇〇メートル(第三次のC3建設は十月五日)。この東尾根P1付近の地形は第二次、第三次、今回とそのたびごとに大きく変化している。局地的に風雪多く、しかも風向不定で、第三次隊はこの上と下にもう一つずつ仮のキャンプ(C2とC4)を作ってルートをひらいた。

P1を越え、東尾根の基部コルにあたるC3予定地六二五〇メートルへのトレースは九月二十六日に完了、C3への予定荷上げもスケジュールどおり十月一日に終わった。

次いで第三次同様、高所順化のためいったん全員がBCに集結し、三々五日休養の後、十月五日から後半期が開始された。モン

ーンは未だ明けず、BCで降雨も雪と変り、毎日寒い朝夕であった。

十月九日、C3建設、六二五〇メートル（第三次のC5、建設は十月十八日）。

十月十一日、C4建設、六九〇〇メートル（第三次のC6、建設は十月二十四日）。ここが頂上直下、東面氷壁の基部である。

この頃モンスーンが去ったのであろう。朝、全天の快晴がやってきた。稜線を画する空は、ますます紺色を深めた。もっとも、地形による局地的現象であらうが、東尾根の三つのピークP1、P2、P3には正午近くになるときまったように雲と雪が現われた。面白いことに、昨年同様、渡り鳥の大群が二陣（二日）に分かれ、朝、六〇〇メートルから七〇〇メートルの高さで飛び去ったのもこの頃である。

C4からのロープフィックスは頂上に向かって小気味よく伸びて行く（C4とC5間は全部フィックス）。何よりうれしいのは、無風快晴と氷の硬さであらう。一ピッチのスピード、そしてスクリューピトンをねじこむスピードが昨年比しはるかに軽快である。十三日、早くも昨年の最高到達点を越え七四〇〇メートルに達する。しかし数こそ少ないが思い出したように落下する雪庇や氷塊がルートを洗ってヒヤッとさせられる。一度これに流されると、たとえわずかの距離でもシェルパにとっては意気消沈の打撃である。今C3以上には隊員六と八名、シェルパ六と七名。しかも全員快調。ここまでくれば頂上は何とかしたいものだ。

十月十八日、氷壁途中に最終攻撃キャンプC5を作るべく、田井、大笹、大野、石原、カミ・ノルブの五名がサポートし、渡部とハクパ・ツェリンがこれに入る。横に走るクレバス（シュルンド）の中に絶好の場所を見付け、持ち上げたプラットフォームは不要になる。ここなら風や雪崩の心配はなく、一夜をゆっくり過ごせる。しかもまだ行動中に酸素を使っていないにもかかわらず体調は良好。睡眠時のわずかな酸素が安眠を約束してくれる。

渡部とハクパ・ツェリン。この二人は昨秋以来の親友である。今回も初めからパーティを組んでよく先頭に立って

きた。登頂にも驚くほど意欲的な二人である。C5から頂上稜線は指呼の間である。明日はとにかく確実に固定ロープを延ばしてほしい。

そして翌十九日。この長い、起伏多い一日は、最初に記したとおり忘れられぬ日となった。

### 事故のあとで

悲しい、いやな一夜があけた。隊員もシェルパも、昨日の、目の前に展げられた登攀で、見えない一時間四十五分の登頂を信じているが、他に示すべき確かな証拠は何もなかった。不調の無線機からは、昨日、何の受信も得られていない。二人の遺体のそばにはもつれ切れた35ミリ・フィルム約二本分（パトローネはなく、完全露光）があり、破損したフィルム用アルミケース、小手帳一、写真引伸し印画（頂上氷壁のもの）、カメラケースや時計バンドの破片、登攀具の一部とともに空しく回収された。

しかし、渡部の右手には折れたピッケルの頭部がバンドでつながれ、そのプレード基部には、頂上で結んだとしか考えられぬ国旗の白い木綿紐が残っており、またハクパ・ツェリンのそばで、散乱した荷物のなかに、手掌大の赤褐色の石が一箇見付けられたことは、私たちをなぐさめてくれた。（写真⑩）

第二登のため、直ちに遺体のクレバス埋葬を計ったが、シェルパは一種のパニック状態であり、一部のものがクレバス埋葬には賛成しながら登攀には反対し、殊にサーダーのイラ・ツェリンはハクパ・ツェリンの実兄でもあって、ベース・キャンプへの収容を強く懇願した。遺体を山中に残置することに対する現地人の宗教的禁忌もあり、やむなくベース・キャンプへの収容に踏み切った。七〇〇メートルからの収容はそれ自体危険も多く、ベース・キャンプ収容後の再登攀は時期的にも不可能であり、事実上、これによって再度の頂上攻撃を放棄したのである。

十月二十三日夕。雪煙上げるP二九の向こうに夕日が沈む頃、暮色たちこめるベース・キャンプに二人の遺体を収



容し、サマのヘッドドラマ僧司式のもとに茶毘に付した。

帰路、遺骨を抱いて日本に近づくにつれ、手紙や新聞切抜きで弔意やなぐさめとともに「登頂に対する疑問」の声があることを知ったが、何のあかしもない。確信しておればこそ、なお困りはてが、客観的、常識的にみればこの疑問は当然のことであろう。

ただ、十九日C3で望遠鏡をとおして撮った写真がうまく写っておれば、強力な証拠になるぞと思いつつも、望遠鏡は普通のものでカメラ用でなく、撮影の距離や絞り、露出時間は種々の条件で撮影したもので、まったく自信なく、帰国後現像してみるまで頼りにはできなかった。伊丹空港に降り立った時も「確信します。しかしデータを提出して判定を仰ぐほか方法はありません」と消極的な言葉しか出なかった。

幸いにも写っていた写真が、本稿に付された写真⑧⑨である。このスノードームの稜線と頂上は近距離にあつて、かつ、ギャップなどの難場もないことは、他の方角からの多くの写真と併せ見れば明らかであり、C3から見えなかった一時間四十五分の間には頂上に立てるものと思われる。

写真、ピッケルに残った国旗の木綿紐、赤褐色の石とともに内外の山岳人や山岳団体から「登頂確信」のたよりをいただいても、やはり私にとっては第二登が待たれる心境である。

### おわりに

「P二九のような山が、そう簡単に登れるものでないことは初めから予想されていたことである。……」これは大阪大学山岳会がはじめてヒマラヤに送った第一次P二九遠征隊の報告冒頭に書かれている文章である。それから十年。四度の遠征が予想されたらうか。

私たちが阪大隊がP二九に対して行なったことは、単に今回の登頂ということだけではない。ほとんど未知であった

山塊にいろいろの方向から可能性を求め、それを一つずつ積上げて今回のゴールに到着したものであって、これはちょうど未知の地理的、科学的方面への探究とまったく同じ心持ちと態度をもって進められてきた。

計算ずくめで計画をたて準備をすすめても、予期せぬことや分らないことがつきつきと出てきて、思い通りうまく行かないのが自然相手の登山であり、ましてスケールの大きなヒマラヤである。ネパールの登山禁止や資金面の問題があり、また山の難かしさに比し私たちの非力の故もあるうが、ヒマラヤ登山とはこんなものであろう。

とり返しのつかぬ死亡事故こそ痛恨の一事であるが、むしろ一山岳会としてよく遂行できたと感じるとともに、この長期間、有形無形、多くの方々からいただいた御援助の大きさに驚き、改めて深く御礼を申し述べたい。(一九七一年記)

## 第四次隊登攀日記

田井英男

九月十二日ベース・キャンプ(BC)建設、九月十四日より第一キャンプ(C1)へのルート工作と荷上げを始めた。写真④に点線でC1へのルートを示したがBCより約三十分草の生えた斜面を上り人文字地点(岩の割れ目に雪が人の字の型に積る。)より草付きの岩尾根になる。岩稜にジグザグにルートを付けて登るが、このあたりは特に難しいことはない、高度四六〇〇メートルぐらい。この岩尾根と雪面とが接するあたりに大きな岩小屋状の所があり、荷上げの中継点とした。さらにこの岩尾根を数ピッチ登ってから、広い雪の急斜面を横断して、東尾根P2とP3のコーナー近くのC1地点に至るのである。C1迄の急斜面には、フィックスロープ、はしごを何ヶ所か設置したが、しばしば雪崩におそわれ、何べんもルート工作のやり直しを行わざるを得なかった。

九月十五日には、BCへの帰りに、ガリーを横断中に湿雪雪崩に3名が巻き込まれ、肝を冷したが、約五十メートル流されただけで無事脱出する事が出来た。この頃は、連日午前中曇り、午後小雨で高所はみぞれの天気だった。約

八〇〇キログラムの物資がC1地点に集結したので、九月二十日、五一〇〇メートル地点に第一キャンプ（C1）を建設、渡部他四名が入った。引続いて東尾根にルート工作と荷上げを展開し、九月二十三日五八〇〇メートル地点に第二キャンプ（C2）を建設した。

東尾根C1とC2間の雪の状態は、昨年にくらべて、クレバスは大きい、ラッセルは少ない。年による違いであろうか。C2は東尾根一峰（P1）、二峰（P2）間のコルよりP1に登りかかった所にある。C2直上氷壁でルートは東尾根をブンゲン氷河側（北側）からリダングダ氷河側（南側）に超越するため、渡部らは苦勞の末に約三十メートルの繩ばしごを氷壁に固定した。C3へのルートは、さらにリダングダ氷河側をP1頂上直下迄、トラバースしたのち東尾根稜線に直登し、稜線通しに少し下って東尾根基部のコルに達するのである。P1の周辺は、リダングダ氷河から吹き上げる風の為か、雪の状態が安定せず、また、午後になると天候がぐずれやすく、三次隊は、ルート開発に苦勞を重ねている。今年には調子良く、九月二十六日には、C3地点迄トレースし、以後十月一日迄、荷上げを続けることが出来た。

この時点でのC1、C2、およびC3の食糧装備の在庫重量はそれぞれ二〇二、七〇七および五一〇キログラムに達した。十月一日予定通り高所順化のためいったん全員がBCに集結した。高度五〇〇〇メートルで連続して行動し、体力を消耗し切って下って来た連中も、BCは暖く、実感として空気もうまく、新鮮な野菜や肉類をたっぷり食ってのんびりし、体力を回復した。

十月五日からいよいよ後半期開始。ここ数日の間に、前半期に建設したルートも大半は雪に埋れ、かなりのラッセルを強いられる。十月五日C1、六日C2に入り、九日には東尾根基部（六二五〇メートル）に第三キャンプを建設した。（第三次のC5地点建設は十月十八日）。ここからはP二九東壁全体が真近く望まれ、いやがうえにも登高意欲がかきたてられる。

十月十日C3より、プラトーを縦断してC4予定地まで達し、さらに東壁基部取り付き点迄トレースして来た。C

3とC4間はプラトールと呼称してはいるものの、高度差で約六五〇メートルあり、時々主稜線から懸垂氷河の崩落もあり、七〇〇〇メートル近い高度でのラッセルはきつかった。この間は距離も長く、途中に中継キャンプが欲しいくらいである。

翌十一日第4キャンプ建設4名が入る。ここ迄はほぼ予定通り快調にキャンプを進めて来れたが、明日からは問題の水壁にルートを切り開かねばならない。テントの外で、アイゼンや登攀具の手入れをしながら、壁をにらみあれこれと話がつきなかつた。

十月十二日、いよいよ水壁のルート工作開始。C4では六時十五分田中・イラツェリン組と田井・テンジン組に分かれて出発した。田中組が先行してロープフィックスの支点作り、田井組が後からロープにビレー用の結節を作ったり、末端処理をすることを分担する。一本約五〇メートルのフィックスロープ（径8ミリ、ナイロン）七本、スクリューピトン十二本、軽合金カラビナ十個とアイスパイルを持つ。この登攀のために特に作ったダブルの高所靴は軽くて足によくフィットし、これに十二本爪のアイゼンをつけると水壁を駆け登れそうに思え心強い。C4より水壁基部迄は一ピッチ、約三十分で達する。ここからは壁となるが、写真やスケッチに見られる二本のシュールドを越える下部はステップの切れる硬雪で問題ない。ここより上は、傾斜五十度にもおよぶ水壁で氷は極めて固く、ピッケルのブレードではほとんど切れず、貝殻状にかけるばかりで足を置けるようなステップを作ることとは不可能であった。アイゼンの蹴爪をきかせてかろうじて立って居れる程度であるから、したがって背中の荷を下ろしたり、腰を下して休む事も全く出来ない。この水壁が高度七五〇〇メートル附近迄続いているのである。（写真②）

昨日来の咳に悩まされるが、今日一日のスピードでアタックキャンプの出来上る日が予定出来るので思い切り頑張る。左手にピッケル、右手にアイスパイルを持ち、アイゼンの前爪を氷に蹴込みながら、約二十歩位一気に登るが、大体これ位で息も切れて、脱糞しそうになり咳も出る。そこで息を整えて、またこれを繰り返す。大体これを三、四

回繰り返すと、下からイラツェリンの「ロープツァイナー（ロープ無いぞ）」の声が聞える。ここでスクリュエーピトンを取り出し、アイスバイルで思い切り氷をひっぱたき、表面から二、三センチ下の青氷を出し、さらにバイルでくぼみを作り、スクリュエーピトンをねじ込む。今日は風も無く、割合いに暖い汗も出る。七本ロープフィックスしたところで、第三次隊の最高到達点から二ピッチ下にデポ地を見付けた。ここで昨年デポした青い六ミリロープの束が約四センチ程氷の下に見えたが、一部は白く脱色していた。持って来たロープも無くなったので、一時三十分下ることになる。この壁は東斜面のため、すでに日がかげりだし、急に寒くなって来た、風も強くなり、氷壁の上方から氷片や雪片が絶えず落ちて来る中を、ずり落ちるように下降した。三時三十分C4へ帰着。

十月十三日、今日も快晴、昨日C4に登って来た渡部・ハクパツェリン組がルート工作に当る。サポートは田井・テンジン組。渡部の闘志ものすごく、蛙岩めざして奮斗、フィックスをさらに五ピッチ延し、蛙岩下端に達した。すでに昨年の最高到達点高度を越え七四〇〇メートルに達した。

十月十四、十五日は風雪で停滞。

十月十六日（快晴）二日間停滞の後でもあり、今日こそは第五キャンプ（C5）を作らねばと、荷上げ隊も、出動した。高度七三〇〇メートルを越える時分より、上からのスノウシャワーがひどくなって来た。十四、十五日に降った雪が、強風にあおられ、氷の滑り台のようなルートに大量落ちてくる。蛙岩横のトラバースでテンジンが強風にあおられて転倒し、思わずはっとする場面もあった。ルート工作の大笹・ハクパツェリン組はフィックスロープをさらに二ピッチ延ばし、難場の蛙岩横を通過、C5地点の見通しをつけて来た。後続の荷上げ隊は結局蛙岩横で風雪の為進めなくなりC5建設をはたす事は出来なかった。帰路、氷壁基部のシュルンド附近で小雪崩を食らい、シュルパ三名が全身打撲、擦過傷やらでひどくまいてしまった。

十月十七日（晴）隊員、シュルパいづれも昨日の疲労がひどく、C4は停滞になる。午後、C3に休養に下って

た渡部が石原とC4に到着した。元氣一杯である。C3の住吉登攀隊長からは、今後の登攀についての詳しい指令書がとどけられた。ここに登頂への体制はすっかり整ったようであった。C4では、初めて睡眠用に酸素を使う。そのため、暖く熟睡出来た。

十月十八日(快晴)睡眠用の酸素のためであろう。今迄になく寝起きがよい。今日こそは第五キャンプ(C5)を建設せねばならない。C5へは入るメンバーは渡部・ハクパ・ツェリン組で、田井、大笹、大野、石原、カミ・ノルブがサポートする。大笹、大野が六時三〇分先行した。十四ピッチのフィックスロープにすがってスピードをかせぐ。蛙岩の直下から、横にかけては、完全に青氷が露出した急斜面がS字状に続き最も登行が困難であるが、そこを突破すると雪面があらわれ、クレパスを避けながら二〜三ピッチ上るとC3、C4からも横に走っているのはつきりと見える大きなシュルンドに着いた。(高度七五〇メートル)。シュルンド内部には、テントを張るのに十分な広さの棚があり、ここならば風や雪崩の心配もなく、4人用のフランスマカルー型テントを張ることにした。最終攻撃キャンプを、どこに作るかについては、今迄最大の難問で、氷壁にロープでプラットホームを釣り下げ、二人用テントを設置する用意をして来たが、遂にこれを使う必要が無くなったわけである。(写真<sup>27</sup>)

ここから見上げると頂上稜線は手が届きそうに近い。シュルンドのすぐ上の氷壁を左にぬけ、蛙岩上部の雪稜に取り付けば、後は、なんとかなりそうである。

渡部は、ハクパ・ツェリンと今日も先頭に立って来たが、『明日は頂上いただきました。』とにこにこ顔で、サポート隊にも『サンキュー、サンキュー』を連発して握手、サポートの我々は、二人にくれぐれも無理しないように言って三時三十分C5を後にした。

## 検討と反省（三次・四次を中心にして）（一九七三年記）

### 遭難事故

住吉仙也

『遭難状況』はすでに本書の第四次遠征報告に、写真を付して記した通りである。この地点は、蛙岩上部の小さな雪（氷）稜の突き当り、小懸垂氷河の断端面のすそを、右ヘトラバースする所。登攀時最も手ごずってスピードが落ちトップ渡部が一度あと戻りした所である。ここを通過すると、左ヘ斜に登り五分間の休憩をとり、以後スムーズなコンティニアスで一気に登っている。（写真㊸×印）

この地点はBC、コルのABC(C3)及び直下のC4からの検討で、始めから最も困難が予想された所である。事故直前、二人の姿は残陽逆光の日陰のなか、目をこらしても黒点が判別しかねる状況で、ABCでの望遠鏡でもその動きは見られない静止黒点の如きものであった。恐らく、ロープのフィックス作業を寒さの中でしていたのであろう。滑落瞬間は誰も見ておらず、C4では落下して来た黒い物体としてサーダーが見たが、ABCでは肉眼は勿論、望遠鏡でも判らず、後刻C4からの連絡で知った事は報告本文にも記した通りである。

遭難の『直接原因は滑落』であろう。滑落の原因が問題であるが、それまでの快調な下降から肉体的な病的原因は考えられない。『滑落状態』を推測すると、先づ渡部のピッケルシャフトが真中で折れ、その上半部は彼の手首にバンドで結ばれ、手首には強い絞縊溝が見られたこと。コンティニアスでは通過不能の固い急傾斜の蒼氷壁で、このためロープフィックスの作業をしていたと考えられること。この二点からシェルパ（ハクパ・ツェリン）が先に滑落し、渡部がこの衝撃を止めることができず、ピッケルが折れ渡部も続いて滑落したと想像される。

篠田会長の、渡部のピッケルについての力学的推論(百十一ページ参照)による大きな力の衝撃例えば氷塊の直撃などが原因であれば、「ハクパに続く渡部の滑落」は、同時又は逆になるが、この学問的考察を除外して一般的に考えれば、滑落時の状況は先づハクパ、続いて渡部が滑ったと思われる。

『滑落の原因』については、近因、遠因、多くの点が考えられる。即ち氷塊の直撃、単なる失敗、アイゼン爪の折損(二死体にアイゼンなし)、堅い蒼氷、寒冷、当然高度と一日の行動に応じた疲労や思考力低下など。しかし私達、三次及四次隊員が一致して考えることは、場所の点からロープフィックスの作業中であろうこと、と「なぜ登攀時、予定していたロープフィックスをしなかったか」ということである。無線機の故障で注意、指令できなかったのは残念だが、ロープフィックスをしなかった原因にはならない。

四次遠征にあたって、三次で撮った氷壁写真から、登路の検討を充分に行ない、蛙岩上部の蒼氷塊を左に巻き込むまで、結果として休憩をとった地点まで)ロープを完全にフィックスすることを決めていた。これは、第二登、三登も望んだが、初登にあたって氷の硬さと斜度、更に日照時(午前)と日照時(午後)の気温差による寒さと氷の硬さ、登攀時と下降時の疲労度の違い、下降時酸素の無い事から、固定ロープが絶体必要と、隊員各自が確認し合った。更に四次、現場で再検討の結果、つなぎ写真の登路以外に、もっとよいルートがないことから、ロープフィックスを全員で再確認したのである。

日数、予定からは、フィックスのためにお二、三日の予猶があった。私事であるが、住吉の誕生日十月廿二日にフィックスを完了し、できれば更に頂上も狙うスケジュールであった。ABCには後続予定の隊員が滞在し、或は休養していたのである。

C4では田井という地味だが物凄い頑張り屋が先輩として指揮していたが、三次で氷壁に触れ、続いて四次に参加した渡部が、登攀に関し全員から頼られていたのは事実であり、又それに答えうる渡部であった。しかし、死者に鞭



打つことになるが、回想されるのは、卒先してロープ固定を強調しつつ、「住吉さん、まかせて下さい」と再三言った言葉である。予定したハンギングテントを使用せずに格好のC5が建設できたこと。その上部の最難場の氷の状態が予想外に良かったこと。このため、高度による思考力、判断力の低下と共に頂上は貰ったという安易な気持、油断があったのではなからうか？とに角頂上を踏みたい。登頂して阪大のP二九に終りを告げたいと考え、約束事のロープ固定を帰路に残して登り続けたのではなからうか？

シェルパをなぜ登頂者に選んだか？という質問もあるが、これは当を得ていない。前述したように、この時点ではアタッカーでなく、最初にC5に入ったというだけで、あくまでロープ固定の義務が予定されていたのである。四次では渡部とパーティを組むこと多く、スマートな登攀技術を持ち、気力、体力とも充実していたハクバ・ツェリンを、渡部の希望も入れて最初にC5入りをさせた田井の判断は、滑落死体の傍に累々とからまった多量のフィックス用ロープを見れば、妥当であったと考える。

私のミスであり、且残念至極なことは、私自身がC5建設前にC4に登っていなかったことである。C5建設が、三次から考えた私の予想に反し早かった点、三期連続(69年ポスト、70年プレ、今回)のため体力が低下していた点もあるが、もう二、三日早くC4に入っておればと後悔される。C4で一週間以上も指揮しつつ頑張った田井は、充分その任を果たした。ただ私もC4にもっと早く居れば、ロープフィックスも含めて再確認事項や、その他の注意を更に念を押せたのではと思うし、又事故後の第二登も、何らかの手が打てたのではと、結果論ながら悔やまれる。

以上のような四次遠征における遭難原因とは別に、阪大山岳会の体質的なものも再考させられた。

P二九の第一次より第四次にわたり、若い者だけでも廿五人のヒマラヤ経験者を数えるが、二度の経験者はわづかに三人のみ。多人数が経験するのも大きな値打ちだと、オリンピック参加有意義論のような意見もあった。人数や参加者個人としての収穫はとも角、山岳会としてヒマラヤに播いた種が、次第に豊かに稔ったとは思えない。

たしかに遠征を送り出す事業には手馴れたが、ヒマラヤに於ける積み重ねは、何か無駄が多かった思いである。無事故、勇気ある撤退は好ましい困難事であるが、この美辞にかくれて頂上の一点に対する執着が薄いのではないか。されば、人数はともかく、遠征が不成功に終ったあと、隊員の切齒扼腕は、すぐに消えてしまうのか、程度の浅いものであったようだ。

ヒマラヤとは、登山とはそのようなものかも知れぬ。しかし渡部が、ロープフィックスを念頭に置きつつ、周りの状況からこの予定を打ち切り、敢て頂上へ向って登り続けたとしても、私は責める気持になれない。勿論このアタックは、批判、叱責されるべきだが、登頂を目差す登山に必須な、私達に欠けていたもの、即ち頂点への執念を、示してくれたと考える。

## 頂上と登頂

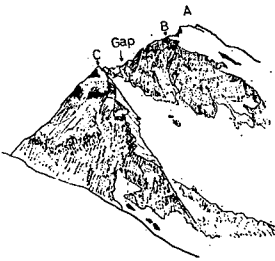
## 住吉仙也

P二九の頂上は眺めることも難かしい。マルシャンデイからもブリガンダキからも、それを望遠することはできず、特定の高所からだけ望み得る。このためか、P二九の山名は、場所により、人種により異なり（後述の山名について参照）やはりピーク二九と言うべきであろう。しかも懐深くこの山麓に入り、頂上附近は眺められても、その最高点は判断できない。

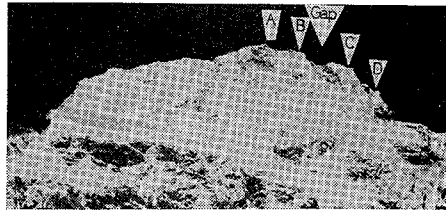
次頁⑤①の写真及びスケッチにより最高点を検討してみる。

マナスルからヒマルチュリに至る南北に延びた主稜線上のP二九であるから、東及西からの景観が、その最高点を最も明瞭に示すはずである。先づ東から、写真②や本書に集載した登路上からの写真では、頂点がAかBか定かでない。しかし西からのもの、P二九と殆ど同緯度 $28.30^{\circ}$ からの写真③（今西寿雄氏撮影、ナムンバンジャンから（一九

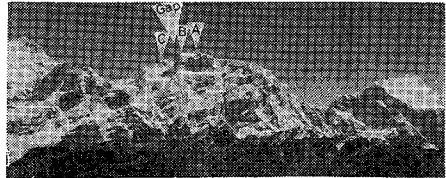
写真 ㉔, p. 29 頂上



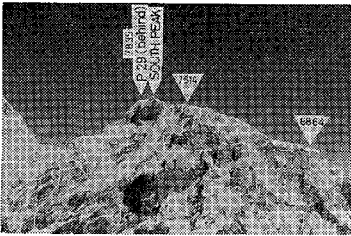
スケッチ㉔ マナスル頂上からの  
p. 29



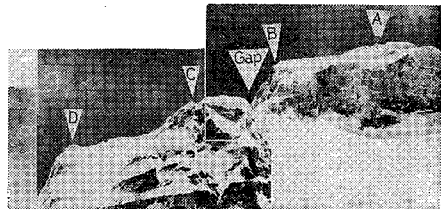
写真㉔ ヒマルチュリ東尾根からの  
p. 29 (東面)



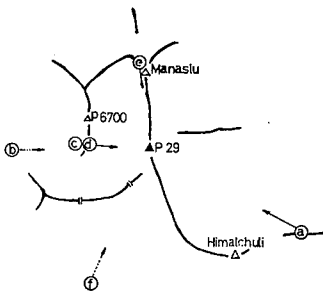
写真㉕ ナムンバンジャンからのマ  
ナスル3山 (西面) 写真㉔参照



写真㉖ 南東からの p. 29 (航空写  
真) 写真㉔参照



写真㉗ 6,700 峰稜線下部のコル (約  
5,000) からの p. 29 写真㉔参照



図㉘ 写真撮影およびスケッチ位置



写真㉙ 写真㉗の拡大

五三年)ではAが頂上であるのは明らかであり、これは、その他の西側からの写真〔例えば薬師義美氏撮影、東ティリツオ峠越しに望むマナスル三山(岳人二三〇号、一九六七年一月号)。風見武秀氏撮影、毎日グラフ増刊、世界の山岳・ヒマラヤ編(一九六九年)。故安久一成氏撮影、バグルンパニから(岳人二九〇号、一九七一年八月号)〕でも明瞭である。北からの写真はマナスル登頂時の今西寿雄氏撮影の写真(マナスル、毎日新聞社版、写真十四)のみ入手できたが、このスケッチ⑥によると、B点は判るがAは指適できない。B点直下の gap に落ちる岩壁面が北面しているから前述の西からの写真では、いづれもこの岩壁面の影を北に投影しており、B点は一層明瞭になる。

南側からの写真が最も多い。トニー・ハーゲン博士より頂載した航空写真、慶応大学ヒマルチュリ初登頂遠征(隊長山田二郎氏)の写真、本書に掲載している大野撮影の航空写真②および①その他の多くの航空写真がある。いづれも稜線上に一見頂上を思わせるピナクルを示すが、最高点Aではない。頂上以南の稜線がコンベックスでナイフリッジをなし、特に東側(写真の右側)が切り立った壁をなし、且東側に雪庇を突き上げているから、撮影する高度で頂上に似たピナクルを示すが、単にスカイラインを割す稜線か、瘤状の隆起にすぎない。これは五百沢智也氏によるスケッチ(THE SKY VIEW SKETCH OVER NEPAL HIMALAYAS-10・岳人、一九七二年十月)で最も正確に示されている。疑似頂点は六八六四米、七五一四米、或はサウス・ピークとして記載され、真の最高点は DAKUR (Phk:29) (Behind)と記されている。本書の写真②および①が比較的Aの附近を見せている。(なお写真①への書き込みは、前記の五百沢氏のスケッチにもとづくものである。)

山日記一九七一年版でP二九の高度が七、五一四米とあるのは、その註にある如く、G.O.ティレンフルトの Mountain World 1968~69 に依ったものであるが、これもやはり航空写真による頂上判定のミスであり、発表直後、氏自身より「誤り」の通知を受けた。

私が一九七一年、海外の山岳会や雑誌に送った登頂報告文で、七、五一四米を「南の肩」South Shoulder と呼ん

だが、これは妥当な表現かどうか判らない。又頂上部南端を「南峰」South Peakとして五百沢氏と同じ表現を用いたが、前述したことから考えればピークと言うべきものではないと思う。

更に写真④は真西からのもので、仰角はやや大きいナムンバンジャンからの写真⑥と全く同方向のものであり、その拡大写真と考えていただければよい。敢て之を拡大し、又今まで累々と頂上に関し述べたのは、登頂の成否を説明する目的でもある。

写真②③④で、渡部、ハクパのパーティーが十月十九日午後一時十五分、私達の視界から消えたのはB点である。それから望遠鏡でもとらえ得なかった、無風快晴の空白の一時四十五分後、再びB点に元気な二人を見たことは、本書の四次報告にある通りである。B点よりAに至る地形は⑥に見る如く平坦ではない、が、問題ない斜面であり且高度差も極めて小さい。又、夕刻常に強い西風で雪煙を吹き上げており一部露岩していることから、ラッセルなどの難渋も強いられることなく、技術的に困難はないと思われる。Aのどの部分が最高点かは判然としないが、一時四十五分でB点よりの往復は充分可能と考えられる。

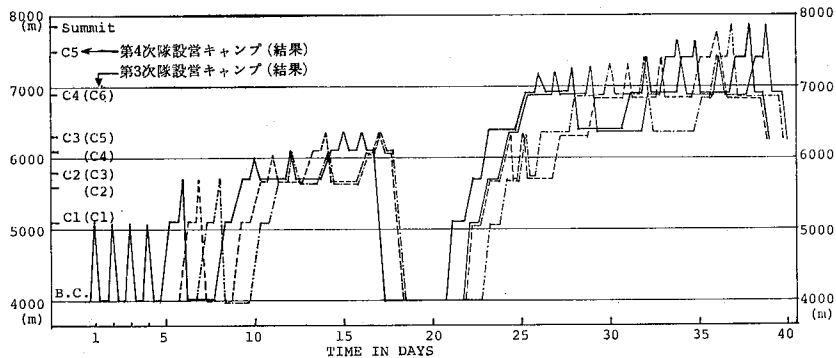
なお渡部パーティーが再度スカイライン上、夕日の逆光の中に現れ、私達の望遠鏡の視界に入ったとき、彼等が背負子はずして荷物を扱っていたことは見られたが、酸素ボンベなどの詳細は判断できるべくもなく、登頂前後で酸素を使用したかどうかは全く判らない。

## 高所順化及び障害

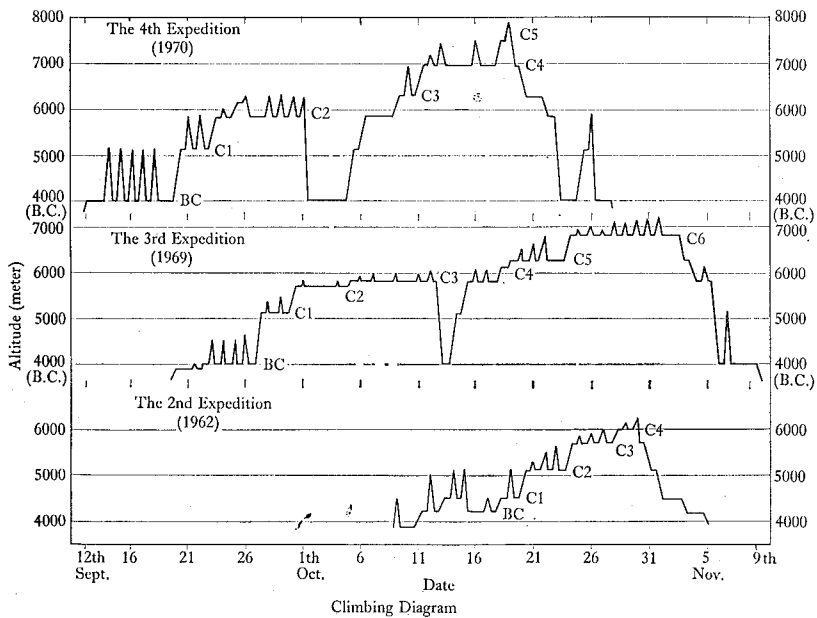
住吉仙也

別表の行動予定表、行動表を参照されたい。

高所障害については「日本山岳会一九七〇年エベレスト遠征隊報告書」の第二部、学術報告の七二頁と七五頁にその考えを記したので、本書では省略する。



㊸ 第4次隊の行動計画表

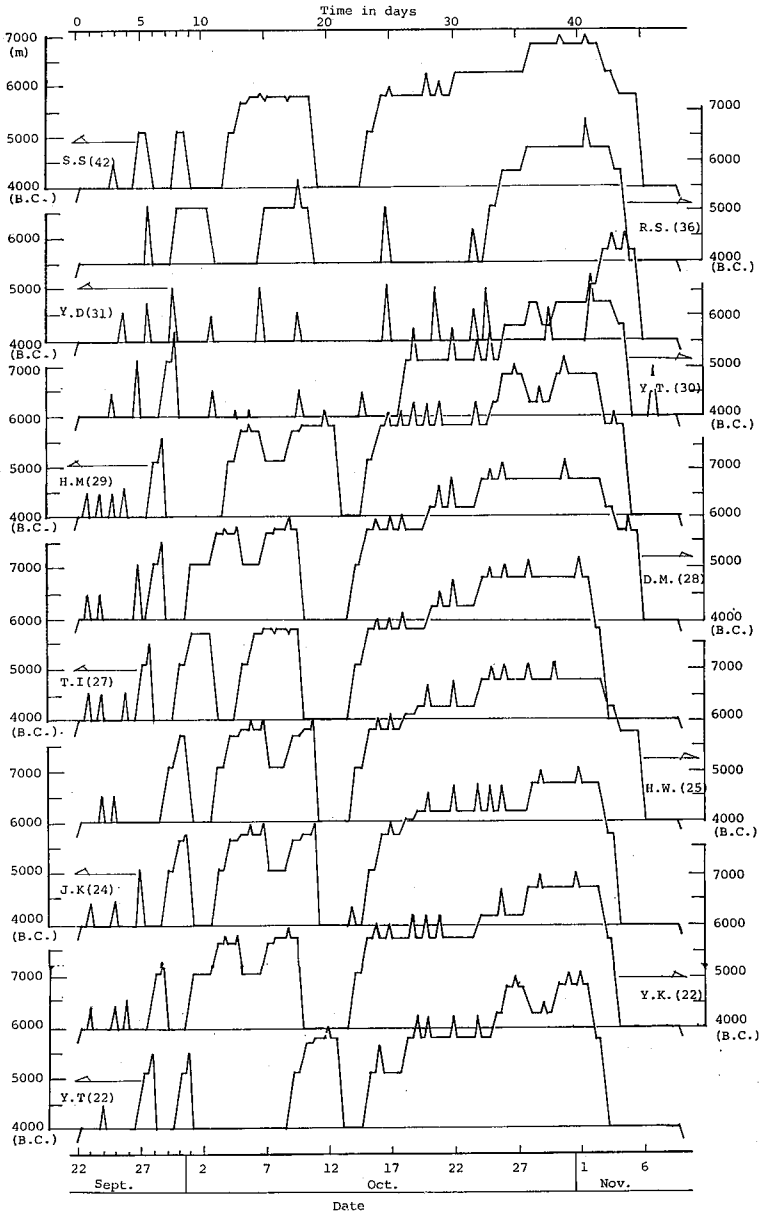


㊹ 第2, 3, 4次隊の行動表

検討と反省

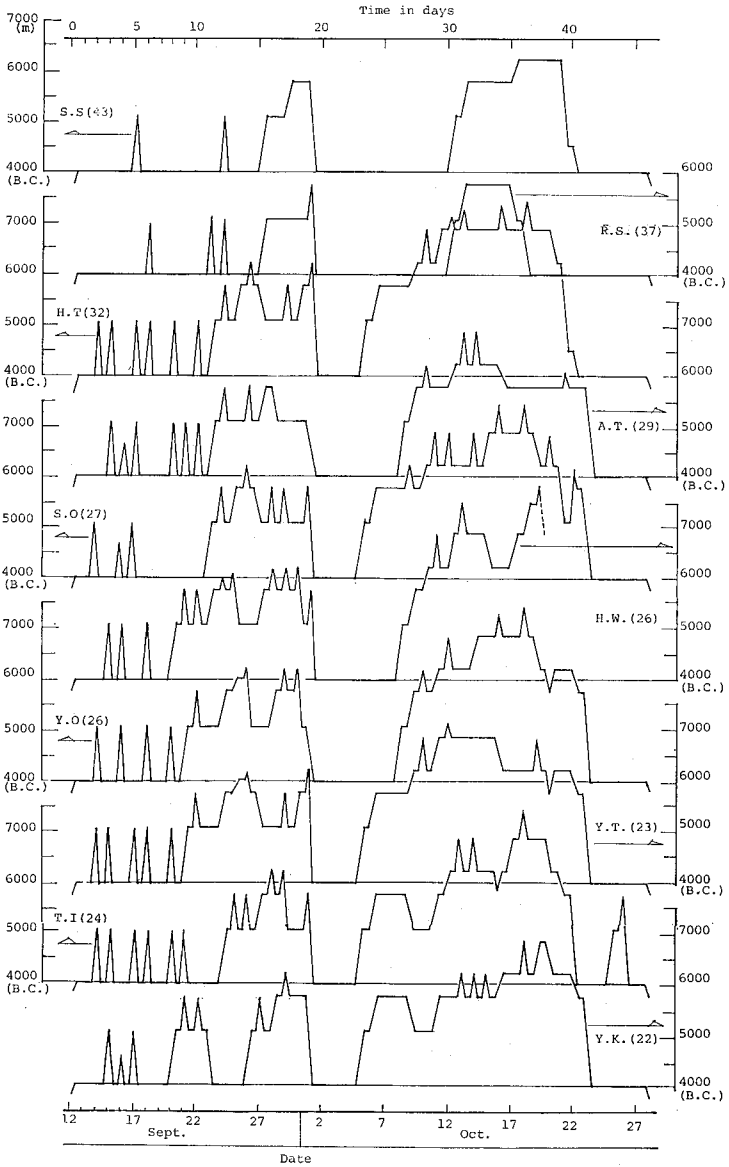
㊸第3次隊のメンバー行動表

(注) S.S (3回目) 以外は全員ヒマラヤ登山は1回目, R.S は女性



㊸ 第4次隊のメンバー行動表

(注) S.S はヒマラヤ登山5回目, R.S (女性), H.W, Y.T の3人はヒマラヤ登山2回目, 他のメンバーは1回目





この見解の上で、第三次、四次の指揮をとったが、重要なことは、行動予定表（荷上げも含む）を作製するに當て、全隊員が完全に理解することである。今までの高所での記録をもとに、各自が充分比較検討のうえ、合同で作製した。

このため現地では、自主的な行動を基本とし、特にBCよりC1、C2までの低所では、各人が自分の体質を自覚すべく、過重な負荷を自発的に負わせた。同時に荷物管理に対しても全員があたることが当然である。

リーダーとしては、第三者、経験者としての他覚的な所見にもとづいて、注意、忠告し、或は行動を規制することもあった。特に第四次に於ては、三次の失敗にかんがみ、隊員のみならずシェルパの高所順化にも配慮した。

酸素使用については、医療用の準備を除いて、七、〇〇〇米までは全く不要である。七、〇〇〇米以上では、地形や日数により、睡眠時使用（二分〇・五立）は効率的であると考えるが、一般的には必要ない。頂上七、八〇〇米附近、についての酸素効率、四次があのような結果になったため、何らデータはないが、私は必ずしも必要と考えない。

## ポ。ストモンsoon期の遠征

住吉仙也 三枝礼子 田中喜樹

第二次の偵察はともかく、第三次、四次の登頂を狙う遠征に、ポストモンsoonを選んだのは、下記登攀の項に述べる如く、七、八三五米のP二九に対し、特にプレモンsoonが良いとは考えなかったこともあるが、最大の理由は外国隊との競合であった。

一九六八年、登山禁止の解除前、イタリヤ及びオランダもP二九のアプリケーションを提出している事実を知った私達は、すでに二度も手掛けたP二九、を何としても登頂したい願いから、可及的早く出せる遠征として一九六九年秋を選ばざるを得なかった。これが一五六九年春からの新登山規則施行と同時に許可され、第三次隊の実現となり、

続いて一九七〇年秋の第四次隊につながった、この間、他大学OBらによる計画もあったが、御好意により、私達が優先して登攀の機会を得たのである。これに関する方々に改めて感謝する次第である。

気象状況については、別表を見て載けば、その概況は把握できると思う。

(一) キャラバン (主に八月から九月上旬) については、行動に何ら支障を来さない。モンソンに入ったばかりの六月頃の降雨続きとは異なり、俄雨や夕立、或は夜間の降雨は多いが、朝から正午頃までは比較的曇が多く、時には晴れており、多くのポーター共々出発が渋滞することは殆どない。

法意すべきことを列記すると①局所的な天候に違いがあること。これはキャラバンの先頭と後部で全く異なることもあり、又海拔高度による、上空との差も大きい。日射、快晴、青空、ガス、曇、雨、シャワー、などが不規則に入り交った感がある。②日中の日射強く、高温であるに反し、俄雨や夕立による気温低下が烈しいから、隊員は健康上湿度と気温差には特に留意すべきであり、又夜間就眠時は乾燥した肌着、寝具を確保すること。③ポーターの宿泊に対する注意。即ち、村落が少なかったり、小さかったりするブリガンダキのような地域では、フライ状の大自然で雨露をしのぐ用意が必要であり、これが朝の出発をスムーズにさせる。④荷物の濡れに対する策。梱包の注意と共に、ポーター各人にも雨具を貸与することは、キャラバン速度を速めることになる。この雨具の回収は賃金支払のとき容易である。⑤キャラバン具としてテントの溝掘り用の鍬かツルハシは極めて有効である。又ポーター用の難場でのフィックスロープも常備、先行させること。⑥帰路の梱包具を確保しておくこと。キャンバス袋などは往復とも使用できるが、カートン箱などは別に帰路用として準備確保しておく必要がある。⑦動、植物に関しては、①のような天候もあって、プレモンソンのキャラバンに比べ、変化に富み興味深い。草花、昆虫、魚、動物、ヒルなど、その代表的なものであろう。

(二) 登攀について、一口に表現すると、プレモンソンの気候は「春霞のかかった気だるい感じの候」である

が、ポストモンズーンは「日溜りが恋しい冷えびえとした秋冷の候」と言える。

プレモンズーンの温暖は高所登山には極めて有利であり、しかも比較的長期（三月下旬から五月下旬まで）に渡る登攀期間が得られるから、八、〇〇〇米以上や、難かしい壁面をルートとする長期間が必要な遠征には適している。しかし一方不定の降雪などで無風快晴の約束される日数は、モンズーンに入る前の数日に限られ、しかも、遅れると大降雪にたたかれるおそれがある。

ポストモンズーンでは、九月中は、雨がみぞれや雪に変わるがキャラバンの延長のような天候である。モンズーンが明ける前後の十月上旬には「秋一番」（春一番に対して）とも言うべき強風と豪雨を毎回二〜三度経験した。注意すべきは、この秋一番迄の新雪雪崩である。雨期の登山であるから当然であるが、日本の冬山と一脈似た雪崩で、ほぼ予測できる。恐しいのは、不定期に起こる氷河雪崩であるがこれは、秋一番のあと、モンズーン明けからしだいに数は減っていく。同時に、日は短くなり、気温は下り、小雪や積雪はあっても、てらてらと輝く氷面はふえてくる。しかし、短期ながら十月一杯は、比較的風は弱く、晴れの多い日は、約束され、登攀、登頂には、意欲的な行動がとれる。生理的に（荷物や資金面からも）登攀期間は五十日前後が適当と考えられるゆえ、八、〇〇〇米前後の山では、ポストモンズーンが有利と思われる。

P二九やヒマルチュリ東尾根の局地的な気象の特徴と考えられる点は、ブンゲン氷河やリダンダ氷河が低高度の大聖谷氷河で、日中日射による大量の上昇暖気流に対し、マナスルからの主稜線が南北に延びており、これに沿った南北の上空冷気流により作られる雲や雪が、常に特定の小範囲地域に見られた。特に東尾根P一附近が著しく、三回を通じ全く異った様相で、巨大な蔵王のモンスターの如く、風向不定の風が舞っており、三回ともルートは異って開かれた。南北に流れる上空の風のためか、第三次、四次とも秋一番のモンズーン明けと同時に、渡り鳥の大群が二群（二日）、約七、〇〇〇米の高度を南下するのを見た。実に壮観である。（写真⑨参照）

1961年 2次隊	
月 日	出発地 天 候
9・29	⑬ 雨, 停滞
30	⑭ 曇後雨
10・1	⑮ 曇後雨
2	⑯ 曇後雨
3	⑰ 晴
4	⑱ 快晴
5	⑲ 快晴
6	㉑ 快晴
7	㉒ 快晴, サマ着
8	㉓ 快晴(停滞)

### キャラバンルート(往路)

(裏表紙見返し地図参照)

- ① トリスリバザール
- ② サムリバンジャン
- ③ ボクテニ
- ④ カトンジェ
- ⑤ アジャンタール
- ⑥ ハセバザール
- ⑦ サレントール
- ⑧ チソタール
- ⑨ アルガトバザール(右岸)
- ⑩ ブラタン
- ⑪ ラウララ
- ⑫ カロンジェ
- ⑬ ドロート
- ⑭ キルサ
- ⑮ カシガオン
- ⑯ ケロンジェ
- ⑰ ルンジェ
- ⑱ フルチョコク
- ⑲ ドマン
- ⑳ ヤルー
- ㉑ ジャガート
- ㉒ スラリ
- ㉓ セティバス
- ㉔ ガテコーラ
- ㉕ パンシン
- ㉖ チュリンコーラ
- ㉗ ニヤック
- ㉘ デン
- ㉙ ビー
- ㉚ コッパ
- ㉛ ナムルー
- ㉜ リー
- ㉝ ショー
- ㉞ ロー
- ㉟ サマ ← ㊱ ローカルカ

アルキエ →  
 ↑ キェルパニ  
 帰 コルセ  
 路 ラウベシ  
 右 ハルケコーラ  
 岸 ダム(45頁参照)  
 ↑ マチャコーラ  
 コーラック  
 タトパニ



検討と反省

I キャラバン往路の天候

月 日	1961年 2次隊	1969年 3次隊	1970年 4次隊
	出発地 天 候	出発地 天 候	出発地 天 候
8・26		キャラバン出発地の番号は、	① 晴, 夕立, 前夜半雨
27		左記キャラバンルート地名の	② 曇時々晴, 夜半雨
28		番号を表す。	④ 小雨後晴, 夕立後小雨
29		⑱-⑳は⑱ドマンと㉔ャルー	⑥ 雨後晴(7時頃から)
30		の中間でキャンプしていたこ	⑧ 晴, 夕刻小雨
31		とを表す。	⑪ 晴
9・1		帰りのキャラバンは、各年と	⑬ 晴時々ガス, 夕小雨
2		も、「ほとんど晴」であった。	⑮ ガス時々晴間, 夕小雨
3			⑰ 晴夜半曇
4		① 小雨後晴	⑱-⑳ 晴夕方小雨
5		② 雨後晴	㉑ 晴, 夕立
6		④ 曇, 夕立, 明け方雨	㉒ 晴後曇
7		⑥ 曇後晴, 夜半雷雨	㉔ 曇時々晴, 夕方俄雨
8		⑨ 晴, 夜半小雨	㉖-㉗ 晴時々曇, 夕方俄雨
9		⑪ 晴後曇, 夕豪雨	㉙ 曇一時雨
10		⑬ 晴, 夕立	晴(停滞)
11		⑮ ガス時々晴, 夕立	㉛ 曇一時雨
12		⑰ ガス	㉝ 晴後雨(B C建設)
13		⑱ 小雨後晴後小雨	
14		㉑ 曇時々雨	
15		㉒ 小雨後晴	
16		㉔ 晴時々俄雨	
17		㉖ 曇, 夜半小雨	
18		㉙ 晴	
19		㉛ 小雨とガス	
20		雨とガス(停滞)	
21		雨とガス(偵察)	
22		㉝ 小雨後曇(B C建設)	
23	① 晴		
24	② 晴, 夕立		
25	④ 晴		
26	⑦ 晴		
27	⑨ 曇		
28	⑪-⑬ 曇後雨		

月 日	1961年	1969年 3 次 隊			1970年 4 次 隊		
	2 次 隊	B. C.	東尾根	標高7000m	B. C.	東尾根	標高7000m
10・17	曇後霽	晴後霧	快晴後霧		晴	快晴	快晴
18	曇後霽	快晴	快晴後霧		晴	快晴	快晴
19	快晴	晴後曇	霧後小雪		晴	快晴	快晴
20	快晴	晴後小雪	快晴後小雪		晴	快晴	快晴
21	快晴	晴後小雪	快晴後小雪		晴後霧	晴後雪	
22	快晴	晴後小雪	晴後小雪		雪後晴	晴	
23	快晴	雪	雪	雪	晴	晴	
24	快晴	晴	晴後雪	晴	晴		
25	晴	晴後小雪	晴後雪	晴	晴		
26	晴	晴後小雪	晴後雪後曇	晴	晴	晴後曇	
27	晴	曇	曇後雪	晴	晴後小雨		
28	晴	曇後小雪	曇時々小雪	晴	曇		
29	晴後曇		曇後雪	晴			
30	晴後曇		快晴後晴	晴			
31	曇後霽		晴	晴			
11・1	快晴後霽		晴	晴			
2	霽		晴時々霧	晴			
3	晴後曇		晴	晴			
4	晴後曇		晴時々雪	晴			
5	晴	晴	晴	晴			
6	晴	晴	快晴	晴			
7	晴	晴					

検討と反省

II 登攀活動中の天候

月 日	1961年	1969年 3 次 隊			1970年 4 次 隊		
	2 次 隊	B. C.	東尾根	標高 7000m	B. C.	東尾根	標高 7000m
9・13					雨		
14					曇後雨		
15					曇一時雨		
16					小雪		
17					雨時々曇		
18					雨		
19					小雨		
20					曇時雨		
21					晴時々小雨	晴時々小雪	
22		雨後曇			晴後雨	晴後小雪	
23		晴後雨後雪			曇後雨	晴後小雪	
24		晴後雪後曇			曇後雨	晴	
25		晴後霧			晴後曇	曇	
26		霧			晴	曇	
27		晴後曇			霧雨	晴後雪	
28		晴後雨	雨後曇		曇後雪	晴	
29		晴後曇	晴後小雪		曇後霰	晴	
30		晴後小雪	小雪		晴後雪	晴後雪	
10・1		晴後曇	小雪		晴後霰	晴後曇	
2		雪後曇	雪		晴		
3		曇後雪	晴後曇		晴時々曇		
4		晴後曇	曇後快晴		曇後霽		
5		晴	快晴後晴		晴後雪	霰後雪	
6		晴	快晴後晴		雪一時晴	雪地吹雪	
7		晴後曇	晴後曇		雪	雪	
8		曇時々雪	雪後霧		晴時々小雪	霧後雪	
9	快晴	晴後曇	晴後曇		晴	快晴	
10	晴	晴後雪	曇後雪		快晴	快晴	
11	晴	晴後小雪	曇後雪		晴	快晴	
12	晴後曇	晴後曇	晴後曇		晴後小雪	快晴	
13	晴	曇一時小雪	晴後雪		晴	快晴	快晴
14	晴後曇	曇後雪	雪		晴	快晴	快晴後雪
15	晴後曇	快晴	快晴後晴		晴時々雪	雪	小雪後晴
16	曇後雪	快晴	快晴後小雪		晴	晴(強風)	晴

その他気付いた点は、シエルパのラッセルは全く下手だが、教えれば馬力があるので有効に使えること。ワカンジキは使い方や場所により利用できること。豪雪に対し標識旗の予備を多く準備すること。私達は用意しなかったが、シエルパ共々ナダレ紐を使用したら安心できると思われるトラバースなどの場所があること。

## 山名について

住吉仙也

P二九（ピーク二九）がインド測量局の記号であることは衆知の通りである。

これに対し、現地では何と呼んでいるか。カトマンズのネパール外務省ではマナスルⅡとも *Datura* ダクラともしているが、一般人は知らない。

第一次のマルシャンディ側では「ツラギ」(Thulagi, Thulang, Thulanagi) と呼んでいたがこれも一般的でない。ムシコーラやその合流点ツルベシより以北のトンチエ方面でのグルンやタマン、(更にボティア)の一部の部落での呼称でしかない。

第三、四次のブリガンダキ側では、ニヤックまでは全く見ることも尋ねることもできなかったが、ナムルー以北のチベット人(ボティア)はマナスルのカンブンゲンに対し、P二九を「カンシヨクパ」と呼んでいた。その意味は不明であるが、カンブンゲンを鳥の頭とし、カンシヨクパを鳥の翼と言うものもあれば、カンシヨクパは白い翼だと言うものもいた。言われて見れば、長大な東尾根が翼のように見えてくる。

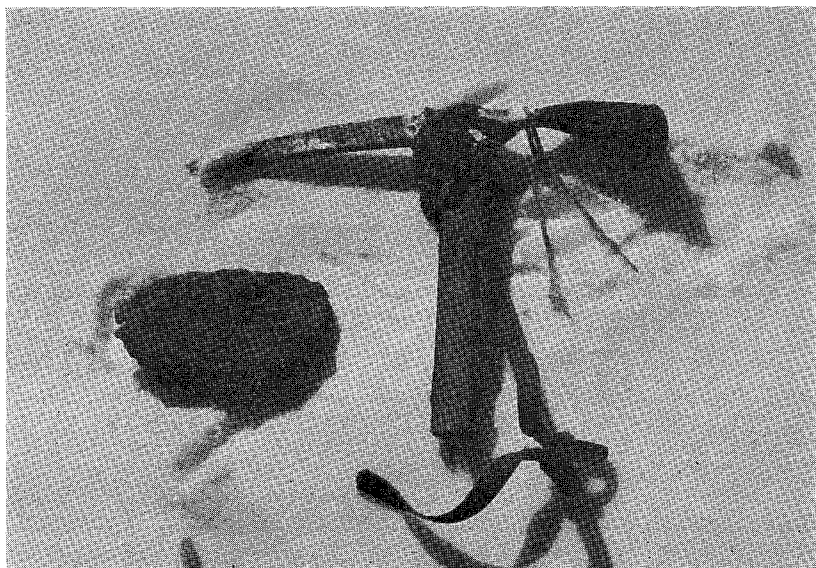
いづれにしろ、あまりに懐深く、山容を見られることのないP二九であるから、名前の必要もないのである。私達には、この山の名はP二九、ピーク二九と言う名で残しておきたい。(一九七三年記)



追  
悼



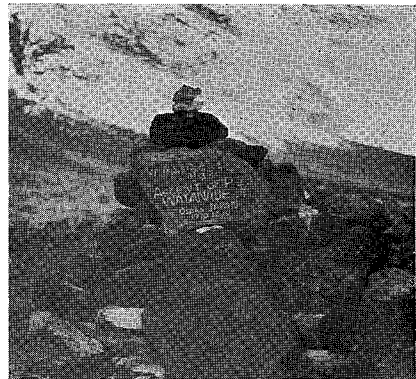
④⑩ ベースキャンプより登攀ルートを観察する渡部洋隊員



④⑪ 渡部隊員の手には結ばれていた折れたピッケルと小石



⑫ ハクパ・ツェリン  
(C4にて)



⑬ 両名のケルン (ブンゲン氷河右岸のベースキャンプ附近)

# 故渡部 洋君の略歴・山行歴

本籍 大阪市西区九条南二丁目二十八番地十五  
 住所 豊中市岡上ノ町三丁目四番九号  
 出生 昭和十八年十一月十二日

昭和三十三年

四月 大阪大学入学、山岳部入部  
 五月 大峰山縦走  
 七月 夏山合宿 立山東面、その後立山―槍ヶ岳―燕岳縦走  
 十月 南アルプス北部縦走  
 十一月 双六岳―烏帽子岳縦走  
 十二月 冬山合宿 白馬岳天狗原周辺 大山

昭和三十九年

二月 春山合宿 三俣蓮華岳周辺  
 三月 猫又山―毛勝山  
 五月 鹿島槍ヶ岳―白馬岳縦走  
 六月 夏山合宿 立山東面、その後黒部川口元のタル沢遡行、西穂高岳まで縦走  
 七月 八月 劔岳北方稜線偵察

昭和四十年 三 四月

十月 劔岳北方稜線偵察  
 十一月 立山中央山稜偵察  
 十二月 富士山  
 奥大目岳（ポラー）  
 劔岳北方稜線（ポラー）

昭和四十一年

四月 十月  
 五月 七月  
 八月 十一月  
 九月 十二月

西穂高岳―槍ヶ岳縦走  
 夏山合宿 劔岳、その後立山を縦走  
 別山南尾根  
 北鎌尾根偵察  
 針ノ木岳―鹿島槍ヶ岳縦走  
 山岳部チーフリーダーとなる。  
 双六岳―薬師岳縦走  
 鹿島槍ヶ岳―東谷―ガンドウ尾根

昭和四十二年

八月 八月  
 九月 八月  
 十月 十一月  
 十一月 十二月

夏山合宿 劔岳、その後立山―東沢―赤牛岳―烏帽子岳縦走  
 黒部川上ノ廊、下降  
 海谷ト妙高山  
 黒部川上ノ廊下偵察  
 冬山合宿 白馬岳天狗原周辺  
 黒部川上ノ廊下偵察  
 黒部川上ノ廊下ゴムポート初下降  
 西穂高岳―奥穂高岳縦走  
 白馬岳突坂尾根

昭和四十三年  
 昭和四十四年

三月 三月  
 四月 三月  
 五月 三月  
 六月 三月  
 七月 三月  
 八月 三月  
 九月 三月  
 十月 三月  
 十一月 三月  
 十二月 三月

立山中央山稜―劔岳八ツ峰  
 大阪大学理学部卒業  
 第三次ピーク二九登山隊に参加  
 (装備担当)

昭和四十五年

十月十九日

第四次ピーク二九登山隊に参加  
 (装備担当)  
 ピーク二九登頂後滑落死亡  
 (享年二六才)

# 追悼文に代えて

住 吉 仙 也

渡部御両親様

このたびのこと、何とも御詫びの申し上げようもございません。

千言万句をのべましても、詮なきことながら、登攀隊長として、私の不肖の致すところ。たゞ御許しを乞うのみです。成功、不成功とか、私の責とかより、今はたゞ洋君の居ないことが、悲しいばかりです。

今回の遠征では、私にとりまして洋君は、最も頼れる唯一と云える隊員でした。且洋君自身もそれを知っておりました。昨秋の遠征、今春のエベレスト、今回の遠征と私は三期連続でヒマラヤに来ておりましたが、その間日本に帰った短日時の間、洋君と一番よく飲み、よくP 29のことを話し合ったものです。エベレストより帰国して、今回の登攀隊長を私が受諾するにつき、洋君が準備の中心であり、隊員であったことが、大きく左右しました。

一方、洋君の登頂意慾も旺盛でしたが、その言葉の隅々に「住吉のためにも登ってやろう」と云う気持が、イヤと云う程私には感じられました。事実、私の誕生日が十月二十二日ですが、洋君は「マカセテオイテ下サイ」とニヤリと笑いながら私に云っておりました。

今回初めより、とても好調でハリ切って居た洋君が、登頂者となるのは、当然予想もし、且当り前のことですので、それが、この様なとりかえしのつかない結果になってしまいました。残念でもありますが、とに角今は悲しいだ

けの気持です。

事故の詳細につきましては、遠征隊留守責任者の大工原氏が御知らせに参上することと存じます。私自身、早速にも御訪ねし、御報告し、御一緒に悲しみたい気持ですが、このような遠隔の地。文面のみで失礼いたします。

十月 十九日 事故

十月二十三日 ベース・キャンプにて茶毗

十月二十八日 帰途キャラバン出発

予定 十一月 八日 カトマンズ着

十一月 十五日頃、帰国(住吉及洋君)

帰国いたしますれば、早々に参上の上、改めて御報告、御詫び申し上げる所存でございます。以上を簡単、取急ぎの御詫びにいたします。

昭和四十五年十月二十四日

於 ベース・キャンプ

登攀隊長 住吉 仙也

## 渡部 洋君を想う

黒田 治朗

彼は終いに阪大の執念であるP29を征服したが、その感激を伝えずに逝ってしまった。一九六九年の第三次隊では私も彼と共に参加したが、ルート工作の後にやっとたどり着いた六九〇〇mの台地で、頂上直下の一枚岩の八〇〇mの急峻な氷の壁を仰ぎみ、お互いに思わず「いけるな。」と顔を見合せた。

その後の健闘も空しくピッケルの刃をたてぬ氷に阻まれ、あと五〇〇mを残して敗退した。しかし全隊員気を取り直して帰りのキャラバンの中でも翌一九七〇年の遠征の準備にとりかかった。三次隊の力を出来るだけ四次に結集せねばというのがその時の結論であったが、結局住吉さん以下三枝、渡部、田中の四人のメンバーだけしか参加出来なかった。四回目の阪大としては最後のチャンスで外国隊や他の日本の山岳会を退りぞけて獲得したパーミッションである。登頂の成功といえは五分五分の可能性で、中軸として働く渡部、田中の両君には何とかして登ってきてくれと祈る様な気持で送り出したのだった。

彼がベースキャンプよりくれた手紙にはこう書いてあった。「二五倍の望遠鏡で壁を見る。岩の上までいけば後は頂上まで簡単に行けるみたいだ。好天とよいシェルパ。そして去年の経験を生かして何とか成功へ引っぱっていきたい。」と二度目の隊員としての責任の重さと成功への明るい見通しを簡潔に述べていた。好天に恵まれ前年の経験を加えキャンプの建設も着々と進んだ様だった。七五〇〇mの最終キャンプからの彼とハクパツエリンとの登高はリズムカルでスピーディであったと聞いている。氷にステップを一步一步刻む毎に前年の敗北感が勝利の喜びへと変化していくのを感じたのではなかったろうか。銀色に輝くマナスルの双耳峰が眼前に大きく現われ、はるか西方のアンナ

プルナ山群の彼方からの夕日を浴びて頂上を躡りしめた時彼の髭面は涙でくしゃくしゃになったことだろう。

一九六三年薬師岳の大遭難の年に彼は阪大に入学し当然のようにすぐ山岳部に入部した。それ以来、彼の御母堂が「山岳部に入って以来勉強机の前に坐ったことがなかった。」とこぼしていた様に真に山の虜となつてしまった。春夏秋冬の合宿、個人山行、日曜のトレーニング、木曜の部会、その他の時間は次の山行計画を考へるといった最も熱心な部員の一人だった。そしてスキー帽を被ってエッセン当番している彼の姿が中華料理店のコックに似ているのとワタナベを掛けて、ワントンと皆から親しみを込めて呼ばれる様になった。ワントンは平素は無口で控目であるが自分の意見ははっきり持ち、一度言い出したら何でも引かないという信念の持ち主でもあった。しかし酒を飲み過ぎると普段の抑制が取れるためか少々荒れる面もあったが、割り箸を手に指揮者気取りでハイドンやベーターベンを演奏するさまは仲々どうして堂に入ったものだった。また勝負事賭事は好まず、山でも時折尺八を吹き、野鳥のさえずり声を聞き分けるという特技を持つロマンチストでもあった。三年後半より次期リーダーに内定し、今後の山行の方向性の問題で頭を悩ました様だった。その時彼は次の如く言っていたと思う。「一山毎の目標を持つだけじゃだめだ、皆やる気をなくしてしまう。大きな目標が必要で、それには我部が後立山から黒部へとの方向へ歩んできたが、その仕上げとして積雪期上の廊下の溯行等はどうだろうか。何年かかっても成し遂げようではないか。」彼は強力にこの計画を推し進めた。オニのワントンと下級生から怖れられたのもリーダーとしての責任感と山に対する真剣さのためであった。二年ごとにこの計画が後輩の手により完全トレースという形で終止符を打った時、「また新しい目標がいるなあ。」とあくまで後輩想いの所があった。この山気違いのワントンも卒業を控え就職を考えざるを得なかった。一度決りかけた話もあったが、その時P29遠征の話が持ち上り、自分から故意に試験を滑ったりした。遠征後、山へ放った情熱を仕事に注ぐ社会人ワントンの姿を見たかったのは私一人の願いではなかったらう。

彼はもういない。しかし彼の情熱を皆は忘れない。

阪大としては型破りのカラーを持ったこのワントンは青春の全エネルギーを賭けた大目標P29の麓、ペンゲンコーラのカルカの上で今安らかに眠っている。

(一九七三年記)



P 二 九 通 信 (一九七〇年)

渡 部 洋

(本文は、渡部洋君がP二九のキャンプより、日本へ送った手紙をまとめたものです。)

九月十八日 (B・C)

今朝、珍しく雲が切れて、P二九が姿を現わした。25倍の望遠鏡で眺めると、例の蛙岩が手にとるように見える。

去年はあの蛙岩の真下まで登ったのだ。

そこから上は60度ぐらいの傾斜をなす氷の壁でここが最難所である。ここさえ何とか登り切ったら、後は頂上まで問題はなさそうだ。

じっと見つめていると、新たなファイトが全身にみなぎってくる。

十月五日 (B・C)

われわれの登頂計画の前半は十月一日で無事終了し、十月二日から四日までシェルパも含め全員がB・Cで休養した。今日から後半の作業を開始、隊員とシェルパの半数がC・1へ上った。

ぼくはB・Cに残って今日も一日ゆっくり休養している。

前半の作業で(C・1、C・2、C・3)を設営、各キャンプにかなりの資材を荷上げした。後半の期間は約二十日間で、まずC・4を六九〇〇か七〇〇〇mに設ける。これは去年と同じ場所だが、問題はそこから上だ。C・4から上の方は45度ぐらい傾斜の雪または氷の壁で、作業は少々むづかしくなる。まず最後の壁(C・4——蛙岩)にフィックスロープを上から下まで張りめぐらす(このロープは延べ六〇〇——八〇〇m、あるいはそれ以上)。それができ上って初めてA・Cを設営する。A・Cからさらにロープまたは繩梯子を何本かかけて、そこでやっと頂上攻撃の準備が整うわけだ。

言葉にすればはなはだ簡単のようだが、これがなかなかの難作業。われわれの目的達成の成否はこの作業の結果にかかっていると見える。今のところ、気象条件はわりと良く、隊員の志

気は旺盛、シェルパも粒揃い、さらに去年に続く今年と、二年連続の登山でもあるので、何としても成功させたいものだ。

ぼくも体の調子が良いので、運が良ければ頂上に立つことも可能だ。もちろん他の隊員が頂上に登る場合でも、全力をつくしてそれを支援するつもりでいる。

未だモンスーンは完全に明けず、毎日午後になると、B・Cはきまつたように雨か雪で、気温も夜半にはマイナスになるようだが、そのわりに寒さは感じない。

今日で四日間のんびり休養したので、明日からいよいよ上へ登りはじめ、都合よく運べば十五日ごろA・Cに入れるかも知れない。

日本を出発してまだ二カ月と少々だのに、ずいぶん永い月日が経っているようにも思える。しかしホームシックというようなことはなく、すこぶる元気だ。ただ腹の減った時、うまい物を食いたいと思う。

日本から持って来た菓子のうち、チョコレートの半分を、カトマンズで子供にやったが、いま手もとにヨーカン二本、チョコレート少々、アメ少々、ハチミツ一瓶、それにチェイニングがある。ここでは、甘いものは貴重なので大切にとってある。

やんでいた雪がまたまた降り出した。それを寝袋の中にはいつて眺めているのはいい気持だ。近ごろ、黒い大きなテベットカラスが二羽（夫婦？）ここに住みついている。テントの上を飛ぶ時ヒュー、ヒューと羽音が聞こえる。その他にシェルパが

飼っているチンミたいな黒い犬が一匹、ニワトリが四羽いる。

もう十月に入ったので日本も朝夕は肌寒くなっているだろう。ヤンチとミンミ（註一家の飼猫の名）、その子供はどうしているか、だいぶ大きくなっているだろうか、ぼくのことを憶えているだろうか、ヤンチとミンミの夢をよくみる。あのあどけない瞳、目をつぶるとまぶたの裏に二匹の顔がはっきり浮かぶ、ヤンチを両手で持ち上げた時の重量感や、体温と軟かい毛の触感がぼくの掌になまなましく残っている。ヤンチがでんぐりがえりをして見せてくれるだろうか。一度顔を見たい。

ぼくは茶色のヒゲが、かなり伸びてきた。

十月六日（B・C）

今日は本当はC・Iへ上り、その後、勝負が決まるまでふたたびB・Cへは降りてこないはずだったのに、夜半にミゾレが雪に変わってテントに積り、その雪掻きを手伝うために夜中に起こされたほどで、雪崩の危険があるため出発を見合わせた。まあ一度上へ上ってしまったらもうのんびりする暇はないし、それに、昨日十人が上に登っているので慌てる必要はない。もう一日B・Cのうまい空気を吸ってのんびりさせてもらおうか。

昼前、うれしいことに、待ちに待ったポストラナーがカトマンズから、懐しい便りを届けてくれた。この時はほんとうにうれしかった。

F子から細長い航空便が二通と小包が一個（中に頼んでおいた書籍と長い長い手紙が入っていた）。家からの手紙一通、以上を受け取った。

手紙をむさぼるように読み、また読み返す。手紙を読むまでは、大阪を発ってから二カ月少々経っていると思いきや、こののだが、伊丹空港を出発したのは八月一日ではなく十四日だったのだ。十五日ほど読み違っていた。まったく曆にうとくなくなってしまっている。

しかし日の経つのは意外に早く、あと二十日ほどで勝負が決まるのだ。

ぼくはこの登山隊に参加するのは二度目だから何となく他の隊員より責任も義務も重いように感じているが、しかし「決して焦ってはならない、たとえ小さな事故でも起してはならない」と自分に言い聞かせている。

ぼくにできることは他に何も無い。しかし、こと登山に関するかぎり、山岳部入部以来現在まで真剣に取り組んできたし力も傾けてきた、お蔭で危険から身をかわす自信も身についたつもりだ。しかし、七〇〇mを超えるのは初めてだ。もちろん先人の経験などを書物によって勉強したが、地形、気象、その他の自然条件等々まったく未経験の境界に飛びこむのだから、思いがけぬ困難にぶつかるともあるだろう、進退の決断を迫られた時、焦って判断を誤ってはならない。自分の失敗は隊の失敗であることを忘れてはならない。

天気の良い時は頂上をみつめ、しみじみ思う、ただあの一点に誰かが立つために今まで、そして今もなお、どれほど大勢の人が努力をしていることか、それでもなおそれが可能かどうか判らないのだ。

何のためにこんなことをするのか？

誰にもうまく説明はできない。かりに登頂に成功したとしても何がどうなるというものでもない。われわれの他には誰もいないのだから、見ている人もなく、声援がとんでくるでもなく、褒賞によって報われるわけでもなく、ただの自己満足で終るのだ、まったく無償の行為とは今われわれがやっていることだろう。

ぼくのことを、借金してまで何でそんな馬鹿なことをするのかと、笑う人もあろう。しかしぼくは今でも、少しのためらいも、後悔じみたものも、まったく感じていない。ただ自分が選んだこの途を、限られたこの時間の一刻一刻を、精一ぱい、少しの取りこぼしもしないように努めるのみだと思えばかりだ。

十月七日(B・C)

登山の後半が始まり、C・1、C・2、C・3とつぎつぎ上へ登って行くはずであったのに、昨日から雪が降りやまず、今日もまた一日足止めをくってB・Cに停滞している。隊員の半数は一足先に上へ登っているが、今朝の無線交信によると、C・2も悪天とのことである。天候だけはどうしようもない、しかし作業は計画以上に進行しているので、焦らずゆっくり行うこと。

雪がしきりに降り続けている。

テントの外は白一色、スキーで思い切りとばしてみたい。

この雪が降り始める前、渡り鳥の群がこのあたりに降りて、しきりに鳴き騒ぎ、時ならぬ賑わいであったが、今はその渡り

鳥の群も雨の空へ飛び去って、後に例のチベットカラスが二羽残っているだけだ。

時々遠雷のような雪崩の音が聞える。

降る雪をぼんやり眺めていると、いろいろな思いが、つぎつぎ頭の中をよぎる。

ヤッチャンや加藤さんたちはどうしているだろう。ヤッチャンといえば、隊のサーダー・イラ・ツェリンがサングラスをかけているのを見ると、ぼくはいつでもヤッチャンのことを思い出す、顔はあまり似ていないのにどうしてだろう。

もう大学紛争もおさまり、神谷先生もアメリカから帰ってこられたことだし、平穩すぎて退屈しているのところがうだろうか。

大岩さんや須崎らはその後どうしているか、みんなの顔が目に見えて懐しい。

誰にしてもそうそう変ったことなんかありようないと思うが、おのおの自分の進む方向を決めなければならぬ時点にさしかかっているのです、いろいろ迷いもし、悩みもあることだろう。とにかくおのおの独自の道を切り拓き、一かどの人間になつてゐる姿を想像してみるのには楽しい。

気にかかっている仔猫の名前を何と決めよう。一匹はベルマン(チベット語でネコという言葉)にしよう。ベルマン!ベルマン!呼び易くていい。そして残りの一匹はネパール語のディディはどうだろう。これは「ねえさん」「おばさん」という意味で、年上の女に呼びかける言葉だ(年下の女にはバイニ)。

ネパールでは「ちょっとおばさん」とか「ちょっとねえさん」とかいう具合に呼びかけたり、話しかけたりする場合必ず「ディディ」という。

ヒマラヤ登山隊は、隔離された人間の小集団だから(わずか三カ月ほどだが)、いやでも毎日顔を突き合わせ、同じ物を食い、不便な環境で行動をとにもする。だからたまには気まずい思いをすることもあり、ムツとすることだってある。しかし例のエベレスト国際登山隊のような異国人たちの寄せ集まりではなく、同じ阪大山岳部の連中だ。いわば同じ釜のめしで育ち、苦楽を分か合った仲間だ、それに何といつても大きな一つの目的で詰ばれた同志である。少々気まずいことがあつても、しこりを残すようなことはない。

しかしこういう生活をしていると、各人の個性がはっきり出て、長所・短所がよくわかる。ということは自分に、自分自身に目を向けた場合、自分の性格もよくわかるような気がする。

ぼくはのんきそうでありながら、短気なところもずいぶんあるようだ。さらにもう一つ気付いたことは、どうも人に命令されて行動することが嫌いなようだ。ことにささいなことにまで、くどくどしく指図されると反発を覚える。自分ではそんなに気むづかしい人間だとは思っていないが、こうした集団生活の中にあつては、とくに自戒せねばならないと思う。

人間にはいろいろな面がある。ある一面だけを見て、この人はこうだと決めてしまつてはならない。日ごろ尊敬している人でも、時にうとましさを感じることもあり、ふだん虫の好かん

人だと思っけていても、時にほほえましい一面を見出したりもする。こうした人間の多面性が、お互いのからみ合いをなめらかにしていると思う。

人生を大きく見渡したら、一幕の舞台劇と見なすことができる。愁嘆場あり、ハラハラさせる場面あり、幸福に陶醉することもあり、死にたいと悲しむこともある。それは演技で、われわれは演技者だ、泣くも、笑うも、怒りも、悲しみも、その場、その場の演技と考え、そのことのために身心をすりへらすなどは愚かなことである。

さっき昼食を終って、今は二時少し前、相変わらず雪は降り続いている。まったくその勢いは衰えそうもない。この調子では明日もまた動けないかも知れない。それでも焦らないことにしよう。降りやまぬ雪はないし、悪天のつぎは必ず好天なのだ。

午後七時、夕食を終わりB・Cに残っている隊員五人で雑談してくつろいでいる。今日は沢山手紙を書いたし、猫の名前も決めだし、明日はできればC・1入りをしたい。

今日でもう六日間何もせず、B・Cでボサーとしていたので休養は十分とれた。これ以上いると身体が鈍ってしまいそうだ。

夕方の五時ごろから、間断なく降っていた雪もやみ、あたりは静まった。この辺で大体三〇cmの積雪である。明日は好天であっても雪崩の危険は依然として去らず、動けるかどうかむずかしい。それにこの雪では脚が深くもぐって歩きにくいことだらう。

十月八日朝 (B・C)

今朝は快晴、どちらを向いても白一色の銀世界である。朝食も終り、これからいよいよ上へ登る準備にかかる。上へ登れば今月の二十五日か月末まで、ここB・Cにさよならだ。そしてまたここへ降りてきた時には、日本から懐しい便りが届いていることだろう。

登頂に成功したらその第一報を持ったメイランナーがカットマンズへ走ることになる。もし失敗の場合は、多分メイランナーを出さないだろう。

今朝九時過ぎベースキャンプを出発して、午後四時ごろやっとC・1に着いた。

今六時三十分、ローソクの明りでこれを書いている。他の隊員が今夕食の仕度をしているところだ。

B・C—C・1間は大雪で、膝から股までもぐり、今日は少々ヘコタれた。案じていた雪崩は幸いになかった。もう出つくしてしまったのかも知れない。明日はC・2へ向う予定である、今日C・1へ上った隊員は三名、三名とも明日上へ登る。

昨日からC・1には誰もいなかった。われわれが到着した時、テントはほとんど雪に埋まり、三人で掘り出すのに一時間ほどかかった。雪の上に張るテントは丈夫だから、埋まっても潰れるようなことはない。台風のような強い風にも堪えられる。そして二重になっているので、中で石油コンロを焚くと、とても温い。ゴー、ゴー燃える音を聞いているのは何とも心地よく、身も心も安らぐのを覚える。

一日の作業を終えて、こうして仲間と茶を飲んで雑談を交えている時が最高に楽しい。誰もが満ち足りた顔である。ぼくはこの雰囲気がたまらなく好きだ。この一時の欲びのために山登りをするのもいえそうだ。

テントの大きさは二m×三mぐらいいだから畳三帖ほどの広さである。この中で五―六人の男が生活するので、炊事をする時は炊事道具や食器類で一ぱいになり、寝る時はそれらを片寄せて寝袋で一ぱいとなる。しかしぼくはこの雑然としたテントの中、汗と食物と石油の匂いのもった、この雰囲気が好きだ。テントの外は空気が凍てつくような寒さであっても、またどんなに強い風が吹き荒んでいても、たった一枚の布を境にしてその内側は、暖気と温和の満ちた別天地なのである。

今八時四十五分。

テントの中を片付けて、エアマットを敷いてその上に寝袋（軟かい水鳥の胸毛が一ぱい詰っている）を敷いて、その中以下半身を埋めてこれを書いていく。このように装備はかなり上質のものを用いているので、気温のわりに寒さは感じない、去年経験した最低気温はマイナス五度ぐらいいであった。

ぼくはかつて、メルヴィルの小説「白鯨」を読み、またその映画も見た。グレゴリー・ペックの扮する捕鯨船長エイハブが、怪物の白鯨モービーディックに片脚を奪われても義足をはめてなお白鯨を追う。結局彼はモービーディックと運命をともにするのであるが、その鯛のような意志と飽くなき執念に感動した。ぼくもいつの日か、あのエイハブ船長が白鯨の急所にモ

リを打ち込んだように、P二九の頂上にピックルを打ち込みたいと執念を燃やしてきた。今そのチャンスがきたのである。体の中で闘魂が激しく燃え上がるのを感じる。

寝るまであと一時間ほどあるので、もう少し書き続けることにしよう。何やらかやら、思いつくまま書きなぐったので、本当のところ書くことはもう何も残っていないのだが、こうして二年も続けてヒマラヤに來たりするから、世間ではぼくのことを、山に憑かれた男とか、山男とか、そんなふうにするだろう、ぼくは以前からそんな風に思われたり、呼ばれることがとてもいやだった。自分では、山登りは単なる趣味。他にすることがないので、暇がある時は山へ登る、そのぐらいいにしか思っていないのだ。ただし、P二九に関しては、「おのれこんちくしょう！ 今度こそは何としても登頂して見せるぞ」と、闘志を燃やしている。

ともあれ、泣いても笑っても、あと十日余りだ。一千万円をかけたドラマの最後の舞台の幕は開けられようとして、ベルが鳴り響いている。

僕は今、舞台の袖で、出を待っている。

（これでノートの余白もなくなり、もう時間もなくなった）

十月八日夜、C・1にて

記  
録  
と  
雑  
感

## 荷物の梱包、輸送、通関(第三次) (一九六九年)

住 吉 仙 也  
石 浜 高 明

### 一、 梱 包

荷物の梱包に関して、特別な考慮は払ったわけではなく、ダンボール(二重張り)の箱に防水用塗料をぬり、さらに、それら二〜三箱をキャンバスバッグに入れ、一個のキャンバスバッグが30kgになるようにした。船に積み込む時の荷姿は、キャンバスバッグ一五個位を一つのクレイター(内が見える木箱)に入れ輸送した。

梱包についての反省

- (1) ダンボールの箱の封印にスリオンテープを使用したか、一度箱を開くと再封印が不完全であるため箱のいたみが激しく、特に、今遠征はキャラバンがモンsoon中であったため吸湿して、ベースキャンブに着くまでに崩壊してしまつたものもあつた。
- (2) マナスル時代に使用されたタイプのワイヤバンドボックスも使用したがワイヤがすぐに切れてしまつた。

- (3) クレイターはかなり大きな荷姿になるため、輸送方法が飛行機によらねばならなくなつた時に不便を生ずる。従つて、キャンバスバッグ四〜五個を一単位とした荷姿の方が良いと思われる。但し、紛失の可能性があるので、日本からインドへの輸送は、貴重品扱いにすべきであろう。又、クレイターは中が見えるので、盗難の恐れもあるので内が見えないように工夫すべきであろう。

### 二、 輸 送

今回、われわれがとつた輸送経路は、日本から海路カルカタへ、カルカタよりトラックにてカトマンズである。

日本—カルカタ

日本よりカルカタへの輸送に関して、ベンガル運賃同盟と称するものがあり、荷物が学術的なものであれば運賃を半額にしてもらえる。下記の所へ英文申請書を提出し許可を受ける必要がある。



BAY OF BENGAL/JAPAN/BAY OF BENGAL  
CONFERENCE

東京都千代田区丸の内三—二

ニュー東京ビル六一六

Tel. 213-3601/5

なお申請書には

。利用する船名

。出港名

。出港口（大体で良い）

。入港口（大体で良い）

。入港名

を記載する必要がある。

なお復路に関しては下記の所へ同様な申請をすれば良い。

The Branch Secretaries,

Bay of Bengal/Japan/Bay of Bengal Conference,

Royal Exchange, 6, Netaji Subhas Road, Calcutta-1.

Tel. 22-6201

但し、これは、カルカッタ経由でネパール入りする場合で、

ボンベイ経由の場合は別の Branch へ申請する。

カルカッターカルマーズ

陸送に関しては、先ず、信頼しうる運送業者が必要である。

る。われわれが利用した運送業者は、

Doos Transport

134-1, Mahatma Gandhi Road, Calcutta-7

Tel. 34-8447

である。これはカトマンズにも支店を持つかなり大きな業者である。

トラックのチャーター料は一台当り 1300~1500 IRs であり、モンsoon中でも一週間位でカトマンズに着く。なお、隊員が添乗した方がより確実である。

### 三、通関手続

従来、カルカッタでの通関にかかりの日数を要しかつその手続が煩雑であったが、ヒマラヤ登山禁止前とは情勢が変化し、その手続はかなり簡略化されている。その一番大きな相違点は、従来、インド政府が介入していたが現在では全くインド政府が関係なくなっていることである。

先ず、有能な通関業者が通関を迅速にするための不可欠の条件であるが今回われわれが利用した業者は十分信頼しうると思われ。それは

Express Clearing Agency

Mr. Ghosh

14/2 Old China Bazar Street,

Calcutta-1, India

Tel. 22-4251

で、日本領事館も推薦している。

通関に必要な書類は、

。 Invoice

一〇号

。 Packing List 一〇部

。 Bill of Lading Original—一部

Copy—一部

。 Import License

以下、これらの書類について説明する。

。 Invoice

型式はきまっていないが、記載すべき事項は

- (1) 荷送人
- (2) 荷受人
- (3) 利用する船
- (4) 出港日及び出港名
- (5) 入港日及び入港名
- (6) 輸送ルート
- (7) 木箱にうってあるマーク
- (8) 荷物の数
- (9) 荷物の体積
- (10) 重量
- (11) 荷物の内容

。 Packing List ② 値段 (U.S.\$)

。 Packing List

これは従来型式と全く同様でよい。但し、コーヒーは持ち出し禁止品目になっているので注意が必要である。

。 Bill of Lading

運賃を支払えば船会社が発行するものである。

。 Import License

ネパール政府が発行するもので下記の事項を記載し、手数料と共にネパール外務省へ申請する。

即ち

- 。 荷物の原産地
- 。 荷物の全値段 (U.S.\$)
- 。 利用する船名
- 。 出港日及び出港名
- 。 入港日及び入港名
- 。 輸送経路
- 。 ネパール到着日

手数料は

荷物の値段 (NRs)	一	五〇〇〇	二〇	
	五〇〇	一	一〇〇〇〇	三〇
	一〇〇〇	一	二五〇〇〇	五五
	二五〇〇	一	五〇〇〇〇	八〇
	五〇〇〇	一	一〇〇〇〇〇	一三〇

となっている。

その他、通関業者に任せるとやってくれることであるが酒類は別に量、値段を申請する必要がある。

通関をスムーズにするためカルカッタ日本総領事館より紹介状を受ける。即ち

通関業者 (申請書) ↓ 日本総領事館 (申請書) ↓ 在カルカッタネパール領事館 (紹介状) ↓ カルカッタ税関ネパール section という経路で通関がスムーズになるようにとり計らうてくれる。

カルカッタでの通関に必要な費用は 700~800 IRs である。

印ネ国境での通関は全く問題がなく書類のみで通関出来る。

なお、この際ネパール内に消費するものを申請する必要がある。それに対して、約一〇%の税がかかる。その他の荷物に対してはその全金額に対して Deposit Money を支払う必要がある。その金額の査定方法は明らかでないが約一〇%程度である。

帰路の通関は Import License の代りに Export License を受取れば他の手続は全く同様である。

四、その他の諸手続

(1) トランシーバー・ネパール政府はトランシーバーの使用に關してはかなり神経質であるので使用許可を受ける必要がある。

。使用台数。周波数。到達距離。出力。型。名称を記載し申請すればよい。

(2) 10mhz シネカメラ 特別に記載すべき事項はない。

以上すべての手続が完了すればネパール外務省より通行証が交付される。(一九七一年記)

「マナスル三山を中心とした登山年表」

- 一九五〇年 マナスル偵察(英、ティルマン)
- 一九五〇年 アンナプルナ(八〇七八m) 登頂(フランス隊)  
(最初の八〇〇〇m 峯登頂)
- 一九五二年 マナスル踏査隊(日本隊)
- 一九五三年 エベレスト(八八四八m) 登頂(イギリス隊)
- マナスル第一次登山隊(日本隊)
- 一九五四年 マナスル第二次登山隊(日本隊)
- 一九五六年 マナスル登頂(八二二五m) (日本隊)
- 一九五八年 ヒマルチュリ偵察(日本隊)
- 一九五九年 ヒマルチュリ登山隊(日本隊)
- 一九六〇年 ヒマルチュリ登頂(七八六四m) (日本隊)

- 一九六一年 P二九第一次隊(西面)
- 一九六三年 P二九第二次隊(東面)
- 一九六四年 マナスル北峯(七一五四m) 登頂(オランダ隊)
- 一九六五、六八年 ヒマラヤ登山禁止令
- 一九六九年 P二九第三次隊(東面)
- 一九七〇年 P二九第四次隊(七八三五m) 登頂
- パウダビーク(六六七二m) 登頂(日本隊)、ヒマルチュリ北東峰(六五〇〇m) 登頂(オランダ隊)
- エベレスト第六登(日本隊)
- 一九七一年 マナスル第二登(西壁ルート、日本隊)
- マナスル試登(南東ルート、韓国隊)
- パウダビーク第二登(日本隊)
- 一九七二年 マナスル第三登(南西壁、オーストリア隊)
- マナスル試登(南東ルート、韓国隊)
- 一九七三年 マナスル第四登(東壁ルート、西独隊)
- マナスル試登(スペイン隊)
- マナスル偵察(日本隊)
- 一九七四年 P二九西壁試登(日本隊)
- マナスル第五登(日本女子隊)、韓国隊試登
- ヒマルチュリ試登(イタリア隊) (日本隊、東稜)
- 一九七五年 P二九試登(東面、日本隊)
- ヒマルチュリ試登(日本隊)
- パウダビーク試登(日本隊)
- マナスル第六登(東面、スペイン隊) (田井英男)

# シエルパの死亡事故(第四次)(一九七〇年)

住 吉 仙 也

ここにP二十九で起きた死亡事故に際して取った処置について述べる。以下時間的経過に従って記す。もちろん、この方法が最上のもではないであろう。今後の遠征隊の一助になれば幸いである。

## (1) 保険の契約

a―出発前、大阪において安田火災海上と契約を結び、シエルパについて一人最高一〇〇万円、隊員三〇〇万円とした。

b―カトマンズにおいてヒマラヤ協会でシエルパ正式雇用後、全シエルパ(ローカル・シエルパも含む)注1)の氏名、年令、出生地を大阪留守本部に連絡して契約手続き完了。

注1)ローカル・シエルパはヒマラヤ協会を通じての雇用ではない。

## (2) 事故発生〔10月19日〕現場での処置

a―登山を断念し、遺体の撤収に全力をかける。〔10月20日(注2)〕

b―遺体のBCへの收容と葬儀および茶毗〔10月23日〕。費用は儀式お供え、ラマ僧謝礼、薪代、石塔などを含め九〇〇<sup>千</sup>。

(注3)

c―ポストラナー発送。〔10月25日(注4)〕

①公式事故報告書…登攀隊長より在ネ吉良大使、篠田阪大山岳会々長、水野隊長および留守本部責任者宛同文四通

②死亡確認書…事故死亡者二名(渡部洋、ハクパ・ツェリン)の英文および和文各二通↓在ネ日本大使館、留守本部、ネパール外務省(英文のみ)

③リエゾン・オフィサーのネパール外務省宛の報告書(ネパール語)

④登攀隊長私信…在ネ日本大使館員松沢氏、渡部遺族、隊員各家族、留守責任者大工原(注5)、ハクパ・ツェリン遺族(英文で⑤に同封)

⑤サーダー、イラー・ツェリン〔死亡したシエルパの実兄〕よりハクパ・ツェリンの遺族へ(ネパール語? 注6)

⑥各隊員の私信

③ 事故発生後の保険金の請求手続き、送金など  
これについては、大学本部および遠征隊留守本部を通じて種

々便法（請求書の形式、受領サインの伝送、手続きに要する日数の短縮など）を依頼し、現地への送金をカトマンズでなるべく早く受け取れるように、日本大使館宛にお願いした。当時カトマンズにあった水野隊長の尽力によるものである。

(4) カトマンズ帰着〔11月10日〕後の葬儀〔11日〕とシエルパの解雇〔13日〕

葬儀は日本大使館のご厚意により、大使館にてスワヤンプナートの僧侶により行なわれた。隊としてはお寺に約二五〇<sup>リビ</sup>寄進。

遭難現地での葬儀・茶毗や大使館主催のカトマンズでの行事は、日本と同じ仏式であることと相まって、シエルパに対する感情的な面で大変有意義であった。

そのあと、帰途荷物の梱包などを完了し、シエルパへの支払い・解雇に当たっては、死亡者ハクパ・ツェリンに対し、契約日より死亡日までの日当支払いと、すでに支給済みの装備を隊として渡した。ほかに隊員個人からの物品給与があった。

(5) 遺族への支払〔11月25日〕

支払額はヒマラヤ協会規約どおり三万<sup>リビ</sup>。

①登山隊々長水野から、受取人ハクパ・ツェリンの妻へ、②日本大使館、③外務省登山局G・B・シャー氏、④ヒマラヤ協会、⑤リエゾン・オフィサー立会いのもとに、外務省内の銀行で直接手渡す。このとき遺児の年金として五〇%が貯金され、その残りが現金で渡された。

また、保険金請求書（保険会社から送られてきたもの）と保

険金受領書に受取人署名（左右捺印）し、これら書類を帰国後保険会社に提出した。なお、別に立会人署名、受取人署名のある受領書を④、⑤、⑥、が一部ずつ保管している。

以上、その概略を述べたが、実際問題としても最もわずらわしい③項に関しては、私たちにとって幸いにも水野隊長が事故発生時から事務完了まで、カトマンズにおられた。もし、このような人間がいなかったらどうすればよいのであろうか？ 事実、事故後ポストラナーをBCから出すとき、水野隊長が日本か、カトマンズか不明であったため、隊員を一〜二名ポストラナーに当てようかと考えた。

また保険金の受取人を遠征隊自体にし得た場合、そのほうが便利な点もあるような気がする。そのほかにももっと良い方法、対策があると思うが、ここには一方法として私たちのとつたものを記した。

注2 入れわかれの場合、初登確認のためにも、さらに第二登を行ないたいと思ひ、前例もあるので、遺体をクレバスに埋葬することを考えたがサーダー（死亡シエルパの実兄）のたつての希望と、現地人の死体を山に置くことに対する宗教上の強い忌否により、非常な危険を伴うにもかかわらず、七〇〇<sup>リビ</sup>からBCへの収容を決心しなければならなかった。この点については、一般に登攀過程上の場所と時点（登頂前、登頂後など）と、遺体収容の危険度とを考慮して、クレバス埋葬かBC収容かを決定すべきであると考えてる。

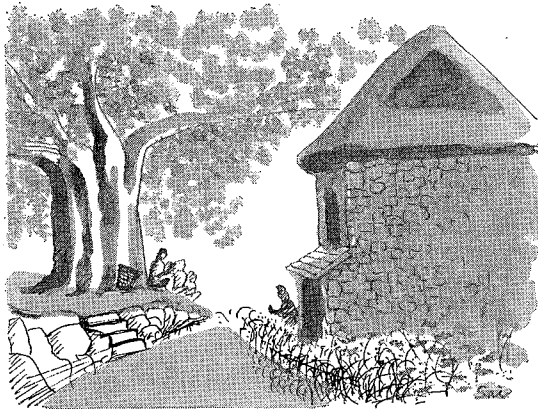
注3 3ラマ僧はサマ部落のヘッドラマと供のラマ僧三名の計四名。22日にはすでにBCに待機していたが、茶毗用

の薪運び上げなどの準備も含め、BC隊員三名がすべて仕切った。

注4 死亡事故の通信を、ニュースで流される以前に渡部遺族へ知らせることを期待して、リエゾン・オフィサーの了解のもとに、ポストラナナーにカトマンズ着後、まず日本大使館、できるだけ時間を隔てて、ネパール外務省に行くよう指示した。事実ランナーはその通りに動いたが、ナムルー（チェックポスト）のポリスがジャガート（チェックポスト）からの、インド人による無線通信を利用して警察暗号電報でカトマンズ警察に打電していた。このためカトマンズでは不正確な短いニュースとして外務省から発表された。

注5 留守本部に今後の隊の予定（カトマンズ着は11月8日など）、現在の資金などを報告する。

注6 11月8日、サードに命じ、遺族のうち妻は11月8日までカトマンズに来ること、その費用はあとで隊から支払うことを連絡させる。（一九七二年記）



## ツラギ氷河の流動

篠田軍治 広瀬貞雄

### ツラギ氷河の概要

ツラギ氷河はマナスル山峰の中でも代表的な大きな氷河で西面を六七〇〇峰で南から北へ大きくUターンして、ゆるやかに流れ、アイスフォールの末端から氷河湖で終るまでも長さ約八km、巾約一km、落差は四〇〇m程度である。この氷河にはアイスフォールから楔状に新しい氷河が入り込んでおり、その先端は氷河末端から四kmあまりの所まで達している。古い氷河は起伏も大きく土をかぶって真黒に汚れており、夏期には中に幾条かの川が流れているが、新しい氷河はあまり汚れていなくて、起伏も小さい。これらの差は第一図から容易に見分けることができる。

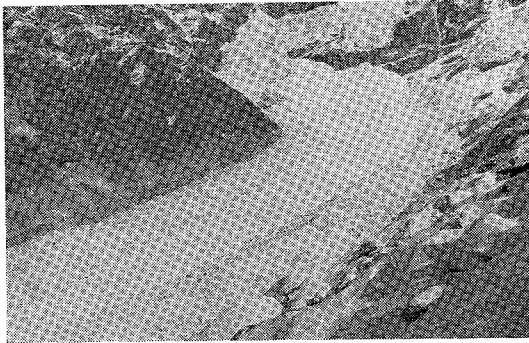
阪大山岳会がツラギ氷河に入ったのは一九六一年プレモンズーンと一九六三年ポストモンズーンで、その間一年半を経過している。新しい氷河の先端を二回にわたって撮影して、その動きを測定したので、ここにはその結果を中心に報告したい。アイスフォールの氷の動きとその速度となだれとの関連については既に篠田が「P二九西面」に記載し、Nature 199, 163 (1966) に「Velocity of Sliding of an Ice-fall」の題で発表している。西面のなだれについてはここでは触れない。ツラギ氷河の流動のことは昭和三十九年春の応用物理学関連学会連合講演会で筆者らが発表しているが、未だ印刷されていないので、ここに概要を述べることにする。

### ツラギ氷河の流動

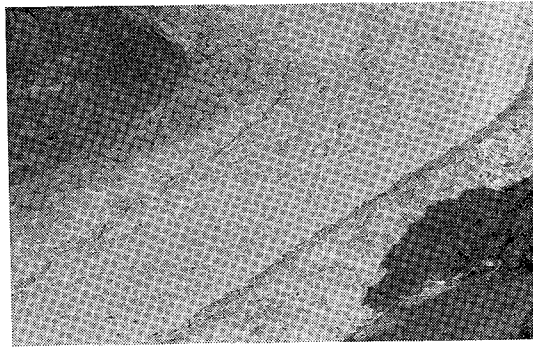
新しい氷河の先端とその対岸の地形には特徴があり、一九六一年と六三年に殆んど同じ方向から撮った写真があったので、それをもとにして先端の流動速度を計算してみた。新しい氷河は先端に近いほど黒くなっているが、盛り上っているのが容易に古い氷河と区別がつく。その結果新しい氷河で六度五〇分、古い氷河で三度十分の流動が認められた。写真は標高差四〇〇m距離一、三〇〇mの地点からとったので、距離に直すとそれぞれ一六三m、七六mとなる。従って一年間の流動はそれぞれ六五mと三〇mになる。アイスフォールのなだれ直前には六m/日が観測されているので、これと比較すると遙かに小さいが、新しい氷河の流動速度は相当な誤差を見込んで速い方であろう。なお新しい氷河には流れのヘッドと関係があると思われる第四図のような縞模様が見られたが、この周期が季節と関係があるかどうかはまだ明らかではない。

### その他

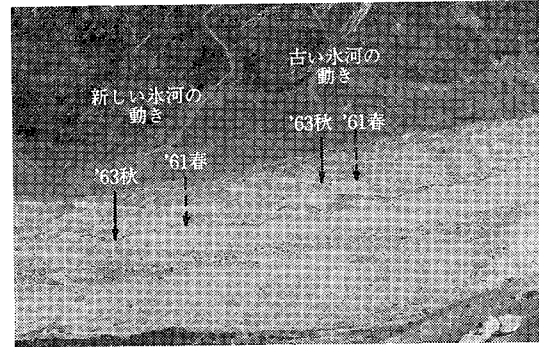
東面のプンゲン氷河は安定しているので特記するような点に乏しいが、P二九本峰から落ちるなだれが氷河を滑る間に氷雪雲が二、三〇〇mの高さに昇ることがしばしば観察された。このように高く上るためには大きな上昇気流を仮定する必要がある。上昇気流は東面では東尾根の南のリダンダの谷、西面では西尾根の南のムシコーラ側に顕著であったが、北側の谷にも相当地大きな上昇気流が起こることが、この結果から想像されよう。



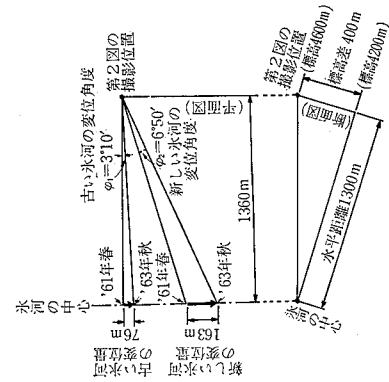
第1図 ツラギ氷河（'63年秋撮影）  
中央の白い部分は新しい氷河  
両側の黒い部分は古い氷河



第4図 新しい氷河に見られる縞模様（'63年秋撮影）



第2図 新しい氷河の先端付近（'63年秋撮影）



第3図 氷河の変化量の算出



## 渡部のピッケルの損傷とその原因

篠 田 軍 治

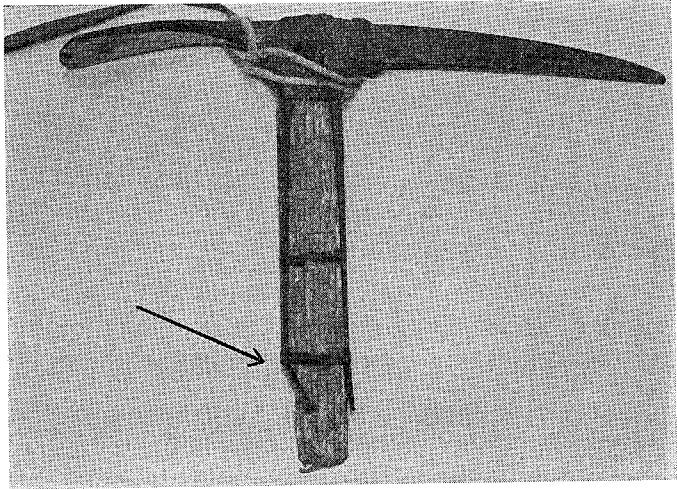
### ピッケルの損傷状態

登頂し下降の途中遭難した渡部のピッケルは木部が折れていても拘らず、ピッケルバンドは手首に固く食い込んで切れていない。二人を結んだザイルも切れていない。住吉からの最初の報告に入っていた見取図ではよくわからなかったが、後に遺品のピッケルを一見して、木部は衝撃による割裂であることが直ぐにわかったが、金属部を見てピックの方もプレートの方も曲っていることに先ず驚かされた。これは全く予期しないことである。これが静荷重だとすればどこかにその痕跡がある筈である。しかし細かく金属部を点検しても、どこにもそれらしい痕跡はない。とすれば衝撃荷重であるが、衝撃荷重でも小さなものが当たれば当然へこむ筈である。従って余程大きなもの、それも均質な固体が当たったものと考えなければならぬ。こうした見地に立って、ピッケルにこのような損傷を与えた条件を検討してみることにした。第1図は損傷の状況を示す写真、第2図は金属物の曲っている状況を示すもので、ピックはプレ

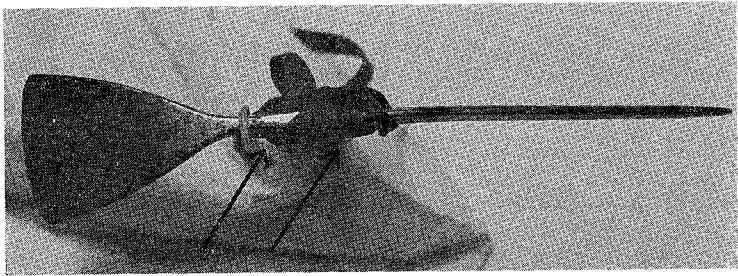
ートの中心線から1.5cm曲っている。なおピッケルは札幌の門田の製品で、シャフトは出発前に入れ換えたもので、材質はとねりこである。

### 木部の割裂

木部は下の方がなくなっており、割裂部を見ると第1図からわかるように金属部が止め金を軸として木部の方に食い込んでいる。しかも金属部は曲っても弾性を失わず、木部に食い込んでから少し戻っている。反対側の金属部はこれと同じ方向に僅かばかり曲がっている。美津濃株式会社の好意で同社養老工場とねりこ、あおだも、やちだもの三種を使って衝撃試験を行なって同じ折れ口を再現しようとした。その結果、木部に貫通する孔を開け、長さ方向に平行に楔を置いて、これをハンマーで叩いた場合に限り同じ折れ口が現われたので、第3図の矢印の方向からの衝撃荷重による割裂であることが確かめられた。最近ドイツ山岳協会(DAV)の安全対策グループ(Sicherheits Kreis)が三二本のピッケルのシャフトの曲げ試験



第1図 木部の衝撃による割裂（渡部のピッケル）



第2図 金属部の衝撃による曲がり「衝撃力の方向は1, 2図の矢印の力の合力の方向であろう」

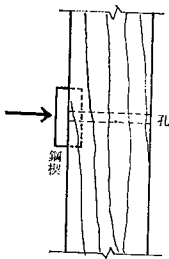
渡部のピッケルの損傷とその原因

の結果を出しているが、その折れ口を見てもやはりこれと同じものはない。とねりごと同じ材質のアッシュでは八本の試料が157~216 kg<sup>1</sup> 平均 195 kg<sup>1</sup> で折れている。アッシュでは八本の材質によって不揃いが多いが、渡部のシャフトの折れ口を見ても極めて良質で、木目の方向も適切な選り方であるから、上記の値の上限強度であり、しかし同グループの試験結果では六〇〇時間の使用で強度は一九％程度下がることが報告されているので、多少割引する必要があるが、200 kg<sup>1</sup> 程度の曲げ強度はあったものと考えられる。衝撃荷重の場合は静荷重よりもばらつきは大きく、事実前記衝撃試験の場合の吸収エネルギーにも著しいばらつきがあったが、渡部のピッケルの場合は破断面から見て破断に要する吸収エネルギーは相当大きい値をとっていると思つてよい。(柎目材九本で吸収エネルギーは 0.79 kg-m/cm<sup>2</sup> と 1.80 kg-m/cm<sup>2</sup> の間平均 1.15 kg-m/cm<sup>2</sup> であつた。)

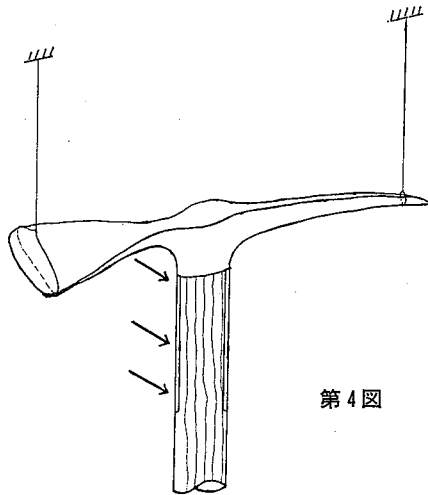
木材では荷重速度と強度との関係はよくわかつていない上に、渡部のピッケルではどの程度の荷重速度であつたが全く不明であるが、上記 200 kg<sup>1</sup> の静破断に要する曲げ荷重を大巾に上廻ることはあるまい。この程度の荷重ではピッケルのピックやブレードは曲る筈がない。

ピックとブレードの曲り

第二図と同じ程度の曲り方を再現するために門田の好意で同じ材質の鍛造品を入手し、渡部のピッケルと同じ寸法に仕上げ、アムスラー型万能試験機を使って両端支持で曲げ試験を行なつた。その結果、1,400 kg<sup>1</sup> で同じ程度の曲り方を示した。な



第 3 図



第 4 図

お、この荷重方向はピッケルの衝撃方向と  $30^\circ$  ほど。程度の差はあるが、直角に近いと見てよからう。液部らの滑落し始め氷壁の傾斜は  $6^\circ$  を越えているので両端支持の条件は成立し難い。とすれば滑落前に手に持っていたか、氷壁にピッケルを打ち込んでいたか、滑落の途中で手に持っていたものが何かに当たったか等が考えられたが、何れの場合も両端が動かないようにしっかりと支持された状態ではない。衝撃荷重の問題としては第4図のようにし、ピックとブレードを弱い系のようなもので吊るし、直中に衝撃荷重をかけたような場合と考えてよい。荷重が静荷重ならば系は簡単に切れ、ピッケルは曲る筈はない。しかし動荷重であると、荷重速度が速ければ切れる前に変形したり折れたりする。

二つの物体が衝突して接触している時間は接近する速度が速いほど短い。速度による差はそれほど大きくない。そして接触すると変形が起こり始め、両者の間に働く力は次第に増加し、次に次第に減少して反跳によって二つの物体が離れる瞬間に零になる。一般にこの最高応力は接触の比較的早い時期におこり、例えば、 $1/2 \times 1/2 \times 30$  in の鋼棒に直径  $1/2$  in の鋼球を  $150$  ft/sec で当つた場合には  $12\mu$  sec で最高に達する。  $10\mu$  sec では最も速い応力波である縦波も、6 cm しか進まなからぬ。ちろん支点にはまた何らの影響も及んでいない。

この種の衝撃問題の専門書として、W. Goldsmith, Impact, The Theory and Physical Behaviour of Colliding Solids, Edward Arnold, Ltd. London, 1960. があるが、上記の結果

は同書に引用されている Cunningham および Goldsmith のデータから求めたものである。

$150$  ft/sec は  $45$  m/sec 程度であり、鋼球の重さも  $80$  g 程度であつて、あまり激しい衝撃ではない。熊本大、体質医学研究所の行なつた高速撮影によるスポーツの動態の研究についての報告から拾つてみると巨人の王選手のヒット性の当りて平均してピッチャー球の速度  $31.33$  m/sec、これに当るバット先端速度  $36.15$  m/sec、打球の速度  $41.08$  m/sec、バットのフォロースピード  $16.70$  m/sec となつてゐる。従つて衝突前の球とバット先端の接近する速度は  $67.5$  m/sec である。打球の速度に  $47.33$  m/sec も記録されているので、時にはこれよりも大きいことはあつても、打球やスウィングにはそれほど大きな差は考えられないので最高でも  $70$  m/sec を越えることは少ないであらう。

また中村寅吉ら二名のプロゴルファーのドライバースイングの結果では、平均で

	ヘッド速度 (m/sec)	クラブ速度 (m/sec)
打球直前	46.6	11.9
〃直後	34.4	12.1

球の速度は  $64.1 \sim 69.1$  m/sec であつた。この場合は接近する速度は  $46.6$  m/sec、離れる速度は  $32.2$  m/sec となり、反跳係数は  $0.69$  となる。Briggs の測定と実験条件の差を考へると、よく一致してゐると思ふ。

野球のバットと球の相対速度  $70$  m/sec ではバットが折れる

ことがあるが、折れた場合の残存強度は明らかでないが、ゴルフで相対速度  $470 \text{ m/sec}$  ではウッド（つめ物のない場合）もクラブも損傷を受けることはすくない。これには速度の差が大きく物を言っている。衝撃については Hertz 以後多くの理論が発表されているが、最近発表される理論式のような膨大な計算を必要とする式を使っても結果はあまり改良されない。そこで Hertz の理論を使って考察を進めることにする。

二つの球が衝突するときの圧縮  $\alpha$  は

$$\alpha = \alpha_m \sin \frac{1 - 0.689 v_0 f}{\alpha_m} \quad \dots\dots\dots (1)$$

で表わされる。ここで  $\alpha_m$  は最大圧縮、 $v_0$  は初速である。そこで、

$$\alpha_m = \left( \frac{5v_0^2}{4k_1 k_2} \right)^{2/5} \quad \dots\dots\dots (2)$$

衝突する物体の質量を  $m_1, m_2$  とする、 $k_1 = m_1 + m_2/m_1 m_2$  であり、 $k_2$  は Hertz の球の接触の式で  $F = k_2 \delta^{3/2}$  に出て来る定数である。

$\alpha = \alpha_m$  の最大は

$$f = \frac{1.47}{v_0^{1/5}} \left( \frac{5}{4k_1 k_2} \right)^{2/5} \quad \dots\dots\dots (3)$$

これらの式から明らかのように圧縮が最大になるまでの時間は初速はあまり関係しないが最大圧縮の大きさは大体初速に比例する。 $\frac{1 - 0.689 v_0 f}{\alpha_m}$  であるから、 $m_2$  をピッケルとすれば、 $m_1$  が大きいほどこの値は大きくなるが、それほど大きな影響はない。やはり物を言うのは初速  $v_0$  である。

波部の滑落地点の直ぐ上には露岩があり、その上から物が自由落下した場合、落差は 100 ft 以下であるから 44 ft/sec こそそこである。実際の場合にはこれを大巾に下廻るのでとてもピッケルを曲げるほどの衝撃応力は発生しない。主稜線とすると自由落下ならば落差 300 ft として、77 ft/sec となり、空気抵抗、バウンド等で落下速度が鈍ってもなおピッケルを曲げる位の落下速度をもつこともあり得ないとは言えない。

次の問題として当ったものの大きさがある。前記 30 in の鋼棒に直径  $\frac{1}{2}$  in の鋼球が当たった場合に棒の外側に働く応力は最大 46 kg/mm<sup>2</sup> に達する。しかし一般に静荷重よりも衝撃荷重の方が鋼の強度は高く出る。例えば SAE 1020 炭素鋼では引張強さ  $62 \times 10^8 \text{ lb/in}^2$  のものが動荷重では  $92 \times 10^8 \text{ lb/in}^2$  と上る。ピッケルのような特殊鋼ではこれほど著しい違いはないがその反面、強度が高いので 45 m/sec の速度で 46 kg/mm<sup>2</sup> の応力を発生する程度では永久変形は起こらない。どうしても初速が割割程度大きい必要があろう。このような立場に立つと前記のような 60 m/sec 前後は必要とならう。前記鋼球の場合、衝突後の最大圧縮力は 6 ton 程度には上る。しかしピッケルが曲がるためには接触面と反対側の表面の張力が降伏点を越える必要がある。この例の場合でもビームの厚さを  $\frac{1}{4}$  in にすると、最大張力は 100 kg/mm<sup>2</sup> になって降伏点は越えるであろう。しかしこれは球が直角に当たった場合で波部のピッケルのように 30° 程度傾いて当たった場合、直角成分を考えると必要があるので 60 m/sec 前後という数字には大きな誤りはない。

いものと思われる。なおこのような速度でも衝突が起ってから最大圧縮に達するまでの時間は  $10 \mu\text{sec}$  であるから、その間に進む距離は  $0.6 \sim 0.7 \text{ mm}$  に過ぎないので、ピッケルは全く動かないと見てよい。

次に何が当たったか。岩と氷とが考えられるが、岩とすればハクパ・ツェリンの遺体の傍にあった赤ちゃけた岩が頂上の石である。P二九は西面から望むと中腹以上はすべてこれと同質の石に見える花崗岩である。マナスル頂上の石に似ているが、マナスル頂上にはこのほかに石灰岩がある。P二九頂上に石灰岩があるかどうかは明らかでない。花崗岩とすればピッケルに何らかの擦痕が残る筈であるが、全くない。石灰岩としても砥石のような作用が考えられるが、その痕跡もない。このように考えるとピッケルに当たったものは氷塊でも尖っていれば圧痕が残るかもしれないが、これがないところを見ると直径にして数cmという小さいものでなく、数kg以上の相当大きなものであろう。大きな氷塊ならば渡部の頭とピッケルに当たることもあり得る。こうしてピッケルは数  $10 \text{ m/sec}$  という高速で飛んでも、その瞬間はアイゼンをつけた渡部の体は止まっていた筈である。ピッケル・バンドが手着に固く食い込んでいたのは当然であらう。

以上は滑落地点で物が当たったとして考察を進めて来たが、トップのハクパがスリップして、セカンドの渡部がこれに引きずられたか、あるいはその逆か、何れにしても最初にスリップ、次にピッケルが何かに当たったとは考えられないか。滑落したが

径路には殆んど障害物がないことは、遺体の止まった近くには石も氷塊もないことから明らかである。二人の滑落の速度は全く不明であるが、アルペンスキーダウンヒルのような高速は出る筈がない。  $40 \text{ m/sec}$  すなわち時速  $144 \text{ km}$  になつたとしても、なお衝突でピッケルを曲げるには程遠い。二人の遺体に大きなパウンドの跡がないこと、ザイルが切れていないことは滑落の途中で大きな障害物に当たらなかつたことを物語っていると考えてよからう。

註

- 1) Alpinismus 5-59 (1972)
  - 2) Cunningham, D.M. and Goldsmith, W.J., Appl. Mech. 23, 60, 6 (1956)
  - 3) 長尾慶彦ら, 体質医学研究所報告18巻2号(昭42)
  - 4) 長尾慶彦, 回誌22巻2号
  - 5) Briggs, I.J., J. Res. NBS., 34, 1 (1945)
- (一九七三年記)

晴れ間にはカッとしたり日照りもあるが、モンsoonも終わりにちかいはいえカトマンズには雨の日も多い。宿の庭は粘土質の草地で、いつも水分をふくんでじめじめしている。宿はデイルバジャールのラリグラス・ホテル。その低い天井と、とほしい設備の中を、うちの隊員たちはじつによく働いていた。買出し、仕分け、荷造り、シエルパとの交渉、政府との交渉、なにもかもじつによく分担されていて、ヒマラヤに手なれの隊という感がふかい。ふつうならば痩せるくらいの仕事であるのに、嬉しくもしばらくの間に皆めきめきと肉づいて来て、顔付きから目のかがやきまでが落ちて着いてきた。よく食うこと、よく眠ること、誰もがであった。

大阪の暑熱の、しかも理学部の廃舎の隅っこで、毎日神経をすり減らして準備をすすめて来ていたのである。テストや水ハークンの新兵器もぎりぎりに間に合うかどうか、何もかも揃ったような、足りないような、神経のすり減る仕事であった。名にしおう天神祭の前後の大阪のうだる暑さであり、油汗はとめどなく流れる。そして一杯のうるん(うどん)。みんな痩せて、蒼白く、大丈夫かなと思わせるようなひよわな隊の姿であった。ラリグラスのめしは美味かった。そして軽井沢よりも上等なカトマンズの夏の気候である。雨季というのに、天気予報の告げる湿度は最高二二%などという信じられないような値である。来てしまったという覚悟のすわりかたもあったであろう。

それよりも、発送間際の入電でカルカッタの港湾ストライキを知ったときの驚き。そして大慌てに奔走して、第二隊の田村君らが道を見出してくれたチッタゴン→ダッカ廻りへの切替え。荷物の一部にはカルカッタ行きと記入されたまま、チッタゴン下ろしにされ、無事につくかどうかの心配。チッタゴンのモンsoon中の沖がかりの積下ろしが果たしてうまくいくかどうか、若し荒天にあえば、そのままボンベイまで持っていかれると聞かされていた。三枝さんたちのチッタゴンへの先発。しつかりものとはいえ、女性の身で、はじめての土地での交渉が、うまくいくものかどうか。付添いは男性とはいえ最年少の、海外ははじめてという若僧であった。そして増水中の川すじを、ダッカへ運ぶのが、そう簡単なものかどうか。ダッカからのパキスタン航空がほんとうに、たしかなのかどうか。思えば危ない橋ばかりではなかったのか。それが、カトマンズに、案ずるよりは易く何もかも揃っていたのである。快食、快眠も当然である。

時間の間に、みなが体操もやり、ランニングもやり、サイクリングもやり、毎日からだづくりに汗をかく。大阪での身の細まりは夢のような昔話になる。これは三年後のエベレスト南壁隊のカトマンズ生活とくらべると、驚くほどのまとまりかたであった。阪大隊は決して一流登山隊とはいえない。むしろ三流くらいに評価されてもしかたがない隊である。それが、あの大

仕事をなし遂げたのは、何といつても長い伝統につちかわれた纏まりであり、隊員のひとりひとりが、やはり大阪大学で受けた高い教養と良識をそなえていたからだ、いえば自謙にすぎたであろうか。からだづくりも、各自の仕事の責任分担も、誰に強制されることもなく、一生懸命な努力として当然のことのようになされていったカトマンズの日々を、私はいまさらに誇りたかく想い返すのである。

それでもなお難問題をいくつも抱えていた。七月に大洪水がテライ地帯をおそった。当然上流の谷間の道も荒廢に帰していると予想され、重荷をかかえての高廻りなどが懸念された。カトマンズではその情報がどうしてもつかまれない。当たってみるよりほかなかった。ひとつはブレモンスンのオランダ隊の入山拒否である。そのリエイゾン・オフィサーを囲んでの評議では、絶対にあの谷へは入れるまいと、つよい否定的見解が披瀝された。これも当たってみるよりほか、予じめ対策はない。いや、懐柔策に、ポーターの雇い替えとしたいへん手間のかかることをやり、医療班が労を惜しまず努力し、心やすく菓をバラまこうということになる。さらに、奥地の収穫高のひくいこと、これは直接に食糧補給につらなる問題であった。こういう問題をかかえての出発に、ただ祈るような気持であったが、隊員の顔の明るいは、心づよいことであった。

カトマンズの医学： 出発前からネパール医学会々長の Dr. F. N. Nadhanar と連絡をとって、Bir 病院に氏をたずねたことから

接触がはじまった。持参したスライドの中から先方の興味のふかいカリエス手術についての講演を医師会館における医学会例会でおこなう。ちょうどインドから帰ってきたアメリカ人がインドのひどい小児栄養失調症(クワシオール症)のめずらしい写真をいくつも見せたあと、私が立つ。阪大の隊員は、むしろ工学部の人が多いのであるが、ほとんど皆が集まって手伝ってくれた。小さい医師会館とはいえ、独立した建物をもち、会場は欧米の医師をまじえてまったく国際的である。

本隊の去ったあと、私は公務上でいったん大阪にかえり、仕事をすませたのち再びカトマンズを訪れる。予行に登った立山で、若いときのつもりで舐めてかかったのが祟り、風雨のズブ濡れに血圧が200を越え、ブリガンダキ入りは断念して、医学接触に専念する。Bir 病院と、Shanta Bhawan の U.C. 病院でいそがしく手術をやり、回診をやり、コンファレンスをやる。カリエス、骨折、骨髄炎が多かったが、肩の棘上筋下の石灰化滑膜包炎もあり、めずらしく先天性股関節脱臼があった。整復位の保持が困難な例で、阪大で開発した内側切開「腸腰筋腱移植」手術をおこなった。スイスの国際援助機関 SATTA にはたらく技術者(ネパール人)の子息で、遠くジリからスイスの専用航空機でやってきた人である。スイスの外科医から Dr. Mon Shah を通じての紹介による患者で、彼とともに手術をして、簡単に彼をおどろかせることとなる。

この患者は、のち数カ月、リバプールの Roat 教授がネパールを訪れたとき、Dr. Mon Shah からの話と、その好成绩をも



っていたくおどろかせることとなり、帰英ののち「水野手術」としてリバプール大学で大きく取上げられ、いずれも好成績であるから、訪英の機に寄って欲しいと希望され、一九七四年十一月、ここを訪れて阪大の成績を紹介して感動させることとなった。Roaf 教授は一九七三年にもイギリス医学の権威ある機関誌ランセットに紹介記事をかき、いずれ「水野手術」についてまとめて報告される予定という。日本ではその獨創性を買う人がなく、ネパールでイギリスの教授によって見出されたことになる。ネパール医学との接触によって得られた大きい収穫であった。

補助医師の養成： 医師不足の対策として、補助医師 (auxiliary medical officer) の養成所が、Kanti 病院の下に隣接している。二年課程で、田舎の診療所要員として作っているという。三十人ほどの二クラスが、まじめな顔で試験を受けていたが、答案は簡単なものらしかった。一九七三年には、これが重要な地位をあたえられて、将来のネパールの医療を背負うような立場になるが、のちに記すこととしよう。私はここにネパールの将来にたいして希望を見出したような感懐をいだくことになる。

インド古方医学： インド古方医学たるアユールヴェダ医学についてはネパールの各方面と接触をつづける間に、いろいろな情報があつてきた。ネパールのこの方面については今まで全然知られていなかった。

サンस्क리트の文献を集めた国立図書館 (National Archives) にはカタログ面に二十三巻の蔵書があるが、私のしらべたかぎり、日本人としては、印度哲学者の訪問署名を少数にとめたのみであった。またカイザー図書館にも二百冊にのぼるアユールヴェダ関係の図書がある (目録番号などは大使館に記録をのこした)。サンस्क리트文献も少々残されている。これらは芭蕉葉に墨をもつて記され、みごとな保存ぶりである。

アユールヴェダ医学は旧市内の西北部にあって、三階建ての相当の校舎と、病棟および研究所と称するものから成っている。三年制と五年制の二段階があり、卒業後は開業資格があつて、民間では相当な声価をたもっているらしい。西洋医 (Western doctor) にかかると一回の診療費二五ルピーのほか、処方箋をもらつて薬屋にいき、さらに薬代を支払わねばならないのに、インド古方医 (ayurvedic doctor) は一回三〜四ルピーで、薬までくれるという。受けるはずである。医学校には薬の製造所も付属していて、健胃剤などをつくっている。入院患者は、腹痛や腰痛などで、重症患者は見られなかった。研究所と称するものは建物のみで、内容は何もない。学校内も教材などいかに粗末で、日本の看護学校よりもだぶ劣るようであった。

アユールヴェダ製薬所と、貴重な文献との接触： アユールヴェダ製薬所 Singha Durbar Vaidya Khana は名のとおり獅子宮の北をふたつばかり門をくぐった奥にある。恐らくラナ家の保護のもとに出発したものである。門を入れて小さな坂をあがると中庭をかこんで煉瓦づくりの建物がならんでいる。右

側の二階建てが事務所と、製品の展示倉庫、正面右手のが生薬などの倉庫と、製煉所、左側の建物が製薬の主な工場らしく、生薬を昔なつかしい足踏み杵でくだいたり、黒焼きをつくっている。すぐ傍に中国製の錠剤製造機が据わっているのに、古いインド式の大天秤があり、何人も並び坐って手で黒い練り薬を丸めて大小不そろいの丸薬をつくり、瓶につめている。

製煉法の古風なこと、まるでアルケミストの昔に帰ったかと錯覚のおこりそうな素焼壺の乾溜装置や、埋め込み式の乾溜壺の上に乾燥牛糞の燃料が盛りあがり、重金属の不純物いっばいの不透明ガラス・レトルトが用いられ五百種の生薬を盛り込んで百八十日余も煮きつづけて膏薬をつくったという大鍋がいくつも転っている。三枝さん(阪大薬学部出身)にならんでもらうと、彼女の背丈よりも大きく、一面に緑青が吹いている。

この階上に、十巻のすばらしい本草図鑑 *Chandra Nighanti* が見つかった。すばらしいものと思われたが、ほんとうの値打ちは分からない。一頁ごとに原色図があり、二千ページにのぼるだろう。これは二年前から薬草研究に來ている東大金井邦夫助教授(現、国立科学博物館員)をともなって鑑定を乞うこととなる。氏の滞留した西洋薬学研究所(National Drug Research Institute)では、この存在を誰ひとり告げてくれなかったという。日本には知られていない文献であり、吉良大使からもこの文化財の発掘(?)をたいへん喜んでいただくこととなる。金井氏は私たちの帰国後、何回か訪れてこの真価をたかく買い、全頁を写真撮影して持帰られ、ネパール留学生を督して

英訳された。序文は本書の著作者の息が父の苦心を記したもので、各頁の図は花・茎・葉・根から、種子、生薬まで記録され、大部分は写生されたものという。説明文はアユールヴェダの三書における各薬草の記載をサンスクリットとネパリをもつて紹介し、そのあとにその名称をサンスクリット、ネパリ、ベングリ、ヒンディ、アラビック、英語、ラテン語で記されているという。しかし、この英語もラテン語も、日本の仮名がきのとき元の綴りを推定するのが困難なように、サンスクリット文字(ヒンディ、ネパリとも共通)から、もとの英語やラテン語を推定するのはそう簡単ではないという。

この貴重な文献はラナ時代のビル執政時代につくりはじめられ、チャンドラの代に完成したが、頁の上端が切取られて図の一部に欠落をきたしている部分のあるのは、チャンドラがビルの名を残さないよう全部切落とさせたからであるといひ伝えられている。序文にはこの間の事情はかくされているようである。この本の価値は製作にあたって何回かインドの学者のネパール訪問をうけて名称などの正確さを期された点にもあり、製作年代が比較的に新しいとはいえ、文化財のすくないネパールにおいて誇るに足る数少ないもの一つであるといわれる。のち、第二回隊の難波恒雄君(現、富山大、和漢薬研究施設教授、「世界を変えた薬用植物」の訳者)は、ネパールを訪れて、この各頁をカラー写真で撮影してきたという。日本でこの書を英訳のうえカラー出版できればと考えるのは私のみの願いではない。

(一九七四年記)

## ネパールの医学教育革命 水野祥太郎

はじめに

ネパールには、いま大変な医学教育革命、ひいては医療体制全体にたいする革命が進行していきつつある。これは国王を中心として練りあげられたプログラムに沿ったもので、まことにネパールの国情にふさわしいやりかたというべきものである。

私は三年前、阪大のP23登山隊でこの国を訪れたとき、この国の医療の状態や、アールヴエダ医学について調べて、寒心の思いをもったのであるが、昨年来のこの国の新しい方向は、医学の根本にまでふれる問題を含んでおり、また広く開発途上国の医療問題を考えるうえに役立つのみならず、日本の医療体制や医療教育体制にたいしてひとつの問いかけを呈することになるとも考えられるので、ここにそれを紹介してみたい。

### 一、ネパール医療の現状

ネパールは人口一、二〇〇万、東西にながく広がっている国で、緯度は28°、沖繩くらい、北はヒマラヤの高峰部が屏風のように連なっており、その後2,000~4,000mくらいの高さに山地住民が住み、中後の1,000~2,000mの丘陵地帯に最大多数の住氏が日本に似た農耕にしたがっており、シャカの生地を含むテライと呼ぶ低地帯にもひろい農耕地があるが、ジャングルも生い茂っている。国はいくつかの深い谷で断ち切られているため、東西の交通はいたってわるく、近年ようやく一部に自動車道路ができたとはいえいまだに徒歩旅行が主とした交通方法と

なっている。

これにたいして医師 (western doctor) 三〇〇名、看護婦一六〇名 (一、六〇〇名ではない)、印度古流の医師 (ayurvedic doctor) 一三〇名、保健士 (auxiliary health worker 医師の代用をも兼ねる) 四〇〇名で、その筆頭たる医師は人口四万人一人といってもカトマンズ周辺 (valley と呼ばれる地域) に集まっただけで、地方は実際上ゼロにひとしい。

国立病院は各地にいくつか作られているが、まず整っているのは首府のビル病院一 (Bir Hospital) 地域ごとに小診療所 (dispensary, health post など) を置くことにはなっていないが、人員配置がままならぬ現状で、実際上なきにひとしいところが多い。要するに医療関係者がおそろしく手うすなのである。

ここでは、他の開発途上国にもみられることであるが、国立病院の医療がすべて無料であること、またイギリス医学の影響から、その国営医療 (NHS) 以前の制度がとられ、病院で働く医師は無給か、わずかの給料であり、生計は自営の診療所に頼るほかなく、中には薬店の下働きとして、その一室で患者を診て生計の資を得ているものもある。西洋医師の診療費は一回二五ルピー (六二五円) と定まっただけで、アールヴエダ医師は三〜四ルピー (一〇〇円以下) をとって薬まで渡してやる。西洋医師のばあいは処方箋をもらうので、いま一度薬店で薬代を

支払わなければならない。ホテルのボーイの給料をたずねると、一カ月二、〇〇〇円以下であるから、一般民衆はちょっと西洋医師にはかかれないということになる。

西洋医師は、いままでの人の多くはインドの大学を出たのち、イギリスに渡り、その卒後訓練をうけていて、アフガニスタンの医師と比べると、はるかに程度がたかく有能な人が多い。病院手術室の無菌にたいする注意とか、病室の治療ぶりをみると、やはりアフガニスタンよりはだいぶ上の点数がつく。若い医師はインドのほか、ソ連帰りの人のあるのが目につく。

インドへは毎年一四―一五名も医学の留学生を送り（コロンボ計画）、ソ連も負けじとニューデリーからの旅費負担で留学生を採る。この留学生たちがなかなか帰国しないのには政府も手を焼いているらしい。帰国したところでカトマンズの外へは出たがらず、ネパール国全体としての医療の充実の目的にたいして、西洋医師をもってしては、とても沿うことができないという実情である。

公衆衛生方面は、しかし相当めざましい改善を遂げている。

WHO がここにも力を注いでいて、すでに天然痘は完全に撲滅されたという。昨年的一名の患者はバングラデシユ難民であつて、五〇万人も流れ込んできて、公衆衛生上の問題をいろいろとかもし出したが、今は大部分（？）パキスタンへ送り出されたとか。疑問符を付したのは、政府関係の人びとの話が、この点で相当に食違つていて、現在皆無というのから三〇万までの幅をもっているからである。しかしカトマンズ付近には、もう

いなくなつたのは真実らしい。

マラリア撲滅には日本の専門家も参加して、やはり成功しているという。ただこの疾患は WHO の絶滅宣言のあと、またまた頭をもたげおそれ十分にある。これらの成功には不思議にもネパールの西洋医師は、役人以外のものの関与はない。

WHO まかせなのである。一般のネパール医師は当面の急問題たる結核にたいしても、癩にたいしても完全にそっぽを向いているといつてよい。外国の誰かのおかげで、何時かは良くなるとも思っているのであろうか。

狂犬病にたいしては、三年前には考えられなかつたほどの成功がおさめられている。もとは牛とともに野犬が街路をうろろとしていたのであるが、昨年、大規模な野犬狩りのキャンペーンをやつて、捕りつくしたものという。年間六、〇〇〇名を算えたワクチン注射が、今は首府ではほとんどなくなつたともいう。これはネパール政府の努力のたまものである。昨年即位のビレンドラ新国王の施政改革の現われであるというが、これにも西洋医師が関与しているわけではない。

西洋医師の養成には、今まで相当に努力して、国の医療の充実をはかるうとした跡がわかるのであるが、それは完全に期待に反する結果となつた。というのが、新国王のブレイントラストの判断であるらしい。実状を知つておればおるほど、この判定を性急だと責めるわけにはいかない。西洋医師の方に、あいそをつかさされるだけの罪はあるように思われるからである。

二、新しい医学部と、その構想

ネパール唯一のトリブバン大学 (Tribhuvan Univ.) に昨年医学部 (Institute of Medicine) として各学部とも institute を冠して呼ばれている) が新設された。Moin Shah 博士がその医学部長に任命されたとき、驚きもし、さこそと頷かれました。彼はインドのハイデラバード大学を卒えたのち、十年間もイギリスの卒後訓練を受けた外科医である。いくたびか私とは手術をともにしたが、それよりも印象深いのは、当時開かれた、「キリスト教医療会議」での彼の発言であった。キリスト教にありがちな独善的な考え、相手を低く見くだした慈善的な態度、それに何よりも人道主義があたかもキリスト教の専売事項であるかのような錯覚を振り回しかねないところを鋭くついで、「ちょっと雑音を入れましたよ (Just I made a noise)」とついでにのける。ネパールにこういう人がいたのかとすっきり見直して、彼のいうこと、なすことには私は注目をはらっていたのであった。

新国王は皇太子の頃から、みずから議長となってセミナーを持ち、いろいろのことを論議し、検討していたものという。即位するや、前例をやぶってヘリコプターを利用して国の隅々まで視察にまわり、施政の改善につとめているとか。野犬狩りもそうであったし、新しい医学部の創設もそのあらわれであったのである。

この医学部は、欧米や日本の医学部とはまったく趣きを異にしている。古いインド医学の学校 (国立、既存) と、保健士養成所 (補助医師 auxiliary health worker) とのほか、二つの看

護学校を傘下におさめた包括的 (comprehensive) な医学教育機関をめざしているものである。

外国流の医師養成の医学教育を真似なかったのは、それがネパールの国情に適しないと判定されたからである。いままでの西洋医師にたいする失望もあり、西洋式医学教育の高価さを避ける意味もある。インドの大学では、年間学生一人あたり三〇〇万円 (一万二千ドル) の経費がかかっている。そしてできあがった医師がネパールの国の要情に應えられないのならば、まったく意味がないではないか、ということである。

アールヴエダ医学は日本でも多少の注目をあつめ、千葉の鈴木正夫教授や、大阪の丸山博教授が熱心であるが、現在のインドやネパールにおける実情は相当たわいない程度のもので、科学とは距ることにはなはだ遠い。ネパールにはもとも国立学校があり、三年コースと五年コースがあり、付属病院や研究所と称するものもついでに。しかし学生は年間五名ぐらいいかにもほそぼそしい。教育設備もほとんどなく、研究所についても、がらんどうの建物と室があるのみである。インドにはカルカッタ、デリー、ラクナウ、ベナレス、パトナなどに十数校あるが、一校ごとに思い思いの内容をもち、ひとつの薬草名にたいして別のが教えられているくらい、またまった学問にはなっていない。モイン・シャーにいわせると、「二、〇〇〇年前から (とも何百年からとも) 進歩が止まっているのだという。

ベナレスの医学学校では近代の西洋医学を取入れようとして、かえって混乱を起しているという。一九一〇年代のアール

ヴェダ医学の英文教科書を開いてみると、すでに外科器械などは西洋医学のものをそっくりと頂いて記されている。しかし、アユールヴェダ医学は、独特の症状解釈と独特の治療方針の設定とを特色にしており、それ自体、やはり一つの疾患にたいするアプローチの方法として認めてよいではないか、とモイン・シャーはいう。

しかし、もし現在の科学をはなれて、単に古い独善的判断とその伝承から抜け出せないならば、もはやその命脈はつづくものではない。王室のブレイン・トラストの（多分モイン・シャー自身の）判断としては、アユールヴェダ医学に科学をあたえてみよう。物理、化学、生物学、解剖、生理などの知識と考えかたを導入してみて、そのうえで、アユールヴェダ医学の道を、みずからの手で切り開いてゆかせよう。そうするとその成否はアユールヴェダ当事者の才能と努力いかにかかっているということになる。

面白い考えかたではあると思う。私がアユールヴェダ当事者に会った印象では、どうやら熱意は見られるが、実行力は疑問で心細い。しかし、ともかくひとつの試みとしてやってみようというモイン・シャーらの意見は、尊重すべきものといわねばならない。

アユールヴェダ医学の発展のためには学生定員を増し、ちゃんとした資格をあたえ、それを人々から尊敬されるようなものに仕上げたいともいう。いまはアチャリヤ（学徳者）、シャステイ（古典にくわしい人）、マデヤマの三種の地位があり、ま

たカピラージとヴァイデアという医師の位もある。これらを整理して一定の資格として、価値あるものにしようという。こうしてアユールヴェダ卒業者の将来の昇進への機会をあたえようということらしい。アユールヴェダ式のあの黒い不揃いの丸薬などの製剤は、今後どうなっていくのか、今でもこの中にはスルフアミンを配剤してあるという。でなければ洋医学の処方の効果に対抗できないからであるという。未解決の要素を多分にふくみながらも、あえて新しいアユールヴェダの道を開く礎石を置いてみようとの試みは買うべきものであろうか。

一方、保健士（補助医）の教育の方はどうであろうか。こちらはカトマンズ北郊の景勝の地にひろい土地と、美しい新建築を加えて定員増加に備えている。いままで二年間の教育であったが、それはそのままとして、公衆衛生教育、地域医療にたいして力を入れるという。今までも標本類もあり、顕微鏡もそなえ、試験できゅうぎゅうとしぼりながら教育している。これを大学予科式の下部教育機関に予定している。中国の有名な「はだしの医学生」（赤脚医生）は六カ月の教育というから、こちらの方が多少とも深い教育ができることであろう。卒業すると乏しいながら、地方へ分散配置されていたのを、もっと強力に僻地のすみずみまで行きわたらせ、村々の小診療所をまかされることとなる。

これにたいして、今度は、第二段、第三段の補修教育が大学の課程として検討されており、ある任期を終わったのち、ふたたびカトマンズで教育をうけて単位をとり、上級の資格があた

えられるようになる。中には地方での開業医資格を認められるものもある。ここにも、個人の才能と努力によって昇進（Promotion）の機会をあたえようという配慮がみられる。これはすすみ進んで大学院博士課程への機会もあたえられようという。詳細は図についてみていただきたい。アールヴェダについても、こちらの方にも細かいカリキュラムもできている。

看護学校については、問題は少々ちがっている。だいたい三年前までの医師四名に看護婦一名というような比率は世界の中での特異例であって、インドとネパールとの特殊な社会構造に根ざしている。病人のからだの世話、特に汚物の処理などがカーズの低い層の人たちの仕事になっていて、一般人からの看護婦志願者が少ない。そのくせ綺麗な仕事の女医や女教師には志願者はこと欠かない現状なのである。これこそ致命的な障害ではないかと思われたのであるが、幸い地方ではこの障害ははるかに少なく、人的資源はかなり得やすいという。これも簡略化した教育で、補助看護・助産婦を下部教育機関として大量に地方で教育しようという。これにも昇進の機会が考えられている。

この医学部の構想はたいへん欧米の既成概念からは異なってみえよう。しかし、こういう医学教育線を押すすめることによって、ネパールの医療改革を、何年かのうちにやり遂げようという、ずいぶんと野心的な構想だと思ってみると、なかなか実際に即してよく考えられているように思われる。

### 三、医療体制の今後

この教育制度が目標どおり進行していくと、いまの無医地帯

はどしどしと改善されてくる。村々の小診療所には、将来の昇進に望みをもった若い人びとが、看護婦とともに赴任してくる。これはアールヴェダ医師のこともあれば、保健士のこともある。これらの両者を同一個所に駐在させて競合させることは避けて、それぞれの縄強りを自然ともつことになるだろう。しかし、どちらかの名声がたかければ、そちらに患者が集まることとなるので、多少とも競争意識の出ることは当然であるが、これを良い方向へ指導するために、あの昇進制度が役立つていくだろう。

もちろん公衆衛生方面の BCG 注射や家族計画などはそれぞれの教育の中に採りいれられて、誰もがやることになる。こうなってくると、西洋医師はあまり役割を期待されなくなりそうである。どうやらカトマンズに棚上げされて、この国の医療体制の進展の中からは取残されることにもなりかねない。しかし、この中のある率の人員は、この医学部の各活動分野において教官として力を発揮してもらわなければならない。今のところネパール医師と接触した印象のかぎりでは、こういう適格者ははなはだ少ないということではあるが。

### 四、この計画の将来

この計画はネパールのニードを考慮し、今までの医学方面の教育の歴史を基礎として、よく現状に適したものと見えよう。しかし、何分まだ大部分は紙上計画であるし、実現には相当大きい困難と、大きい未知要素の入っていることが否めないであろう。

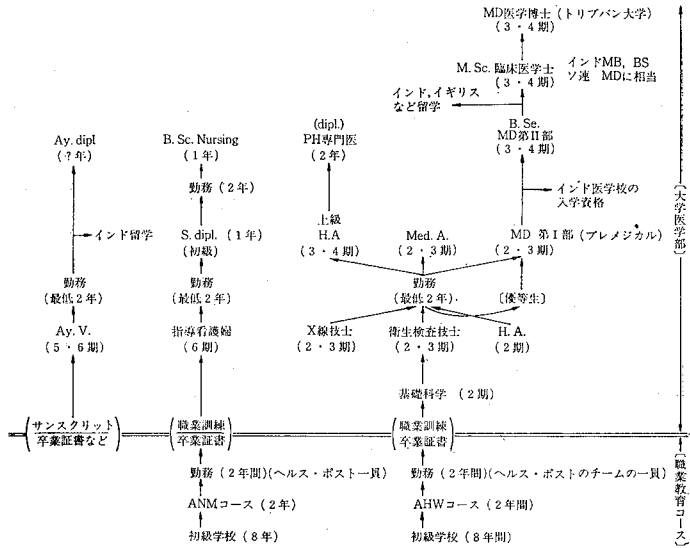


図1 全般の構想は、人材を豊富につくことにあり、職業訓練コースを経て2年間勤務ののち、証明書資格 (certificate course) を経て、さらに2年以上の勤務を経て免許資格 (diploma course) に入り、さらに称号資格 (医師および看護婦, degree course), 学位資格 (医師のみ) とすすむ。1期は6カ月であるが、単位をとるにはこの図よりも1, 2期多く見込まれている。

ANM: 準看護助産婦

AHW: 保健士 (ヘルス・ポストの助手の地位につく)

HA: 保健医 (health assistant) (ヘルス・ポストの長となる)

Med.A.: 準医師 (medical assistant)

B: バチャラー, M: マスター, Sc: サイエンス

カリキュラムは、たとえばアユールヴェダではネパール語4単位、ネパール文化6単位、サンスクリット6単位、英語6単位、合計一般教養22単位、基礎科学56単位(物、化、植、動、解、生理、病理、細菌)、アユールヴェダ医学57単位が当てられ、1単位は1学期(6カ月)間毎週講義1時間、演習2時間、実習4時間であるから、3年間では相当の密度の教育となる。アユールヴェダ医学といっても、公衆衛生は西洋医学を取り入れ、家族計画、結核対策も含まれている。臨床には内科のみならず、外科、産科から眼、耳鼻科も入り、簡単な治療を目標にしている。たとえば眼科では結膜炎や異物の治療程度であるが、これのみでもネパールの失明者削減に効果が期待されるという。

なお下級学校は小学5年、中学5年であるが、AHW, ANM はその最後の2年を職業学校コースとして採るもので、一般の10年修了者も大学入学の資格をもつ。



最大の難問は、やはりこの国の貧困さであろう。いま、保健士養成所はすでに拡張新築が終わらんばかりになっている。しかし、その教材教具の充実をどうするか、教科書をどうするか、教官をどうするか、問題は山積している。アールヴエダ医学

校は貧弱ながら建物も持っている。しかしせいぜい一年間に二〇名までの定員より以上入学させる余地はないし、教材教具の乏しいこと、医療用器具の貧弱なことなど、この充実は果たしてこの国にできることなのかと、問いたくもなるくらいである。

いま一つ気になるのは、ヒンズウ教徒そのもののような学生たちの呑気さである。インドの医学生も医師たちも似たものではあるが、もう少しましかも知れない。向上心をどれだけ刺激しても、ほんとうに立上つてくれるのかと問いたくもなりそうである。それにアールヴエダ医学に科学の基礎教科をあえたとき、ほんとうは何が起るのか今から予測できないことである。ことに、その教師たちの側に、新しい科学を消化しきれかどうかの不安がのこる。困難は決して少なくないのである。

しかし、この国の人たちは、アフガニスタンの人たちよりは、ずっと賢明な人が多く、正直で信頼ができる。一部商人は旅行者に数倍の値をふっかけて評判がよくない。しかし、ホテルの室内に露出して金銭を置いて紛失のおそれはない。根が正直で善良なのである。それに殺伐さがまったくなく、平和な繁栄への基盤がそろっているように思われる。この地では良い政治が良い結果をあげることができそうである。とにかくこの土地の人たちが考え、そして力をあわせていることは、よく

見てとれたと思う。実現への道はたしかに動き出している。たしかにこれからはみものである。大きい冒険的な実験ではあるが。

このような医学教育を賞めることは、偏狭な医学者からはお叱りをうけることかと思う。まさにこれは世界の医学教育の主流からすれば、大きい退却を意味する以外、何ものでもない。

医学を、正式な医師以外の手に委ねることを目標とするこの制度は、イギリスの *Medical Council* とか、アメリカ医師会からはもってのほかとの非難がでるにちがいないのである。医師社会にたいする謀叛といえなくもないからである。しかし、それでも私は、これはネパールの国情の実際からみて、足を地につけた発案であり、その謀叛というのも、正式な医師たち自身が一般社会から遊離して独善をきめこんだために、支払うことになった代価であるといつてよいのではなからうか。これを単なる紙上計画としてあざわらうことはやさしい、しかし、私としては低開発国の人たち自身の手で考え出され編みだされたこの野心的な計画にたいして拍手をおくってやりたいし、できれば日本から援助の手をのばすべきでないかとさえ考えるものである。もし成功の見通しが立てば、これは他の開発途上国においても適用できる方策として高い評価をうけることになるであろう。また、日本の医学の現状にたいしても、ちよつぱり皮肉な問いを投げかけているようにも思われるのである。

(「医学のあゆみ、第八七巻第四号、昭和四八年十月号より転載」)

# 薬草と生薬を求めて

難波恒雄\*

出 発

大阪大学山岳会が中部ネパールヒマラヤのP29登路調査と同時に學術調査の Expedition を出そうということをも具体的に決めたのは、一九六三年春のことである。私は専門柄薬物と植物の部門を受け持つことになった。中部ネパールの植物は既に日本山岳会のマナスル遠征に際しての先発隊の方達により、数多く日本にもたらされており、今更とは考えたが、この地方の秋の植物は未だ採集量は少く、また種子採集の可能性もあるので、とに角やりましようということになったのである。その上

生薬の面では、以前大阪府立大学の中尾佐助教授が二〇種程蒐集してこられているが、これは現地調査したものでなく、またその薬効、用法、処方等の聞き込みもなく、不十分なものであった。その点生薬の専門家が始めて現地に入ったら、何らかの成果はあがるだろうと考えたわけである。ただ現地の情況はネパールの首都 Kathmandu すら不明で、まして日本で予備調査ということは全く不可能であり、どのようにして生薬調査および蒐集を行なうかはその都度現地の情況に応じて臨機応変

にやらねばならなかった。今から思えば実に冒険で結果的には幸い多数のチベットおよびネパールの生薬を蒐集できたが、出発のときはまるで雲をつかむような状態だったのである。しかし正直に言って参加させてもらう気持ちになったのは、私のヒマラヤ熱がそのような困難な状況を無視できるくらい高まっていたのかも知れない。

\* 現富山大学薬学部教授、一九六三年当時大阪大学薬学部助手

## 行 程

九月二十二日 Kathmandu を出発してから十月七日 Sama へ着くまでは全員同一行動をとる。私は毎日植物採集とその整理に追われる。まるでヒマラヤへ古新聞紙を取り替えるためにやって来たようなものだ。連日新聞紙の山と格闘をする。途中九月二十七日 Arghat Bazar から十月三日 Setchaasu へ着くまでずっと雨が続き難儀な採集行であった。十月八、九、十日の三日間は Sama で休養。この間 Sama の部落民と交渉、標本の乾燥等結構忙しい。十月十一日 P29 直前の BC へ移動、私

と田村氏は夕方まで住民の診療をし、セカンド・ラマにうまうまとかつがれたあびく道に迷い深夜ほうほうの体で Sama 落部に引き返す。翌日再び BC に向う。BC へのカルカの道は全く素晴らしいの一語につきる。カラマツの黄葉、各種のシヤクナゲの緑、メギの類、バラの類の見事な紅葉。バックにマナスル、P 29 と続く純白の雪峰。十月十二日から登山隊員の行動開始。私は専ら BC を足場に附近の高山植物の採集をする。しかしもう秋も深まり花の咲いているものは数える程しかない。途中から種子採集に切り替える。快晴の日が少なく曇ったりで標本の乾きが遅い。相変わらず午前中は新聞紙と格闘する。C 1・C 2・C 3 との連絡をとりながら連日 BC 周辺を動き巡る。十月二十八日シェルパのアンツェリンを伴い Sama へ下る。何を思ったのかセカンド・ラマが BC まで迎えに来る。途中カルカの奥のゴンパを見せてくれる。マナスル隊の寄贈金で建ったいわくつきのゴンパである。Sama にはチベットから来たアムジー（ラマ僧医）がいるとの事で、一日も早く下りたかったのだが、ハンドトーカーの親が BC にあるため離れるわけにゆかず、やっと二十七日 C 4 へのめどがついたので早々に下ることにしたのである。二十八日アンツェリンの妻の家に宿る。すごいノミだ。一日でねをあげ翌日からゴンパの横手の広場にテントを張る。この日から十一月六日までアムジーとの往き来を重ねる。マナスル氷河湖方面等に一緒に葉草採集をする。「もう少し時期が早かったらこの辺には一杯葉草がある」「是非もう一度来い」確かにそうだろう。「来るときには

知らせてくれ。出来るだけ集めておくから」ありがたい話だ。しかしどうして連絡すればよいだろうか。朝からチベットの生薬、薬物書を持って来て私に講義をしてくれる。もっともアンツェリンを通じての話だから理解するにも限度がある。テープレコーダーをもち出して重要なところはふき込んでもらう。薬の名前、薬効の聞き込み、書物の複写、毎日日々が実に忙しい。夜は子供がテントの周りに集って来て歌や踊をしてくれる。「早くテープレコーダーを出せ」こっちが疲れていようが、眠むたかろうがおかまいなしだ。十一月二日ヘッド・ラマの家でロキシ（ネパールの蒸溜酒）を造るというので見学に行く。アルコール蒸溜法は前から興味を持っており Arghat Barar でも一寸見せてもらったが、詳しい聞き込みをやるには絶好の機会である。蒙古と同じ内取式ヘッドスチール型の蒸溜器を用いている。しかし乳酒は殆んど作らぬらしい。原料はトウモロコシやツアンパ（大麦の粉）等である。十一月六日全員 Sama へ下って来る。Sama での最後の夜、薪を組んで村人と共に踊る。その夜田村氏のキスリングががテントの中から忽然と消える。一大事、ダライラマ兵の懸命の搜索で翌朝キスリングだけは出て来たが中味はもどらず。今まで書物等で Sama の人達の悪口をいやという程読んだし、また聞かされた。しかし、僅かではあるが単身この村に住み込み村人に接した結果、非常に親しみを感じていた矢先である。「やっぱり」 Sama 部落に対する感じはまた元にもどってしまった。だがもう少し考えてみよう。剽窃ぐせをもった人間はどこへ行ってもいるも

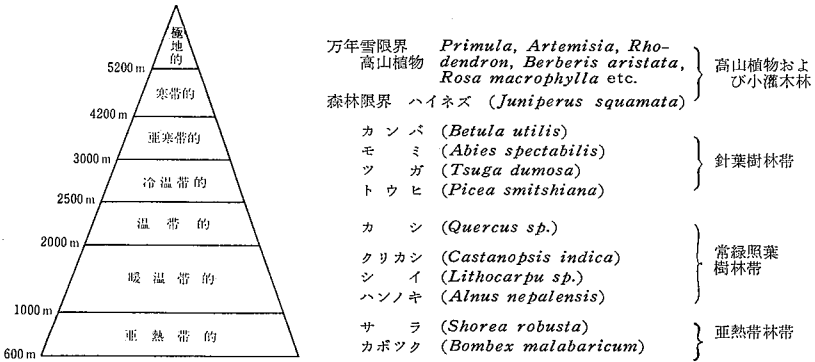
のである。一般の人達は今まで実に親切にしてくれた。全体の  
中の一事だけ見て物事を批判するのはやめておこう。しばらく  
暖かい目で彼等を見ていこう。もっとも田村氏はそんな呑気な  
ことは云っておれない。パスポートをやられたのだから。十一  
月七日盗品が出ぬままに Sama を出発。全く後味の悪い思い  
である。無事 Iakya-Ia を越え九日 Bimakoehi につく。九  
州電々が失敗したヒムルンヒマールがすみ切った青空にくっま  
りと白塊を落している。このあたりではU字型の全く典型的な  
氷河地形が見られる。十一月十一日 Thonje 着、ここから第  
2の目的地ドナコーラを探り、P 29東面と西面との比較観察を  
する。私は東面のブンゲンコーラと西面のドラコーラとの植物  
相の比較に従事する。十一月十七日 Thonje 発 一路 Pokhara  
めざして帰途につく。十一月二十三日 Pokhara 着。この日ラ  
ジオでケネディ大統領の暗殺を知る。Thonje から Pokhara  
までの道筋は暖帯へと移り再び植物が咲きみだれ出す。私は次  
のインド、パキスタンの調査のため是非とも十二月一日までに  
帰国せねばならず、標本の乾燥の事を考えると、この間の植物  
には残念ながら目をつむって行かねばならなかった。

#### 中部ネパールの植物

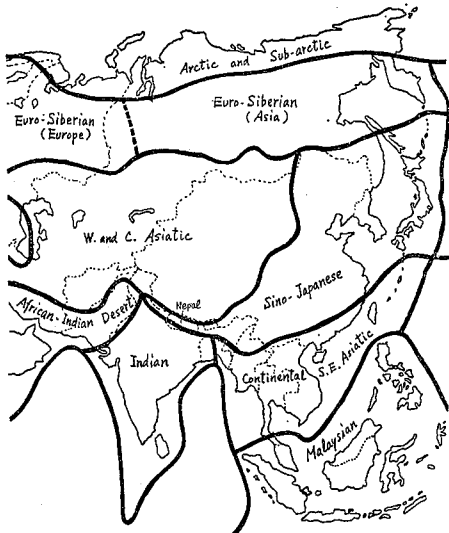
ネパールの植物は古くは Don<sup>1)</sup>, Royle<sup>2)</sup>, Hooker<sup>3)</sup> 等の  
報告があり、特に中部ネパールの植物については今西<sup>4)</sup>、中尾<sup>5)</sup>が  
その概略を記しており、その一部のフロラは北村<sup>6)</sup>、原等によりま  
とめられている。私の歩いた道筋は殆んどマナスル隊と同コー

スであるので、その植物相を語ることは今西<sup>4)</sup>、中尾<sup>5)</sup>等の報告と  
重複をまぬがれ得ないが、再確認の意味で私の歩いたブリガン  
ダキ筋とマルシャンディ筋とを比較しながら述べてみよう。ま  
た薬用植物の分布にも多少加筆しておく必要がある。ただ持  
ち帰った資料(生薬および腊葉標本)はなお整理研究中であ  
る。専門的な面は後の機会に譲りたい。

中部ネパール・ヒマラヤ北緯 28°30' ~ 27°30' に位置してお  
り、ヒマラヤの南麓は亜熱帯に足をおろし、しかもその頂上は  
万年雪で被われているのであるから、ここを歩くことは亜熱帯  
から極地までを垂直に経験するようなもので、温度変化からみ  
るとこの間に暖帯、寒帯を通過することになり、各地帯によっ  
てその植物相が異ってくるわけである。中部ネパール・ヒマラ  
ヤの植物の垂直分布を图示すると(第1図)のごとくなる。北  
緯 27°30' 以南のタライ地区では熱帯林がジャングルをなして  
おり、このあたりから薬用樹脂類が数種でているが、この地区  
は未踏査なので言を持たない。次に中部ネパールの植物を平面  
分布からみると、丁度東西の線で三等分し、南からインド的植  
物相、日本、中国的植物相、チベットの植物相の三相に区分で  
きる。このうち中部部の 1000 m ~ 3000 m あたりのところが、  
日本、中国を通じて狭い帯状にのびた日華区系にあたるところ  
で、常緑照葉樹林を主体とした林相がみられる(第2図)。日  
本の樹林相と異なる点は落葉樹が少く、また暖帯的な照葉樹林と  
亜寒帯的な針葉樹林との間にブナ林を優占種とした落葉広葉樹  
林がみられないことである。亜熱帯の植物は日本ではなじみの



第1図 中部ネパールヒマラヤの植物の垂直分布



Ronald Good : The Geography of the Flowering Plants から

第2図 アジアの植物分布区系

少ない温室から抜けてきたものばかりだが、1000 m 以上の暖帯のものは如何にも親類と考えられる日本でなじみ深い草木が現われだす。全く「やあ、今日は、しばらくでした。」と云いだしたくなるような植物が次々と現われ、旅情をいやが上にも高めてくれる。ブリガンダキおよびマルシヤンディの道筋において、600 m ~ 1000 m あたりの亜熱帯で指標になるのはサラノキ (*Shorea robusta*) である。薬用のもではマルシヤンディ筋の Khudi 附近でマラリヤの特効薬、常山 (*Dichroa febrifuga*) が多くみられた。このあたりではマメ科の灌木が非常に多く、またノボタンの類 (*Melastoma sp.*) や *Bauhinia sp.* が行く先々で美しい花をつけていた。栽植されているものは、ポインセチア、エウフォルビア、ポダイ樹マンゴー、バナナおよびミカンの類等である。ヤンは 2000 m 近くまで上っており、マルシヤンディの Thonje 附近の絶壁にはらばら野生しており、よくぞあんなところまで生えたものだと思われるような状態で生育している。ブリガンダキ、マルシヤンディを問わず、グルン族の地帯には道々に休み場があり、そこに必ずといってよい程二種のポダイ樹が植えられている。ヘンガルポダイジユ (*Ficus bengalensis*) とインドポダイジユ (*Ficus religiosa*) であり、ネパールでは前者を *bol*、後者を *pipal* と云う、これらは聖木としてあがめられている。巨木神仰のなごりであろうか。高度 1000 m あたりからクリに似たクリカシ (*Castanopsis indica*) が指標木となり、また日本にも普通のクヌギの類が現われだす。さらに高度を増すとカシの類 (*Quercus sp.*) が優占し

だし、2000 m ~ 3000 m ではトウヒ (*Priza smithiana*) やツガ (*Tsuga dumosa*) が優占種となる。ブリガンダキ筋では峡谷が深く峻壁が露出している部分が多く大きな純林は全くみられず、Nysak を過ぎたチベット系民族の部落あたりから、トウヒ、ツガの類の疎林があらわれだし、マツは高山性のゴヨウマツ (*Pinus griffithii*) に代る。それまでのマツは低地性のサンヨウマツ (*Pinus roxburghii*) であり、これは 1000 m あたりから現われ 2000 ~ 2200 m で切れる。3000 m 辺からシヤクナゲの類 (*Rhododendron campanulatum*) が現われるが、マルシヤンディ筋では 2500 m 位までみられる。3000 m 以上になると針葉樹ではモミ (*Abies speciosa*) に混じてカラマツ (*Larix griffithiana*) が見事な黄葉をみせていた。しかしこのカラマツはマルシヤンディ筋では全く見られなかった。恐らく湿度と気温の差であろう。カバノキの類 (*Betula utilis*) は Sama 部落のマナスル氷河湖近辺 3700 m から、ラルキヤ峠を越え、Bimutakochi に下るまでの 4200 m 以下のところに美しい樹肌をあらわしていたが、Sama 部落から Bungenkhola を通って Base Camp (4500 m) への道筋には全くみられなかった。しかし P 29 西面の丁度 Bungenkhola の反対側にあたる Donakhola の 3500 ~ 4000 m 辺では、以前大隊によって Kambakhochi と名付けられたところに見事な純林があり、それに全くびっしりとサルオガセ (*Usnea longissima*) が付き、落葉した枯枝を色どり、風に揺られていた。このようにブリガンダキ側とマルシヤンディ側を比較すると、前者は地形的に険悪なところが多く森林が意

外に貧弱であるが、後者では割合見事な純林が残っている。また比較的温湿のためか、サルオガセ、ラン、シダの類が樹木に多く付着している。私は *Bungenkhola* と *Donakhola* しか見ないないので、これらの樹林の違いが各谷によってそれぞれ異なるのか、それともブリガンダキとマルジャンディという大峡谷の差であるのか詳細はわからない。モミ、カバノキの林が切れる 3700~4200 m が森林限界で、それ以上になると日本でみられるハイマツに代ってハイネズ (*Juniperus squamata*) が現われ、また各種のシャクナゲ (*Rhododendron selosum*, *R. anthopogon* 等) がみられる。高山性草本は P 29 の東面と西面では殆んど差はないが、*Bungenkhola* を上りつめたマナスルと P 29 の氷河が合流してできた *Bungengompa* 付近の大氷河の南側と北側では、日照時間の差からであろうか、多少の違いがみられた。次に薬用植物の面から眺めると、ネパール系、チベット系ともに 1000 m 以下の亜熱帯のものが割合用いられている。しかし道筋に住むグルン族はその使用法を殆んど知らない。むしろこう云った面ではチベット人の知識は豊富である。もっとも何事によらずグルン族と比べるとチベットの方が知識欲が旺盛であるからであろう。この地方では *Zingiber*, *Curcuma*, *Alpinia*, *Metoplexis*, *Gynenchum*, *Angelica*, *Dichroa*, *Achyranthes*, *Cirsium*, *Artemisia*, *Adiantum* 等が薬用にされているが、これは恐らくインドのアーユルヴェーダ医学の知識が入ったものと思われる。また日本で広く民間的に用いられているゲンノショウコ (*Gentiana nepalense*) やセンブリの類 (*Suertia angustifolia* など) も

しばしばみられたが、これにはグルン族は全く関心を示さなかった。<sup>1)</sup> *Suertia* の高山性のものは 4000 m あたりまで生育しており、チベット人は広く薬に供している。<sup>2)</sup> 高山性の植物はチベットでは広範囲に薬物として利用されているように、*Saussurea*, *Cirsium*, *Artemisia*, *Taraxacum*, *Rhododendron*, *Gentiana*, *Suertia*, *Rheum*, *Rosa*, *Colanester*, *Berberis*, *Podophyllum*, *Aconitum*, *Delphinium*, *Clematis*, *Habenaria*, *Oreitis* 等多種類が供応されている。

1 他の地域に住むグルン族はインドのチレンタ草の代用として用いていたとのことである。

2 別報参照

## ネパール文化と医療

一般にネパールと云えば山ばかりの国と考え勝であるが、インド国境に近い南のタライ地区は大きな高度差のないジャングルをなしている。またカトマンズ盆地のような広々とした平野もあり、高度は 300 m ~ 8000 m の中があり、山の塊っているところは、ネパールを東西の線で南北に二分した北の部分である。そしてヒマラヤの大山脈はネパール領のチベット国境側を東西にのびており、この山脈の横腹をぶち切って大峡谷があり、その峡谷に沿って人一人やと通れるような道がからくもつけられているのである。古来からこれら峡谷の道はチベットとネパールの交易の通路として、チベットからは岩塩や羊毛、ネパールからは穀物等が互いに物々交換されていた。そしてこの交易を通してネパール文化とチベット文化の接触が行われて

いたのである。このように文化交流は行われているにしてもチベット系民族とネパール系民族は互いに違った次元で生活している。ネパール文化は多分にインドの影響を受けており、その宗教的基盤はヒンズー教であるが、Kathmandu のような都会を除いては文化程度はかなり低いものと思われる。その点非文化的であることには変りないが、文化の面から見ればチベット民族の方が進歩しているように感じられた。これはそれぞれの国の背景に関係あることだが、確かにチベット民族にはかつて独自の文化を築き上げたという底辺的なものが見られる。

今まで書物でチベット人ポーター達の悪口を随分と読まされたが、好奇心と知識欲が旺盛で誇り高い彼等の心を傷つけない限り、むしろつきあい易いと思った。もっとも私が歩いたのはブリガンダキ筋とマルシャンディ筋だけなので、一般的なことは云えないが、そのネパール系のグルン族との比較においてチベット人の優秀性を認めるのである。もっとも最近とはみに文明の波が、インド側からと、中国・ソ連側からと浸透してきているので、次第に共通したものが現われだしたことはない。ブリガンダキ筋の Namu とマルシャンディ筋の Thonje を結んだ線から北側は完全なチベット民族地帯で、Ngyak と Thonje を結んだ線の南側は完全なグルン族地帯である。そしてその中間に両者の混合地帯があるわけで、このネパール系民族は生活様式が多分にチベット化している。Ngyak と Namuru 間の人達は「自分達はグルンでもチベットでもない。クタン族であ

る」と云っていた。しかし建築、服装はチベット人と似ている。このことは現在のネパール政府の政治のあり方から見れば逆のように思われるが、生活というものが、高度や気温に非常に左右されるものだという見本をみせつけられた感じがした。高度 600~1000 呎を中心としたネパール文化と、3000~4000 呎を中心としたチベット文化とは農耕様式も異なるし、また気温の違いから服装、建築様式も異ってくるのである。その他宗教的にヒンズー教とラマ教の違いからくる風俗、習慣の相違もみられる。そして民間医薬の面でも文化の差、植物分布の相違から使用する薬物は異ったものが多かった。これら二つの文化を類型的に比較すると次のようになる。

(A) ネパール系民族地帯

- 一、600~1000 呎を中心に住居する。
- 二、煉瓦作りで壁をぬった家。
- 三、屋根はアズマヤで藁葺き、または木の葉葺き。
- 四、土間に敷く竹やわらで編んだ席。
- 五、木綿の粗末な着物を着た裸足の人。
- 六、主食は米、小麦粉、ひえ、あわ及びトモロコシ(粉食多し)
- 七、腰にさしたククリ。(曲った刀)
- 八、道端にインドポダイジュとベンガルポダイジュを植えた休み場。
- 九、水田に植えた稲と家畜の水牛、羊、高度を増すと畑に植えたシコクビエと家畜の牛、羊。
- 十、宗教はヒンズー教が主、言語はネパール語



(B) チベット系民族地帯

- 一、3000〜4000Hを中心に居住する。
- 二、石を積み重ねた家。
- 三、屋根はキリヅマの板屋根または水平な板屋根。
- 四、土間に敷く羊毛の絨毯や毛皮。
- 五、羊毛のぶ厚い着物を着、長靴をはいた人。
- 六、主食は大麦や雑穀の粉。
- 七、腰にぶら下げた直刀。
- 八、道端に祀ったマニ（経文や仏像を刻んで石碑）、村の入口にあるチオルテン（塔）、ゴンパ（寺）、いたるところにたてられたタルチョ。（経文を書いた旗）
- 九、畑に植えた大麦（夏麦）や雑穀と家畜のヤクゾムや牛、羊。
- 十、宗教はラマ教。言語はチベット語。

以上のようにネパールではその文化圏が、インド的なものとチベットのなものに分けられるから、その医学も自ずと二つの系統に分けられる。一口で云えばネパールには独自の医学はない。しかしネパールという国が以前から文化的にも経済的にもインドに師事してきた国柄であるから、医学の面でもその主導権はインドが握っているわけで、インドで行なわれている医学が即ちネパールの医学であると云いうる。首都 Kathmandu には現在アールヴェーダ医学、ユナニー医学、ホメオパシー医学およびアロパシー医学と四統の医学が行なわれており、それぞれ違った方法で治療をしている。アールヴェーダ医学はインドで起った世界最古の医学と云われており、用いる薬物の

種類は非常に多く、インドでは極めて盛んで、これのみで治療を行う病院があり、研究面でも相当力を入れている。最近では欧米各国の学者が注目しはじめ、恐らく漢方医学に先がけてこれら薬物の研究がなされるのではなからうか。しかしネパールではまだ研究するところまではいっていない。それに政府の援助と研究者の養成が必要であろう。私は Kathmandu のポイデ・ドカン（生薬店）を廻って約二〇〇種の生薬を蒐集し、その名前、用途の聞き込みを行なったが、アールヴェーダ医学で使用されている薬物が多かったようである。ユナニー医学はギリシャ医学から派生したアラビヤ医学の流れで、これを行っている人は少ないが、インドのパンジャブ、カシミール地方から入ってきて行なわれているとのことである。ホメオパシー医学は近世にドイツで起った学説で、最近日本でも漢方をやる人達の間でよく論じられているが、インドではなかなか盛んらしく、これをインドで学んだ医者が Kathmandu にも相当いる。用いる薬物は殆んどヨーロッパ系の生薬である。最後のアロパシー医学はホメオパシー医学に対する云い方で即ち近代西洋医学である。これら医者数は現在統計資料が皆無なので不明である。最近ネパールに対する各国の援助計画が実行され、多くの国の医者がこの国に入り込んで治療を行なっている。Kathmandu には二つの医学校があるそうだが、そのうちの一つは Ayurvedic system の college である。どの程度の規模のものかわからない。製薬企業は存在せず凡てインドにおんぶしている。それ故もちろん薬学の専門学校はない。しかし街中には

薬局が割合多く、その大部分はなかなか立派な店舗を構えている。陳列してある薬は殆んどインド製であるが、他にイギリス、ドイツ、スイス等の薬品もある。日本製品は全く見かけなかったが、今後進出の余地があるのではなからうか。これら薬品は一般に高価で、われわれが日本から持っていた薬品はどこでも引張り肌であった。薬局の他に日本と同様薬種商とも云うべき生薬店がある。これらの店は市場の裏筋に多く薄汚なくお愛想にも立派とは云えないが、一般大衆の利用度は高く、よく流行っている。薬が非常に安価であることと、気安く買えるということが原因であろう。生薬の種類は二〇〇〜三〇〇程であるが、この主人はそれぞれの薬の薬効を実によく知っており、客から訴えを聞くこととさつと処方する。薬屋というより医者と言った方がよいかも知れぬ。教育はインドで受けたものが多いが、ネパールでも高校程度の生薬専門の学校があるのとことである。ネパール語の薬物書も出版され、彼等の唯一の参考書となっている。

ブリガンダキおよびマルシャンデイの谷筋には医者も薬店もない。一体彼等は病氣になったらどうするのであるうか。軽症はほっておくが、重病者は背おって *Kahmandu* とか、*Pokhara* のような都会に連れていくとのことだ。*Pokhara* にはスイス系の立派な病院が建っている。グルン族の間では多少民間医療が行なわれているようであるが、用いる生薬の種類は少なく、それも全部チベットやインドから入ったもので身近なもの活用の知らないように見受けられた。西部ネパールの

奥地へ行くと今なお祈禱師がいるとのことだが、私が歩いた道筋では残念ながら見かけなかった。

チベット人の部落に入るとアムジー(テマ僧医)がいる。しかしこれも相当大きな部落でなければならぬ。私が十日程住み着いた *Sana* 部落は人口五〇〇人余りのブリガンダキ筋では最大の村であり、ここには以前から住んでいる老人のアムジーがおり、灸を主体とした治療を行っていたが、薬物に関しては殆んど知識がなく、実にたよりのないものであった。一般にチベット人は凡ゆる面で好奇心が強く、あつかましく、われわれは彼等の診療にはほとほと手をやいたものである。結核、下痢、頭痛、眼病等が多い。ヨード不足からくる甲状腺腫はこの辺では病氣とは思われていない。グルン族に多い足が細くて腹のとび出た栄養失調症はチベット人には余り見かけられない。

三、四年前にチベットから逃れてこの村の周辺部にテントを張って住み着いている難民の中に今一人アムジーがいた。彼は四〇才前後の小柄な人で妻と娘の三人暮し、名前はチャンパ・インネと云い、他の難民達と同様 *Sana* の村はずれの羊毛造りのテントに住んでいた。時々村人がきて治療を受けていたが、先ず脈をみ、顔色、舌等を診察していくのは漢方の治療とよく似ている。現在のチベット医学が八世紀頃アユールヴェーダ医学のサンクスリット原典からチベット語に訳され、それに漢方医学の知識を取り入れてその土地に合う医学として作り直されたものが連綿として続いているのであらうと云われているから、漢方医学と似ているのは当然かも知れない。彼とは私が

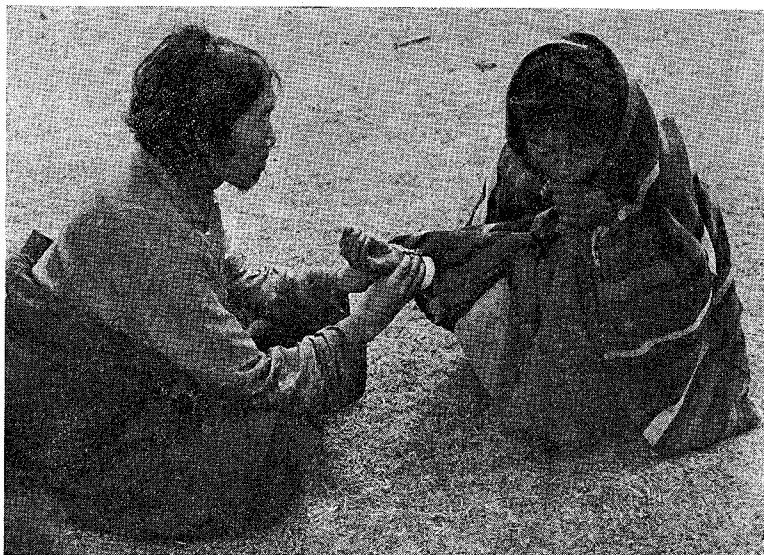


写真1 チベットのラマ僧医が患者の脈を看しているところ



写真2 リンドウの類 *Gentiana depressa* Don チベットの  
医者はこちらを *Pangyan-karpo* と称し、全草を鎮咳薬  
として喘息や咽喉痛の治療に用いている

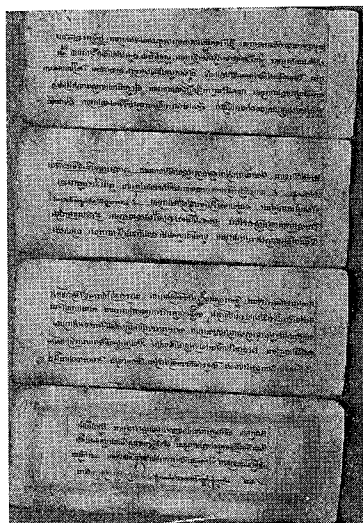


写真3 チベット医薬学の物書

China に住んでいる間にすっかり友人になり、一緒に薬草採集をしたり、私の持っていた日本の近代医薬と交換にチベットの生薬約一二〇種をわけてもらったりした。そしてそれら生薬の名前、薬効、処方構成等毎日のように往き来して聞き込みを行なった。まことに親切な人で、チベットの薬物書の複写、実物を持ち帰れたのは一重に彼のお陰である。また私の助手を勤めてくれたシエルパのアンツェリン・パンチの協力にも大いに感謝せねばなるまい。最近これら入手できたチベット薬物の研究に手をそめだしているが、整理した瓶の中から生薬を取り出すたびに、雪煙をあげるマナスル山麓でのアムジーとの出会いの一場面が、一幅の絵のように脳裏に浮んでくるのである。

チベット生薬は前述のようにインド、中国の影響を多分に受けており、その中には漢方で使用する甘草、桂枝、烏頭、生黄蘗香等があり、またインド産のものでは鬱金、白檀、木香等が混っている。しかし純粹にチベットに特産する植物、動物、鉱物類も相当数あり、今後の研究を待たねばその基源や薬効の真实性はわからない。一般にネパールの生薬と比較すると動物、鉱物性生薬を豊富に用いており、私が入手した生薬中約半は植物性以外のものであった。その中にはチベット産の狼の舌とか、チベットに棲息する鷹の喉の部分とか危し気なものもある。また用法もネパール生薬とは異なり、大部分が粉にして温湯で服用する。鉱物性生薬は殆んどが外用薬で、折骨、筋肉痛、外傷等に用いており、植物性生薬は大部分が全草を使用し、漢薬のように使用部分を根葉、果実等と限定していない。

また用途も多少の違いがあり、例えば中国やヨーロッパ等で健胃薬として用いる。Gentiana 属の植物をブンゲンカルポおよびウパと称し、共に鎮咳薬としている。

ネパール生薬は前述の如くインドのアールヴェーダ医学の影響が強い。大部分が植物性で、私が蒐集した約二〇〇種のうち鉱物性のものはたった二種類しかなく、動物性のもの麝香、熊胆、龜甲位で非常に少ない。用法は煎じて飲むものが多く、また全草を使用するものより根、葉、果実等と使用部分を分けているものが多い。チベット生薬にしろ、ネパール生薬にしろ単味で用いることは少ないようで、必ず数種混合しあるいは定った処方を作り使用している。

今後これら薬物を比較研究することにより、多くの課題が生れてくるものと期待する次第である。

以上記したものは一九六四年にあちこちらの新聞、雑誌類に書いたものをまとめ多少手を加えたものであって、現在いじりしく発展したネパールの実情にそぐわないものかも知れないが、当時のことを記録しておく意味で、本報告書の末尾をけがさせていだいた。

文 献

- 1) Don, D. : Prodr. Fl. Nep. (1825)
- 2) Royle, Ill. Himal. Mount. (1839)
- 3) Hooker, J.D. ; The Flora of British India, I~VII : (1872~1897)
- 4) 今西錦司 ; ヒマラヤを語る, 194 (1954) その他
- 5) 中尾佐助 ; マナスル, 1952~3, 1 : 190 (1954)
- 6) Kitamura, S. ; Fauna and Flora of Nepal Himalaya, 1 : 73, 278 (1963)

第三次隊学術調査報告 (生薬関係)

1. 難波恒雄, 中部ネパールにおけるアルコール蒸溜法, 薬学研究, Vol. 36, No. 6, 171-184 (1965)
2. 難波恒雄, 南登代子 ; チベット薬物の生薬学的研究 (1) Pangyan-Karpo および Upa について, 植物研究雑誌, Vol. 43, 234-247 (1968)
3. 難波恒雄, 溪 忠 人, 南登代子 ; チベット薬物の生薬学的研究 (2) "Tikta" および "Gyati" について, 植物研究雑誌, Vol. 43, No. 9, 268-276 (1968)
4. Tsuneo NAMBA and Tadato TANI ; Pharmacognostical studies on the Tibetan herbal medicines (3). On "Sagdik" THE JOURNAL OF JAPANESE BOTANY, Vol. 43, No. 12, 514-521 (1968)
5. Tsuneo NAMBA and Tadato TANI : Pharmacognostical Studies on the Tibetan herbal medicines (4). On "Khaunjun", The Journal of JAPANESE BOTANY, Vol. 44, No. 6, 176-180 (1969)

## ネパール の 民 家

### 大 野 義 照

首都カトマンズからチベットとの国境近くのチベット人の村サマに至るまでの沿道の民家について、キャラバンの順に述べよう。

このルートは文化的にはヒンドウ文化圏からチベット文化圏へ、自然環境は低地から高地のそれへと移り、これらの影響を受けて民家の形態は変化している。

#### カトマンズ市街の民家

カトマンズ市街には、王宮や寺院の間に三階および四階建ての共同住宅がある(写真1)。そのうち表通りに面しているものは、一階に店舗をかまえている。建物はどれも古く、一見レンガ造りの構造のようであるが木構造で、柱と柱の間にレンガが積まれている。四階建てともなると自重が大きく、壁厚は四〇〜五〇cm、柱は二重柱である。一般に一階床は土間で二階・三階床も床板の上に泥が塗られている。出入口は小さく両開き戸で、これらの戸や窓の木枠には細かい彫刻がされている。屋根は瓦葺き、軒は斜材で支えられ、この斜材にも人物や動物が

細かく彫られているものがある。

カトマンズでは二つの住居を尋ねる機会を得た。一軒は街で知り会った少年の家で三階建ての古い共同住宅、もう一軒は世話になった役人の郊外にある三階建ての一軒家である。珍しく感じたのは、いずれも三階床まで泥がきれいに塗られ、台所が三階にあることである。水は屋外の共同水場まで女が水がめを持って汲みに行っていた(写真2)。

#### アルガトバザールまでの民家

交通路の要所に発達した街であるトリスリバザール(写真3)とアルガトバザール(写真4)は、石だたみのおりに面して専門商家がならんでいる。屋根は切妻、瓦またはトタン葺きであり、壁はレンガないし石積みで開口部には木枠がはめられている。全体にカトマンズ郊外の民家の造りとよく似ている。

トリスリバザールからアルガトバザールまでに見られる集落は、純農村である(写真5)。これらのうち峠や山腹の集落は

かなり密集しているが、川べりの平野部の集落は分散している。集落間の距離は短かく、二時間も歩けば次の集落に入る。

これらの村には必ず旅人相手の茶店がある(図1)。茶店の土間には、泥のカマドが設けられ、常時湯が沸き、ミルクが温められている。注文に応じてインド製の紅茶を茶こしにとり、湯を注ぎ、ミルク、砂糖を加えてでき上り。ガラスカップ一杯約十円である。客の多い店では手廻しのフイゴを使い、縁台や長椅子を置いている。茶とともに雑貨を扱っている店、素焼のツボでいったポップコーンや落花生、バナナを売っている店もある。農家も茶店も二階建てで壁は石積み、屋内外とも石の上には泥が塗られ石面は見えない。壁面が白や赤茶色に彩色されている家もある。屋根は草葺きで入母屋が多い。建坪は約一〇〜三〇m<sup>2</sup>ぐらいで、間仕切りのある家は見当らなかった。開口部は腰をかがめて入る出入口と三〇×三〇cmぐらいの小さい窓が一つあるだけで、屋内は昼でも暗い(図2・3)。

### ブリガンダキの民家

アルガトバザールで主街道を離れ、ブリガンダキに入ると道は一段と貧弱なものとなり、ところによっては、われわれの通った跡が道となった。ブリガンダキは人の往来も少なく、茶店や木賃宿はないし、バザールと呼ばれるような集落もない。谷が深く兩岸は切り立っているの、ほとんどの集落は山腹に発達し、少しでも耕作可能な斜面は畑とされ、その耕地を見下す位置に集落がある。きびしい地形の影響を受けてか、三〇〜五〇戸の農家が一面まりとなって密集している(写真6)。私た

ちは集落の中に野営地を求め、一日一五〜二〇km歩いたが、二つの集落を通り抜けた日もあったし、その日の野営地まで集落のない日もあった。対岸の山腹に目をやると同じような集落がある。

ブリガンダキに入って一日目の集落では、それまでの民家との違いが室内にあらわれた。それは部屋の間のカマド以外に中央には簡単な炉が設けられていることである。炉の存在は、昨日までの村よりも約六〇m高いということによるものである(図4)。

二日目、家のまわりにバナナはなくなり、家の外観は一変する。屋根は切妻、板葺きとなる。屋根に板が用いられるようになったのは、地形が険しく、開墾不可能な林が残り、木材が容易に手に入るためと思われる。壁は石と泥からなっていることには変りないが、泥の使用量が少なく、外側は石の積み目が見える。全体に、二階建てが多く、二階床は板が並べてあるだけで泥は塗られていない。

一つの村において、家の大きさ、間取りに大差はないが、住居とする建物のみ家、家畜小屋を持つ家および家畜小屋と物置小屋を持つ家と付帯している小屋に差がある。家畜は、食料、使役以外に化学肥料のない当地において唯一の肥料を生み出すものとして重要である。

### チベット人の村

ブリガンダキも上流に入ると、二重、三重に積み上げたチョルテンなどの宗教的構造物が現われ、ラマ教文化圏に入ったこ

とがわかる。カトマンズを出発して十日目の野當地・ジャガートで初めてチョルテンを見て以来、村の出入口や道端にチョルテンやマニ石をならべたメンダンが現われてくる。人種はまだグルン族であるが、ラマ教化しチベットの風俗や生活様式を採用し、民家の形態もチベット人のものと似ている。このような集落をいくつか過ぎてチベット人の住む世界に入る。

カトマンズを出て14日、兩岸切り立った深いV字谷にも、かなり広い河岸段丘が現われ、そこにチベット人の集落が点在する。これらの集落のうち下流からプロック、ロー、サマの村をとりあげる。標高二五〇〇〜三〇〇〇m、樹木はツガやモミの針葉樹が多くなる。各村ともかなり広い平坦地を有しているが、本流や支流が入り組み、それら平坦地は続いている。村と村の距離は半日ないし一日行程位。これらの集落の間にも、わずかの平地を耕作する一軒家がある。

プロックは本流沿いの道からはずれ、右岸を高度にして約三〇〇m登った河岸段丘に開けた村で下からはまったくその存在に気付かない。急な坂道を登り切ると、大きな目玉を持つ塔のカンニがあり、それをくぐると眼前に一端はブリガンダキに落ち、後方は急傾斜の山に続く〇・五×二km四方ぐらいの平坦地が広がっている。平坦地はすべて耕作され、トーマロコシの取入れの終わった畑には、家畜が放され、山手を中心に五〇〜六〇戸の民家が点在する。他の村と違って密集度は小さい。村内を巡る道は幅一〜二m、石が敷かれ、両側は石垣が積まれている。山すそと中腹に二つのゴンパ(ラマ寺)がある。高山に囲

まれたこの平地の中央には、小川が流れ、小川に沿って木立が繁り、その蔭では尾の長い山鳥が遊んでいた。まさに桃源境である。

ローでは数十戸の民家が密集し、長屋形式の家が多い。ゴンパは密集した民家の間にある。地形は、プロックほど平坦でなく、大部分の耕地は村の下手にある。村はずれには、カンニと長いメンダンが続く。

サマ(写真7・8・9)はブリガンダキ最奥の村(標高三五〇〇m)で、ここからチベットまで集落はない。サマは標高七〇〇〇〜八〇〇〇mの高峰に囲まれた盆地に開けた一大集落である。平坦地およびチベットとの交易路の要所という地理的条件にも恵まれ、ブリガンダキ沿いの集落では一番大きい。一〇〇戸ぐらいの民家が小川を中心に密集し、約四百人のチベット人が住んでいる。集落の周囲に畑があり、その続きの草地は放牧地となっている。放牧地の第一のカンニ、畑の中の第二のカンニをくぐって集落に入る。村内にもメンダン、彩色されたチョルテンがあり、集落から約五〇〇m離れた高台に大僧院がある。このように、まとまった集落には必ずゴンパがある。集落内にあることもあるが、大体集落を少し離れた高台にあり、屋根は緩傾斜のスレート葺きの寄せ棟で、二重、三重に重なり、先端には黄色の金具が輝き、石積みのはがし塗りがされたうえ、白く塗られて遠くからでも識別できる(写真8)。内部は正面に数体の仏像がまつられ、部屋中央に釣鐘状の大きなマニ車が吊り下り、まわすと涼しい音がする。天井や側壁には、極



彩色の仏画が描かれ、棚には教本が納められている。あるゴンパの天井裏には、火葬にした後の灰や骨を泥と交て、拳大の円錐形に固めたものが無数に納められていた。

チベット人の住居(図5・6・7・写真9)

切妻、平入りの二階建て。一階は土間、二階床は数本の丸太柱で支えられ、棟木は直接壁にのせ、二階には柱はない。全体に長屋形式の住居が多いが、一戸建ちの家もある。

構造材料はすべて自然のものが使われ、屋根は板または自然石のスレートで葺かれ、壁は石積み、二階床は板である。

建築用具は、ナタとチョウナだけで、鋸は使用されていない。屋根や床に用いられている板もナタ一本で得たものである。

人々は二階に住む。一階は家畜小屋や物置として使用され、二階居室へは屋外からの階段で前室に上り、その奥の低くて狭い両開き戸をくぐって入る。前室は板敷、前面は板で囲われていない場合もあり、そこは穀物や家畜の飼料とする草置場となっている。また前室の一部を板壁で区切って仏間を設けている家も多く、彼らが熱心なラマ教徒であることがわかる。居室は、長さ一九〇、幅五〇、厚さ三〜四cmの板敷きで、妻側の壁より中央に約一・二m四方の囲炉裏が切られている。囲炉裏は下から板、スレートおよび泥を重ねて作られ、真中には鉄製の五徳が据えてある。ここで茶を沸し、食事をし、暖をとり、そのまわりで寝る。燃料は、乾燥地帯のチベット人は家畜の糞を用いるが、ここでは薪である。囲炉裏端の席は決っている。向

って右側は男、左側は女の席で、奥から年長者の順に座る。図6・7はそれぞれブロック、ローの実力者の家であるが、床より一〇〜二〇cm高い「座」が、窓ぎわと正面の壁沿いに設けられ、その前にテーブルとなる台が置かれていた。ローの家では、毛織が敷かれていたが、その上でも靴を脱ぐことはない。正面の壁には棚や戸棚があり、左には、日常使用する食器、鍋、壺が、右には、仏具などが雑然とならべてある。

一般に、石壁で囲まれた空間を区切ることはない。ブロックの家では、図のように壁沿いに板壁で区切り、物置として使われていたが、他にはこのような例はなかった。またブロックの村では、二戸で一棟をなしている家が多いが、この二戸に住む家族の関係は、尋ねたけれど要領を得ずわからなかった。

天井は、張ってある家が多く、その高さは約二m、ある家では、物置となっていて、はしごをかけてあった。ただし、囲炉裏の真上は天井がなく、煙はそこから屋根と壁の隙間を通じて外に抜ける。囲炉裏が、妻側の壁ぎわ中央にあるのは煙抜きにも都合がよい。

窓は全体に小さい。一般の家では、四〇cm四方の空間があるだけ、図の家の飾りのついた木製の窓も空間は小さく、いずれの室内も昼なお暗い。明かりとしては、バッテリーランプがあるにはあるが、宗教的な行事に用いるだけで日常生活には使われない。

家の前面には、必ずスレートを敷きつめた庭があり、その周囲は石垣で囲われている。大きな家は、門構えの広い庭を持つ

ている。その庭では、風速やから竿を用いた脱穀作業および家畜の世話が行なわれる。

ここに述べたことは、当地方のチベット人の住居の特徴であって、チベットや、ネパール国内でも乾燥地帯のチベット人の住居は、木材を使うことが少なく、二階以上も床は土間で、屋根は平屋根である。このような相違は、ブリガンダキが、比較的雨が多いということ、そのため木材が豊富であることに因るものである。

### まとめ

カトマンズ郊外からサマに至るまで、民家は二階建てが多く、壁は石と泥から成り壁厚は三〇〜四〇cmと厚い。窓は小さく、しかも少なくして室内は、昼なお暗い（カトマンズの市内の他は電灯はない）。居住スペースは一ルームで、屋内に間仕切りはない。入口は小さい木製の両開き戸が木枠ごと壁にはめ込まれている。またカトマンズの古い住宅を含め、浴室、便所がない。便所がないということは、糞尿を肥料として使わないことにもよるのであろうか。以上は全般に共通していることであるが、奥地に進むにつれ、次のような変化が現われた。屋根は市街地の切妻から入母屋、再び切妻となり、それに対応して瓦葺きから草葺き、そして板ないし自然石のスレート葺きとなる。壁は泥の使用量が減り、初め室内外とも泥が塗りこめられていたのが、室内だけとなり、ついで内外とも石積みそのままとなる。二階床は、板の上に泥を塗り土間とされていたものが板の間に、居住空間は一階から二階へと変る。火の使用場所は、



写真1 カトマンズ市街

カマドからカマドと囲炉裏の併用そして囲炉裏のみとなる。ネパールは多民族の国であり、ブリガンダキ沿いにもいくつかの民族が生活をしているが、これら住居の変化は、民族の違いによるもののほかに、上流になるにつれ、高度が上り、気温が低くなり、また木材の入手が容易になるなどの自然環境および、上流からのチベット文化、下流からのヒンドウ文化の浸透によるものと考えられる。（一九七一年記）



写真3 トリスリバザール



写真2 カトマンズの共同水場

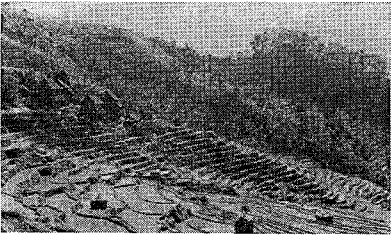


写真5 農 村



写真4 アルガトバザール

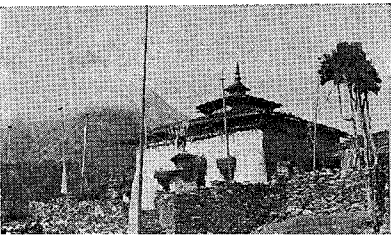


写真7 サマ村の入口

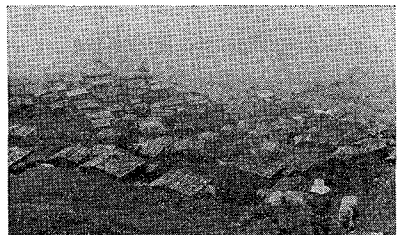


写真6 ブリガンダキの村

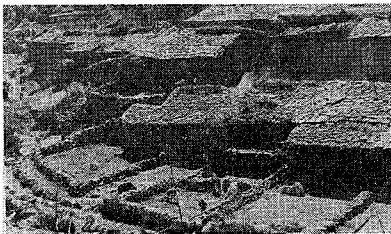


写真9 サマの住居

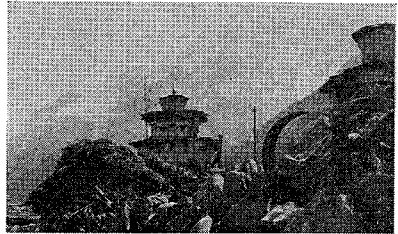


写真8 サマのゴンパ

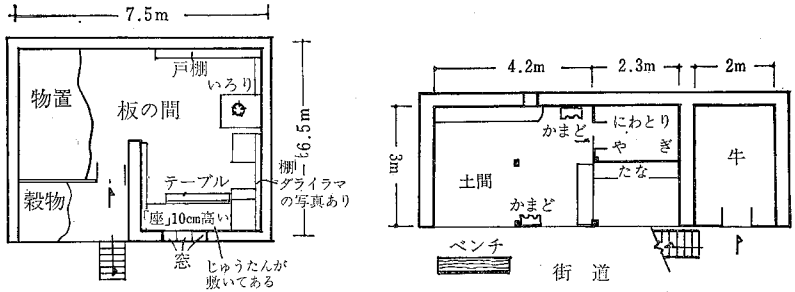


図1 茶 店

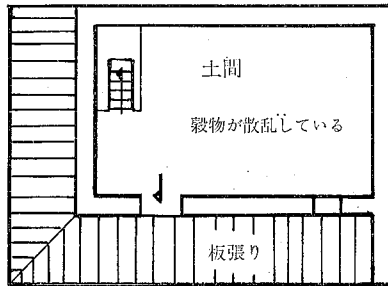
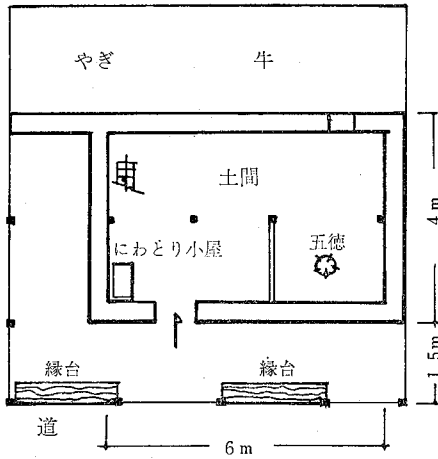


図2 街道筋の民家

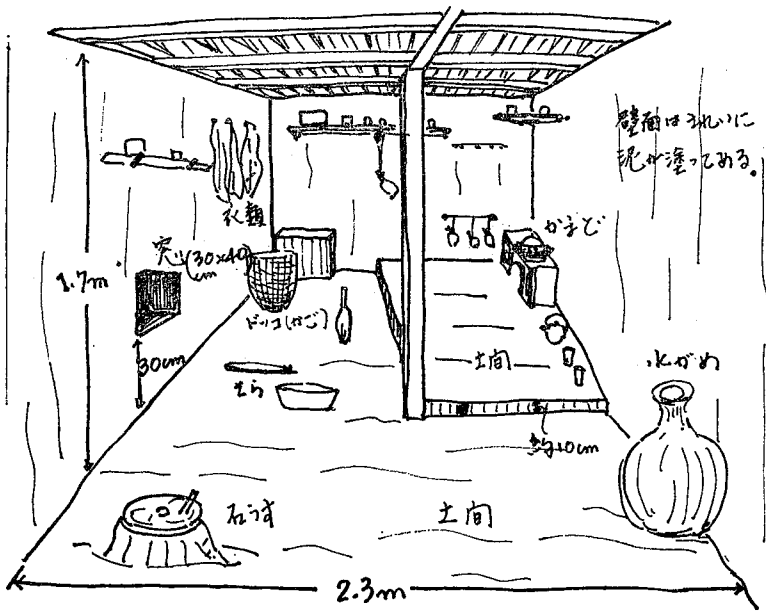


図3 街道筋の農家（室内）

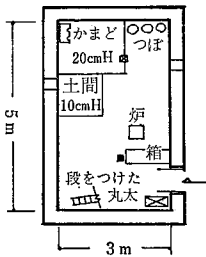


図5 ローの民家

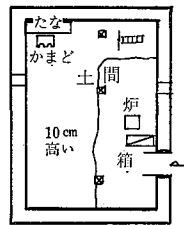


図4 ブリガンダキ下流の家

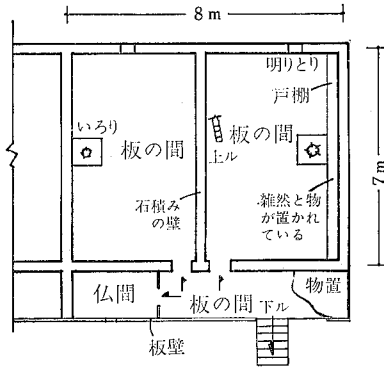


図6 ブロックの大きな家

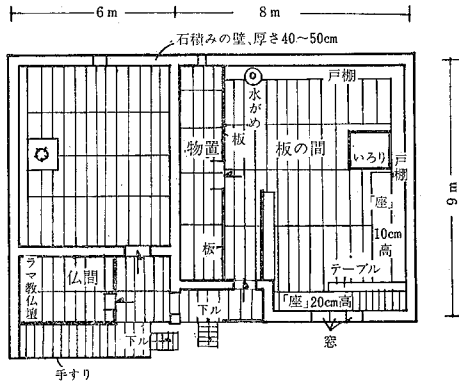


図7 ローの大きな家

## 遠征隊事務局での回顧

—(私達同期の者を中心に)—

大工原 恭

### 第一次遠征隊

今から考えると、昭和三十二年に阪大山岳部に入った私たち(田村、広瀬、佐藤茂、玉井、大島浩、田井、笠松、村井、大工原)の学年が、一次から四次までのP29遠征隊に、常に大きな位置を占めて来ているが、これは、昭和三十五年(一九六〇)夏の薬師登山に始まったと思う。その山行は、篠田会長のほか、OBや現役が参加したが、これは篠田会長のヒマラヤへの体力テストであった。その山行から一カ月ほどして、徳永OBから、阪大山岳会で来春、P29へ行くから、現役全員で準備を手伝えという話があった。

当時の現役にとって、ヒマラヤは遠い夢であった。大学山岳部を母体とした遠征計画は数多くあったが、実現したものは少なかった。数少ないヒマラヤ登山の記録が出版されるとすぐに買いこみ、回覧し、手垢のつくまで読み返して、ヒマラヤの様子やそこでの苦しい登山のことなどを想像した。そこに出てくる名前しか知らぬ隊員は、私たちにとって神様のようなもので

あった。それが、私たちのよく知っているOBをヒマラヤへ送り出せるというのであるから、現役は興奮したものである。

当時、山岳部の最高学年であった私たち九名は、ただちに徳永OBの指示により各分団に分れ、それぞれOBをチーフにして計画を練りはじめた。しかし、遠征隊を組織することは、阪大山岳会として始めてのことであり、仕事を担当したOBも、不慣れで、どこからどう進めて行くべきか判らなかつたのは無理もない。しかもOBは各自勤務を持って、自由時間が少ない。したがって、比較的自由な現役の私たちが、実際の仕事を進めようようになった。こうして、次第に、私たちが各分団分野でのチーフになっていったことが、私たちのその後を形作った原因の一つと思う。

今の時点でふり返ってみると、第一次遠征隊の準備は、いろいろと不備であった。何しろ誰もまだ入ったことのない西面からP29にとりつくということが決まっているだけで、登路はもとよりキャラバンルートすらはつきりしていなかった。ヒマラ

ヤ経験者は、当時阪大山岳会に三名いたが、実際の準備過程を詳しく知っているのは住吉OB（一九五九・ヒマルチュリ隊員）だけであったし、参考書も実際に役立つのはマナスル（毎日新聞社刊）があるだけであった。しかし、わずか三、四カ月間に、あれだけの物量（総量五トンを越えた）を集め、梱包し、送り出したのは、OBと現役が、とにかくP29という目標に全力を投入した結果であろう。あの当時ほど、OBと現役が、総力を結集したことは、その後もあるまい。とにかく、一次の遠征計画は、隊員と関係なく多くの入達の熱意と努力で軌道に乗った。時に迫られた昭和三十五年の十二月から翌年（一九六一）の一月にかけて、準備室となった医学部記念館の二階は、朝から夜中まで、大勢の人が右往左往し、大変な騒ぎであった。

他面、資金に関しては、私たち若僧はまったく関知することなく、篠田会長、水野健次郎OB（現美津濃株式会社）、故梶原OB（「ザイルー強さと正しい使い方」著者）、徳永OB、住吉OBが中心になり、今西寿雄氏の助力も得て進められている。

ネパール政府からの登山許可、日本大蔵省からの外貨割当て使用許可（当時は必要であった）が遅れたことや、その他の事情もあって隊員の正式決定がおくれ、私たち準備担当者、実際に遠征する隊員の意見も聞けぬまま、一月末に神戸出港の船に間に合わせるべく、どんどん準備を進めた。勤務先の仕事をすませてから来るOBの準備責任者や、計画の途中から参加し

た隊員予定者などが変な質問をすると、多忙と疲労の私たちから怒鳴られるといった場合も何度かあったことを思い出す。

こうした喧噪の中から、先発隊が二月中旬に、本隊が三月初めに出発してゆき、残った人たちはそれぞれの職と学業に帰った。あの騒しさと忙しさから解放され、改めて振り返ってみると、私たちの胸中は、遠征隊を一つ「われわれの手で」送り出したという満足感とともに一種の嫉妬もあった。また、実際に始めから終りまで全力をつくして準備に奔走したOBや、現役にとっては、馬鹿騒ぎのあとのむなしさを感じた人も多かったであろう。

遠征隊帰国、二、三カ月後、在阪の隊員と実際に準備を進めた者が集まってヒマラヤ研究会を作った。そして、全員の一致した意見は、今後遠征隊派遣にあたっては、隊員決定を第一にすべきこと、準備は最初から隊員が行なうことであった。

## 第二次遠征隊

ヒマラヤ研究会は、その後も毎月一、二回、広瀬宅で開かれていた。始めの内はOBから現役まで多数が集まっていたが、次第に減って、私たちの学年が主体となった。その理由は前に書いた第一次の準備と出発後の気持であったと思う。ただ、私たちの学年は、「次回はわれわれの手で、われわれが行く」という気概があった。しかも、一次隊の準備に最初から加わり、最後の段階では、ほとんどその中心になった者が多かったの

で、各分担のこまかい点まで知っており、私たちだけでも充分に準備を進めることができたのである。



目標とする山も、P 29に限ったわけではなかった。むしろ、一次隊の報告がきわめて悲観的なものであったため、始めは、もう少し可能性のある山、私たちにでも登れそうな処女峯も対象になった。三十六年から三十七年にかけて、いくつかの山が候補に上っては消え、上っては消えた。しかし、私達の心の中からP 29が消えるわけには行かなかった。一次隊が失敗したのなら、今度は「われわれが」という気持が誰の胸の中にもあった。住吉OBが集めて来たP 29東西両面の写真を中心に、議論が深夜におよぶこともあった。それは、一つには、いつも篠田会長が「山には必ず弱点がある」と言われていたことが、皆の心の中にあつたためであろう。しかし、写真を眺めているだけでは、結論の出るはずはない。西面が駄目なら、残るは東面。今まで東面からは無理と言われているが、もう一度詳しく眺め、登ってみたいというのが、自然に私たちの結論になつていった。こうなると、私たちの間では話が早かった。ただ判らないのは肝心の資金のことである。三十七年（一九六二年）の秋ごろから、私たちの代表が第二次遠征隊の計画案を持って篠田会長に何度も面談し、時には先生のお宅まで押しかけたりした。

そのころ（三十七年秋）、阪大山岳部、スキー部、ワンダーホーゲル部の三つの部が主体になって、梅池に山小屋（現在の梅ノ木寮）を建設する話が具体化していたため、篠田会長も、ヒマラヤ遠征と山小屋建設の二つの資金調達をするには、相当苦慮された。しかし、三十八年（一九六三年）の年頭、ポスト

モンsoon期に、小規模の第二次隊（偵察隊）を東面に出せるとの了解を得た。が、資金面から大きな隊は出せない、あくまで偵察ということであった。

かくて、二次隊がスタートした。手早くネパール政府への申請書が作られ、計画書が印刷され、外貨使用許可願が出された。それとともに、既定方針に基づき、隊員の決定が急がれた。ヒマラヤ研究会のメンバーは全員が参加を希望していたが、その中から、田村、広瀬が、選出された。しかし、隊員決定と同時に、残念なことは、私たちの仲間関係に微妙な変化が生じた。それは、はっきり言って嫉妬というべきものであつたろう。それぞれの本業が忙しいことを表面の理由に、内心は「行く者でやれ」といった気持が手伝って、一人二人と準備の本流からはなれていった。こうした中で笠松、梶本、三沢が隊員を最後まで助けて、三十八年の夏に第二次隊を送り出した。（注、笠松は同一年、大阪府立大、東京都立大合同遠征隊（一九六三年秋シャルプ登頂）に参加した。）

#### 二次と三次の間の空白期間

二次隊が発出した後、広瀬と田村から、私たちの仲間あてに何度も詳しい現地報告があつた。そして彼らが東面に登路を発見した後、ただちに登頂を狙う三次隊の準備という強い希望になつた。もちろん言われるまでもなく、登路発見と同時に在阪の仲間は「今度こそわれわれの手でわれわれが」という意気込みで準備にかかった。しかし、この三次隊計画はどうも阪大山岳会上層部の同意が得られなかった。理由は資金の点である。

当時社会の経済状態は不況で、その上、二次隊は最終的に相当の赤字を出し、これ以上の負担に、阪大山岳会は耐えられなかった。

この状況は、二次隊の帰国後、三十九年（一九六四年）の春になっても同じであった。登路は見つかっても、それを実現させる可能性は、私たちに当分訪れそうもなかった。

P 29 遠征を他の山岳会（たとえば日本山岳会）へ話しかけることが真剣に討議されたのもそのことである。もちろん山登りに権利のあるわけではないが、当時他の山岳会は「P 29 へは阪大が行く」と考えるあたたかい空気があったのである。

そのころ、すでに P 29 は処女峯として世界最高級の一つであり、難しい山としても一級であった。一大学山岳部を母体とした私たちの阪大山岳会で手がけるのは名誉なことではあったが、資金の面からいささか手にあまる感があったのは事実である。しかも P 29 はマナスル三山の中の一つであるし、外国隊に登られてしまうのは残念すぎる。こうした理由から、もっと他の組織にも相談するというのが議論の始まりであった。

この問題は、その後もしばしば討議された。しかし、P 29 によってヒマラヤへの開眼をしたといえる私達の仲間には「われわれだけで」という感情が強かった。たとえ二回とはいえ、準備に情熱を傾け、田村と広瀬はすでに途中まで登っている。どうしても私たちの手で、せめて阪大山岳会の仲間が頂上に立つてほしかった。

第三次遠征隊の準備計画はその後もしばしば引き続き練られたが、そ

の都度資金難で挫折した。その間に、ネパールをめぐる国際情勢は悪化して来ていた。そしてついに、昭和三十九年（一九六四）の秋ごろから、ネパール政府は一切のネパールヒマラヤ登山を許可しなくなった。この禁止は、私たちに幸いであった。禁止令の出ている間は、P 29 は誰に登られてしまう気はいはない。その間に、私たちは P 29 のことを初めから考えなおし、二次隊を組織する余裕が与えられたのである。

私は「P 29 ・一九六四プラスチック」と題した小さなノートを作って禁止解除を待った。遠征隊を組織するには、初めのすべり出しが大切であることは、一次二次の経験から判っている。ある程度進み出せば、あとは雪ダルマのように自然に大きくふくらむ。しかし、最初の段階でモタモタしていると、時期を失って計画そのものを中止せねばならないことさえある。私はノートに「遠征隊組織に当って、まずしなければならぬこと」とをまとめ、必要書類も日付だけぬいた原稿を作ってひたすら待った。

ヒマラヤ登山解禁の噂がしばしば流れたが、いずれも噂にすぎず、二年、三年と過ぎていった。昭和四十三年（一九六八年）の中ごろにも解けるらしいという噂がとぶようになった。そしてその秋、観光取材に私たちの仲間、佐藤茂（毎日新聞社）が出かけていった。彼は禁止令のことをいろいろ調べてくれたが、やはり確かな情報は得られなかった。（注、佐藤は、その後日本山岳会エベレスト遠征隊に参加）

第三次遠征隊

第三次遠征隊の発端は、昭和四十三年（一九六八年）のもう寒くなった十一月中旬、住吉OBが私の研究室を訪れて来られた時に始まった。

情報網の多い住吉OBは、来年春ごろからネパール政府が、三十八座に限ってヒマラヤ登山の禁止令を解く予定であること、その三十八座の中にP29が入っているらしいことを、どこからか聞いて来られたのである。三十八座の中の処女峯ではP29が最高であろうから、早くしないと外国隊（オランダ、イタリヤが書類、口頭で申込んでいる由）に取られる恐れがある。会内上層部の了解は住吉が取るから、お前はすぐ申請書を作ってとりあえず直接ネパールへ送れというのが、住吉OBの話であった。

その夜、私は早速タイプをたたき、次の日には住吉OBのサインをとってネパール政府に送った。その他の書類もただちに印刷にまわし、順次各方面に配った。東京での事務手続は、在京の玉井が奔走した。彼との間に多量の速達郵便と電話が交され、私は一度も上京する必要なく十二月中旬ごろには、一応の事務は済んでいた。

ネパール政府の反応も早かった。翌年（昭和四十四年）の早春には、私たちはポストモンスーンのP29登山許可を手に入れていた。そのころから、私たちは隊員の選考と資金の検討に入っていた。

第二次隊の報告とその後の研究で、頂をねらうには、最低隊

長も含めて八名が必要であるという結論が得られていた。（その後隊長の判断で十一名になった。）これまでの成行きとその豊富な経験から隊長は住吉OBということには、もう決まったも同然であったが、その他の隊員はまったく白紙であった。早い時期に隊員を決めるということは、全員の主張であったが、実際に選考することになると、これもなかなか難しいことであった。初めのころ、住吉OBと私は私たちの学年を中心としてその後から重点的に隊員も選ぶつもりであった。これなら、一詣に山に登ったことも多く、遠征隊を準備した経験もあり、お互い気心も知れていてまとまりも良い。しかし、実際には各個人の都合で参加可能な人は、ほとんどいなかった。そこで範囲をさらに若い層に広げて、改めて考えなおすこと、住吉OBが隊員選考一任の許可を会長からとってむしろ住吉OB個人としての隊員決定という基本線で進められた。

戦前のOBも含めて二百名足らずの会員の中から、隊員を選ぶ作業は簡単には進まなかった。何人かの意見も聞いて約二十名のリストを作り、この中から順に住吉OBが直接面談し、最終的に八名が決まったのは四月も中ばを過ぎていた。

隊員の中には是非とも加わってほしかったのは、二次隊隊員の田村と広瀬であり、この二人には、住吉OBが最後まで説得したが、諸般の都合でどうしても参加が得られなかった。話はさきにとぶが、三次隊登頂不成功の原因はいろいろあるが、その一つには頂上につながる氷壁にとりつくまで日数のかかりすぎたことがあげられると思う。もし東尾根を登った彼等の一人で

も参加していれば、三次隊での登頂も可能であったかと考えている。

資金も心を配った問題であった。ヒマラヤ登山とは言え、いやスポーツというものがオリムピックであれ草野球であれしよせん遊びである。幸いにして日本の経済は上向きになったが、他人の遊びごとに貴重なお金をまわしていただけるかは甚だ心もとなかった。資金調達の実際はまったく住吉OBが当たられたが、篠田、水野、恩地の諸先生そして水野建次郎OBの全面的なご協力があつた。

従来が行きかり上、私はその事務管理を担当したが、前の二次隊が赤字を出し、その後数年間、山岳会の活動に支障をきたした苦い経験から、今回は絶対に赤字を出さぬことを会計面の主眼にした。

装備、食糧関係で三次隊ではとくに変わった所はなかった。これは準備期間が短かかったこともあるが、とにかく氷壁直下の七〇〇m地点まではほぼ従来の装備で行けることがはっきりしていたし、氷壁自体は住吉OBのヒマルチュリにおける知見しかなかったためでもある。ただ高所での燃料にプロパンガスを全面採用したこと、モンsoon中のキャラバンのためポーターにも雨具を多量に用意したなどが従来と少し変わった点である。また、酸素関係では、折から日本山岳会でエベレストの計画が進められており、住吉OBがその酸素担当であつたためそのテストもかねた数種類のマスクその他を準備した。

幸いにして私は第三次隊に加わり始めてヒマラヤ遠征を経験

し、私流にヒマラヤを楽しんだ。遠征には私のような役目の人間も必要と自分に言い聞かせつつ、登山そのものとは直接関係のない仕事もしながら、隊員、シエルバ、私たちに協力してくれたネパールやチベットの人たちを比較的・客観的な立場で眺められた。そして、我田引水であるが、現時点でふり返つてみると、阪大山岳会が出した四回の遠征隊の中では、第三次隊がいろいろな意味でもっとも充実した隊ではなかつたかと思つている。

#### 第四次遠征隊

第四次隊の準備は、三次隊が登頂をあきらめて全員ベースキャンプに下山した日から始つた。下山後のあの解放感を楽しみながらも、全員の記憶のフレッシュな内にと住吉OBに叱られつつ、ベースキャンプと帰途のキャラバン中に何回かのミーティングをして失敗の原因と今後のことについて話し合つた。全登山期間を通じて、ほとんどベースキャンプに腰をすえていた私は、もっぱら聞き役にまわり、下山直後の興奮から、次第に冷静になっていく皆の意見を少しづつまとめていった。そしてカトマンズに帰るころには、一応の結論として、

①氷壁途中の急斜面にも張れるテントが必要である。(三次隊の最高到達地点までには、通常のテントを張れる場所がなかった。)

②スクリューハーケンを早く打てるように工夫する。(三次隊では堅氷と氷質の関係から一本のハーケンを打つのに十分以上もかかることがあつた。)

③でできるだけ早い時期に氷壁直下まで到達し、氷壁工作の時間的余裕を作る。

④時期はポストモンスーンが良いのではないかと？

⑤できるだけ三次隊員が四次にも加わること。

一方、住吉OBの結論は ①第四次は若い三十代の隊長のもと今回の隊員が中心となること ②時期をポストで十日以上早く ③氷壁でのスピードアップと心がまえ ④ハンギングテント ⑤シェルパに対しても高所順化考慮の5点であった。

カトマンズに帰るとすぐに私たちは、来年（昭和四十五年、一九七〇年）のポストモンスーンの登山申請をネパール外務省に提出した。ポストモンスーンを選んだ理由は、後にも書くが、一九七〇年のプレモンスーン期はすでにオランダ隊に許可が下りていて、一九七〇年ポストモンスーンがもっとも近いチャンスであった。ネパール外務省の係官はきわめて好意的に私たちの申請を処理してくれ、私がカトマンズを出発した十二月の初めにはすでに許可を約束した。

三次隊の全員が帰国し、昭和四十五年の元旦に、皆が住吉OB宅に集ってから、四次隊の計画は次第に具体化した。そのもっとも重要な点は、三次隊のうちの何人が四次隊に加われるかということであった。その時点で、五人の若手が参加の意志と可能性を出してくれたので、私はひとまず安心した。（しかし、最終的には二名になった。）

次の問題は、隊長の件であった。住吉OBは日本山岳会のエベレスト隊（一九七〇年プレモンスーン）に加わっていくこと

になり、時間的に同じ年のポストモンスーンの遠征隊の隊長を引受けていただくわけにはいかなかった。この問題は、住吉OBと個人的に何度か話し合い、エベレストと手紙でやりとりし、また私と同年のOBの意見も聞いた。住吉OBの意見は、若い三十代の隊長という強い要望であったが、篠田会長、恩地部長と最終的に相談し、水野名誉教授にお願いすることになった。教授は丁度阪大を停年退官され、折から開かれていた万博の診療所長でご多忙であったが、私がお願いしてから半月後に、隊長を引受けるとの返事をいただいた。

これで隊長問題は片づいたわけであるが、実際の登攀指揮を誰が取るかという問題はまだ残っていた。

ヒマラヤ登山には、つねに高度順化という難かしいしかも経験でしか解決できない問題がつきまとうが、登山期間が短縮されるポストモンスーンでは、とくに迅速かつ効果的な高度順化が要求される。さらにP29では、七〇〇mを越えてから高度差約八〇〇mの氷壁をつめるというもっとも難しい場所があり、登頂を狙うには、充分に高度順化した隊員が最底六名は必要と考えていた。こういった高度順化の指導、そして豊富な経験と指揮能力といったことも加えて登攀隊長をお願いできるのは住吉OBしかおられなかった。しかし、その住吉OBは「住吉より若い三次隊の隊員が中心になってやるべし。あとは頼む。」の一言を残して、二月末には、エベレストに出発し、結局三次隊の隊員が集って準備を進めるほかなかった。そこで準備の実務は牧野、石浜、渡部を中心としたグループが行ない、

私は隊員の人選と資金の検討を引き受けることにした。

隊員の人選は、三次の時にも増して難かしかった。初めは、三次隊の隊員を中心にしまとめる計画であったが、勤務先や家庭の事情、そして健康問題などで次々と不参加が増え、そのたびに年令、人柄などを考慮しつつ新しい人を加えたのであるが、最終的には、私の目からもいささかツギハギの目立つ所があり、結局登攀隊長を引受けられた住吉OBにいろいろ迷惑をかけることになってしまった。

資金の面は、全面的に三次隊に準じてすすめられたが、今回も恩地先生そして水野健次郎OBには、一方ならぬお世話になった。

新しい装備として考案試作せねばならぬものに、氷壁斜面に張るテントがあった。これは隊員大野（阪大建築工学教室）が中心となり、渡部らに加わっていろいろ智恵を出し合って、耐寒性アルミ軽合金のフレームに組合せナイロン布地を張った台床を作り、この上に小さなテントを建てる仕組となった。（これは結局使用しなかった）

スクリーナーハーケンを早くねじ込む方法については、渡部が早くから試行錯誤を重ねていた。三次遠征の時、このハーケンが早くねじ込めなかったのは、氷が予想外に固く、ピッケルやピトンを打込んでも、氷が雲母状にはがれるだけでやたらに時間を消費したためである。これの解決策として、水面に小さな最初の穴をあけるのに、プロパンガスバーナを用いる方法などを試してみたのも渡部であった。この方法はうまく行かず結局

採用されなかったが、あのころから、四次隊としてP29の頂上に最も情熱を傾けていたのは彼であった。さらに大笹、田井、田中は、ハーケンそのものを改良するとともに、ハーケンをまわす種々の道具を考案しようとした。それは、ハーケンを一つのポルトと考え、ハーケンの頭部をポルト状に変え、スパナよまわして打込もうというものであった。しかし、この新しいハうのものでハーケンは試作を引受けられるところが見つからぬままに時間切れとなり、結局故野崎OBの製作による高強度、鋭刃のスクリーナーハーケンとスタバイを主としたものを購入し、それをまわす小道具だけを手作りし携行していった。

登山期をポストモンズンにしたことについては、三次隊の隊員の間からも少し異論が出、またいろいろな人からもプレモンズンにしてはどうかという意見が出された。事実、ポストはプレに比べて登山期間も、一日の行動時間も短かく限られるし、とにかくやたら寒い。ヒマラヤ高峯の初登頂記録がほとんどプレに片寄っているのも、こういう理由によるものである。ポストでもっとも恐ろしい冬のジェット気流（偏西風）による強風は、P29を東面から登る場合、マナスル主稜線によってある程度さえぎられる。また登路となる東尾根は、雪崩の危険が多く、降雪の多量なプレでは、通行不能になる恐れがあった。もちろん私たちにはプレの東尾根について経験がない（住吉OBのヒマルチュリ東尾根のプレは参考になったが）。どのように変るか判らないところを新しく登るよりも、経験済みのポストでいった方が良いのではないかというのが私たちの

得た結論であった。また、これは山登りの計画を立てるにあたってもっとも避けねばならない感情であるが、とにかく、三次隊で七三五〇mまで行ったのだから、もっとも近いチャンス、すなわち一九七〇年のポスト（ブレはオランダ隊と決定）に頂上を取りたいというのが偽らぬところであった。このため、できるだけ早くベースキャンプに入り、モンスーンの明けの前に、経路を生かして東尾根上のテントを伸ばし、モンスーン明けと同時に氷壁工作にかかれるようにしようというのが私たちの作戦であった。

この作戦を成功させる一つの鍵は、いかにして全装備をカトマンズに早く運びこむかである。カトマンズから先のキャラバンはある程度予想が立てられても、それまでの輸送にはいくつかの難関があって多くの登山隊が泣かされている。折から、いつも陸揚地に使っているカルカッタが政情不安で港湾ストに突入してしまった。そこで私たちは思い切って新しいルートを使うことにし、そのころ、まだ安定していた東パキスタン（現パングラデッシュ）のチッタゴンから直接カトマンズに空輸することにした。この変更は、もう私たちの荷物を積んだ船が日本出港という間際になったため、全部の送り書きを書きなおし、書類を作り変え、大変な手数となったが、四宮OB（辰巳商會）の骨折りで何とか間に合わせ、結局全隊員がカトマンズに集結する前に、全部の荷物がカトマンズに到着しているという異例の早さになった。

この第四次P 29遠征隊が、阪大山岳会としてP 29に送る登山

隊としては最後のものになるであろうことは、計画の段階からほぼはつきりしていた。もし第四次隊が登頂に失敗しても、阪大山岳会が単独でただちに第五次隊を組織する可能性は、隊員と資金の両面からなかった。「登頂断念」と同時にただちに、P 29の計画を日本山岳会関西支部へ譲る件が篠田会長了解のもとに住吉OBと今西寿雄支部長の間になされていた。

今まで、ヒマラヤ遠征隊を見送りに行ったことのない私であったが、今回は最後の阪大P 29隊を送り出すつもりで大阪空港へ出かけていった。そして張り切っている若い人たちを眺めながら、今回は是非頂上を踏んでくれという気持とともに、長い間執心してきたP 29頂上だから、そのままに残してほしいという気持も奇妙にあったのをおぼえている。

#### おわりに

この稿の初めにも書いたように、阪大山岳会がP 29へ四回の遠征隊を出した十年間、昭和三十二年同期に山岳部に入った私たち九人の仲間はいろいろな意味で遠征隊に関与して来た。そしてその間、大島（浩）と村井を除く七名が何れかの隊に加わってヒマラヤの土地を踏んだ。このようなことは一山岳会として功罪もあるが、私たちは、P 29をやってきたという大きな誇りと喜びがあった。そして、あらゆる面で私たちに援助、助言して下さった篠田、水野、恩地の諸先生また、未熟な私たちを叱りながら、何くれとなく立てて下さった住吉OB、徳永OBをはじめとする諸先輩、そしてつまらぬ雑用や批判を引き受けてくれた後輩諸君にお礼を申したい。しかし、それにも増

して、一次から四次まで事務面にたずさわって来た私にとつて、大きな驚きと感謝は、尨大な事務ファイルに記載された人々と会社の多いことである。直接山岳会と関係ないにもかかわらず、十年の長き、四度の多数に渡って、私たち山岳会へ、じ

つとあたたかい援助を与えて下さったことこそ、未熟な阪大山岳会が、ヒマラヤ史に輝しい一頁をし得た大きな源であろう。  
(一九七三年記)

## 参考資料リスト

田井英男

### 第一次隊

○篠田 軍治「P二九の西面」(山岳、第五七年、七二—九二ページ、一九六二年)

○篠田 軍治「P二九西面」(大阪大学山岳会、一九六二年十月、非売品)

○住吉 仙也「P二九峰偵察記」(世界の旅、二七号、一九六一年、修道社)

○小秋元隆邦「ヒマラヤ、P二九とその周辺」(岳人、一六四号、グラビア、一九六一年十二月)

○篠田 軍治「P二九遠征—ベイスキャンプその他」(日本山岳会会報、二二八号、一九六一年十二月)

○徳永 篤司「ピーク二九峰登山計画をめぐって」  
「ピーク二九峰登山準備過程日誌」

「装備、食糧表」

(以上、時報、大阪大学山岳会、十一号、一九六一年六月)

○「ピーク二九峰遠征日誌」(時報、大阪大学山岳会、十二号、一九六三年九月)

### 第二次隊

○木村 裕一「P二九の東面」(山岳、第五九年、一五一—一六二ページ、一九六四年)

### 第三次隊

○玉井 康雄「P二九東面(一九六九年)」(山岳、第六五年、一一四—一二〇ページ、一九七〇年)

### 第四次隊

○住吉 仙也「P二九登頂(一九七〇年秋)」(山岳、第六六年、九三—一〇八ページ、一九七一年)

○「登頂と確信します」(日本山岳会会報、三一三号、一九七一年七月)

○「水野 隊長↓三田会長への手紙」(日本山岳会会報、三二一三号、一九七一年七月)

○「P二九初登頂」(日本山岳会関西支部報二二号、一一—二ページ、一九七一年四月)

○「ネパール・ヒマラヤ、一九七〇年ポスト・モンスーン日本



- 隊の記録」(山と溪谷、三九〇号グラビア・一九七二年三月)
- 「対談、ピーク二九の氷壁(諏訪多栄蔵、住吉仙也)」(岳人・二八五号、七六―七八ページ、一九七二年三月)
- 住吉 仙也「シュルパの死亡事故……大阪大学山岳会P二九遠征隊一九七〇年の場合」(岩と雪、二三号、五〇―五八ページ、一九七二年)
- 二人は「白い翼」に登った。ヒマラヤP二九登攀隊長の手記」(週間朝日、一九七〇年十二月四日、一五六―一五七ページ)
- 「死を賭けたP二九初登頂」(アサヒグラフ 一九七〇年十二月十一日)
- S. Suniyoshi (I. Yoshizawa): Himalayan J., Vol. 30 (1970), p. 147-153
- American Alpine J., Vol. 17, Issue 45 (1971), p. 439-440
- Alpine J., Vol. 76, No. 320 (1971), p. 229
- Die Alpen, (Marz, 1971), p. 53
- Mountain, (London), (July, 1972), p. 16
- 解説、その他
- 松田 雄一「数字の山―ピーク二九の山名に就いて」(日本山岳会会報、二二八号、一九六一年十二月)
- 神原 達「ヒマラヤ日本隊の記録十一、マナスル三山の二つ」(ピーク二九)(山と溪谷、一九六九年五月)
- 葉師 義美「ガネッシュヒマール―マナスル山群、ヒマラヤ・ノート、九」(岳人、三〇三号、一九七二年九月)
- 古川純一「ヒマラヤの岩壁登攀について―P二九南西壁試登(一九七四年プレモンスーン)からの考察」(岩と雪、三九号、一九七四年)
- P二九の写真(前記資料以外のもの)
- 村木潤次郎「ヒマルチュリ」(毎日新聞社一九五九年)ヒマルチュリ(JAC隊、一九五九年)東尾根より。
- 深田 久弥「ヒマラヤの高峰、第五卷」(雪華社、一九六五年)松田雄一氏撮影、ヒマルチュリ(JAC隊・一九五九年)C<sub>6</sub>より。P二九東尾根
- 深田 久弥「ヒマラヤ登攀史改定版」岩波新書 マナスルの項に同じ写真あり。
- 「世界の山々」(山溪カラーガイド8、山と溪谷社、一九六七年、四八―五〇ページ)木村勝久氏撮影。
- 白川 義員「神々の座ヒマラヤ」(朝日新聞社、一九七二年、五二―五三ページ)航空写真。
- 白川 義員「ヒマラヤ」写真集(小学館、一九七一年)航空写真。(愛蔵版、一九七五年)
- 白川 義員「銅」一〇四号、一九七三年、日本銅センター、金属鉱業八社の広告、西面の航空写真。
- 「マナスル、一六五四―一九五六年」(毎月新聞社、一九五八年)今西寿雄氏撮影、ナムンパンジャンより西面。橋本誠二氏撮影サマ入口より。今西寿雄氏撮影、マナスル頂上直下より。
- 石坂昭二郎「ヒマルチュリ日記」(ベースボールマガジン社

一九五九年、東面および西面の写真。

○JAC六十周年記念パンフレット、木村勝久氏撮影、ヒマルチュリ（慶応大隊、一九六〇年）C<sub>2</sub>（五九〇〇m）よりP二九頂上付近。東西両面の写真。

○「世界の山岳、ヒマラヤ編」（毎日グラフ増刊・毎日新聞社一九六九年十一月五日）

二七・二八ページ。ナムンバンジャン峠より。

三一ページ。ヒマルチュリC<sub>1</sub>（慶応隊）より。

三三ページ、ヒマルチュリC<sub>2</sub>（慶応隊）より。

三四ページ、マナスル三山東面。

六〇ページ、マナスル頂上付近からのP二九。西面

○「ヒマラヤ・ネパール」（岩波写真文庫88、岩波文庫、一九五三年）マルシャンディからのP二九。

○深田 久弥「ヒマラヤ・山と人」（中央公論社、一九五六年）裏表紙、伊藤洋平氏撮影。西面。

○風見 武秀「ヒマラヤ」（原色写真文庫7、講談社、一九六七年）一一八ページ、ナムンバンジャン峠より。二二〇、一一二、一二四ページ。マルシャンディ谷より。

○薬師 義美「イティリツオ湖をめぐる一遠い湖」（岳人、二二〇号、一九六七年一月）グラビア・東イティリツオ峠越しのマナスル三山。

○安久 一成「世界の名峰⑧ アンナプルナ・マナスル周辺」（岳人、二九〇号、一九七一年八月）ポカラに近いバグルンパニからP二九西面。

「世界の名峰」（東京新聞出版局、一九七二年）安久一成氏撮影、岳人掲載のもの。

○高橋 照「マナスル西壁」（文芸春秋社、一九七二年十二月）マナスル三山西面。

○五百沢智也「パウダとヒマルチュリ」（岳人三〇三、四、五号、一九七二年9、10、11月）航空写真からのスケッチ。

○山田 圭一「ヒマラヤを飛ぶ4、マナスル・ガネッシュ」（岳人、三二三号、一九七四年四月）、西面上空より東面をのぞいた航空写真。

○内田良平「P二九西壁ツラギ氷河より」（山と溪谷、一九七五年一月）

○山田圭一「ヒマラヤを飛ぶ」（写真集）（東京新聞出版局、一九七五年二月）西面航空写真。

○「世界の山々II」（写真集）（白水社、一九六四年）西面、ヒマルチュリより。

○「世界の山」（写真集）（山と溪谷社、一九七五年）西面。

○深田久弥「ヒマラヤの高峯」別巻写真集（雪華社、一九六五年）、西面および東面。

○専修大隊（山の溪谷、一九七五年十月号）ヒマルチュリ西面からのP二九。

○内田良平「アルパインカレンダー一九七六年版」（山と溪谷社）二九西壁

○諏訪多栄蔵、山田圭一「ネパール・ヒマラヤ登攀史4、マナスル・ジュガール・ランタン」（岩と雪四六号、一九七五年十一月）南からのカラー航空写真。

決算報告

支出(国外)の部 (単位; U.S. ドル)

項 目	第 1 次	第 3 次	第 4 次
荷物輸送費 <sup>注1)</sup>	1,073.6	830.7	1,538.4
都市滞在費	1,228.4	1,508.6	2,033.2
シェルパ料金 <sup>注2)</sup>	2,842.9	1,904.0	2,589.8
ポーター料金		2,701.6	2,580.7
現地物資購入費 <sup>注3)</sup>	282.0	782.3	1,275.9
通 信 費	309.5	180.0	186.2
交 通 費 <sup>注4)</sup>	1,510.1	67.2	37.6
雑 費 <sup>注5)</sup>	635.2	847.0	1,070.7
合 計	7,881.7	8,821.4	11,312.5

注1) 各隊の輸送経路を簡記する

1次; 神戸(船)→カルカッタ(トラック)→パイロワ(ネパール)(飛行機)  
→ポカラ

2次; 神戸(船)→カルカッタ(飛行機)→カトマンズ

3次; 大阪(船)→カルカッタ(トラック)→カトマンズ

4次; 大阪(船)→チッタゴン(東パキスタン)(飛行機)→カトマンズ, カ  
トマンズ(飛行機)→大阪

なお通関料を含む

注2) リエゾン料金を含む

注3) キャラバンおよび B. C における食料, 薪, および若干の装備代を含む

注4) 1次はカトマンズ→ポカラ往復, カトマンズ→カルカッタ, およびカトマンズ  
→東京の一部を含む

3, 4次はカトマンズ→トリスリバザール往復バス代, インド(パキスタン)→  
カトマンズの一部

注5) 登山料, ヒマラヤ協会手数料, パーティ費, ローでの現地交渉費 1,500 ルピー  
(4次), 葬儀関係費(4次)を含む

支出（国内）の部

（単位：円）

項 目	第 1 次	第 2 次	第 3 次	第 4 次
外貨購入費 注1)	2,845,941	1,585,036	3,132,829	4,095,125
外貨裏付円払旅費	1,235,572	927,698	2,675,995	2,704,011
荷物輸送費 注2)	133,371	96,156	103,670	709,275
装 備 費	1,661,249	472,691	1,035,519	1,467,316
食 料 費	229,046	75,289	136,448	168,895
酸 素 費	65,950	0	280,934	429,400
医 療 費		5,095	2,550	2,500
写 真 材 料 費	80,660	95,750	33,825	87,000
学 術 調 査 費	56,098	63,300	0	0
梱 包 費	178,370	19,500	36,890	241,530
保 險 費 注3)	141,900	29,300	104,412	396,325
事 務 局 費 注4)	648,717	255,422	355,798	970,643
雑 費 注5)	0	22,551	47,059	244,527
繰 越 金	400,000	0	817,591	115,700
合 計	7,676,874	3,647,788	8,763,520	11,632,247

注1) 東京（大阪）—カトマンズ往復旅費、ただし1次は一部外貨払い

注2) 3次は大阪—カルカッタ船賃、4次は大阪—パキスタン・チッタゴン港、船賃  
+チッタゴン—カトマンズ飛行機賃

注3) 4次のみシェルパ（ローカル・シェルパを含む）にも保険をかける。291,913円

注4) 募金事務費も含む

注5) 1次は事務局費に含まれている。4次は葬儀費用の一部を含む

## 決 算 報 告

山 本 光 二  
大 野 義 照

大阪大学山岳会は1961年の1次隊から1970年の4次隊と、10年間に四度の遠征隊を同一目標の山に出すことができた。遠征隊を出すにあたって重要な問題の1つは資金である。いま、四度の遠征を終え、借財を残さず決算報告ができるのは長年にわたる各方面の方々のご援助によるもので厚くお礼を申し上げたい。また、ここに記した多額の募金のほかに装備、食料、医療の分野でも多くの現物寄付を受けた。あわせて感謝いたす次第である。

なお、この10年間に関係通貨の交換率は別表(166頁)のごとく変遷し、円とネパールルピーの交換比率は10年の間に約40パーセント円高となった。一方規模のほぼ同じ1、3および4次隊の総経費において各隊の間で大きな差違はない。したがって日本国内の物価、賃金の上昇率を考慮すると遠征に対しての経済的負担はおそらく半分以下に減少していると考えられる。

第4次の繰越金115,700円については報告書出版会計に算入いたしたいので、各位のご了承を戴ければ幸甚である。

### 収 入 の 部

(単位;円)

項 目	第 1 次	第 2 次	第 3 次	第 4 次
	1961-春	1963-秋	1969-秋	1970-秋
	隊員 8名	隊員 5名	隊員 11名	隊員 11名
一 般 募 金	5,822,500 <sup>注1)</sup>	1,059,000	4,896,000	5,959,700
会 内 募 金	525,000	832,134	569,900	400,880
隊員自己負担金	1,320,000	950,000	3,160,416	4,250,000
雑 収 入 <sup>注2)</sup>	9,374	406,654	137,204	204,076
繰 越 金	0	400,000	0	817,591
計	7,676,874	3,647,788	8,763,520	11,632,247

注1) 東京放送・毎日新聞の後援費を含む

注2) 銀行利息、生薬収集代(3次)、原稿料(4次)、その他を含む

ヘキストジャパン。平和発条。紡績協会。北陸電気工業。堀田庄三。本田親男。

毎日新聞社。前田産業。楨有恒。(故)松方三郎。松沢憲夫。松下幸之助。松下電子工業。松下電器産業。松田雄一。松原喜八。松丸秀夫。松村組。松村敏治。丸石製菓。丸善紙工。丸正産業。曲直部寿夫。ミドリ十字。ミノルタ。三田幸夫。三菱レイヨン。三菱鉛筆大阪府販売。三菱電機。三菱重工。三菱商事カルカッタ支店。美津濃。峰村英薫。(故)宮崎寅四郎。宮原巍。村岡実。村上栄次。村木潤次郎。村橋俊介。明光社。明治商事。明治製菓。明和病院。宮下秀樹。森下製菓。森田齒科商店。森永製菓。森永乳業。持田製菓。三井物産カルカッタ支店。宮沢宏昌。光島督。

ヤンマーディーゼル。八尾市立病院。八幡製鉄。弥谷商店。薬師義美。山田二郎。山田商事。山村硝子。山村雄一。山野井武夫。山本巖。山本防塵。山之内製菓。山崎英雄。ユニチカ。湯浅電池。湯川泰秀。有恒倶楽部。雪印乳業。行岡病院。依田孝喜。四谷亀胤。吉富製菓。吉田泰蔵。吉沢一郎。山本良久。

ロート製菓。ロック製作所。Ram Krishna Verma。

ワタナベ運動具店。渡辺製菓。和田清忠。(故)若菜三良。

(昭和50年3月現在)

別表 関係通貨の交換率(円換算)の変遷

	米ドル	英ポンド	インド・ルピー	ネパール・ルピー
1961年	360,00円	1008,00円	75,60円	50,00円
1966, 6月	同上	同上	48,00円	35,56円
1967, 11月	同上	864,00円	同上	同上
1971, 12月	308,00円	802,56円	42,31円	30,42円
1973, 10月	265,00円	682,00円	37,00円	26,00円

## 協力者御芳名一覧表

水市柏橋農業協同組合。清水建設。塩田建具工業。塩野香料。塩野義製菓。敷島紡。柴田春家。島津製作所。島田輝男。島本末晴。昭和アルミ。正田建次郎。神東塗料。仁丹テルモ。仁丹ドール。菅原工業。菅原寛和。(故)杉道助。住友ゴム工業。住友化学工業。住友機械。住友金属工業。住友銀行。住友重機械工業。住友商事。住友信託銀行。住友生命保険相互。住友電気工業。住友特殊金属。住友病院。セーレン(福井精練)。ゼネラル。製鉄化学工業。世界長。関特殊利器製造。(故)関桂三。積水化学工業。銭高組。仙石裏。ソニー。象印マホウビン。 Govinda Man Serchan, Indra Man Serchan。

ダイキン工業。ダイハツ工業。在ダッカ日本総領事館。タマノ井酢。田中喜彦。田辺製菓。田辺寿。多根病院。第一セッケン。第一製菓。大紀アルミニウム工業所。大建油業。大五栄養化学。大正製菓。大日本製菓。大日本セルロイド。大日本製糖。大日本紡。大有産業。大和ゴム製作所。大和紡。大和銀行。大洋漁業。太陽工業。太陽テント。台糖。台糖ファイザー。高田馨。高橋進。高橋信三。宝酒造。宝海苔。玉屋。武田薬品。竹田寛次。竹原千鶴子。辰沼広吉。辰巳商会。丹頂。チバ製品。中外製菓。中央ペイント。珍々堂。津田周二。塚田印刷。椿本チェイン。手島祥一。帝国産業。帝国食品。帝人。寺阪元雄。天王寺病院。トキコ。Toni Hagen 博士。トモミツ縫工。戸田建設。土井正治。東亜パルプ。東京衛材研究所。東京芝浦電気。東京製綱。東洋アエリング。東洋羽毛工業。東洋紡績。東レ。徳島ハム。富岡ハム。鳥居薬品。

ナガサキ屋。那須藤。那智勝浦町立温泉病院。浪花電鉄協会。中井皓智。中井光次。中尾佐助。中尾哲二郎。中島商事。中山製鋼所。長井隆三。長瀬産業。成瀬岩雄。ニッポン食料。日華油脂。日研化学。日産自動車。日商岩井。日清食品。日通ボックス工業。日通商事。日東アルミ。日東紙器。日魯漁業。日本アプジョン。日本アルミニウム。日本板硝子。日本エアブレーキ。日本オルガノン。日本楽器。日本化薬。日本金属工業。日本工営カトマンズ事務所。日本鋼管。日本紅茶。日本シェーリング。日本ジフィー食品。日本食品工業。日本新薬。日本水産。日本生命保険。日本セメント。日本山岳協会。日本山岳会。日本山岳会関西支部。日本トレーディング。日本ベンガル湾運賃同盟。在日本ネパール大使館。日本冷蔵。日本レーヨン。日本ロッシュ。日本触媒化学工業。丹羽達郎。ネッスル日本。在ネパール日本大使館。(故)野崎善蔵。野田喜商事。野田醤油。野村哲也。能村隆三。

ハウス食品。パークデービス三共。橋本誠二。長谷川周重。早石会。万国物産。万有製菓。汎建製作所。播磨マッチ。白馬堂。浜野正男。日立マクセル。日立製作所。日立造船。日高信六郎。杏林薬品。松垣正忠。久武商店。平林克敏。不二食品。扶桑薬品工業。富士工業。富士写真フィルム。福井商事。福助足袋。藤倉ゴム。藤沢薬品。(故)藤本列治。(故)古市美津雄。古河アルミニウム。古河電工。二木信次。府立成人病センター。双葉商会。

## 協 力 者 御 芳 名 一 覧 表

(敬称, 社団法人, 株式会社, 有限会社略)

アングル。安宅産業。安藤建設。芦原義重。吾嬭製鋼。青木大。茜屋。赤堀四郎。旭ダウ。旭化成工業。朝日工業社。朝日麦酒。朝日新聞社。味の素。荒金正。五百沢智也。イーグルマホービン。インド放送。伊藤忠商事。医療法人清洲会。医療法人岩木会。猪崎久太郎。石上帆布網具工作所。石坂昭二郎。石田留三郎。今西寿雄。(故)今村荒男。岩谷産業。岩坪五郎。上野製菓。植村直巳。梅野孝治。S.B. 食品。エース・コック。エーザイ。エース食品。恵下湧。江崎グリコ。オーナー。オニツカ。オリエンタル義肢。オリエンタル酵母製造。尾西食品工業。小田原大造。小原勝郎。小野市商工会。小野薬品工業。大阪アルミ。大阪コクヨ。大阪ライオンズクラブ。大阪医薬品協会。大阪瓦斯。大阪警察病院。大阪市。大阪私鉄五社(近鉄, 京阪神, 阪神, 南海, 京阪)。大阪商船三井船舶大阪本店。同カルカッタ支店。大阪税関。大阪船員保険病院。大阪大学後援会。大阪建物。大阪通信病院。大阪百貨店協会(大丸, そごう, 阪急, 高島屋, 近鉄, 阪神, 三越, 松坂屋)。大阪莫大小。大阪貿易。大阪府。大阪府立病院。大阪労災病院。大賀寿二。大木保太郎。大市昆布。(故)大島堅造。大塚製菓。大塚博美。大芦百太郎。大幡産業。大林組。大西衣料店。大西巖。大荘直也。大森弘一郎。太田敬。太田敬次郎。岡希世志。扇商事。岡田実。岡野バルブ。奥田藤兵衛商店。奥村組。奥野良臣。石川博。

カゴメ食品。カルカッタ气象台。在カルカッタ日本総領事館。カルピス食品工業。加藤建三。加藤幸彦。科研化学。外務省情報文化局。(故)梶本徳次郎。鐘淵化学工業。鐘紡。神谷宣郎。神原達。亀山ローソク。川井直人。川崎重工。川勝賢作。川崎製鉄。川崎病院(神戸)。川村義肢。釜屋電気。釜洞醇太郎。関西労災病院。関西電力。寒川製作所。汗管工業。ニッコーマン醤油。キャノンカメラ。キューピーマヨネーズ。木村雅昭。木下和夫。木村勝久。吉良秀通。紀伊産業。気象庁。岸田権二。北口山スキー研究所。共進油脂工業。共和運動具。協和醸酵工業。グンゼ。久保田鉄工。(故)工藤友恵。楠灰製造。倉レ。倉敷紡績。黒木製作所。黒田黒光堂。黒川誠一。小西六写真工業。小西政経。古森利貞。好日山荘。神戸マッチ。香雪記念病院。幸福相互銀行。浩洋商会。鴻池組。興亜石油。興和新業。神戸製鋼所チッタゴン事務所。(故)カイザー元帥。小林成樹。

サンスター歯磨。サントリー。サンド薬品。左藤義詮。佐藤久一郎。斎藤化工機。斎藤省三商店。斎藤博。坂田元記。坂本幸哉。酒井鉄工所。堺化学工業。桜井立三。三共。三共イースト。三協特殊ネジ。三晃商会。三油興業。三陽社。三陽商会。三洋電機。三立製菓。三和化学研究所。三和銀行。山晴社。山陽鉄工所。参天製菓。J.R. ガイギー社。シャープ。シャレー。シマヤ商店。市立池田病院。市立泉佐野病院。市立貝塚病院。市立堺病院。清



# あ と が き

恩 地 裕

阪大山岳会の P29 登頂は 4 回の遠征、2 人の犠牲で終わった。これに関係された方は、直接の登山パーティ、支援隊、それから私共のように大阪で基金集めや、後仕末のお手伝いをしたものなどを数えると大変な人数になる。阪大山岳会としてはいつまでも残る事業が完成した。

資金集めのために松下本社、関電本社、新薬協会などを廻ったとき、心よく支援して下さった各社の人々に心から感謝している。第 4 次遠征の時は大学紛争の時代に当り、片方では産学協同で企業を仇のように呼ばれるものが学内におりながら、その企業と何の関係もない P29 遠征の資金援助をお願いに行くのは、どうしても気おくれのすることであった。それに付けても、大阪大学という名前の有難さが身にしみて感ぜられた。その企業と P29 に何の関係もなくとも大阪大学なるが故に、協力が得られた。

また、遭難後の処理についても、外務省、保険会社、日商岩井の方々などの御協力はほんとうに嬉しかった。水野隊長との連絡、保険金の支払の問題について、外務省の担当者が迅速、適切に処理して下さった。そのお陰で、遭難後の処理が良く念を入れて行われ、大阪大学遠征隊の声価を高め得たことは、われわれ後援者として、ほんとうに良かったと思っている。

30 数年前松本高校が 4 年の歳月と 2 人の犠牲によって、前穂高北尾根東側の各季の登山が完成されたが、その時は当事者、今回は裏方として働き、奇しき因念を感じる。

それにしても、それまでしてなぜ山に登るのであろうか、30 年の間はまだ、そのままである。

れたけれども、だからといって私達の隊が成功したとは云えない。従ってこの本は失敗の記録である。

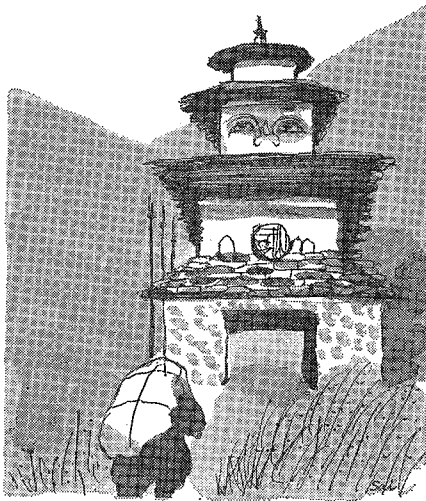
しかし乍ら、一方で、登頂の成否が単なる虚名であって、重要なのは山登りそのものであるというのも事実であると考える。

P29 峰の了った後に於て、私達大学山岳部の新しい目標は、残り少ない未登頂やバリエーションルートではない。

運、不運に関係なく、天候に関係なく、登山を安全に遂行出来る様にする努力が、スポーツアルピニズムの今日の重要なテーマであると考えるものである。その為に本書が役立てれば甚だ幸である。

最後に序文をいただいた楨有恒氏、貴重な写真を御提供いただいた白川義員氏、日本銅センター、森一氏、および今西寿雄氏、本書作製にあたり、いろいろ御協力を御願ひした日本山岳会および日本印刷出版の小林積造氏、小林誠造氏に厚く御礼申し上げます。

(1975年記)



## 編集後記にかえて

徳 永 篤 司

1956年3月27日、その日の昼すぎ、私達マナスル登山隊の一行30人は、サマ部落民の入山阻止に逢って立往生していた。陽だまりの岩角に腰をおろして、私は2時間もの間、一つの山を眺めていた。疎らな森林帯の向うに、見渡す限りの広い雪原が続き、氷河、クレバス、そしてあの鋭いヒマラヤ巒が伸びてゆく青空との境に、山頂を水で飾りつけた、不気味な山容が真昼の太陽に、キラリと光っていた。

同年5月20日、マナスル登頂を了えて、BCに集結した隊員隊は一律に無口で、仕事をやりとげた解放感というよりは、永年の目的を失った時の虚無感に捕われている様に見えた。それは初登頂を果す度に、自らの目的を一つづつ失ってゆき、遂には未登の山を全部なくしてしまうという登山家だけが持つ皮肉なめぐり合わせを示す様に思われた。

事実、1953年のエベレスト登頂以後の目ざましいヒマラヤラッシュによって、8千米峰は次々と登頂され、世界の登山家の目は目ぼしい7千米峰の初登頂に向けられ始めていた。順次に高く記録を伸ばしてゆくというスポーツ界の常識から離れて、登山界では下向きに新しい仕事の分野を求めなければならなくなったのである。

BCに着いた手紙を整理していると、その春、現役は、永年の懸案であった黒部横断に成功し、チーフリーダーは穴戸から西川にバトンタッチ、準備期間中、肝炎で寝込んでしまった私の代りに働いてくれた住吉は、私を送って再びニューヨーク航路のシップドクターに戻り、尾藤はインターンを了えて同じ外科医局へ入局したいとやって来ていた。第2次隊の隊長を務めることになる木村は、この春に学生服を脱いで日本アルミに入社し、入れ代って兼清、山本信、渡辺、野口、といった連中が新入部員として名を連ねていた。多士済々、まさに何事かを始めねばおさまらぬ状態であった。

そして10年に及びP29峰遠征が始まったのである。登ってしまう迄は一体何年かかるものやら、果して登れるものかどうかとも、何もわからないのが初登頂の山登りである。私達はその間、最後までP29峰を我が手でやり抜こうと固く決意していたと云えば嘘になるし、終始一致団結していたといえど真実を歪めたことになる。迂路曲折をこえてここ迄来れた原動力は全てP29峰の魅力であった。

この間、たった一つの慰めは、こうした難攻不落の山であつたればこそ、実に多くの会員を次々とヒマラヤへ送ることが出来たことであり、そして、たった一つの痛恨事は、最後の幕切れであった。

原則論として、登頂パーティが全員遭難した場合、確たる証拠のない限り、その山は未登頂の儘でなければならない。さいわい本隊の場合、後日フィルムによって登頂が証明さ

P-29 1961~1970

印刷・発行 1975年11月30日 (非売品)

編集発行 大阪大学山岳会

〒560 豊中市待兼山町1-1

大阪大学学生部気付

印刷 日本印刷出版株式会社

〒553 大阪市福島区吉野1丁目2番7号

本書に関する連絡先

〒565 吹田市山田上 大阪大学工学部金属材料工学教室

田井英男